

9902 | space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第413号 1999年2月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日 第三種郵便物許可

SD

ダッチ・モデル

建築・都市・ランドスケープ

The Dutch Model: Architecture, Urban Design and Landscape

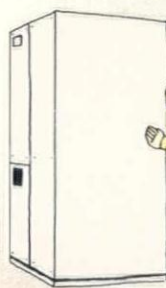
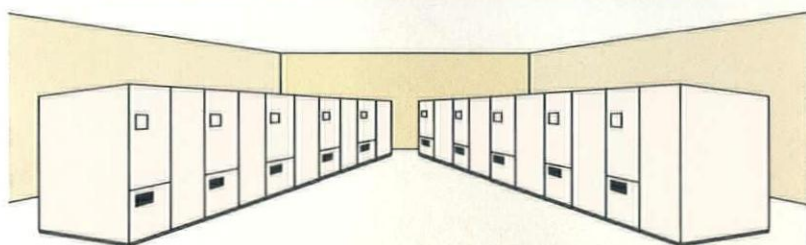


Monthly Journal of Art and Architecture



ビル空調機リニューアル 合理化委員会の評決です。

スーパーアロエースの ロッカー設置



YAZAKIの吸収冷温水機スーパーアロエースは、コンパクトなユニット設置タイプです。場所を取らず、ロッカーのように整然と並べて設置できます。エレベーターや階段から容易に搬入でき、工期の大幅な短縮が可能。ビル空調機のリニューアルに最適です。

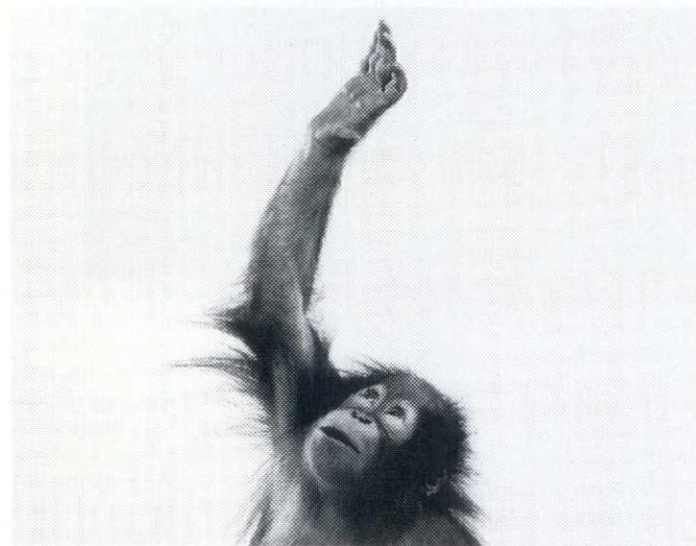
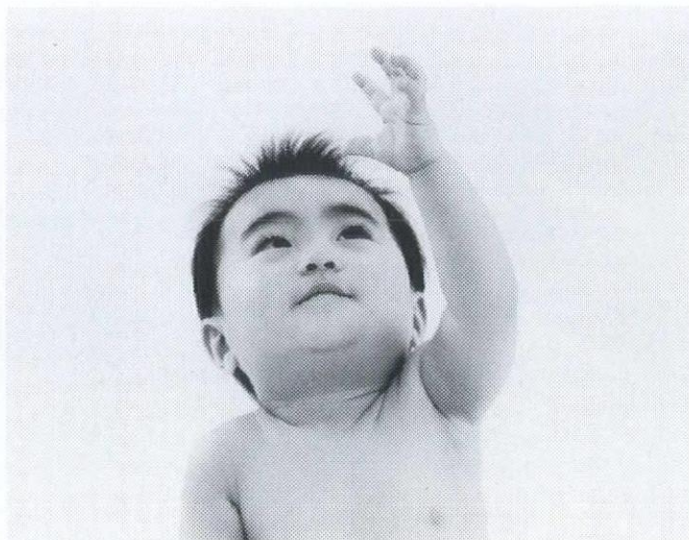
ユニット形冷温水機のパイオニア

ロッカー設置に最適な スーパーアロエース

矢崎総業株式会社

Y-CITYワールドヘッドquarters: 〒410-1194 静岡県裾野市御宿1500 TEL0559(65)3002
空調機器事業部: 〒435-8575 静岡県浜松市子安町1370 TEL053(461)5112

札幌支社 011 (852) 2914	仙台支社 022 (284) 9115	東京支社 03 (3298) 3140
名古屋支社 052 (833) 8415	北陸支社 0764 (41) 6516	大阪支社 06 (6458) 4825
中国支社 082 (923) 2115	四国支社 087 (833) 3336	九州支社 092 (411) 4835



大切なのは、 何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TNet 03(4431)2111

広告についてのお問合せの際は＜SDを見て＞と御明記願います

National/Panasonic

AV&C FT APS

AUDIO
音響システム

VISUAL
映像システム

COMMUNICATION
通信システム

COMPUTER
コンピューターシステム

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR & AQUA
空調・水管理システム

PASSAGE
搬送システム

SOFTWARE &
SYSTEM
ソフトウェア・
システム

ここにはあります人と自然と技術の調和が

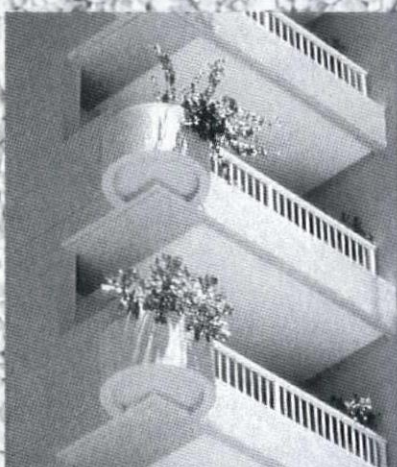
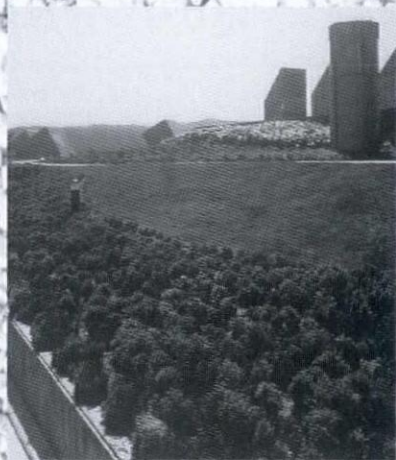
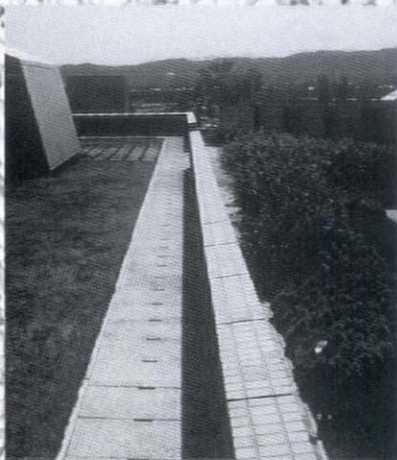
松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部 ☎03-5460-2931
北海道支店 ☎011-207-7722
東北支店 ☎022-711-3551
新潟支店 ☎025-246-1031
関東支店 ☎0286-37-2241
神奈川支店 ☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010
長野支店 ☎0262-26-3990
北陸支店 ☎0762-23-1121
静岡支店 ☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店 ☎06-6949-2111
中国支店 ☎082-247-5272
四国支店 ☎0878-26-1711
九州支店 ☎092-431-1100
沖縄支店 ☎098-869-2926



スタンダードへ。



緑化を中心に、
潤いある都市空間づくりを。

快適な都市空間に、
自然の持つ潤いをプラスすることで、
私たちの空間はさらに豊かになります。

だから、緑化防水工法「カナート」。
インテリジェントと緑化を
高次元で融合させ、新しいスタイルの
空間演出を可能にしています。

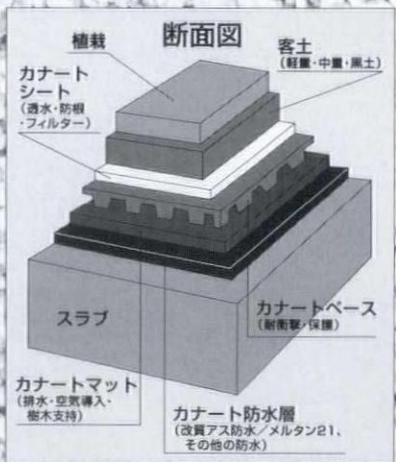
そして、働く、暮らす全ての人々に、
生き生きとしたコミュニケーションを
提供していきます。

高度な建築技術でさらに広がる空間に、
緑を。未来の快適な都市空間づくりの
指針を「カナート」は示していきます。

カナート

緑化防水工法

- 信頼性を高めた防根・排水性。
- 快適性を向上した断熱・遮音効果。
- 従来の保護コンクリート施工は不要。
- あらゆる施工現場に対応する優れた防水力。
- 計画に合わせて選べる3種類の客土設定。
- 荷重の低減、工期の短縮、低予算、
優れたコストパフォーマンスを実現。



日新工業株式会社



営業本部 TEL 103-0005 / 東京都中央区日本橋久松町9-2 TEL 03 (5644) 7211 (大代)

<http://www.nisshinkogyo.co.jp>

横 濱 TEL 045 (316) 7885 (代表)
千 葉 TEL 043 (227) 9971 (代表)
大 宮 TEL 048 (642) 5811 (代表)

大 阪 TEL 06 (6533) 3131 (代表)
名 古 屋 TEL 052 (933) 4761 (代表)
福 岡 TEL 092 (451) 1095 (代表)

札幌 TEL 011 (281) 6328 (代表)
仙 台 TEL 022 (263) 0315 (代表)
広 島 TEL 082 (294) 6006 (代表)

高 松 TEL 0878 (34) 0336 (代表)
金 沢 TEL 076 (222) 3321 (代表)
本 社 TEL 03 (3882) 2424 (大代)

時代が求める快適空間へ。

より経済的に、最適なリニューアルを実現する 確かな診断技術。

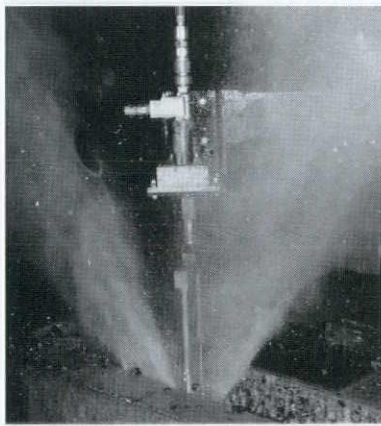
綿密な調査・診断により、リニューアルが必要な部位を的確に把握。リニューアル効果確認のためのプログラム、高効率な施工法の採用などにより、最少限の費用で、また短期間でご要望通りのリニューアルを実現します。



配筋非破壊システム

静かに、クリーンに、リニューアルをすすめる カームジェット工法。

高速水噴流により、床や壁のコンクリートのみを破碎。破碎したコンクリートやジェットの排水を完全回収するカームジェットシステムは、無振動、低騒音で粉塵も発生しません。静かで、クリーンなカームジェット工法なら業務を続けながらのリニューアルも可能です。



超高圧水を噴射するカームジェットのノズル

快適度を高める アメニティの総合診断。

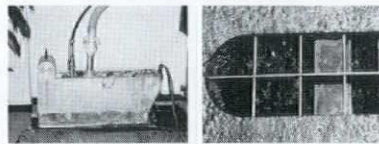
室内の温湿度分布、気流、粉塵、CO₂濃度、振動、照度など。快適性にかかわるさまざまな要素を系統的に診断。さらに問診からそれぞれの設備機器の性能診断にいたるまで、きめ細かに収集、解析、症状ごとに総合的に診断します。そしてトータルコンサルテーションを通し、設備機器や照明のオペレーションを実施、より快適な環境を実現します。

未来も快適に——リニューアル後の 事業収支評価システム。

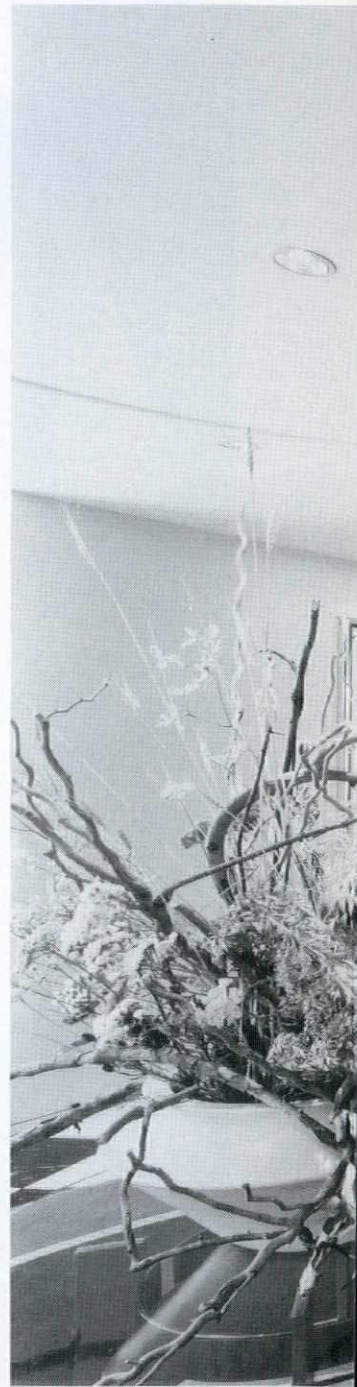
リニューアル後の事業をさらに活性化、発展させるためには、綿密かつ複合的な視点をもつプログラミングが必要です。カジマでは、土地の所有形態から事業手法、建物規模、用途、資金調達など、さまざまな角度から検討でき、またビルオーナーとテナントといった異なった立場からも検討できる事業収支評価システムを採用。リニューアル後の事業の採算も予測したうえで、最適なプログラムで実行します。

リニューアルならトータルな技術力と 豊富な実績をもつカジマにお任せください。

私たちは、単なる改修・補修ではなく建物そのものの活性化を図り、新たなビジネスチャンスを生み出す付加価値の高い空間づくりをご提案いたします。リニューアルなら多様なニーズに高度な技術と豊富な実績・ノウハウでお応えするカジマに、ぜひ一度ご相談ください。



鉄筋・配管が残された破碎後の床



多彩なニーズに応えるカジマのリニューアル技術。

R E N E



W

A

L

in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社：東京都港区元赤坂1-2-7 〒107-8388

お問い合わせは

技 術 営 業 部 03(3404)2011

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY

軽井沢
 ホテル鹿島ノ森
ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ：
ホテル鹿島ノ森予約係
☎03(3478)6220
現地☎0267(42)3535(代)
FAX:0267(42)5335



大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興夢科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

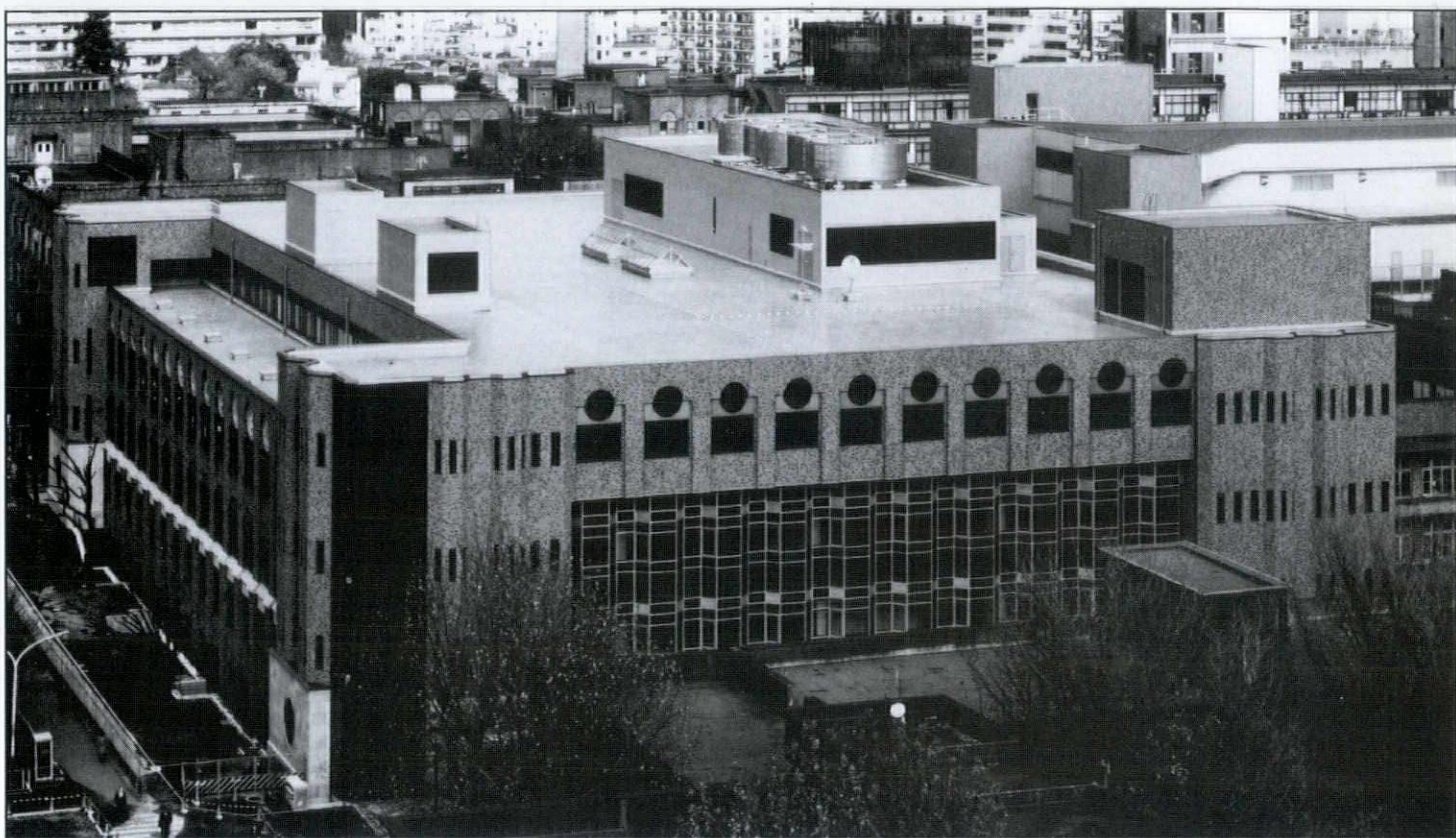
建設資機材の総合商社 鹿島グループ 大興物産株式会社

本社 〒107-8307 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本社 ☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714



シート防水が大きく飛躍

『ロンブルーフエース』は、物理的強度の高いガラスクロスを中心に積層し寸法安定性は抜群で（低収縮性）、耐オゾン劣化、耐紫外線などに対する耐候性、寒冷地における耐寒性、十分な水密性、さらに軽い、施工が簡単、歩行可能、補修が容易など優れた特長があります。

熱融着だけでなく液溶着も可能になり、溶着がより一体化されました。改修工事では、既存の防水材を撤去しない方法（廃材を出さない）も適用でき、環境に優しい工法です。

塩化ビニル樹脂系シート防水材（JIS A 6008）

ロンブルーフエース

建物に優しい

他の防水工法と比較してロンブルーフエースの屋根は軽量化でき、建物に優しい工法です。

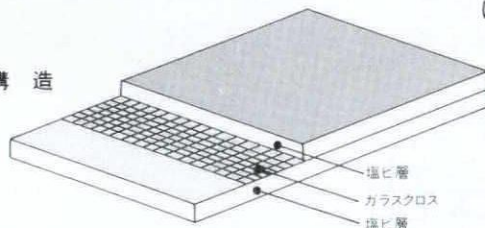
人間に優しい

熱融着だけでなく液溶着も可能。溶着がより一体化されました。しかも省力化が実現。人間に優しい工法です。

環境に優しい

改修工事では、既存の防水材を撤去しない方法（廃材を出さない）も適用でき、環境に優しい工法です。

構造



●規格 厚さ／2.0mm(2.5mm*)

※(受注生産品)

幅／1,830mm 長さ／10m

色数／PA-31 ホワイト

PA-33 グリーン

PA-34 グレー

PA-35 ライトブラウン



ときめきの生活空間をサイエンスする

ロンシール工業株式会社

●本社 防水部／〒130-8570 東京都墨田区緑4-15-3 ☎03(5600)1866

●大阪支店／〒532-0011 大阪市淀川区西中島3-9-13大北ビル ☎06(304)2700

インターネットホームページアドレス <http://www.lonseal.co.jp/>

●営業所

札幌 ☎011(271)0411

盛岡 ☎019(624)6925

仙台 ☎022(265)4771

新潟 ☎025(243)3791

大宮 ☎048(664)1511

土浦 ☎0298(32)8813

千葉 ☎043(246)5851

横浜 ☎045(662)7370

静岡 ☎054(251)3712

名古屋 ☎052(935)7063

金沢 ☎076(292)1161

岡山 ☎086(231)6011

広島 ☎082(211)2700

高松 ☎087(831)4177

福岡 ☎092(472)5857

鹿児島 ☎099(258)6571

個性が集まって大きなエネルギー

サッシ・カーテンウォールの総合メーカー



私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から
“テクノロジーとヒューマニズムの調和”をめざす新しい時代をつくろうとしています。

とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ(快適さ)や、
建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など
美的付加価値の重要性もますますそのウェートを高めています。
弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。



昭和サッシ

昭和鋼機株式会社

本社 ▶ 〒174-0063 東京都板橋区前野町6丁目1番10号
☎ 東京 (03) 3969-1101 (代表)

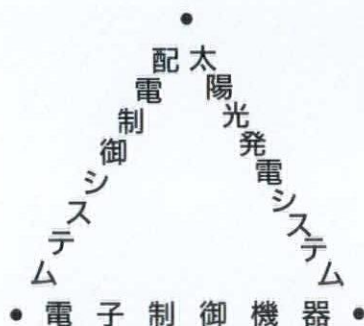
所沢工場 ▶ 〒354-0045 埼玉県入間郡三芳町大字上富1163

明石工場 ▶ 〒674-0093 明石市二見町南二見21番3号

昭和鋼機サービス株式会社 ▶ 〒174-0063 東京都板橋区前野町6丁目1番10号

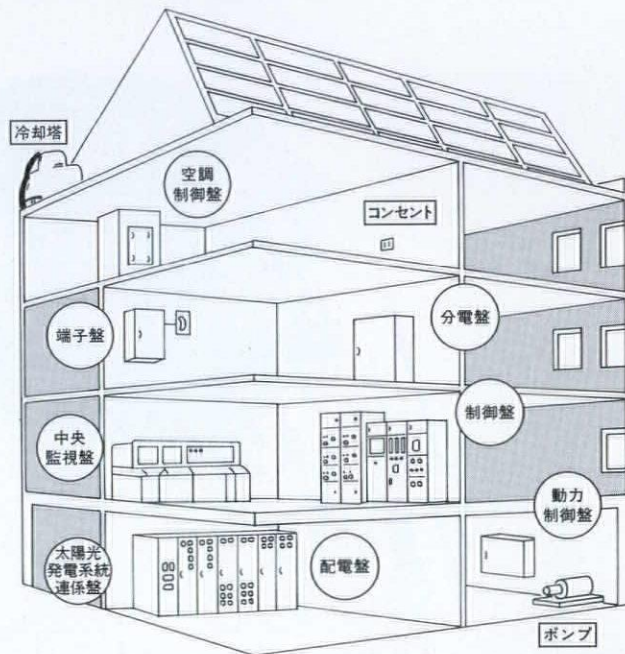
大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所

見えない電気を交通整理 それはKAWADEN



川崎電気株式会社

- 本社／山形県南陽市小岩沢225
- 東京本社／東京都港区芝浦3-7-4



最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

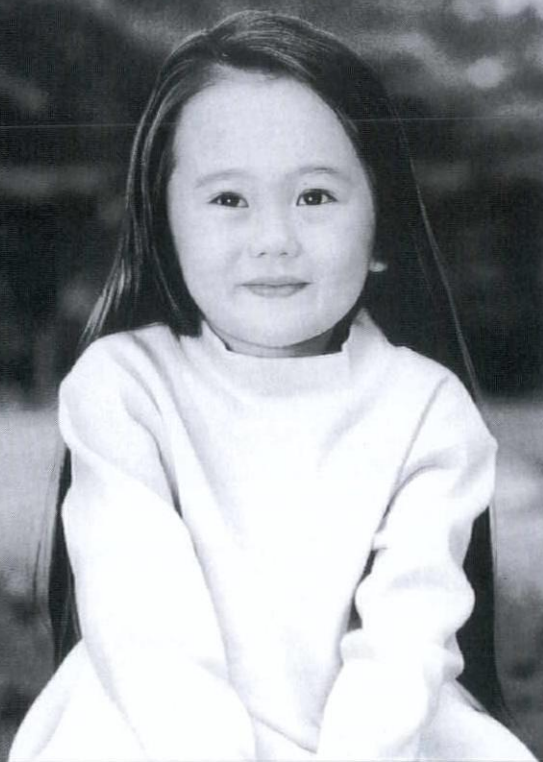
いろんな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

先端技術で、システムする。
TOE/NEC

株式会社 トーエネック

本店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店/東京都豊島区東横1-3-11 〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本店/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532-0025 ☎(06)6305-2181

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

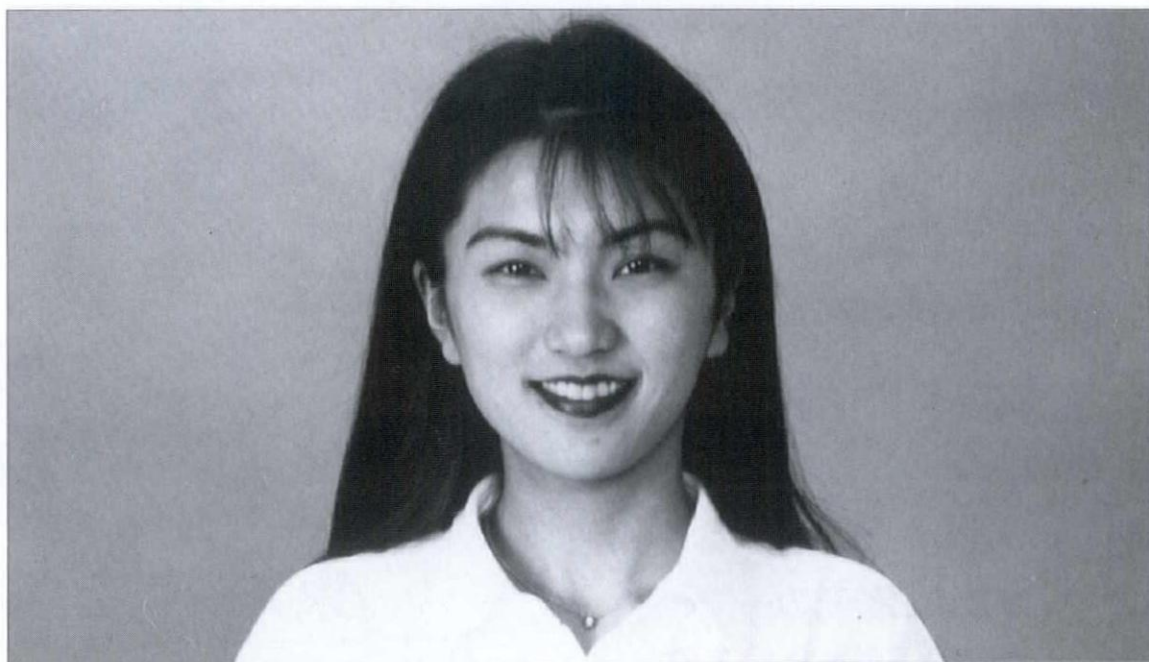
もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.



確かな歩み未来まで……



総合設備の設計施工 電気・情報通信・計装・空調・給排水・水道施設

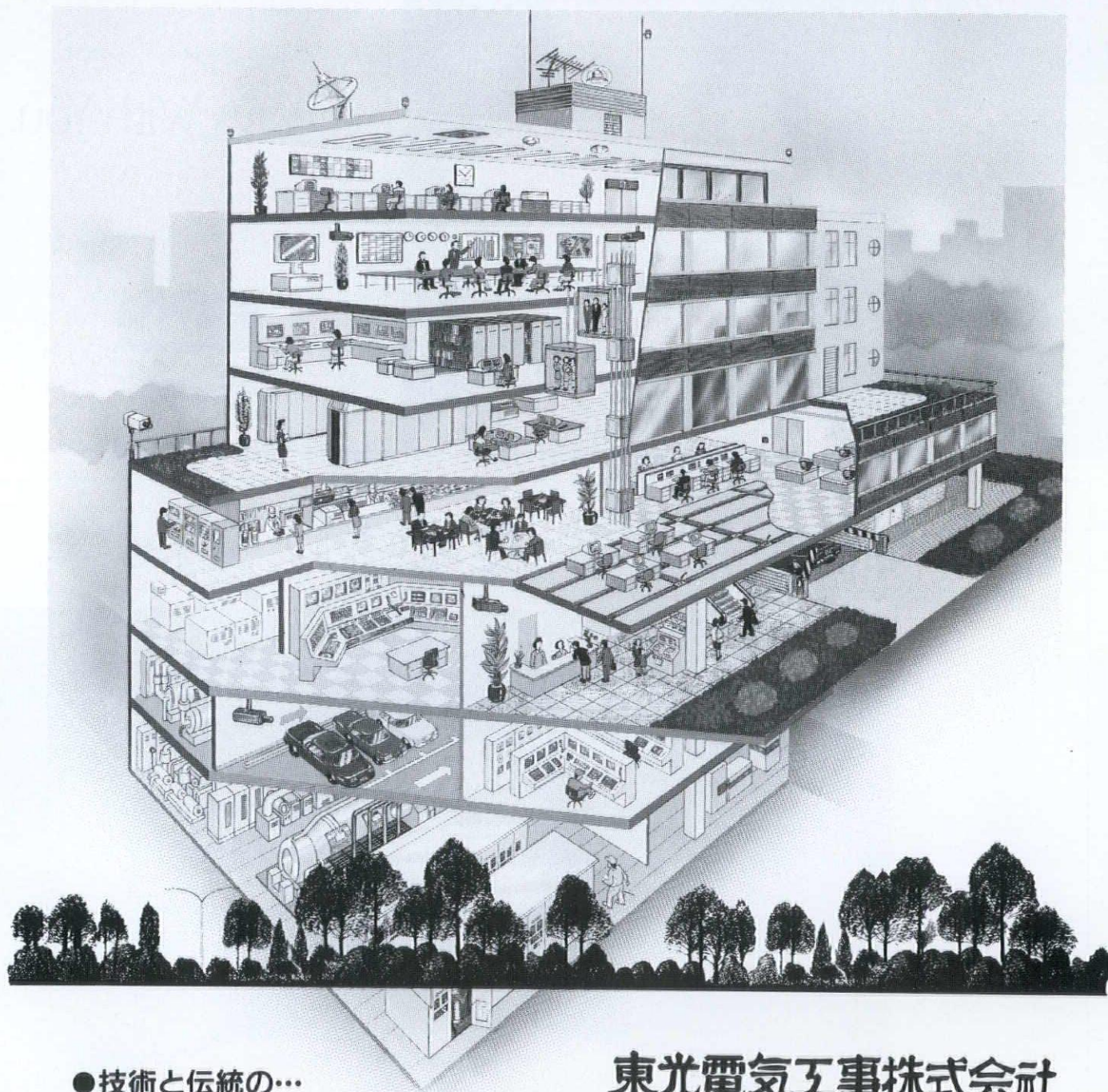
株式会社 **中電工**

本店／広島市中区小網町6番12号 TEL (082) 291-7411
支店／広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪



快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、 豊かな経験。



●技術と伝統の…
内線工事 ■ 外線工事

東光電気工事株式会社

本社 〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5 TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡

5 特集 ダッチ・モデル 建築・都市・ランドスケープ 監修=吉良森子		6 トータル・ランドスケープ 建築・都市計画・ ランドスケープ・デザイン としてのダッチ・モデル 吉良森子	26 ダッチ・モデルについて 21世紀の社会モデルとして 長坂寿久	44 アムステルダム東部 港湾地区再開発 オランダ都市計画の メカニズムの現在 吉良森子	46 「協議の国」オランダの 都市計画 建築・都市計画、 そして社会の密接な関係 笠 真希
65 フローの空間 オランダのメディアと インフラストラクチャ ジョン・サッカラ 翻訳=太田佳代子	81 セカンド・モダニティへの 建築 パート・ローツマ 翻訳=五十嵐太郎	95 オランダ近代建築の地勢 ホリゾンタル・ メガストラクチャ・ パラダイムの形成と延伸 石田真一	キーワード 構成・編集= Keyword Group	9 1. インフラストラクチャ	29 2. 制御システム
			49 3. 対等性	69 4. 合意形成	85 5. 合理主義
12-94 建築家・都市計画家・ ランドスケープ・アーキテクト12人		14-19 OMA	14 都市計画 「ソンドウ・ニュータウン」	16 ボルドー近郊の住宅	18 駐ベルリン・ オランダ大使館・援助の家
20-23 ターン・ファン・フェルゼン	20 ユトレヒト大学 付属博物館	22 オフィス・ビル「ING銀行」	24-25 メカノ	24 都市計画・集合住宅 「プリンセンランド地区」	
33-38 WEST8	33 都市計画 「ホルネオ・ スポールシブルグ」	37 ランドスケープ・デザイン 「カラスコ広場」	39-40 カウバー・コンパニオン	116 都市計画 「カッテンブルグ」	
41-42 Max.1	41 アイントホーフェンの 14の住宅	42 「ユトレヒト近郊の町の 30,000世帯の都市計画」	53-56 UNスタジオ ファン・ベルケル&ボス	53 都市計画 「アーネム・センター」	
57-60 ヴィール・アレック	57 KNSM島の アパートメント・タワー	59 ボクステルの警察署	61-64 ケース・クリスティアーニス	61 都市計画・集合住宅・ 市営水道局跡 (GWL)	63 都市計画・ オフィス・パーク 「バイト・シティ」
73-76 ペンテム・クラウエル	73 スキポール空港 ショッピングセンター 「スキポールプラザ」	75 コンサートホール 「ゴッブクラスター」	77-80 ノイトリング・リーダイク	77 「道路・運河」管理ビル	79 ショッピング・センター 「フラシル」・ 「ワタワノ集合住宅」
89-94 MVRDV	89 仮想都市「メタシティ」/ データタウン」の 3Dシミュレーション	92 オフィス・パーク都市計画 「パークレーン」			
89 建築家・都市計画家・ ランドスケープ・アーキテクト Vol.2 構成=大松俊紀		キーパーソン・インタビュー インタビュアー=吉良森子、上原雄史		12 レム・コールハース	32 アートリアン・クーズ
101 オランダ建築旅行ガイドマップ アムステルダム/ロッテルダム ユトレヒト/デン・ハーグ		43 リック・バッカー	52 ヴィッツ・バティン	72 クリスティン・ファイライス	88 ヴィニー・マース
105	連載：エントロピーの森 都市のインフラストラクチャ 2				写真=ハイナール・シリンド 文=山形浩生
111	展覧会レポート： 「アルヴァー・アールト：20世紀モダニズムの人間主義」展より				梅宮弘光
112	展覧会レポート： 「原広司：25の顔面台——種相論的都市における記号場」展より				松永英伸
114	書評				
116	新刊紹介				
119	お知らせ				
120	海外レポート： 「パリ」パリ「建築シテ」プロジェクト				山名善之
121	海外レポート： 「フエノスアイレス」フエノスアイレス・ビエンナーレ——テーマを排した建築会議				藤口範子
122	海外レポート： 「ロッテルダム」データ・スケープ/社会性のある建築を求めて				大松俊紀

5 Special Feature:

The Dutch Model:

Architecture, Urban Design and Landscape

Supervision: Moriko Kira

6

The Total Landscape:
The Dutch Model in
Architecture,
Urban Design and
Landscape Design
Moriko Kira

26

On the Dutch Model as
a Social Model for the
Twenty-first Century
Toshihisa Nagasaka

44

Amsterdam East Port
District Redevelopment:
The Mechanisms of
Dutch City Planning
Today
Moriko Kira

46

City Planning in
the Netherlands,
the "Nation of Councils":
Architecture,
City Planning and
Their Close Links to
Society
Maki Ryu

Chief Editor: Koji Akawa
Editor: Shinya Takagi
Associate Editors:
Mariko Terada,
Yumi Ohsu,
Rei Iizuka,
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kure
Digital Studio Shiroki
Publisher: Kama House
Executive Director:
Aiko Hasegawa

65

The space of flows:
Media and Infrastructure in
The Netherlands
John Thackara

83

Architecture for the
Second Modernity
Bart Lootsma

95

The Topography of
Modern Dutch
Architecture:
The Evolution and
Growth of the Horizontal
Megastucture Paradigm
Toshikazu Ishida

Keyword

Composition and Editing:
Keyword Group

9

1. Infrastructure

29

2. Control

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
5-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107-8345,
Japan
TEL:
03 5561 2551 (Management)
03 5561 2555 (Editing)
FAX:
03 5561 2561 (Management)
03 5561 2565 (Editing)
TEL EX:
02422467 KA-JMSA J
Home Page:
<http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm>

12-94

Twelve Architects,
Urban Planners, and Landscape Architects

14-19

OMA

14

Urban Design
"Song-Do New Town"

16

House near Bordeaux

18

Netherlands Embassy in
Berlin+House of the
Giving in Berlin

Printed in Japan
This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

20-23

Koen van Velsen

20

University Museum

22

ING Bank

24-25

mecanoo

24

Urban design and
Housing project
"Quartiere Prinsenland"

Order Form: Page152

Cover:
Auto-camp Camper
Cover Photo: Karel Tonnis
Cover Design:
Thomas Karpman/ND

33-38

WEST8

33

Borneo/Sporenburg

37

Carrasco Square

39-40

Kuiper Compagnons

39

Urban design
"Kattenbroek"

41-42

Max.1

41

14 dwellings for
Eindhoven

42

Urban design for
30,000 houses near
Utrecht

53-56

UN studio
Van Berkel and Bos

53

Arnhem Centre

57-60

Wiel Arets

57

Apartment Tower
KNSM-Island

59

Police Station Bostel

61-64

Kees Christaense

61

Residential community
on the former Municipal
Drinking Water (GWL)

63

Plan Description
"City of Bits",
Amstel III, Plot206a

73-76

Bentheim Crouwel

73

"Schiphol Plaza",
Amsterdam Airport
Schiphol

75

"Popcluster/013"

77-80

Neutelings-Riedijk

77

Road and Water
Support Building

79

Shopping Center
"Brazilie" + "IJ-Tower"

89-94

MVRDV

89

Metacity/Datatown

92

Urban Design "Parklane"

89

Architects, Urban Planners, and
Landscape architects, vol. 2

Composition: Toshiki Omatsu

Key Personality Interview:

Interviewer: Moriko Kira, Yushi Uehara

12

Ran Koolhaas

32

Adriaan Geuze

101

Architectural Travel Map of the Netherlands
Amsterdam/Rotterdam
Utrecht/Den Haag

43

Riek Bakker

52

Wytze Patijn

72

Kristin Feireiss

88

Winy Maas

105

The Entropic Forest:
Urban Infrastructure 2

Photo=Heiner Schilling
Text=Hiroo Yamagata
Hiromitsu Umemiya

111

From the Exhibition:
Alvar Aalto 1898-1976

112

From the Exhibition:
25 Music Stands: A Semiotic Field in a Modal City

Eishin Matsunaga

114

Book Review

116

Book Information

119

Announcements

120

Topics Abroad:
[Paris] Museum of Architecture and Patrimony

Yoshiyuki Yamana

121

Topics Abroad:
[Buenos Aires] The Buenos Aires Biennale: The Themeless Architectural Congress

Noriko Takiguchi

122

Topics Abroad:
[Rotterdam] Datascape: In Search of Architecture with a Social Role

Toshiki Omatsu

特集 | ダッチ・モデル 建築・都市・ランドスケープ

Special Feature | The Dutch Model: Architecture, Urban Design and Landscape

「モダニズム建築の王国オランダ」。このタイトルのもとに、今から14年前の1985年SD8月号の特集で紹介されたオランダの近代建築が、大きな衝撃をもって我々にその魅力と新鮮さを与えてくれたことは、まだ記憶に新しい。そのときから我々の関心は、オランダの近代建築から始まって現代建築・都市へと展開したと言って良いだろう。

その特集と前後して、オランダの建築家レム・コールハースが新たな視点でニューヨークにおける建築的現象を分析した『デリリアス・ニューヨーク(錯乱のニューヨーク)』が大きな話題を呼んだが、このこともやはり根底において、オランダの近代建築の魅力に裏付けられると言えるだろう。そして90年代に入って、コールハースに続くオランダの若手建築家が次々に世界の建築雑誌をにぎわせてきている。果たして、この近代建築から続くオランダの状況は、どのような建築的、都市的、社会的背景から起こってきているのだろうか？

そこで本特集では、以下の5つのキーワードを用いて、「ダッチ・モデル」としてのオランダの建築・都市計画・ランドスケープを考察する。

keyword 01 インフラストラクチャ | Infrastructure

keyword 02 制御システム | Control

keyword 03 対等性 | Horizontality

keyword 04 合意形成 | Consensus

keyword 05 合理主義 | Pragmatism

もはや今までの私たちのチューリップ・風車・運河というオランダのイメージは、5つのキーワードに象徴された「ダッチ・モデル」に取って替わろうとしている。

「ダッチ・モデル」。これこそ新たな都市システムのモデルのひとつであり、ここに、建築・都市計画・ランドスケープをトータルに捉えようとする、21世紀に向けてのオランダの強い意志とその魅力をお伝えしたい。(編集部)

監修＝吉良森子 | Supervision: Moriko Kira

トータル・ランドスケープ

建築・都市計画・ランドスケープ・デザインとしてのダッチ・モデル

吉良森子

環状都市ネットワーク「ランドスタット」

19世紀オランダ新古典主義建築家カウパーの名作〈アムステルダム・セントラルステーション〉は、かつて17～18世紀に東インド会社がその黄金時代を築き上げたアムステルダム港と、今は淡水化された海の境界に建っている。だからアムステルダム・セントラルステーションに降り立つとき、この同じ風景をかつて船乗りたちもアムステルダムに入港する帆船から体験していたのだと感動する。この駅は今でもオランダ各都市とヨーロッパの主要都市をつなぐ、主要な列車の発着駅だ。その中でもデンハーグ、ロッテルダムを經由してブリュッセル、パリへ向かう列車とユトレヒトを經由してドイツ、ルール地方へ向かう列車は最も重要な路線であり、24時間列車の運転を行っている。アムステルダムからロッテルダムまでは約1時間、ユトレヒトまでは30分かかるのだが、実はユトレヒトとロッテルダムも繋がっていて約40分程だ。つまりこれらのオランダ主要都市は環状ネットワークを形成している。

アムステルダムに住んで7年、この環状ルートは何度往復したかわからない。何度となく早朝のブリュッセル行きの列車にも乗った。列車は駅を出発すると、アムステルダムの旧市街を左手に見ながら、右手に、現在は住宅に改装された、美しい17世紀の煉瓦造りの倉庫によって形成された運河沿いの町並みを通り、元労働者住宅地区に入るとアムステルダム派の名作デ・クレルクの集合住宅〈エイヘン・ハールト〉の美しいタワーが見える。そこから列車は二手に分かれハーレム駅経由だと現在のアムステルダム港にそびえるたくさんのクレーンを右手に見ながら、スキポール空港経由だと戦後住宅難時代に開発された高層住宅地を通過しながら列車は市街地の外に出る。そこからはオランダ観光イメージそのものの風車とどこまでも続く牧草地の模様のような羊と牛の群れという牧歌的な風景が始まる。4月末にはチューリップが開花する。色とりどりの広大なチューリップのカーペットがどこまでも水平なオランダのランドスケープを埋めるのだ。そんな風景を一瞬楽しんだかと思うと、再び市街地が始まり、

ハーレム駅、あるいはスキポール空港に到着する。そこからライデン、デンハーグ、デルフト、ロッテルダムへの風景はこのような市街地と牧草地が約15分ごとに繰り返され、ロッテルダムから列車を乗り換えるとゴード、ユトレヒト、そしてアムステルダムへ戻ることができる。この環状都市ネットワークがオランダの政治・経済・文化の中心「ランドスタット」(エッジ・シティ)である。

このランドスタットはグリーン・ハートと呼ばれる、農地と自然保護地区の緑地を中心に、その縁にオランダの主要都市が数珠繋ぎに並んでいるのでこう呼ばれている。ランドスタットの各都市は歴史的市街地、文化施設、商業施設、住宅地を備え、人口が最も多いアムステルダムで70万人あまりという住みやすいスケールで、それぞれ独立した生活圏を形成している。だが、ランドスタット全体の人口は、すでに述べた主要都市と、これらの都市のサブネットワークである無数の小さな町や村が加わり、約600万人という北ヨーロッパ最大の経済圏となっている。中心が緑地であることから明らかなように、ランドスタットの主要都市間にヒエラルキーはなく、各都市の、歴史的地理的背景によって育てられた異なる機能の対等なネットワークによって成り立っている。首都アムステルダムは金融と文化、ロッテルダムは世界最大のユーロポートに象徴される経済、政府各省庁、各国大使館のあるデンハーグは政治、ドイツ経済との関係に大きく依存するオランダにとっては重要な物流のクロスポイントであるユトレヒトは交通、といった具合だ。

統合されたネットワークとしての自然／都市

このランドスタットの面白さは、水平な都市のネットワークだけではない。グリーンハートと市街地という自然と都市のネットワークこそ、国際的にも本質的な問題を提示している。都市から都市へと列車で移動すると、繰り返し牧草地に遭遇することからも明らかなように、グリーン・ハートはその縁を都市と都市の間に滑り込ませている。都市は近年ますますグリーンハートの中心に向か

って拡大し、そして都市間の緑地を狭めようとしているが、生活・自然環境の保持と言う視点から、都市の拡大に対する反対は非常に大きい。経済対環境という21世紀の地球的問題はランドスタットの構造そのものである。しかし、ここで強調したいのは、ランドスタットでは、あるいはオランダでは、自然／都市の関係が相反し、対立するものではなく、むしろ統合されたネットワークとして捉えられていることだ。自然と都市が分離していて、世界でもまれな豊かな自然をもつ日本に比べると、このような考え方はまだ違和感があるかもしれないが、オランダに住んでいると、自然と都市をひとつの枠組みの中で相互のバランスとして考えるということは、例えばアムステルダムからロッテルダムへ向かう列車の風景としても何度となく目の当たりにする現実なのである。

オランダ人は有史以来、主に沼地の国土を干拓して国土を作りつづけてきた。つまり、列車の風景に広がる牧草地も自然保護地も実際にオランダ人が自分たちで作り上げてきた人工的なものである。その歴史を考えれば、オランダ人にとって自然と都市をひとつの枠組みのなかでトータルに考えることは何ら不思議のないことだと納得がいく。そしてのんびりと牛や羊が昼寝をしている緑豊かな牧草地の地面の中に一面に排水パイプが配管されていて、24時間電力を使って地下水位をコントロールしているということを知ったとき、この心とむく牧草地が完全に人工的でハイテクな存在であることに気がつく。オランダでは同じように森林も自然の沼地も環境として必要であると考えれば「作って」しまうのである。そして、こうして「作られた」自然環境の中にも、驚くほど急速に生態系が育っていく。10年ほど前にオランダの環境学者と話した時に、環境を守るということは既存の自然を守るのではなく、あるエリアになるべく豊かな生態系が存在できるような環境を整備することによって、「育て、コントロールする」ことだと言われ、愕然としたことがある。実際にオランダは国土全体の生態系を把握していて、豊かな生態系が確認されているエリアを「環境価値の高いエリア」と呼んで、国土計画にも反映されている。このような国に

住んでいると自然と人工の境界が実は驚くほどあいまいなものであることを思い知らされる。

21世紀を目前にして、自然と都市（人工）をトータルに捉えなければならないのは、もはやオランダだけの現実ではない。自然と都市は互いに深く関わり合うひとつの実体であり、どちらか一方の視点から判断、決定を下すことによって何ら問題を解決することはできないということは周知の事実だが、問題は概念的にもシステムのにも技術的にも双方をひとつの枠組みで考えるためのインフラを作り上げかねていることだ。都市と自然の問題だけでなく、建築と都市、建築と社会の問題についても同じことが言える。今日、個々の枠組みの中で考えていても何ら問題は解決しないという閉塞感に建築・都市・ランドスケープに関するさまざまな分野の人が直面しているのではないだろうか。

トータル・ランドスケープの提案

7年間建築家としてオランダで生活をするうちにこのオランダ独特のトータルな問題の捉え方を建築・都市計画に関るさまざまな場で体験し続けてきた。数年前からオランダの建築、そして特に都市計画とランドスケープを日本に紹介することを考え始めていたが、オランダの専門家、SD編集部とのディスカッションを進めるうちに、結果としてのデザインだけを紹介するのではなく、このトータルな考え方を可能にしているオランダのシステムとオランダの建築・都市計画の関係を明らかにするという視点から作っていく方向に定まっていっていった。オランダの近年の動きを見ると、建築・都市計画・ランドスケープの境界はあいまいになりつつある。職業的な枠組みとして例を挙げれば、アムステルダムでボルネオ・スポールンブルグの都市計画を行ったWEST8のアードリアン・ゲーズはランドスケープ・アーキテクトだし、ファン・ベルケル、ケース・クリスティアーンズなどの建築家も都市計画を行っている。そして組織的にもこれらの計画を迫行する自治体、開発業者、都市計画家、建築家の関係も急速に統

合的なものになりつつある。これは建築・都市計画・ランドスケープを総合的に捉えようとする21世紀に向けてのオランダの強い意志を示していると言って良いだろう。

このようなオランダの状況を調べ、特集の趣旨を考える過程で驚いたことがある。本特集のタイトルとして、生活環境を統合的に考えるというテーマを表すために、私たちはランドスケープ・デザイン、都市計画、環境問題を統合する概念を表現する言葉を探していたが、結局見つけることができなかった。ランドスケープ・デザインというと日常生活とは無関係なランドアートのものを思い浮かべし、都市計画といえば都市開発や色で塗り分けられたイメージの沸かないマスタープランを思い浮かべし、環境問題といえば自然保護、水や空気の汚染を考える。どの言葉もその問題自体で完結して、他との関係性をまったく感じさせない言葉だ。そしてそのことが、言葉の、そして私たちの考え方の根本的な欠陥を浮き上がらせている。なぜなら、どの言葉も生活環境の本質に関るだけではなく、時には激しく利害の対立する、相互に深く関係する問題であるはずだから。これらを総合的に捉えず、それぞれがそれぞれの価値観の中に閉じこもっている限り、生活環境を改善するどころか、何が問題なのかを把握することもできないはずだ。そのような思いを込めて、オランダの統合的な生活環境の捉え方を私たちは「トータル・ランドスケープ」と呼び始めた。

特集の構成——建築・都市計画・ランドスケープのダッチ・モデル

この数年のオランダの目覚ましい経済的發展を経済の世界では、オランダ独特のマネジメントである、トータルな問題の捉え方によるものだとして説明しており、それを「ダッチ・モデル」、あるいは「ボルダー・モデル」と呼び、この言葉は世界的に知られるようになった。このダッチ・モデルを解明していくと、そこからはオランダの社会と文化の歴史の基盤が明らかになっていく。それは同時に、オランダの建築・都市計画・ランドスケープの基盤

でもある。そこでこのオランダ特集では、オランダの社会と建築・都市計画の関係を示す上で、今最も活躍しているオランダのデザイナーの作品と平行して、このダッチ・モデルを解明するキーワードとキーパーソンのページをはさみ込んだ。

ダッチ・モデルを解明するキーワードのページは、なるべくたくさんのイメージや統計を集め、具体的な事例を挙げるために10人近くの日蘭の建築家、都市計画家、エコノミスト、法律家からなるキーワード・グループによって資料が集められた。この5つのキーワードは、今回執筆者でもあるエコノミストの長坂寿久氏が1996年にオランダでの講演会で話されたキーワードをもとに選んでいる。これらのキーワードによって、オランダ社会のシステムを具体的に示すと共に、オランダの建築・都市計画・ランドスケープとオランダ社会との関係に光を当てることができたのではないだろうか。そして、この問題をキーワードとは別の側面から照らし出すのが、キーパーソンである。オランダの建築・都市計画・ランドスケープとオランダ社会を考える上で最も重要と考えられる6人に、上原雄史氏と共にインタビューした。この他、多くのオランダ社会、建築、都市計画の専門家にエッセイを、そして毎年『オランダ建築年鑑』を編纂している建築史家ハンス・イブリンク氏に各建築家の解説、建築・都市計画の作品解説を執筆していただいた。

トータル・ランドスケープという考え方は、オランダでは実践を通して徐々に育ちつつある。それはまさに最も都市化、人工化が進み、そしてヨーロッパ中からの汚染された河川が流れ込む低地オランダの切迫した状況がそうさせているのである。この特集を通して、ダッチ・モデル、トータル・ランドスケープの背景・システム・デザインが、少しでも具体的に日本の読者に伝わることを、21世紀の日本の建築・都市計画・ランドスケープ・デザインのヴィジョンを構築する上でインスピレーションとなれば、と願っている。

●きら・もりこ／建築家、在アムステルダム

The Total Landscape:

The Dutch Model in Architecture, Urban Design, and Landscape Design

Moriko Kira

Recent remarkable economic development in the Netherlands can be explained as reflecting the success of the Dutch approach to management. Commonly known as the "Dutch Model" or "Polder Model," it boils down to analyzing problems and finding solutions that are harmonized with the situation as a whole. Investigation of the background of the Dutch Model can shed light on the foundations of Holland's social and cultural history, and those foundations are also the basis of Dutch architecture, urban design, and landscape design. The purpose of this feature issue is to throw light on how Dutch architecture and urban/landscape design today relate to that basis in the country's society and culture.

Practicing architects in the Netherlands often come across this Dutch way of dealing with situations in view of the totality. According to the Dutch approach, for example, nature and the manmade are not conflicting concepts but are considered part of an integrated network. The relationship between the "Green Heart" and the built-up areas of the Randstad is a good example. For urbanites in Japan, where nature and the manmade are often totally separated and people are accustomed to the exceptional abundance of nature, it may be difficult to understand how nature and the manmade can be dealt with under a single conceptual framework. For those who live in a land where even pastures and forests have been artificially created, however, it is perfectly reasonable and realistic notion, the results of which you can see all around

you. Even in the artificially created natural environment, the ecosystem develops quite rapidly. One Dutch ecologist describes protecting nature as fostering and controlling the environment in order to assure optimal conditions for the environment and the ecosystem. While this may seem a somewhat shocking idea to those who associate nature with non-interference by human beings, it also illustrates how subtle is the border between nature and the manmade in the Netherlands.

As we face the dawn of a new century, the reality of the need to consider nature and the city (the artificial) as a totality is by no means limited to the Netherlands alone. It is now widely recognized that cities are closely related to their natural environments and that we can no longer afford to make judgments and decisions from either point of view in isolation. The total view is indispensable. The difficulty is to create conceptual, social, and technological infrastructures that can deal with both dimensions within one framework. What may be said about the nature vs. manmade question applies also to the problems of architecture vs. urban design and of architecture vs. society. People in many fields of endeavor are facing the fact that problems often cannot be solved and further development cannot be achieved as long as one thinks within only a single perspective or professional framework.

The Dutch Model, which permits us to break through the established borderlines between professions and ways of thinking in order to attain a total conception of the

matter at hand, deserves our close attention. In discussing the concept for this issue with the editor and the Dutch specialists we consulted, we realized that it would have to do more than simply publish the Dutch designs; attention had to be given to the relationship of these works to the social system, to the "Dutch Model." Recent developments in the Netherlands show that the borderline between architecture and urban and landscape-design is gradually growing less distinct. This is an indication of the ambition in the Netherlands to create an integrated framework that embraces all three realms of activity.

To further illustrate the relationship between design and society, we have interspersed among the works of the Dutch designers pages featuring key words and key personalities in the world of Dutch design. The key words were chosen from among terms presented in a lecture given in 1997 by Toshihisa Nagasaka (see p.26-28 "On the Dutch Model as a Social Model for the Twenty-first Century"). The key personality pages further illuminate the relationship from other perspectives. I would like to express my gratitude to the authors of the articles, to Hans Iblings, who contributed the explanations of the designers and their works, and to Yushi Uehara for his interview of Rem Koolhaas and assistance in coordinating the OMA pages.

● Architect, Schroevers-Kira Architecture, Amsterdam

オランダの社会と文化は干拓の歴史によって形作られてきた。言いかえれば、オランダは治水のインフラによって築かれたインフラ社会だということだ。

三角州の沼地をその国土として選んだオランダ人は、有史以来乾いた土地を作り上げることに取つかれてきた。干拓のプロセスは簡単に言えば、以下のようなものだ。沼地の周辺に水路を掘れば沼の水は水路に流れ込むので土地は乾きそして沈下する。沈下していく土地を周辺の沼地の水や海から守るために堤防が築かれ、その乾いた土地の雨水、地下水は風車によって組み上げられ、海へと排水される。恐ろしいことに、このプロセスは一旦始めたら二度と止めることはできない。干拓された土地を風車と運河の完璧なネットワークによって日夜ポンプアップし続けなければ、せっかく乾いた土地は水浸しになってしまうのである。風車から水蒸気、今日では電力になったとはいえ、オランダという国が存続する限り、ポンプアップし続けなければオランダの国土の半分以上は水浸しになることには変わらない。そして地球の温暖化によって海面は高くなるばかりだ。現在オランダは、年間国家予算の約20%を水管理に費やしている。このことに気づいたとき、オランダ人って何と言う悪循環を始めてしまったんだろう、と呆れたものだ。オランダの国土は水管理のインフラと運命を共にしている。

しかし水管理のインフラは、オランダのインフラぶりを語る上ではほんの序の口だ。なぜならオランダは治水という自ら選択した悪循環の結果、常に国家を危機にさらすリスクを負うことによって突出した土木工学のシステムを発達させ、その技術とシステムとメンタリティはオランダの産業、政治、文化の基盤を規定していったからだ。産業という側面から言えば、国を守る風車の開発による世界最高の木工技術は、16世紀にオランダに高度の造船技術をもたらし、オランダは多くの植民地を持ち、華々しい東インド会社の歴史を作り、貿易国としての基礎を築き上げた。世界一の貨物量を誇るヨーロッパの物流ゲートであるロッテルダムユーロポート、ヨーロッパ第3の規模のスキポール空港を国の規模に照らしてみれば明らかなように、オランダ経済は貿易によって成り立っている。政治的には、治水の問題は常に他のエリアとの協力関係なしに解決することはできない。この結果、オランダでは早い時期から宗教的、地理的に異なるエリアがコンセンサスを形成して問題解決をする独特の民主的政治インフラを作り上げてきた。13世紀に始まった、地方有力者による水の問題を話し合う水議會は同時に地方政治の母体となり、今日知られるオランダ的民主主義は治水の歴史とともに育てられたのである。この商人の歴史、議會政治の歴史は、他のヨーロッパの絶対君主の歴史とはまったく異なる、実利的民主的な文化を育ててきた。それは水管理を運命共同体とする、きわめて自制的な文化だ。質実剛健を良しとするプロテスタンティズム(カルビニズム)が、低地オランダの主要な宗教となったことから明らかなだろう。ここに、オランダ文化のインフラさえも水の管理を基礎として形成されたということが出来る。(吉良森子)

keyword | 01

Infrastructure

インフラストラクチャー

構成・編集=Keyword Group

吉良森子、大松俊紀、Iwan Hamelers, Sander Schroevers、嶋川肇、
綿谷博美、笠真希、Henk Jan Bulstra、長坂寿久





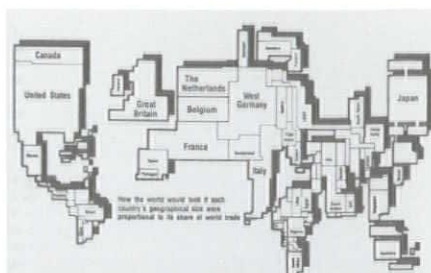
01 | 1年1人1000kmの自転車



04 | 高速を横切る運河



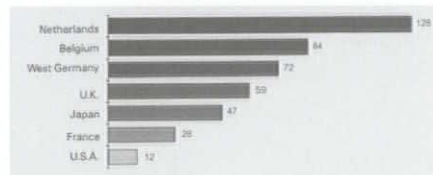
08 | ロッテルダム港



02 | 輸出货量で描いた世界地図1995



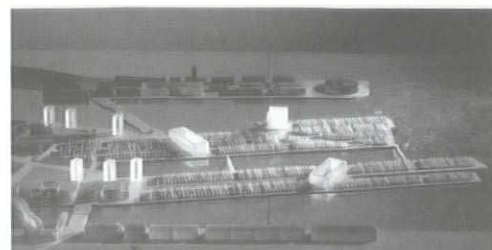
05 | アムステルダムの路面電車



06 | 7大工業国の自動車の密度



09 | 公衆インターネット



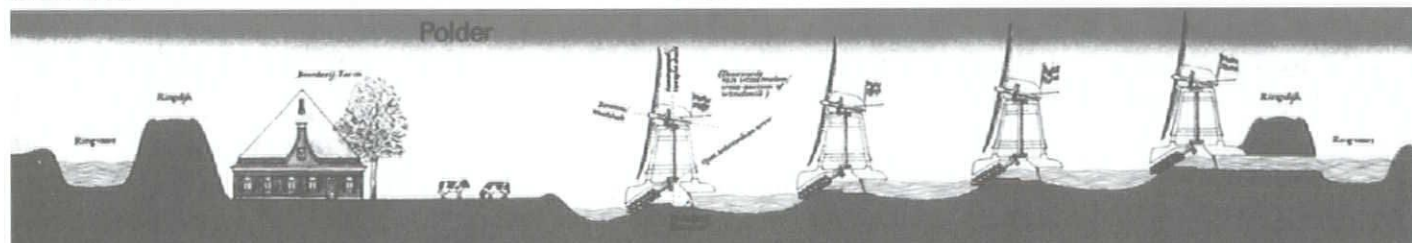
03 | ホルネオ・スポールンブルグ都市計画



07 | スキポール空港の近隣にある世界最大の花のオークション



10 | 凍りついた泥炭採掘跡の湖でスケートを楽しむ人々



11 | 水をくみ上げる風車

01—オランダ国民平均1人あたり1年に1,000km自転車に乗るといふ。風の日も雨の日も、大人も子供も老人も。1929年の大恐慌の後の経済活性化の公共事業として、オランダ政府は全国に自転車道を建設した。かつて自転車は真剣な交通手段だったのだ。車社会の今日も(もちろん手軽さと安さもあるが)、自転車の自己所用感、デモクラティックさ、エコロジカルさが彼らにとってもフィットする。©Iwan Hameleers

02—世界最大の港ユーロポート、ヨーロッパで最も人気の高いトランジット空港、スキポール。小国オランダの戦略はヨーロッパの流通を掌握することだ。©Resource for Future

03—植民地との貿易で栄えたアムステルダム・イーストハーバーは、かつて港湾機能のインフラとして造られた人口の島のランドスケープをアイデンティティとして、新たに住宅地として再開発された。提供=アムステルダム市DRO ©Hans Brons

04—水面下の町を維持するということは、随時海面の高さまで水をポンプアップし続けるということを意味する。そのため、オランダでは船が高速道路を横切るような天地がひっくり返ったような場面に出くわすことがある。©Karel Tomei

05—運河の町アムステルダムの地下鉄建設には莫大なコストがかかるため、メインのインフラは路面電車。電車のデザインはアーティストと広告会社の独壇場による。©藤原がすみ

06—7大工業国の1km²あたりの自動車の密度の比較。オランダ128台、日本47台、アメリカ12台。ちなみに、この表が作られてからすでにオランダの自動車の密度は20%増加している。©オランダ地理情報センター

07—オランダの花は、ベルトコンベアに乗って競売にかけられ、空港に運ばれて、次の日には日本の花屋で売られている。提供=Flower Auction、Aalsmeer

08—ヨーロッパの玄関、ユーロポート。世界最大の貨物の流通量を誇るロッテルダムの港。マース川、ライン川を介してヨーロッパ大陸の物資はこのロッテルダムの港経由で内陸に移送される。オランダ外務省提供、©Peter Horree

09—人と物資の流通にとりつかれたオランダ人が情報の流通にこだわらないわけではない。政府はいち早くエレクトリック・ハイウェイに対する政策を発表し、自治体もインターネットによる情報公開を進め、家庭の銀行送金も電子化が大勢になりつつある。©Iwan Hameleers

10—スケートと自転車こそインフラなオランダの国民的スポーツ。運河も湖も凍りつく寒い冬を誰もが心待ちにしている。提供=オランダ外務省、©KLM Aerocarto

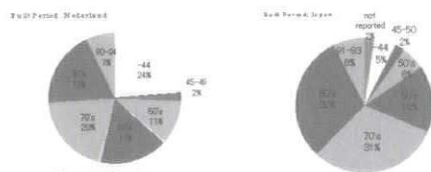
11—オランダの最も低いところはロッテルダム近郊にあり、水面下約6.5m。今は電動ポンプだが、かつては国土の25%を占める0m地帯の地下水、雨水、生活廃水をも風車のネットワークで海面までくみ出していた。出典=『Euro-Book 1990』



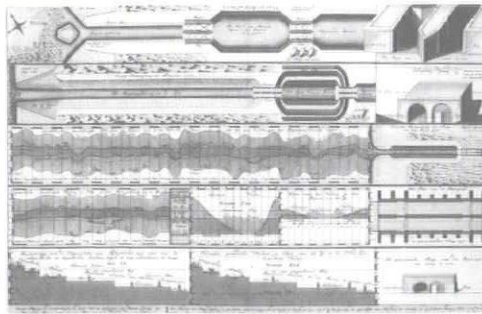
12 | ハイウェイ・デンシティ



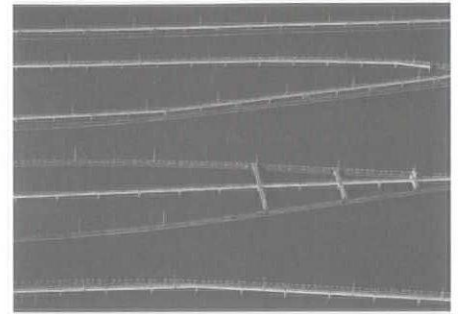
15 | オートキャンプ



16 | 日蘭建設期比較



13 | 1740年の水門設計



14 | 船の分岐点

17 | スキポール空港とチューリップ栽培の温室

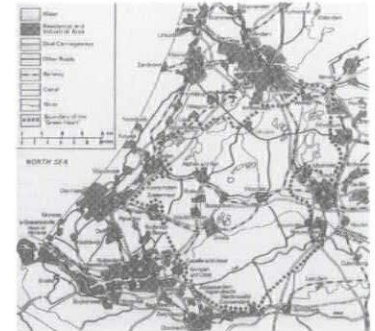


18 | アムステルダム上空から



19 | 1928年に発行された「考える主婦」のポスター

20 | ランドスタットの交通ネットワーク



12—インフラなオランダのミッションは、A地点からB地点に人と物資を運ぶこと。そこに価値が生ずる。当然オランダの高速道路の建設密度は世界最高だ。

13—さすが水利管理の国。1740年の水門の図面の美しさにただただ感動するばかり。©Melchior Bolstra

14—交通量が多いのは高速道路だけではない。ロッテルダム港についた物資の70%は、その先の運河や川でヨーロッパの国々に運ばれる。この写真から、海と川の境界で安全かつ効率の良い内陸水運のため、船の航路は行き先によって海の上ですでに分岐されていることがわかる。提供＝オランダ水利交通省

15—人口1500万人のオランダには40万台のキャンピングカーがあるという。まさに4人に1台という信じられない数字。インフラなオランダ人は旅をこよなく愛する。かつて、オランダの帆船は世界を発見したが、今日ダッチ・ファミリーはキャンピングカーに乗ってヨーロッパを駆け巡る。©Karel Tomei

16—95%の日本の建物は戦後建てられている。私たちは、ヨーロッパには新しい建物を建てる余地はなく、改築ばかりしていると思いがちだが、実はオランダの建物の76%は戦後建てられている。オランダは干拓、インフラ、新しい町を建設し続けているのだ。資料作成＝笠真希

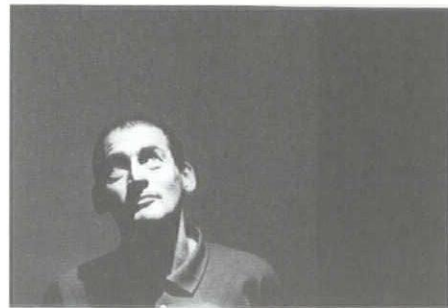
17—資金も高く、日照も少ないオランダの世界最大の切り花の輸出国としての競争力を保っているのは、インフラが充実しているからである。提供＝Flower Auction Aalsmeer

18—同心円状に運河が広がるアムステルダム市は、アムステル川の河口に港町として発展した。水面下の町に、治水、交通のインフラとして生まれた運河は、今では人々が住み、イベントが開催されるユニークなパブリックスペースだ。

19—月曜洗濯、火曜アイロンがけ、水曜買い物、木曜掃除、金曜銅器磨きと、かつて主婦の日課は厳しく定められ、インフラ・マインドはオランダの家庭生活にも浸透していた。洗濯機の普及とともに月曜の異常な電力消費の集中を避けるため、政府はこの慣習を止めさせるキャンペーンをしたらしい。提供＝アムステルダム歴史博物館

20—アムステルダム、ハーグ、ロッテルダム、ユトレヒトは、それぞれ人口100万弱だが、高密度の交通ネットワークでつながれ、全体では「ランドスタット」と呼ばれる人口約600万人のひとつの経済圏を形成している。生活圏としては極めて心地よい規模だが、ランドスタットをマーケットとするビジネスマンは年間平均約4万km運転するらしい。©ANWB

激変する現代都市の作家性と自身の社会性 一個人としてのレム・コールハースに聞く



—今回はOMAの作風に関してというよりも、計画の背後に横たわるさまざまな位相についてお話をうかがいたいと思います。現在オランダでは、あなたを追う様に若い建築家達が活動中ですが、あなたに比べて説得力が欠けるような気がします。作家であるあなたの活動を読む側の若者は、事実を見つめ、読み、結論を導き出すあなたの方法論に、力を見出していると思います。生きたレトリックの活用という面で、ロラン・バルトの読者が陥ったジレンマを思い出しますが、いかがですか。

ただ、ここで明確にしたいのは、この問題には関与したり考えたりしたいとは思わないということだ。私の過去の活動がもたらす効果に焦点を合わせるのには、まず大変な労力を必要とするし、自分の活動の自由を奪い取ることになると思うからなんだ。だからたとえ現実的な効果がどうあろうとも、私がこれまでの活動をこれからも続けて行くことは重要なことだと思うんだ。

—もちろん別の視点に立って、あなたの作家としての自由を確保するために、あなたが社会的効果を無視している事実は理解できます。同時にあなたの方法論を一般化することで、より力強く万能な方法論が見出されるようになりはしないかと思うわけです。それはあなた自身にも言えることではないでしょうか。

それは、確信に最も関係することだと思う。私は「知識」に非常に関心があると同時に、非常に懐疑的でもある。今までこのふたつに支えられるように新しい場所へ向かってきたんだ。だが発見を洗練し、ついには共有され得る価値にまで高めていくことには怠惰なのかも知れない。私は知識や確信のように、言わば集団による決断に非常に懐疑的なんだ。だから一度世に送り出した建築は私からは独立した存在で、鰭の尾を切ったというわけだ。ロラン・バルトの場合も、間違いなく同じ現象だと思う。君が意識的に引用したのかどうか解らないが、私は未だに彼の著作からは、すべての計画の細部に至る深い影響を受けている。つまり、想像力を介して事実を魅惑的な方法で解釈する方法に彼の影響は大きい。今まで私の方法論として彼を決して引用はしてはいないが、彼は間違いなくそこにいる。日本的でもある「重要でないものは何もない」という彼の教えが、ロラン・バルトの所業を私の仕事において非常に重要な存在にしているんだ。一般的に西欧では重要性のヒエラルキーが浸透していることにはもう気付

いたろう。バルトが刺激されたと同じように、私が東洋の文化に魅了されるのはすべてが「空白の地」として同様な重要性を持っていて、物事を理解するためにはその全体を読むことが必要で、ピークだけを讀んではいけないということなんだ。

—新しい計画を、バルトがテキストを解説するように読むのでしょうか。

無論そうだ。この意味で私達のすべての仕事はたったひとつの研究の部分だと言える。つまり、私達と他者との相違は、計画途中で発見する物事を無理なくリニアに結びつけ得る点だといえる。つまり「物事はいかに進行し、この過程の操作可能性を探る」単一の研究活動なんだ。ただ残念ながら、この読解方法をここでこれ以上説明することは出来ないんだ。

—なるほど。さてバルトの話からはもうひとりの重要な作家を想起します。あなたはジェネリック・シティでジェーン・ジェイコブスに言及しました。言ってみれば、彼女は当時の死したゾーニング都市構造・グリッドに再び息を吹き返そうとしたわけですが、あなたは彼女を評価しつつ、その終焉を述べました。それは今の「蓄積された知識」への懐疑によるのですか。私はあなたがジェネリック・シティを彼女の視線を延長した部分に置いたと読みましたが。

面白い問題提起だね。というのも、今ハーバード大学で、中国デルタ研究の後に「都市研究」を行っているのは、「ショッピング」という題材。その一部が「ジェーン・ジェイコブスに何が起こったか」なんだ。今まで十分に文章化されなかった部分に、例えばこんな事実がある。60年代にジェイコブスが都市を再発見した。そして70年代に聡明な専門家達がこれを制度化した。つまり彼女の発見した原理に基づいた新しい法を施行し、各都市の通りそれぞれに「ショッピング」を挿入し、通りを再構成した。80年代と90年代にはディズニーがその都市モデルを引き継いで、これを新戦略として都市をテーマパーク化して開発している。この彼女の真剣な意図に始まる非常に魅惑的な3段階の展開は、現実が瞬間にまったく逆の方向に退化していく過程だと思う。彼女は媒介手段である「ショッピング」の真実性を論じ、資本はこの特異な媒介を

均質性に転換した。これは理念的な表明が現実に利用されていった過程で、両者の間に跨る誤用と分離に関する最も恐るべき物語であり、事実だ。それは今話し合った私の場合にも言えることだと思う。

—ジェイコブスが扱った都市はグリッドですが、あなたの以前の都市計画もそれを扱っています。『デリリアス・ニューヨーク』は良く知られた例ですが、例えば『SMLXL』ではバリ軸線計画にコルビュジェの輝く都市を引用しましたね。均質なグリッドが混沌とした現実を代替する提案した。その背景には何がありますか。

君も知っているように、あの計画は結論に至る部分で危機に直面したんだ。グリッドに至る以前に、さまざまな都市パターンを新旧を問わず検証し、グリッドを越えるシステムを模索したんだが、私の目で見える限りどのシステムをとってもグリッドの持つ質を凌ぐものを見出せなかった。だから、その課程にある欠陥があるとはいえず、その時点で新しいマニフェストになったというわけなんだ。

最近事務所で韓国のエアポート・シティの後でもうひとつ都市をつくるという興味深い都市計画をしたんだ。

—何が計画の骨子になっているのですか。

エアポート・シティは、明快でかつ繊細な計画なんだが、その後の計画はメルンセナールで取り扱ったいくつかの問題をもう一度露骨な矛盾を含まないように気をつけて展開したものなんだ。

—では何故グリッドが他のシステムに比べて優れているのですか。『SMLXL』に書かれていたように、グリッドには自由を求めて競争する個人の、自由を成立させ得る質があるからですか。

まったくその通りだ。実は今多少異なったモデルを扱っている。ハーバードでの「都市研究」では、現在最も極度に変貌しつつある都市の状況を主題として、毎年異なったテーマを題材としているが、今は中国デルタの新都市研究を延長する方向で進めている。中国デルタの都市は、一見破綻しているように見えるけれど、よく見ればそこにある体系が存在していることが

読み取れる。これがテーマだ。バリ軸線計画がなければ、今程グリッドを見つめることはなかっただろうと思う。次の計画は、さきほど説明したように「ショッピング」で、現在はアフリカの大都市を研究している。内破している都市ラゴスは急成長しているが、その都度インフラストラクチャーの比率がどんどん低くなり、予算もますます低くなっていくといった矛盾に直面している。比喩としての現代都市は、人体に埋め込まれる人造器官(ロボティック・オーガン)なんだ。人造器官が日々「自然」に近づくために改善されているように、現代都市もその様相を日々豹変させている。私たちが生きている現代都市の今日的な現象を理解するために、私は常に研究を重ねているんだ。例えば中国デルタの現代都市では喧騒な速度が鍵だ。つまり「速度」が都市を伝統的な方法で築くことを許さない状況だ。都市があまりに不連続にランドスケープ上に建設されていくので、建設の直後にその残骸とそしてランドスケープそのものの断片を残していく。この現代都市では都心とランドスケープの間に400mしか距離がなく、ふたつが同時に存在、実現しているというわけだ。

——あなたの建築家としての意図はグリッドを置き換えるといった都市システムの研究であると言って良いのでしょうか。

新しいシステムが、事実上あるシステムとして確立するようなことは決してないと思う。ただ、私がこのような研究で導き出したいのは、最低限概念的な優位性で、それを理解するための方法は言語活動なんだ。このことはここでシステムとして機能しているような現象を最低限知的に理解することを目的としている。だから言ってみれば、物理的なというより知的なシステムを理解・合意できるようなものが課題であり、現代都市の今日を描写し過去の都市との比較理解をもたらすことが目的なんだ。だから物理的というより精神的な問題を論ずるということだね。

——非常に重要なテーマですね。あなたの方法において言語活動と建築活動の間に差はありますか。

差はない。特に都市計画において非常に顕著だ。建築においても無論思考は言語に結びついているけれど、都市計画では特にその差が不可視だと思う。例えば今私達が計画しているシンガポールの中心部にあるオーチャード・ロードは解りやすい例だ。ここで私達の提案は、このようなデザインではどのように組織されていて云々と言い始めれば、たちまち馬鹿げたことになる。何故なら、シンガポールの置かれている現状は端的に言えば、その病理がいかに

に進行していて、あるいはアジア経済危機がどうであるか等を知的に理解することが第一の目的なのだから。このようなことはすべて言語的な想像力や分析・問題提起による方が、私達の案をよりよく正当化できる。新しい状況を本当に提案できる場合にだけ具体的な方法論を図式的に提案する必要がある。だから、間違いなく言語的な活動は、デザインや都市デザイン等といったレベルの活動より重要だ。端的に言ってしまうと、都市計画の80%は言語活動で、残りの20%がデザインの占める割合。言語活動は都市計画そのものなんだ。

——つまり、現代都市の現在から本質を抽出し、それに従い物理的な状況を提案する。意味から建築を抽出すると言って良いのでしょうか。

そうだ。まったく簡単な答えだな(笑)。一度抽出すれば形態は、その分析過程・診断の一部として自動的に描くことが出来る。私達の方法で新しいのは形態を意味の中に発見することだと思う。ただ、その形象化の過程で膨大な事件が起こっているのを忘れてはいけない。

——最近の言語活動が建築活動と等価だという主張に関してはいかがですか。同時に建築は神話作用から逃れられないという主張もあります。

事実、今言ったように私達は、意味を建築から開放するという活動において、かなりの行程をこなしてきたと思っているんだ。と同時に建築が意味を持つことは、究極的に避け得ぬことは熟知している。だから私達の活動は、言ってみれば意味を相手にした格闘技で、その目的は意味を釘付けにすることだ！ しかし、意味のない抜け殻をつくり得るといった幻想を持つてはいけないんだ。建築が意味を持つのは不可避なんだ。だから私達は、建築から余計な意味を出来るだけ消し去り、私達自身を開放することが必要なんだと思う。

——以前、あなたは脱構築に非常に興味がありましたよね。僕があなたの学生だった頃、あなたがニューヨークで開かれたデコンストラクション展を観て非常に落胆していたのを覚えています。今、脱構築を巡る建築にあなたに関心がないのは何故ですか。脱構築が様式化したからですか。しかし、脱構築は美学的な問題を課題としています。これを手法とした建築・都市計画によって社会を脱構築することは可能なのですか。

確かにあの時点でデコンストラクションは完全に様式化したし、それが原因で僕はデコンストラクションへの関心が薄れた。ただ、現象としての脱構築は今日頻繁に起こっていると思う。事実、私自身、アメリカ社会で進行中の社会変革に完全に依存していると深く認識しているし、私自身もそこから孤立した現象だとは考えていない。だから私は本当に現代社会が複雑な関

係、束縛やもつれた関係、教育制度等を脱構築していると思うんだ。これを私は、迷宮のように複雑な社会現象すべてが水準化していく極一般的な課程の一部だと読む。脱構築は、日常的に起こっているんじゃないかな。

——あなたは過去に建築と哲学の関係を疑問視していますが、それとの関係はどうでしょうか。

私が哲学に関して疑いを持っているわけではないんだ。ただ建築家が哲学を読み、哲学に従事し、哲学を彼自身の目的に沿って利用することを疑うんだ。もちろん現代社会を読む上で、哲学は重要なものだ。だから哲学そのものよりも、哲学を利用することに問題があるんだらう。

——あなたは、過去に詩学に関しては一切発言していませんが、それに関してはいかがですか。ボルドーの住宅は、この意味で非常に興味深いと思います。この建築は、あなたの大規模な計画とどのような関係がありますか。この住宅に「隠喩としての都市」を見出すことは可能でしょうか。

今まで詩学を一切問題にしなかったから、建築と詩学を無関係だと考えているえわけではない。ただ詩は個人的なものだろう。

私自身、この建築は過去の大規模な計画で得た知識抜きには完成し得なかったと言える。例えばエレベーターという形式を採ってインフラストラクチャーが表現されているのは、そういった初期の研究を完成した後でこそ、実現できたのだと思う。住宅の各部分には類比したものがあって同時に、それは論理的な状況でもあるわけだ。私がここで試みたのはふたつの地上階を持つ住宅を構想し、このふたつの地上階を巡って興味深い緊張感を展開しようとしたことだ。しかし、住宅を設計することでこの都市的な意図を、私個人のために翻訳したということでは決してない。例えばここはこの住宅の最も都市的な部分で、あそこは最も公共の場所である等と言い始めた瞬間に、この住宅で起こり得るすべてのことを偽っていることになるのだから。この住宅では厳密にこう言ったことを重複して計画した。しかし私の目的は、もちろんそれを十分に堪能することにあるんだが。

(1998年11月17日、於：OMA事務所)

profile

レム・コールハース | Rem Koolhaas

1944年ロッテルダム生まれ。1972年AAスクール卒業。1972年からIAUSの特別研究員としてニューヨークに滞在し、「テリリアス・ニューヨーク」の研究を開始。1975年エリア・ゼンゲリス、マデロン・フリーゼン、ドルブと共同でロンドンにOMA設立。1978年以降、アムステルダムのアパートメントの設計、ハーグのダンス・シアターの設計の仕事を経て、OMAをロッテルダムに設立

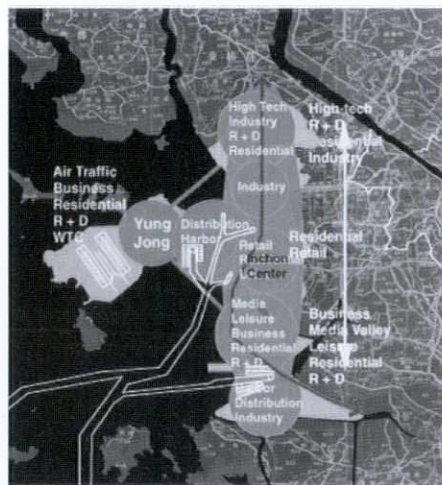
OMA

OMA

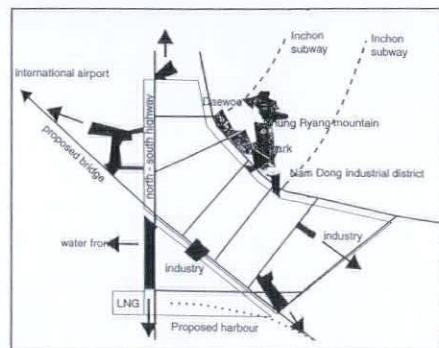
都市計画「ソンドゥ・ニュータウン」

"Song-Do New Town"

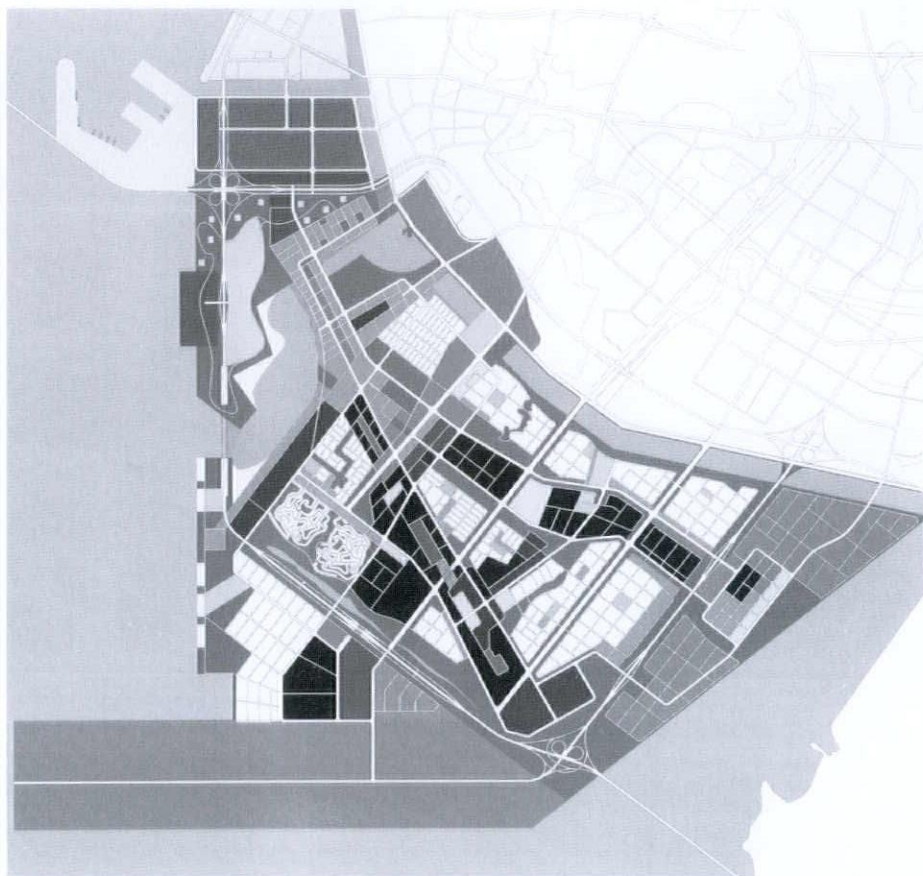
インジュン_韓国_2000-2012年
Incheon_Korea_2000-2012



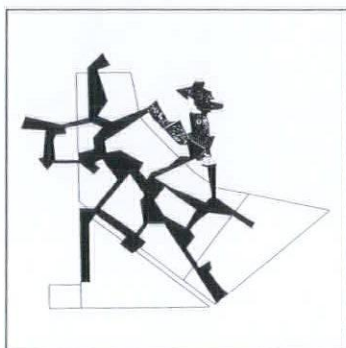
戦略的地域図



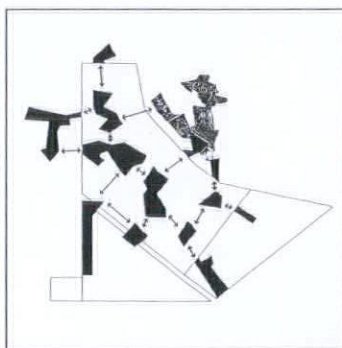
サイト・スペースフィック



土地利用図



ネットワーク



ノード



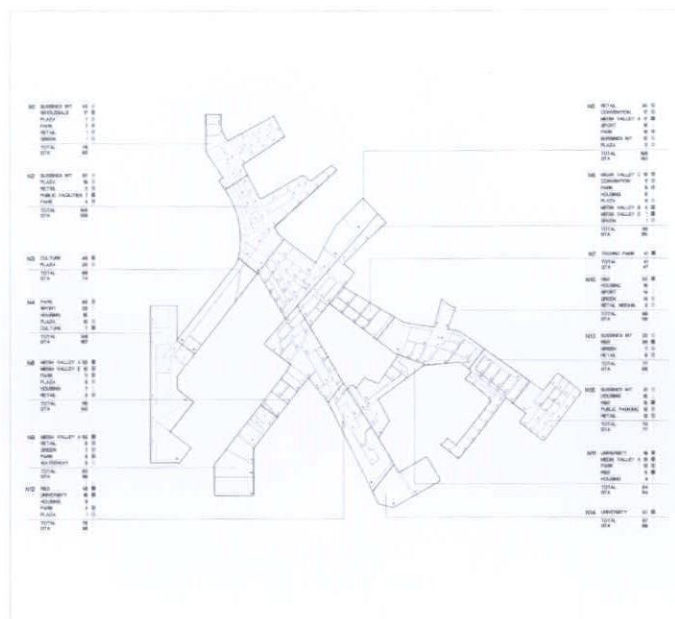
パティオ

レム・コールハースが主宰するOffice for Metropolitan Architecture (OMA) は、建築都市計画分野の新しいアイデアのラボラトリーである。彼の作品とアイデアは、直接OMAとリンクしていない多くの建築家にも影響をおよぼしている。これらのアイデアは、ベストセラー『S, M, L, XL』に最も詳しく記録されている。今日までOMAは、オランダではそれほど多くの作品を実現していない。ロッテルダムの〈クンストハル〉、ユトレヒトの大学講義室と試験場〈エデュカトリウム〉がオランダで完成された主な作品である。オランダ以外の作品は過去十年で、フランスのふたつのヴィラ（パリ近郊とボルドー）、北フランス、リールのTGV駅周辺の都市計画（会議場の設計も含む）と福岡市の集合住宅の設計などがある。（ハンス・イブリング）

The Office for Metropolitan Architecture, the office of Rem Koolhaas, is a laboratory for new ideas in the field of architecture and urban planning. The work and ideas of Koolhaas have also had a marked influence on many architects with no direct links to OMA, ideas that are extensively documented in the bestseller "S, M, L, XL". Up to now OMA has realized relatively few projects in the Netherlands. The Kunsthall in Rotterdam and the Educatorium in Utrecht, a university building with lecture theatres and examination halls, are the major Dutch works completed. Outside of the Netherlands OMA's work over the past decade includes two villas in France (one near Paris, the other in Bordeaux), the urban plan for the area around the TGV station in the northern French town of Lille (including the design of a congress building), and a housing project in Fukuoka. (Hans Ibelings)



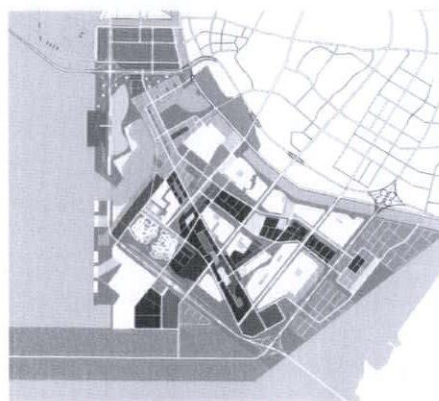
「パティオ」と住居地区プログラム



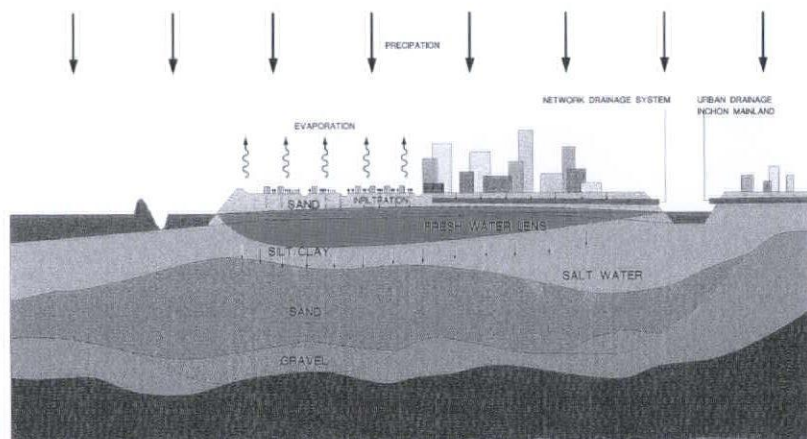
「ネットワーク」と複合プログラム



2008年第3期



2012年完成予定・全第8期



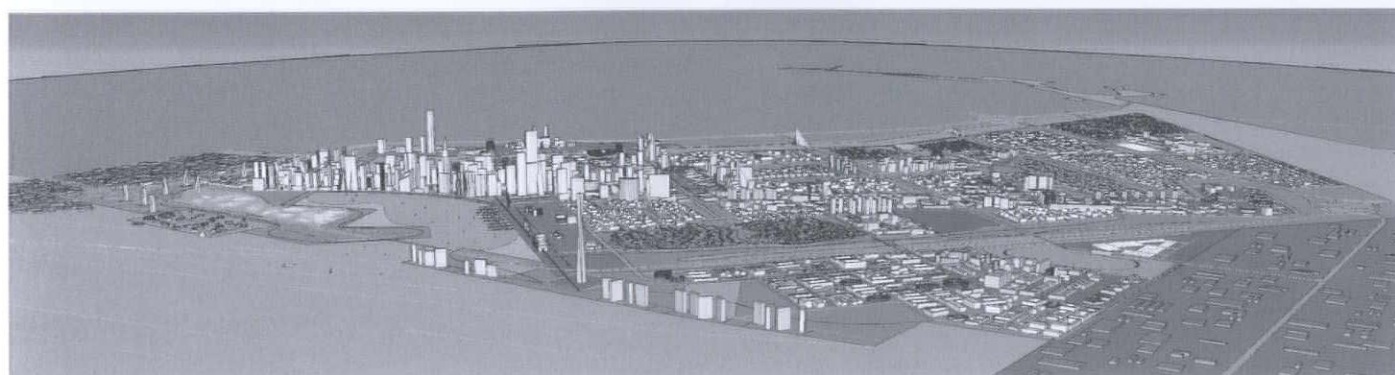
エコロジカル・グローブ・ダイアグラム

20世紀末、アジア経済は確率性0の危機を迎えた。ここで紹介する都市計画は、IMF介入以後の韓国で計画・実施が進んでおり、2008年に第3段階が、2012年には最終段階が建設予定のものである。具体的には「ネットワーク」と「パティオ」がこの「ソンドウ・ニュータウン (SDNT)」を構成する。前者は、未知な経済変動を考慮した高密度複合プログラム。これはすでに都市公園に指定されている土地を用途変更しつつ建設され、SDNT全体を連結する役割を負う。後者は既知の住居地域プログラムだ。優先的に建設されるネットワークの交点は、ノードを構成し早期に均整のとれた都市活動を可能にする。メディア・ヴァレイを構成する本計画は、エコ・グローブやさまざまな緑地管理、斬新な交通計画等が新機軸で首都ソウルの最大の臨海副都心計画だ。コールドハースは現代都市を、建築・インフラ・ランドスケープが融合した状況、また過酷な経済速度が計画の線形性を歪んでいると定義する。ここで「NYを現代的に翻訳した」という彼の意図は「東洋の虎」経済の復活を目指す政治を背景に成立する。我々はそれを目撃するのだろうか。(上原雄史)

用途：ニュータウンの計画 (商業、メディア・ゾーン、住宅、リゾート、工業、緑地帯、水辺)

敷地面積：4,260ha

設計：OMA / R.Koolhaas, D.v.Dansik, G.Bates, E.Bu, M.Cho, A.Fisher, R.Eelman, B.K.Deuten, F.Aikemade, A.Kurdahl, F.Blok, R.d.Graaf, M.Hollwich, B.Ingels, G.Libedinsky, C.Marcopoulos, J.Ramus, S.Schoeller, J.d.Smedt, A.Smit
コンサルタント：Water Management and Planning / De Weger, HASKONING, IWACO (A.Zeilde, F.J.d.Wit, M.Kwart, S.Visser, A.v.Leerdam), Port Planning / De Weger (H.Ligteringen), Traffic Planning / Ove Arup&Partners, London (D.Johnston, S.Jordan), Korean Consultant / Iroje Architects, Seoul (Y.Kim), Zoning Specialist / Jina Architects and Engineers, Seoul (S.Hong)
Client : Daewoo Corporation



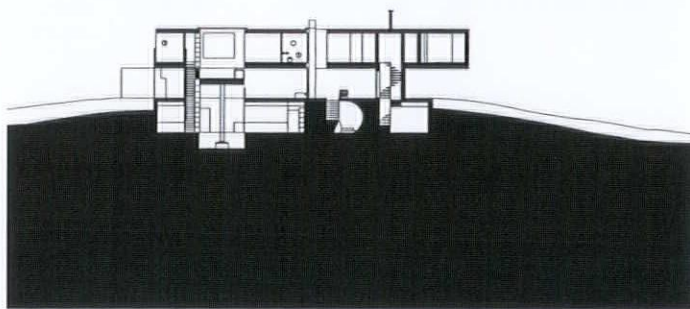
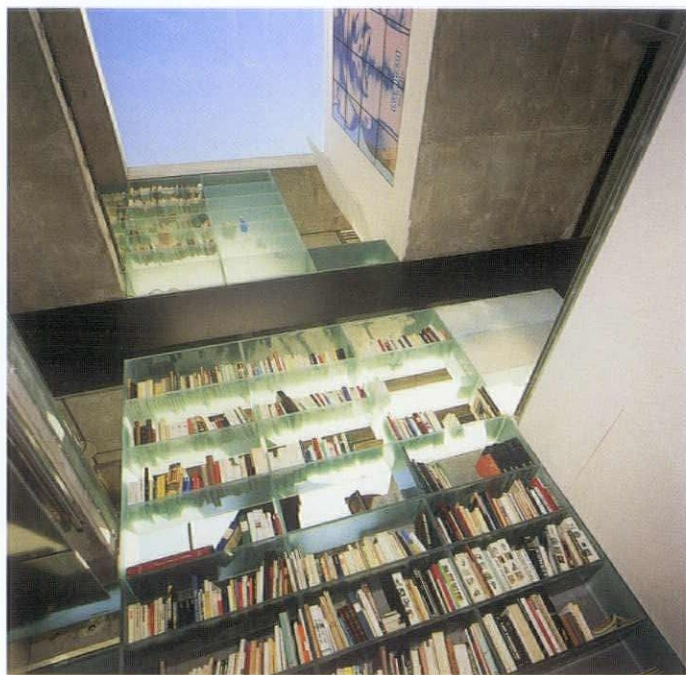
海上からのパース

ボルドー近郊の住宅

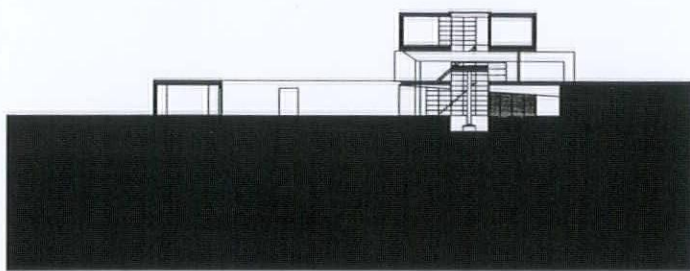
House near Bordeaux

ボルドー フランス 1998年

Bordeaux_France_1998



断面図



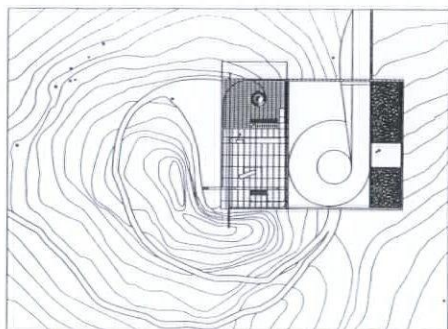
断面図

コールハースが近年の現代建築史上最も都市的な住宅を建てた。交通事故で半身不随になった施主が、彼の世界を構成する「複雑な家」の建築を依頼した。OMAは上下に重なる3つの家と3つの階段、ひとつのエレベータを用いて曖昧で都市的な領域を構造化した。この住宅を訪れるゲストは、中央の洞窟のような階段室を登り居間であるガラスの家を招かれる。印象的な経路。自然と不可分なガラスの家。子供達はテレビ室を経て螺旋階段を登り、そのまま彼らの寝室に着く。施主である主人は、ワイン庫と食べ物に囲まれ、彼の新しい機械の心臓であるエレ

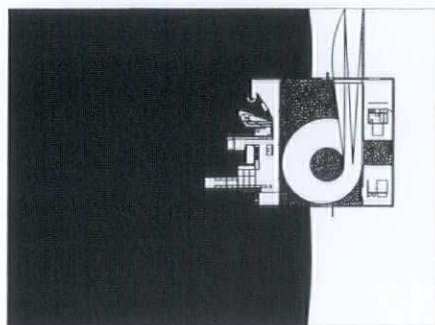
ベーターに乗れば、グラスレズン*の書庫に沿いながら居間を経て寝室に昇る。頭上には大きな空。住宅の奥にはガラス越しに家事室があり、そこから書庫隣の階段を用い婦人の執務室を通りバルコニーに至る。垂直な動きの構成。3つの住宅は水晶のように明快に水平に積層していて、その本質的な構成要素以外の細部はまったくない。それぞれの領域が出会う住宅の中心部は、ヴォイド・空白で光が溢れている。寝室部分の丸窓はブルバードを切り開いていく隠喩。この住宅に隠された隠喩は詩を抱き、新たな時空を住み手と共に刻む。(上原雄史)

*：レズンとは、プラスチック樹脂のことで、この本棚はガラスに樹脂加工した部材でできている。

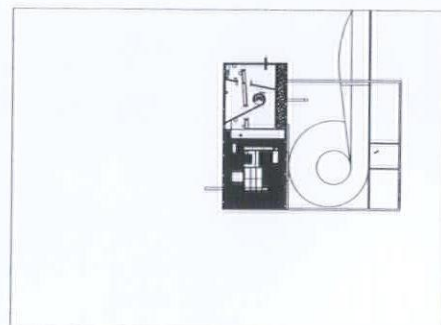
用途：個人住宅
構造：S+RC造
規模：地下1階、地上2階
延床面積：500m²(メインの住宅)+100m²(ゲスト・ハウス)
設計：OMA / R.Koolhaas, J.Gang, J.Monfort, J.Thomas, B. Price, Y.Yamagata, C.Dondorp, V.Coste, E.Schotte
Regaud Ingenierie / M.Regaud (Executive Architect)
構造設計：Ove Arup & Partners / C.Balmond, R.Pugh
共同設計：MVS / M.V.Severen, R.D.Preter (for platform and fixed furniture)
コンサルタント：Van Santen / R.-J.V.Santen (Facade), A.T.H. / G.Couillandeu (Hydraulics), Inside-Outside / P.Blaisse (Interior and Landscape)



地下1階平面図



1階平面図

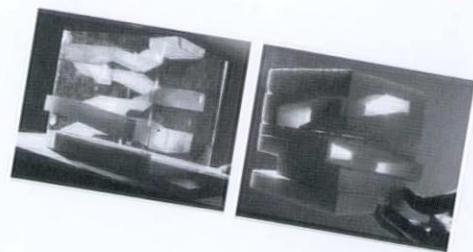


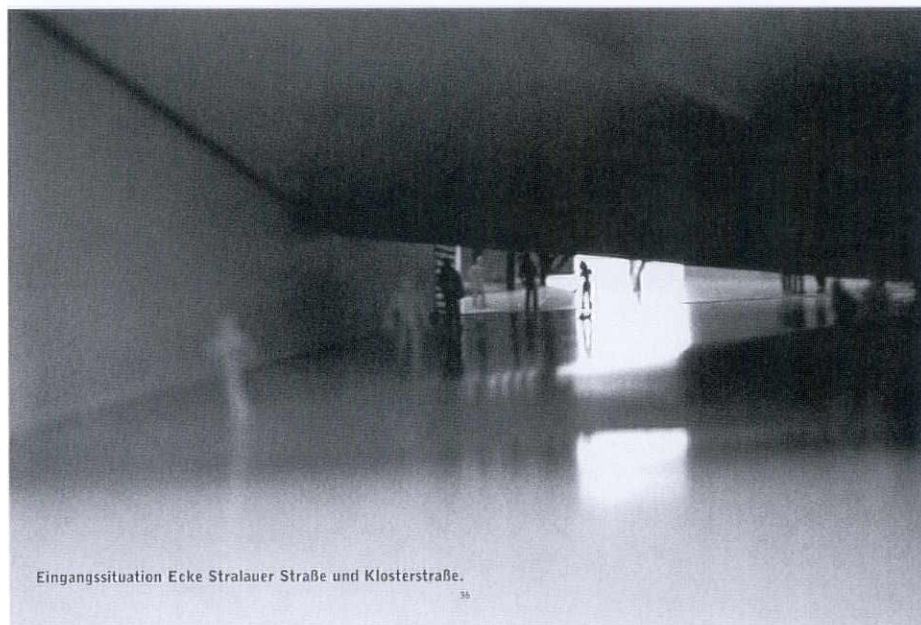
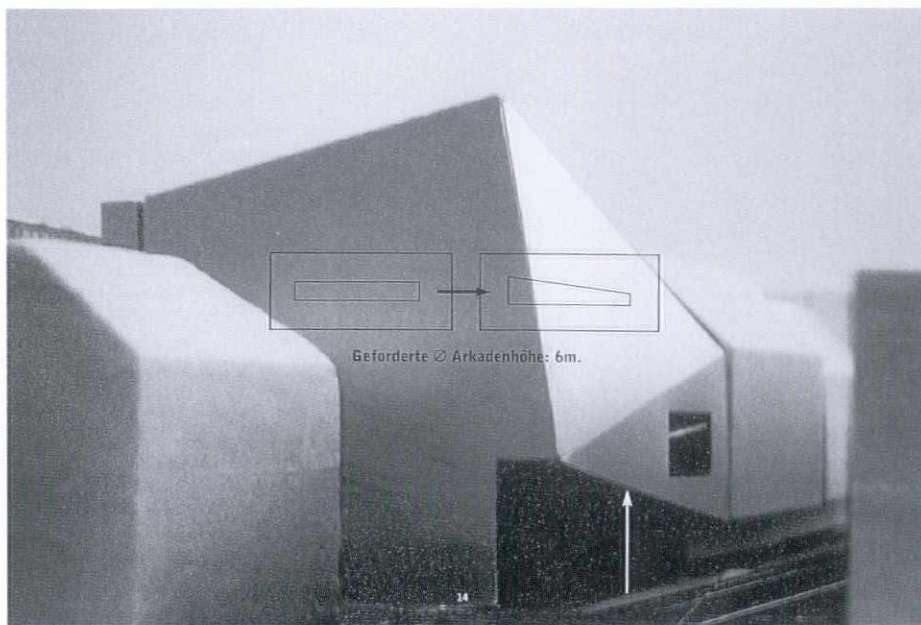
2階平面図

OMA

駐ベルリン・オランダ大使館+援助の家
Netherlands Embassy in Berlin+
House of the Giving in Berlin

ベルリン_ドイツ_1999-2001年
Berlin_Germany_1999-2001





配置図

コールハースの新しい〈在独オランダ大使館〉と〈ベルリン援助の家〉は、共に元東ベルリンのある都市ブロックに隣りあっている。コールハースが、隣接し独立したふたつの建築をいかに設計し、都市レベルの操作をしたのか見てみよう。大使館は、ベルリンでは例外的な解法で、ブロックの角で孤立するガラスの立方体建築が執務空間を満たし、また館員の住居プログラムが背景をつくりつつ、凹んだ角を形成しブロックを閉じる。援助の家のプログラムは、ルドルフ・シュタイナーが創設した芸術を中心とした小学校のベルリン本学舎だ。平面的には伝統的な解法でありながら、細長い敷地にある建築内部に光と容積を充分に導入するため、建築全体が断面計画も含めてダイヤモンドのように構成されている。つまり彼の主張は、各建築はそれぞれ計画の自由を追求し、独立した組織であること、両者が都市計画規制を新しく解釈してゆけるインターラクティブな社会性を有する存在だとする2点にある。従って、当然両者の間に伝統的な意味での様式的な関係はない。むしろ、ないが故に他者から自らを識別してゆく、新しい様式性を脱構築的に獲得しているとは言えないか。この意味で、ここでの都市モデルは概念レベルでNYグリッドと互換である。ただ各都市固有の計画規制への批評が、建築的にはキャプティヴ・グローブとはまったく異なった解法を導いているのだ。(上原雄史)

〈オランダ大使館〉

用途：大使館
構造：S+RC造
規模：8階
延床面積：8,500m² (4,800m²/オフィス、1,500m²/住宅、2,200m²/駐車場)
設計：OMA / R.Koolhaas, E.Schotte, G.Bonesmo, B.Margulis, C.Müller, F.R.Havaux, A.Leinonen, D.Ooievaar, M.Hollwich, U.Garritzman, R.Hilz, M.Bos, A.Kuhrdahl, S.Aarts, A.Hess, J.d.Smedt, B.Price+M.Guinand (Research and Design)
構造設計：Ove Arup&Partners, Berlin / D.Lewis, I.Thompson, C.Chelubim
共同設計：De Weger / E.v.d.Zee, B.Kern (Berlin)
コンサルタント：De Weger Architecten en Ingenieursbureau (Rotterdam) / H.Zegers, S.v.Gemerden Services : Huygen Elwako Raadgevende Ingenieurs bv (Rotterdam) / R.Smolders, R.v.d.Vat, R.Lampe, S.Hudepohl, Over Arup & Partners (Berlin) / B.Cody Fire : Hossier Hass+Patner (Belin) / P.Stanek Lighting : OVI (Waghton DC, Berlin) / J.Sundin, E.PeinigerImage : OMA / H.Welmann (Hectic Pictures)
Client : Ministry of Foreign Affairs-Dienst Gebouwen Buitenland, The Hague, The Netherlands

〈援助の家〉

用途：オフィス、ショップ、住宅、文化施設
構造：S+RC造
規模：8階
延床面積：9,000m² (1,100m²/文化スペース、2,400m²/オフィス、2,400m²/商業スペース、1,500m²/住宅、1,600m²/駐車場)
設計：OMA / R.Koolhaas, E.Schotte, R.Choeff, K.Keck, B.Wolff, O.Shütte, F.R.Havaux, M.Hollwich, J.d.Smedt, F.Blok, P.Ouwkerk (Image / Graphic Language)
共同設計：De Weger / E.v.d.Zee (Rotterdam), B.Kern (Berlin)
Client : Haus um die Schenkung GmbH, Berlin D

クーン・ファン・フェルゼン

Koen van Velsen

ユトレヒト大学付属博物館

University Museum

profile

クーン・ファン・フェルゼン | Koen van Velsen

1952年オランダ、ヒルヴェルサム生まれ。1971〜76年ファン・デル・ボル、プロム・ファン・アッセンデルフト・エン・コニングの両事務所に勤務。1977年事務所開設。1983年アムステルダム建築アカデミー卒業

ユトレヒト_1996年
Utrecht_1996

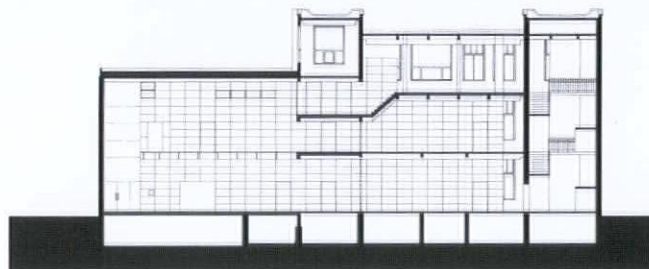
この大学博物館は、かつて植物研究所であった。既存の建物は一部改修され、残りは解体新築された。新しい建物はガラスのボックスの中に木のボックスが入れ込んであり、エントランスはこの新しいエリアにある。自然光を遮断する必要のあるコレクションのための展示空間は、閉じた木のヴォリュームの中につくられている。必要に迫られて閉鎖空間が作られたわけだが、前後のファサードを完全に透明にすることによってこれを代償している。(ハンス・イブリング)



用途：博物館
構造：RC+S造
規模：3階
敷地面積：3,506m²
延床面積：1,200m²



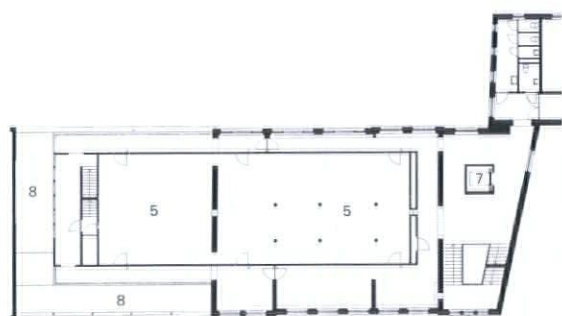
立面図 S=1:600



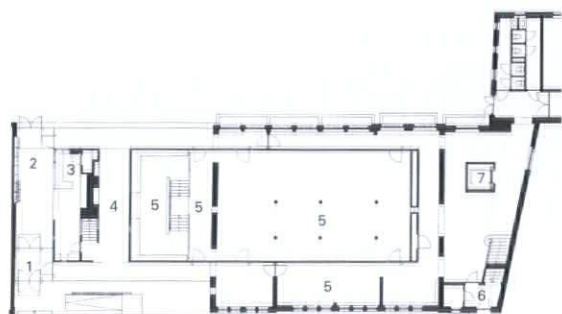
断面図 S=1:600

建築家として独立してほぼ20年になるクーン・ファン・フェルゼンは、これまで多くの本格的な作品の目録を築き上げてきた。初期には住宅の改装や商店のインテリアを手がけ、最近の彼の作品としては〈アムステルダムの兵舎の国立美術アカデミーへの改築〉、〈ユトレヒト大学博物館〉、〈ロッテルダムの映画館複合施設〉、〈テルネウゼン市役所の増築〉、数多くの住宅プロジェクトなどが挙げられる。現在アムステルダムでは、新しい映画アカデミーが建設中である。ファン・フェルゼンの作品からは、ある種の非一貫性が見て取れる。成功したとは言えないが、いくつかの住宅作品を除けば、ほとんどの作品は秀作ばかりである。ファン・フェルゼンは、1987年に新しい町ゼーヴォレに図書館を完成したときに大きく躍進した。この建物は他意のないシンプルさと複雑な構造と空間を併せ持っており、このようなアプローチは、彼の多くの作品から見出すことができる。ファン・フェルゼンはまさに「建てる」建築家だ。彼は、自分の作品について決してディスカッションをしたり、文章を書いたりすることがなく、インタビューも避ける、数少ない建築家なのである。(H.イブリング)

Working as an independent architect for almost twenty years, Koen van Velsen has built up a substantial oeuvre. He began his career doing house renovations and shop interiors. Now his oeuvre includes the conversion of a barracks into new accommodation for the National Academy for Visual Arts, the University Museum in Utrecht, a cinema complex in Rotterdam, the extension to the Town Hall in Terneuzen, and various residential projects. A new building for the Film Academy is currently under construction in the centre of Amsterdam. Van Velsen's work displays a certain inconsistency. Apart from some less successful experiments, particularly residential projects, his top works form a majority. Van Velsen's breakthrough came in 1987 with the completion of the public library in the new town of Zeewolde. This building combines a disarming simplicity with a structurally and spatially complex solution, an approach found in all his work. Van Velsen is by definition an architect who builds. He is among the few who never discuss or write about their work and he shuns interviews. (H. Ibelings)



2階平面図



1階平面図 S=1:600

- | | |
|-----------|------------|
| 1: エントランス | 5: 展示スペース |
| 2: クローク | 6: サービス用入口 |
| 3: 受け付け | 7: エレベータ |
| 4: カフェ | 8: 光庭 |



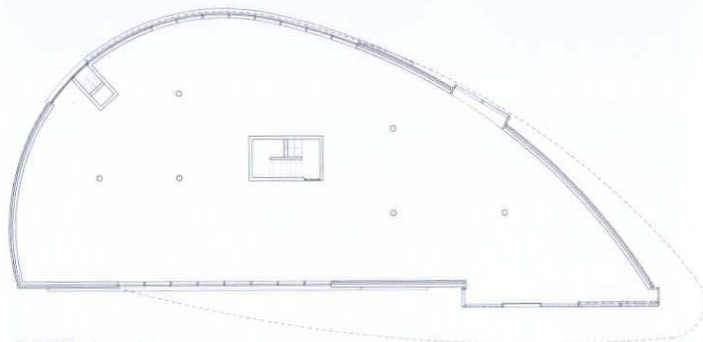
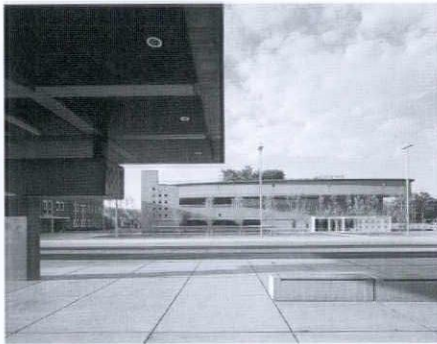
オフィスビル「ING銀行」

"ING Bank"

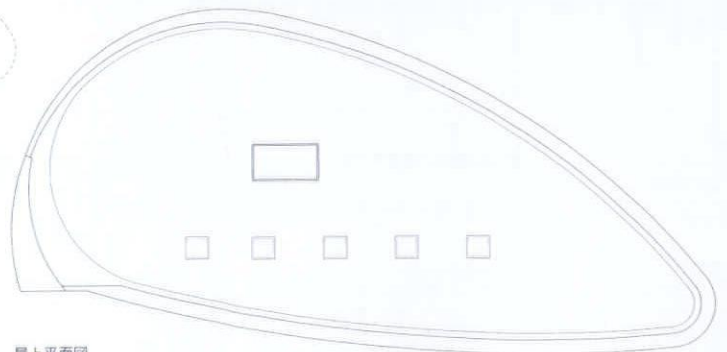
テルネウゼン_1998年
Terneuzen_1998

60年代の傑作建築のひとつに数えられる、ファン・デン・ブルック&バケマの市庁舎と90年代になってファン・フェルゼン自身が設計した市庁舎増築の近くにこの銀行は建てられた。この銀行は楕円形を基本に、近隣にある佳作建築たちと同様に極めて自立したオブジェである。単純な形態、モノトーンなマテリアル、建物のマッシブな様子から、この建築は頑強で確固な印象を与える。(H.イブリング)

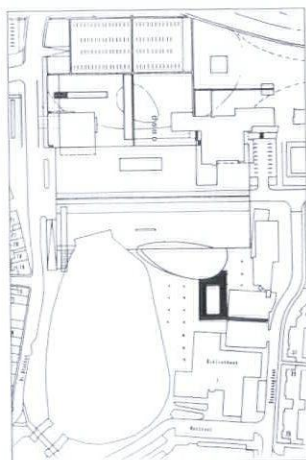
用途：オフィス
構造：RC+石造
規模：2階
敷地面積：2,500m²
延床面積：1,200m²



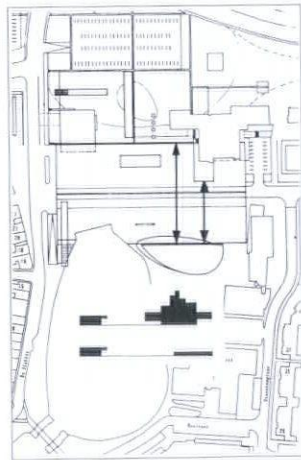
1階平面図 S=1:400



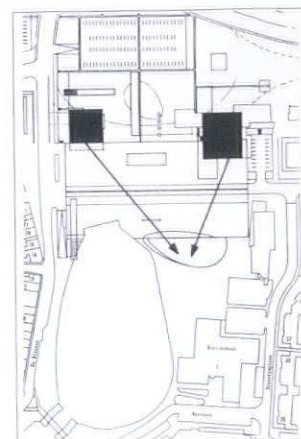
屋上平面図



ダイアグラム「交通」



異なる壁の空間的関係性



周辺の高いビルからの眺め



メカノ

mecanoo

都市計画+集合住宅「プリンセンランド地区」

Urban design and Housing project "Quartiere Prinsenland"

ロッテルダム_1993年
Rotterdam_1993

profile

mecanoo: 1984年にH.ドル、F.フーベン、C.ヴェイヤー、と他2人の計5人でメカノを設立。現在は、ドル、フーベン、ヴェイヤーの3人が主宰
ヘンク・ドル | Henk Döl: 1956年オランダ、ハーレム生まれ。1984年デルフト工科大学建築学科卒業
フランシ・フーベン | Francine Houben: 1955年オランダ、シッタルト生まれ。1984年デルフト工科大学建築学科卒業
クリス・ド・ヴェイヤー | Chris de Weijer: 1956年オランダ、ワーハニンゲン生まれ。1983年デルフト工科大学建築学科卒業

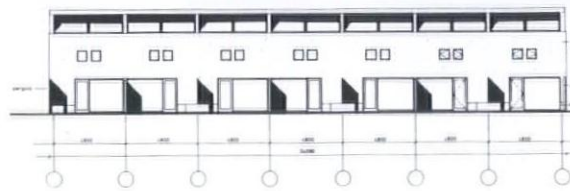


1980年代初頭に、5人のデルフト工科大学の学生によって設立された建築事務所メカノは、現在、設立者5人のうちの3人、フランシ・フーベン、ヘンク・ドル、クリス・ド・ヴェイヤーの3人に率いられている。ロッテルダムの学生住宅の設計競技での1等は、メカノの目覚ましいスタートを約束し、彼らは80年代、90年代を通じてオランダでもっとも成功した建築事務所となったのであった。もともとメカノは、ソーシャル・ハウジングを中心としたコミッションを請け負っていたが、今日ではさまざまな分野で活躍している。近年彼らは、ワーハニンゲンの農業大学、シルボルト、ユトレヒト、デルフトの大学図書など、素晴らしい教育施設を実現してきた。メカノが設立された頃は、国際的にはポスト・モダニズムが広まりつつあったが、オランダではネオ・モダニズムが優勢で、メカノは其中でも卓越した、代表的建築事務所だった。近年彼らが展開してきた作風は、国際的に普及している要素と初期からのメカノの作品の特徴である形や材料の洗練の両方が読み取れる、混合された作風である。(H.イブリング)

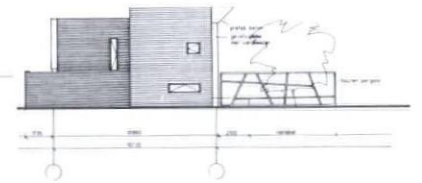
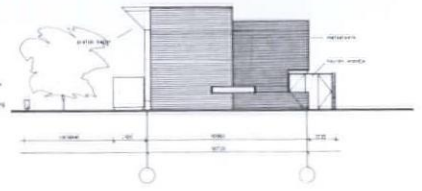
The office of Mecanoo, established in the early 1980s by five students from Delft University of Technology, is currently headed by three of the five founders: Francine Houben, Henk Döl and Chris de Weijer. First prize in a competition for student housing in Rotterdam guaranteed a flying start for Mecanoo, which in the 1980s and 1990s has become one of the most successful offices in the Netherlands. Initially the office received commissions mainly in the field of social housing, but it is now active in all fields. In recent years Mecanoo has in particular completed some exceptional educational buildings, in Wageningen for the Agricultural University, in Silvolde and Utrecht, and in Delft where the office designed the university library. In the early years of its existence Mecanoo was one of the most prominent representatives of the Neomodernist tendency that held sway in the Netherlands at a time when Postmodernism was gaining ground in the rest of the world. In recent years the office has developed a mixed idiom, which in part conforms to what is common internationally and in part displays the authentic refining of form and material, a feature of Mecanoo's work from the start. (H. Ibelings)



平面図 S=1:500



立面図 S=1:500



この住宅地の計画では、敷地およびその周辺の都市計画のみならず建築設計も求められた。スタートポイントは郊外的なクオリティをもつ、都市型のガーデン・シティであった。過半数の住宅が2階建ての庭付きだが、隔壁を共有するタウン・ハウスである。その他、2階に居間のある3階建ての住宅、メゾネット住宅やアパートなども計画された。パブリック・スペースと緑地のレイアウトでは近隣のイメージの一体化が優先された。4つの緑地はそれぞれイギリス・日本・フランス・オランダの庭が抽象的に表現されている。(H.イブリング)

用途：都市計画+集合住宅
構造（集合住宅）：RC+煉瓦造
敷地面積：100,000m²
住戸数：557戸
建築面積：計66,840m²
延床面積：計74,880m²（80m²/Aタイプ77戸/75m²/Bタイプ189戸、205m²/Cタイプ116戸、285m²/Dタイプ84戸、75m²/Eタイプ62戸、75m²/Fタイプ29戸）



配置図



「日本の庭」のイメージ



「オランダの庭」のイメージ

ダッチ・モデルについて

21世紀の社会モデルとして

長坂寿久

「ダッチ・モデル」という言葉がある。いうまでもなく、オランダの社会システムを言い表した言葉だが、「アメリカン・ドリーム」のように何故固有名詞的に呼ばれることになったかは、オランダの独特のシステムが、単に独特であるだけでなく、それだけ国際的意味と普遍性があるからである。

オランダの独特の社会システムは、いうまでもなくこの国の風土に起因している。ヨーロッパの地理を思い描いて欲しい。オランダはアルプスを源流とする3つの川（ライン川、スヘルデ川、マース川）がヨーロッパ大陸を延々と旅してきて、北海に流れ着くその三角州にできた、まさに「低地」の国である。三角州であるため、いつも川と海からの洪水に浸食され、人々が安心して住める場所ではなかった。しかし帆船の時代になって、まずアムステル川とロッテル川に堤防を築いてアムステルダムとロッテルダムという町を作った。やがてひとつの国家を形成し、世界の覇権国となったこともあった。まさに水を管理（治水）することによって、国家をつくってきたのである。

堤防は一カ所でも溢れたらそれでおしまいである。だから治水は全員参加で、皆と相談しながら、コンセンサスを得ながら行う管理を必要とし、そのため治水の前には皆対等であるノン・ヒエラルキーの平等社会ができ、機能的に対応（プラクティカル）する文化が生まれ、それがアメリカや英国とも違う「オランダ的民主主義」を造り上げてきた。

制御（コントロール）モデル——治水の発想

例えば、理念の国アメリカと治水精神によって培われてきたオランダとの間で最も違う点のひとつは、問題解決に対するアプローチの違いである。社会問題のアメリカ的解決手法は、その問題部分を摘出し削除しようとする外科手術的手法である。悪いものは悪い、だからなくしてしまうという、きわめて原理主義的アプローチである。それに対し、オランダの発想は違う。その問題の影響を極小にするように、いかに管理するかという「制御（コントロール）」手法を取る。何故かと言え

ば、オランダにとって「水」は最大の問題だが、それを外科手術的に削除し、なくすことはできない。できるのは、それをいかに管理・制御して影響を極小化するかという解決方法だけだからである。

日本人にとってのオランダの一般的イメージは風車とチューリップだが、さらに安楽死や麻薬（マリファナ、ハシシのソフトドラッグのみ）や飾り窓（売春）を合法化している国として知っている人も多い。これらは半分間違いで半分正しい。安楽死も麻薬も売春もこの国では法律によって禁じられているという点で間違いである。しかし、これらはいずれも定められた条件の下で、一定の厳しい規制・管理に従って行われる限り、不起訴処分にするという行政指導の下で、実際に行われているという点では正しい。

麻薬や売春はいくら取り締まっても決してなくなる犯罪である。従って、こうした犯罪を一定の管理下におくことによって、最小限に防ぐ（制御する）ことの方が現実的と考えているのである。こうすることによって、アメリカのように犯罪が地下に潜ったり、マフィアなどの犯罪組織がはびこり、若者たちがそれによって犯罪の世界に巻き込まれることを最小限にできると考えている。その点でダッチ・モデルはアメリカと対比する限り、オランダにおいては統計的には成功しているのである。

こうしたオランダ的制御モデルの発想は、21世紀には意味を持つかもしれない、私は思っている。何故なら、20世紀の外科手術的アメリカン・モデルでは、実はその手術に一度も成功したことがなく、犯罪は一向に減少せず、むしろ一層増加し、組織化され、地下に潜り、深刻化してきているからである。

コンセンサス・モデル——オランダ的民主主義

国家の「合意形成システム」もアメリカとオランダでは違う。アメリカン・モデルの民主主義的特色は大統領制であり、プライマリー（予備選挙）を通じるお祭り騒ぎである。そしてアメリカ的合意形成システムの特徴としては、例えば世論調査の果たす過剰な役割を

指摘できるだろう。これに対し、オランダのそれは「コンセンサス民主主義」と呼ばれている。そのコンセンサス形成システムのひとつとしてはりめぐらされているのが「政策諮問委員会」のネットワークである。これはオランダ社会の隅々に政府システムとして無数に張りめぐらされていて、これら諮問内容を実施するのが政府の役割といわんばかりである。オランダの諮問委員会には法的保護があり、政府はすべてを受け入れる必要はないが、回答する義務を負う。こうした実態的ネットワークを通じ、国民の声は政府に届く仕組みとなっており、国民側も、こうしたネットワークを通じて自分の意見を政府政策まで間接的にでも反映させることができているという自負（あるいは幻想）を、グラスルーツのオランダ人はもっているかのようでさえある。

ボルダー・モデル——オランダ経済の奇跡

この合意形成システムは、オランダにおいては政労使間の合意形成システムを造り上げてきた。80年代以降これがワークしたことにより、かつて「オランダ病」と呼ばれるほどに苦境にあったこの国は、現在ヨーロッパの中で最も経済パフォーマンスの良い国へと転換したことで話題となっている。

「オランダの奇跡」と言われるほどの良い経済パフォーマンスをもたらした秘密は、82年の「ワーセナーの合意」と呼ばれる政労使の合意形成にある。この合意形成を通じて達成されてきたオランダ経済の再生は、干拓の国オランダということで「ボルダー・モデル」とヨーロッパのジャーナリズムは呼び、「オランダに学べ」と最近の欧州の経済誌はボルダー・モデル特集で溢れている。

ダッチ・アプローチ——環境問題への対応

この合意形成モデルのひとつとして、環境問題への対処方式として世界でも有名な「ダッチ・アプローチ」という固有名詞ともなっている方式がある。政府と産業界が環境協定（コブナント）を締結して（1994年開始）、環

境問題への企業の取り組みを促進する方法である。あくまでも「紳士協定」であるが、産業界にとっては法律による規制導入に対して、企業に強い打撃を与えるような形で規制導入とならないよう、企業としての見解を最大限反映させることができるという点で大きな成果であり、同時に政府や環境団体にとっては、企業が環境問題への関心と理解を強め、具体的目標に向かって具体的取組みを図っていくという点では、画期的なものとなっている。こうした「協定」を通じて、企業と政府と環境団体との情報交換が進み、三者間の協力体制を導くことになった。政府と産業界の関係の強い日本では参考になるモデルであらう。

インテグレーション・モデル ——関係省庁の横断システム

さらにこの合意形成モデルは、日本の政府機構の最大の弱点ともなっている省庁間の縄張り争いを超え、省庁間にまたがる横断的問題については、これら関係省庁を交え、それを超えた統合的なタスクフォースが形成されているかのような取り組みを作り上げている。この省庁間のテーマ別横断システムを、私は「インテグレーション・モデル」と呼んでい

る。例えば麻薬対策も、内務省、厚生省、外務省、警察などが関わる問題であるが、この各省庁間の連携がオランダは実にいいのである。高齢者ケアのケースも、ここでは詳述できないがその典型のひとつである。日本がドイツを参考にして導入した自宅介護保険制度も、実はドイツがダッチ・モデルを参考にして導入した仕組みだったのである。建築においても、後述のようにこのインテグレーション・モデルはオランダの都市計画システムを特色あるものになっている。

インフラ・モデル ——トレーダ国家の競争力の源泉

もうひとつ、ダッチ・モデルの典型を書いておこう。現代はますますインフラ競争力が産業競争力の基盤として重要な要素となっている。例えば、オランダは世界最大の切り花の生産・輸出国である。太陽も多くなく、賃金もむしろ高いオランダで何故切り花産業に競争力があるのか。オランダの切り花産業はスキポール空港の周辺に広がっている。夜スキポール空港へアプローチすると、パッチワークの如く幻想的に輝く光の広がりを見る。あれがオランダの切り花を産みだす温室群である。切り花産業の競争力は花を切った後、一

刻も早く消費者に届けるインフラ競争力で決まる。オランダの切り花の競争力は、ヨーロッパ全土へ直ちに運ばれる優れた道路網と鉄道網、日本を始め世界に直ちに空輸できる優れた航空網によって支えられているのである。

現代のインフラ力はエアポート（空港）、シーポート（港湾）、テレポート（情報通信）と、それらをつなぐ道路網、鉄道網のトータルなインテグレートされたネットワークにあり、それによってシナジー効果を楽しむことができるのである。スキポール空港はヨーロッパでトランジット空港として最も利便性の良い空港であり、ロッテルダム港は世界最大の港である。テレポート（情報通信）インフラは衛星を含め、ヨーロッパはどの国も同程度に進んでいるが、現代では通信インフラ力を規定する最も重要なサブインフラは、実は英語を中心とする多元語力なのである。オランダはヨーロッパの中でも飛び抜けて多元語度の高い国である。これがオランダの情報通信インフラ力を強めている要素となっている。

「治水」は水のインフラのことであり、それは同時に河川インフラ力をもたらし。オランダはこうしてインフラ力によって競争力ある人工国家を造り上げてきた歴史をもつ。オランダのインフラ立国たる発想は、隅々まで行き渡っていて、国土計画としての都市の配置もインフラ・ネットワーク型（ランドスタ



スキポール空港周辺にある花を栽培するビニール・ハウス



動物用の橋（グリーン・ブリッジ）



画家ピート・モンドリアンもモチーフとしたオランダの典型的なランドスケープ「ポルダー」

ットのグリーンハートがその例)であるし、細かいところでは、エコトープという環境コンセプトに基づいて、オランダの高速道路にはうさぎなどの動物用の橋(グリーン・ブリッジ)や蛙などの生物用のトンネルも作られている。まさに徹頭徹尾インフラ・ネットワーク社会の国である。

トータル・ランドスケープ・モデル ——オランダの建築と都市モデル

1920年代に都市空間の建築美学が生まれ、機能主義的デザインが始まり、20世紀モダニズムの出発点となった「デ・スティール」の運動が、何故オランダで始まったのかは、オランダに住むと納得してしまう。この運動の牽引者のひとりである画家のピート・モンドリアンの絵は、まさにオランダのランドスケープをモチーフとしたものであり、ドゥースブルフの機能主義的発想も、オランダの人工的自然と伝統的プラグマチズムの中から誕生したものだということが分かる。オランダ人にとって自然とは、人工的に造られた自然を含んでいるのだが、今や自然環境の保持には野性にまかせておけばいいのではなく、人工的に手を入れなければならないことを現代の環境学は教えている。これこそダッチ・モデルが現代的に意味を持つに至ったケースのひとつ

である。

現代の建築や都市づくりにおいても、オランダは独特のモデルをつくり上げている。「建築は政府、自治体、企業、そして市民など、様々な職業や機関の利害との関係の中にしか存在し得ない」という発想がそれであり、そのため「建築のひとつ一つのオブジェとしての質よりも、それぞれの関係性とかインフラとの関係とか、エリア全体のヴィジョンといった統合的な質に注意が向く」(クリスティン・ファイライスのインタビュー参照、p.72)のもその故である。ここには建築を都市計画と地理と自然の総合的な関係の中でトータル・ランドスケープとして捉えようとする考え方が基本にある。建築家の作品を単体として誇示した20世紀から脱して、このオランダのトータル・ランドスケープ・モデルへの移行こそ、21世紀の建築界が問われている課題なのではないか。

オランダの建設省にあたるVROM(住宅国土開発環境省)という省は、国民の住宅と国土計画と環境という3つの分野を統合した省である。国土計画と環境とは本来相反する概念である。それを同居させ、その上に人々の住宅を重ねているのはまさにオランダ的と言える。また、建築と都市が関わる省は、農水産省、交通水利省などさまざまな省が関わり、さらに自治体、企業、ディベロッパーなどの関わりの中で、オランダでも縄張り争いがあ

るにしても、この国の場合は横の連携はベースとして前提となっている。

本特集で詳しく紹介されるボルネオ・スポールンブルグの都市計画も、「アムステルダム市の都市計画課、アーバン・デザイナー、アーキテクト、ディベロッパー、建設会社など異なるプロフェッションを集めてプロジェクトチームを形成」(本文参照)し、パートナーの関係となってフレキシブルな開発の可能性を追求するという手法も、まさにオランダ的であることが分かっていく。

「ダッチ・モデル」のほんのいくつかを紹介したが、現代の世界において、20世紀モデルとして中核をなしてきたアメリカン・モデルの限界を見るとき、ダッチ・モデルは恐らく21世紀モデルとして注目を浴びるに十分な意味があるだろう。同時に日本の社会改革においても最も参考になる国であると思う。2000年は、日蘭が会って400年目の年として、両国はこれを公式に祝うことになっている。本特集はその点で、建築や都市計画における「ダッチ・モデル」の詳細を我々に紹介してくれると共に、それは21世紀の世界の建築界にとって十分意味のあるモデルであることを気付かせてくれるだろう。

●ながさか・としひさ/ジェトロ、前ジェトロ・アムステルダム所長

風車と木靴の牧歌的なイメージとは対照的にこの小さな国オランダを世界的に有名にしているのは、売春、ソフトドラッグ、安楽死の許容などといった一見アナーキーな政策だ。ある問題に対して断固厳しい法律を設け糾弾するのではなく、むしろ問題を大きくしないように大筋をコントロールしようとする手法である。断固解決しようとしても決して完全には解決できないのが多くの社会問題で、解決しようとするほど多くの問題は地下に潜り、現実的には問題は深刻になっていく。偽善的にきれいな水面上の状況だけを認識しようとするのがアメリカであるとすれば、許容されにくい水面下の現実により市民権を与えることによってそれらの問題を大筋は国でコントロールしようとするのがオランダだ。

この考え方は売春やドラッグといった特殊な問題にだけに適応されているのではなく、法律、組織のあり方、さらに都市計画の手法などすべてに通ずる。これを表す言葉として「ラーム・ヴェット(骨組み法律)」という法律用語がある。これは上位の法律では大筋を決めて、実際の決定は下位の法律に委譲されるということである。例えばドラッグは良くない、という根本的上位決定に対して、下位においてはその精神は受け継いでいるが、それをなくすことは無理だという現場の状況を受け入れ、上位決定をただ忠実に施行するふりをするのではなく、利害や矛盾だらけの現実を許容し、その状況に対して合理的な決定をする力を下位の法律、組織が持っている。

都市計画においてはPKBという法律がある。「計画核決定」と訳されるが、国レベルで決定される国土計画はアウトラインのみを決定し、下位にある自治体が上位決定を反映させながら、独自のヴィジョンに基づいて市民、ディベロッパー、都市計画家、建築家、建設業者の利害を調整しながら実際の都市開発を行う。州、自治体、市民のレベルの決定とどうかわるか、ということの規定した法律である。これも「ラーム・ヴェット」であり、例えばアムステルダム東部港湾地区においては80年代後半から段階的に開発を進めてきたが、その時々々の市の政策方針、経済状態、マーケットのニーズに合わせて開発のシステム、ヴィジョンを変換させてきた。東部港湾地区開発は5段階に分けて行われてきたが、それぞれ前の開発の結果を反映させ、都市デザインのヴィジョン、集合住宅のタイポロジー、官民の関係、開発のシステムなどは驚くほどに新しい考え方を導入して展開されてきた。都市開発としては短期間の10年の間にこのような展開が可能であったのも下位に決定を委譲しているからだ。(吉良)

keyword | 02

C o n t r o l

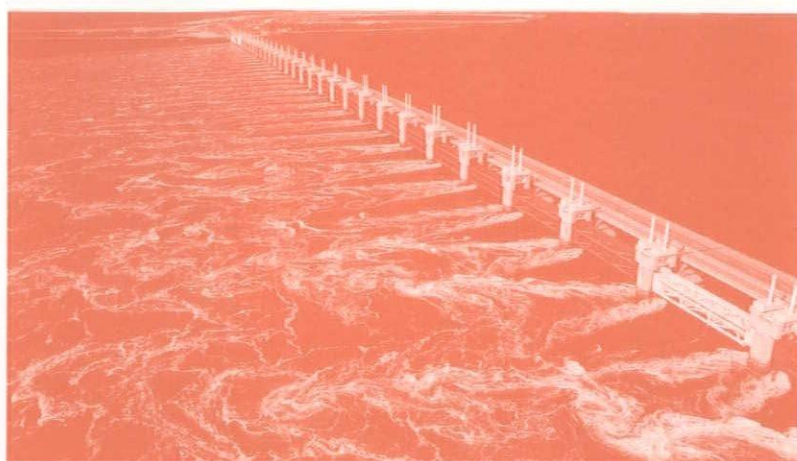
制御システム

構成・編集=Keyword Group





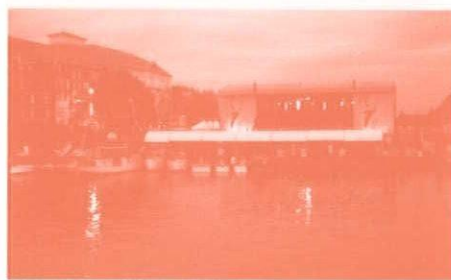
01 | アナグマ・トンネル



02 | 巨大水門



03 | 1572年の要塞都市の平面図



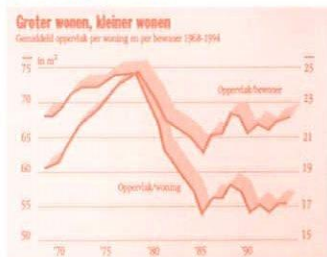
04 | アムステル川面のオペラのタブ



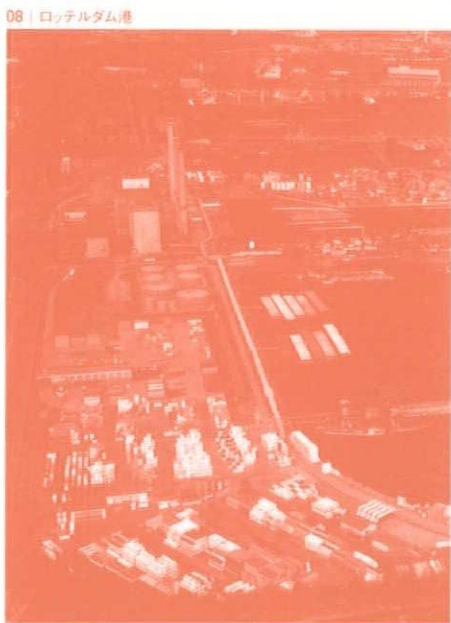
05 | 20世紀のボルドーランドスケープ



06 | 衛星写真リリースタット



07 | 1人あたりの住宅面積と1戸あたりの住戸面積の変化



08 | ロッテルダム港

01—人間のロジスティクス管理だけでは不完全だとオランダ人は考える。ウサギのための緑地橋、蛙、アナグマのトンネルなど、工業化社会に共存する自然に生きる動物たちの渡りの道も国土計画の一環だ。提供＝オランダ水利交通省

02—この水門はゼーランドのデルタ計画の一環だが、嵐による異常な高潮のときだけ閉鎖される。通常の堤防を建設するとこのエリア一帯が完全に淡水化され、牡蠣、ムール貝の養殖ができなくなるので、非常時以外は自然な潮の満ち引きを保持する。このハイテクさ、スケールの大きさと自然な潮の満ち引きとのバランスに、オランダのコントロールを感じてしまう。©Karel Tomei

03—産業革命が起こるまで他のヨーロッパの都市同様、オランダの都市はすべて要塞内に管理されていた。出典＝「Netherlands als Kunstwerk」

04—女王陛下の誕生日、コンサート・シーズン始まるのプレ・パフォーマンスなど、年に何度もアムステルダム市の町全体は同時多発的イベント会場に変貌する。運河には特設ステージが設置され、一瞬の間に町は祝祭空間になり、気づくといつものアムステルダムに戻っている。自治体のコーディネーションは手慣れたもの。©藤原かすみ

05—水の管理は全ての国民の合意がなければ成り立たない。こうしてウォーターシップと呼ばれる地域評議会は、13世紀から水の問題を合議制で解決し、オランダ独自の民主主義を育ててきた。ちなみにウォーターシップは現在もまったく健在で、政府、州、自治体

からも独立したパワフルな超組織である。©Karel Tomei

06—完全なマンメイドの土地は、想像を絶する技術的政治的コントロールの歴史から生まれる。南海(アイセル湖)の干拓は、17世紀からエンジニアの夢だった。技師レリーは1891年南海干拓案計画に着手し、1920年南海を海から切り離す堤防建設が始まり32年に完成、68年まで干拓は続いた。レリースタット市は、1956年に干拓が終わり、67年から人が住み始め、現在約6万が住んでいる。

07—人口増加していないオランダの住宅不足が一向に解決されず、住宅が建設され続けているのは小家族化が進行して世帯数が増え続けているからである。70代末には平均75m²だった住宅のサイズは今では55m²しかなく、1人あたりの住居面積は逆に70m²近くに増加している。©CBS

08—水管理とともに生きてきたオランダ人は、ロジスティクスに取り付かれていく。港・空港・鉄道などのインフラどころか政府・企業、ボランティア組織、そして文書、図書管理から家事に至るまで、オランダ人の超ロジスティック・マインドは止まらない。

09—オランダでは、子供は親も学校の先生も大抵名前を呼び捨てにする。68年のムーブメントはオランダ社会を大きく変え、コントロールの枠の中での自由度を広げた。ソフトドラッグ、女性解放など、他の国では押しつぶされた自由をオランダ社会は飲み込んでしまった。安楽死、移民問題など、現在もオランダのコントロールの限界への挑戦は続いている。



09 | ダッチ・キッズ



10 | オランダ的な断面



11 | ハシはコーヒーショップで



12 | 防風壁

10——この断面を見ればオランダの建設費は地下に投資されることは明らかだ。地下室が水浸しになったり、既存の建物の基礎を造り直したり、不同沈下した建物をジャッキアップして床を水平にするなんてことは日常茶飯事。それでもアムステルダムでは水平な床や垂直な壁はめったにお目にかからない。

11——オランダのソフトドラッグは合法なのではない。18歳以下には売らない、5g以上売らない、酒と一緒に売らない、個人の使用に限定する、他人に迷惑をかけない、指定のコーヒーショップのみで売る、という条件を満たしたときに不起訴処分になる、という仕掛けだ。

©藤原かすみ

12——石油ショック以来ロッテルダム港の水運は、石油タンカーからコンテナ輸送の船にその重心を移した。タンカーと違って風の影響を受けやすいコンテナ輸送を保護するため、1.7kmの区間に高さ25mの防風壁が建設された。提供＝オランダ水利交通省

13——蒸気機関を使うようになるまでは、干拓できる土地の幅は限られていた。農家は細長い自分の土地の端の堤防沿いに家を建て、コミュニティは堤防に沿ってリニアルに形成されていた。

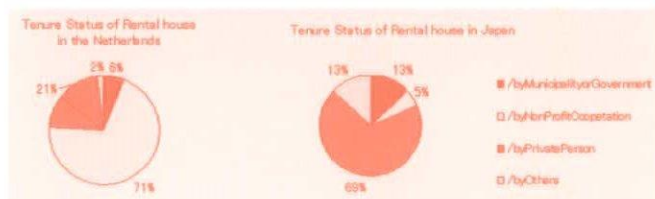
14——WEST8は、開放的な港に対峙するプライベートな住宅地を生むため、建築設計にさまざまなルールを課した。3階建て、住戸のエントランスは1階に、外装材の統一など。しかしレグズはルールよりコミュニケーションが第一だと考え、建築家、ビルダーとともにワ



13 | 19世紀のボルダーランドスケープ

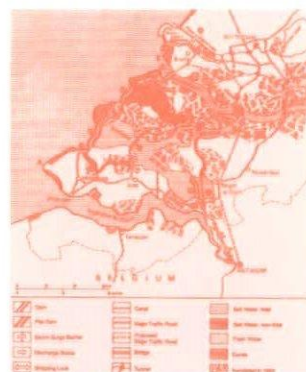


14 | ボルネオ・スボルンブルグ都市計画



15 | 日蘭住宅オーナー比較

16 | 社会福祉国家



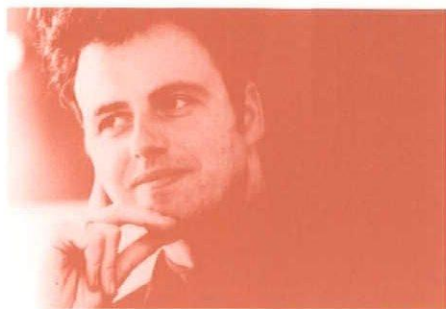
17 | デルタ・プロジェクト

ークショップを開いた。参加型のコントロール、これがダッチ・モデルだ。提供＝アムステルダム市DRO、©Hans Brons

15——オランダは10年前まで持ち家率が30%と日本の半分だった。オランダの住宅の約80%は非営利な団体の所有。プライベートなオーナーの住宅も賃料の上限は制限され、さらに家賃補助金が出る。この負担に辟易とした政府は、住宅購入ローンに対して税金優遇を行い、住宅購入を奨励した。その結果、持ち家率は60%と倍増し、かつてない建設ブームがオランダを襲っている。資料作成＝笠真希

16——オランダの収入税は高い。でも、たいていの人々は年金、保険、賃料補助、などと考えていくとちゃんとリターンが返ってきていると感じている。国の純正所得の20%を貯蓄しているオランダは、15歳から年金を積み立てて、国家に老後やいざというときに助けてもらう身代金を払っているのだ。©Prof.W.Z.Shetter

17——水のコントロールは自然との命がけの戦いの歴史。1953年高潮と北西の暴風によりオランダ南部ゼーランド地区堤防が決壊。15万haの土地が浸水し、1835名の命が奪われた。この結果4つの入り江を海から閉じ、このエリアの交通ネットワークとなった全長700kmの堤防はとして建設された。提供＝オランダ水利交通省



コミュニケーションする都市計画・ランドスケープと建築へのスピリット 都市・ランドスケープ・アーキテクト、アードリアン・グーズに聞く

—まず、あなたのプロフェッションを定義してみただけですか。

ランドスケープ・デザインってとても工学的な職業なんだ。インフラ、水、土壌、植生を考えるロジカルな技術職だよ。でも庭園のデザインは、イマジネーションや直感に頼る詩的な職業だ。だから僕の仕事はふたつのまったく異なる世界と関っている。始めはこのギャップに苦しんだけど、徐々に庭をデザインする詩人とランドスケープを計画するエンジニアが僕の中でリンクしてきた。オランダ人にとっては、自然を造ることは当たり前のことだ。だからランドスケープデザイン・建築・土木・自然を分けて考えることはできない。歴史も認識も共有している。このことがオランダに僕たちのような事務所が存在する文化的背景を説明していると思う。それに現代の環境問題は、これらを総合的に考えない限りにも解決できない。だけれども国土計画のレベルでインフラ、住宅計画、自然と分けている。ばかげたことだと思わないかい。

—ボルネオ・スボルンブルグ島の都市計画のプロセスは、どんなものだったのでしょうか。

まず低層で高人口密度という矛盾したスキームが果たして数値の上で実現可能かというリサーチから始まった。その結果5つ位のバリエーションのプランを作ることができたのでこれならやれと思ったんだ。そして同時に、これは詩的な直観だけど、港というオープンなランドスケープの中に極めて内向的な町をつくるというアイデアに完全にとりつかれたんだ。これはあまり機能主義的なスタート・ポイントではない。建築家だったらこんなことは考えなかっただろう。そしてこのストーリーをもって建築家たちに挑戦した。50%の建築面積をヴォイド・スペースにして、オリジナルな住戸タイポロジーを設計してくれて。だから建築家もエゴイスティックなスタイル論でけなし合うのではなく、面白いタイポロジーを生み出すために真剣にリサーチをしなければならなかった。その結果はすばらしいものだったよ。

—外装もマテリアルもずいぶん規制してますね。

実際は建築家とのディベートを通じて何が一番このプランに適した条件か決めていったんだ。「この完全にオープンなランドスケープにテンションを

生み出そう」「ガラスの透明性ではなくてコンクリートや煉瓦造じゃなきゃダメだ。どう思う?」って。

—最終的にはとても限られた種類のマテリアルを使いでしたね。

80%の住宅を開発したニュー・ディールが建設費を下げるために3つのタイプの煉瓦を使うことを要請してきた。だから僕はそこでお金を節約する分、ディテールにもっとお金をかけさせてほしいと交渉した。取り引きだったんだ。

—かえて同じ種類の煉瓦を使ったおかげで、ひとつ一つの建築のタイポロジーから生まれる個性が心地よく表現されていると思います。それに建築のデザインに制限を与えることによってかえて豊かなタイポロジーのバリエーションが生まれましたよね。

建築家に白紙の条件を与えることは最低なことではない。でも僕は一緒に仕事をした建築家たちを誇りに思う。僕たちのアーバン・スキームを彼らが受け継いで、さらにすばらしいプランにしてくれた。それはデザインのスピリットを理解してくれたからだ。建築設計の間も建築家とディスカッションを続けたよ。でもテイストとかスタイルについてではない。タイポロジーのことであれば建築家は話を聞いてくれるしプランも改良する。

—ディスカッションに対してオープンに自分を開いて、他の人の意見を受け止める。それってオランダでは大切なことですね。

オランダで建築の仕事をしていくっていうことは、自治体、ディベロッパー、コントラクターと徹底的にディスカッションすることだから。相手を尊重し、そして相手の能力に問い掛けることができればね。建築家によっていろいろなシナリオを考えたんだった。挑戦するか、怒らせるか。クラウド&カーンにはかなり煽った。彼らは優秀な建築家だから良い作品を作るとはわかってたけど、僕は彼らにベストの作品を作ってもらいたかったんだ。「これがクラウド&カーンの作品?」「冗談だろう」って。建築家のパーソナリティによってはマイルドにチャレンジした。話のわからない建築家には図面に赤いペンでコメントを書いて送り返した。自治体が申請図面にコメントするみたい。もちろん追い詰めるだけじゃなくて一生懸命助けた。建築家がクライアントともめたら同じように

もめている建築家を集めてクライアントに交渉に行く。たいていはこんな〇×は欲しくない、っていうようなことだから、僕はクライアントに「わかった。確かにあなたの言うことは正しいけれど、これは建築の設計なんだから100%なんてことはできない。80%ルールを作ろう」というようなネゴシエーションをする。

—建築家との個人的な関係が重要なんですね。

当然だよ。それがダッチ・モデルだよ。

—でも4年間挑戦し怒らせ、ディスカッションし続けていやにならないですか?

まさか。これがアーバンデザイナーの仕事だ。都市計画ができた段階で建築家やビルダーを招いてワークショップをして、デザイン、基本詳細、予算を照らしてどのようなスキームが可能なか意見を言い合っ。建築家同士がより良いスキームを設計するために助け合うっていう方法を僕は心の底から信じている。ヴォリュームとファサードを計画してそれを分割するような伝統的な都市計画にはもう意味を見出せない。そんなプランは死んでいるよ。

—このプロジェクトの成果は何でしょうか。

まず第1に、匿名な郊外ではなく、高密度のアーバンな組織が再評価されたこと。第2に僕たちが経済的に採算性で複雑なプロジェクトを多くの建築家とコラボレートしながら進めていく能力があるということも証明した。第3にKNSM島やジャワ島と同じ住戸密度なのにボルネオには居住者のプライベートな空間がある。これは現代社会の本質的問題に立ち向かうステートメントだ。住宅は個人のアイデンティティとコミュニティ両方を実現しなければならない。それが可能だということをこのプランは示している。

(1998年10月15日、於: WEST8 オフィス)

profile

アードリアン・H.グーズ | Adriaan H. Geuze
1960年オランダ、ドルトレヒト生まれ。1987年ワーハニンゲン農業大学大学院(ランドスケープ・アーキテクチャ)修了。1987年WEST8設立。建築雑誌「Archis」の編集、スキポール空港ランドスケープのスーパーバイザーなどを務める。現在、デルフト工科大学建築学科、ハーバード大学ランドスケープ学科教授

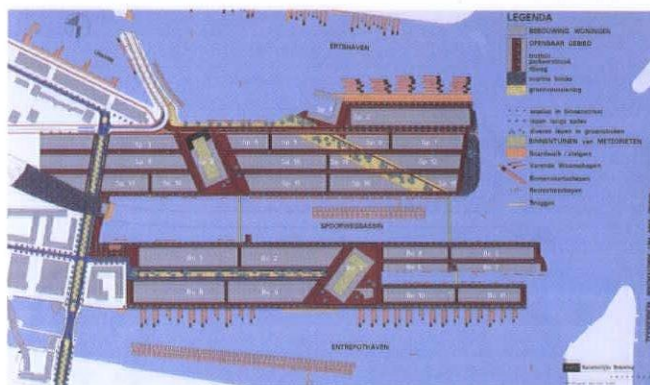
WEST 8

WEST8

都市計画「ボルネオ・スポールンブルグ」

"Borneo / Sporenburg"

アムステルダム 1997年
Amsterdam 1997

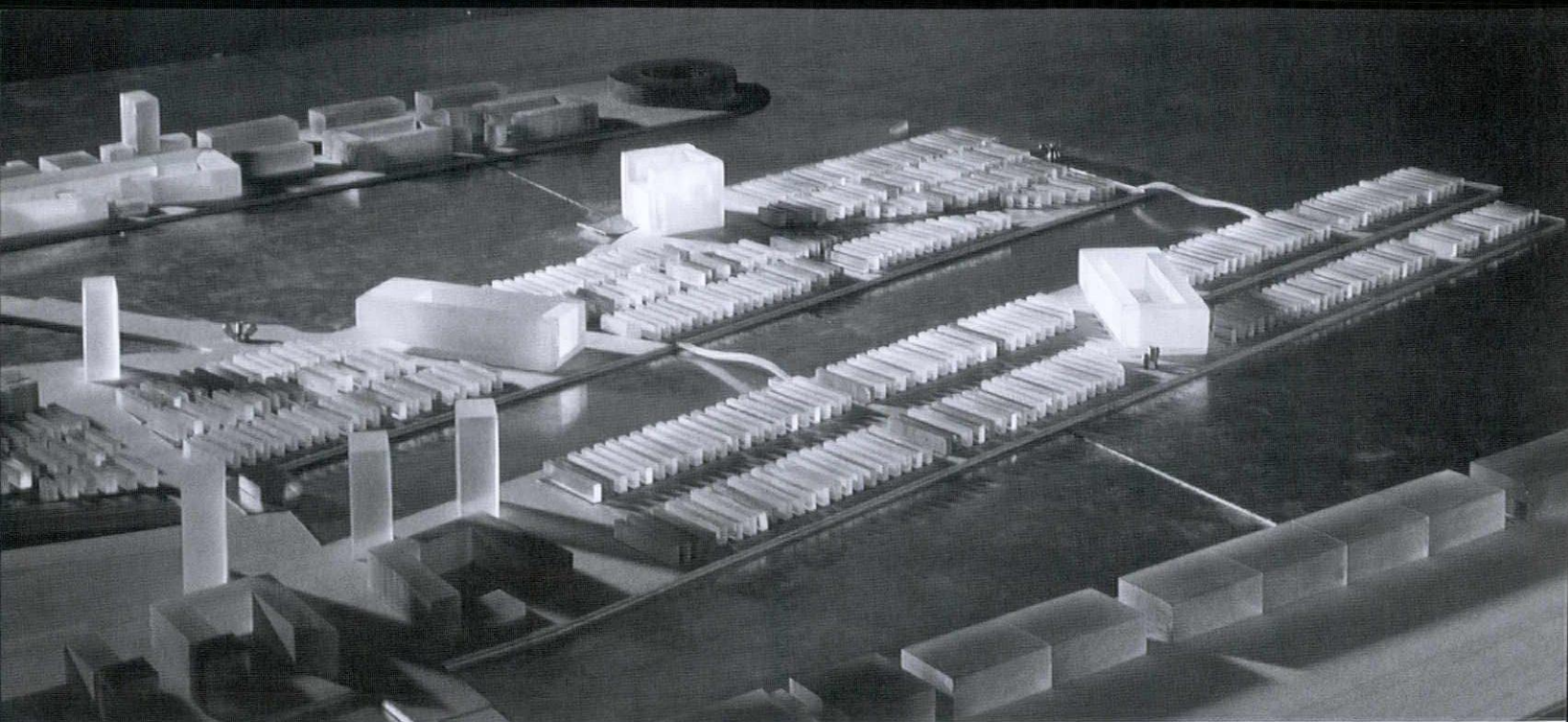


マスタープラン



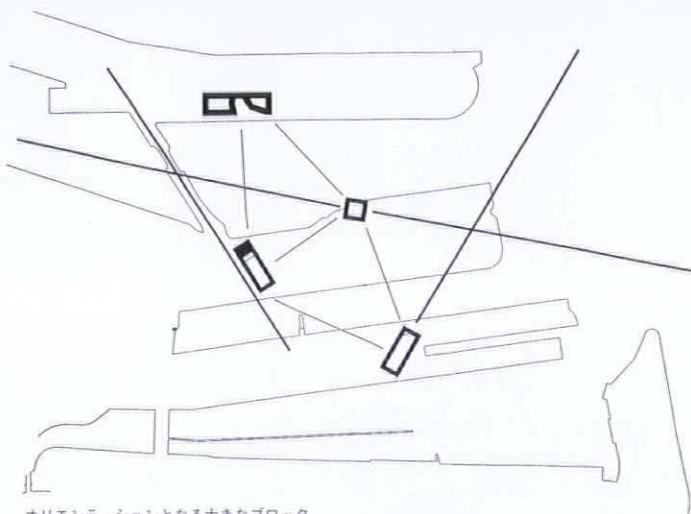
ランドスケープ・アーキテクト、アードリアン・グーズは、WEST8の設立者のひとりであり、中でも最も著名なデザイナーだ。彼は90年代に入ってランドスケープ・デザイン界をリードするようになった。WEST8の一般的のランドスケープの事務所ではない。その活動は、その職能の伝統的な枠組みをはるかに超えている。庭や公園をデザインするだけでなく、さらに広域の環境の計画を立てたり、建築周辺のオープンスペースの設計をしたり、ボルネオ・スポールンブルグの住宅地のように、パブリック・スペースからマスタープランまでにわたる都市計画も行ってきた。彼らは、ランドスケープ・デザイン事務所であるのにも関わらず、デザインに木や植物をほとんど使わない。ロッテルダムの劇場広場のデザインからもわかるように、植栽と同じように重要な構成要素のレパートリーとして、石、コンクリート、木、アスファルト、ゴム、鉄、エポキシなどがある。彼らのプロジェクトは、論理的な結論を導き出す強烈なアイデアによるところが大きい。そしてもうひとつの重要な材料は、ユーモアのセンスだが、時として陳腐なものになってしまうこともある。(H.イブリング)

Landscape architect Adriaan Geuze was one of the founders of West 8 and is also the most prominent designer in this office, which has acquired a leading position in the 1990s. West 8 is no ordinary office for landscape architecture; it is active far beyond the discipline's traditional field of scope. In addition to designs for gardens and parks, plans for larger landscape environments and open space around buildings, West 8 also works on urban design commissions ranging from the design of public spaces to master planning, such as the Borneo-Sporenburg residential district in Amsterdam. As an office for landscape architecture West 8 uses remarkably few trees, shrubs and plants. Equally essential components in its repertoire are stone, concrete, wood, asphalt, rubber, steel and epoxy, as illustrated by the design for the Schouwburgplein in Rotterdam. Projects by West 8 often rely on a strong idea taken to its logical conclusion. Another essential ingredient is a laconic sense of humour, which occasionally degenerates into the banal. (H. Ibelings)

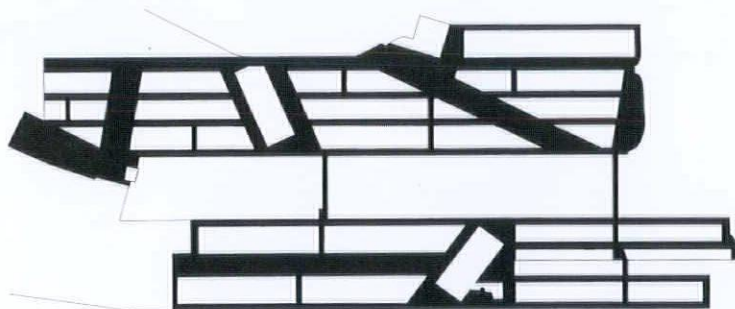


開発される以前の様子

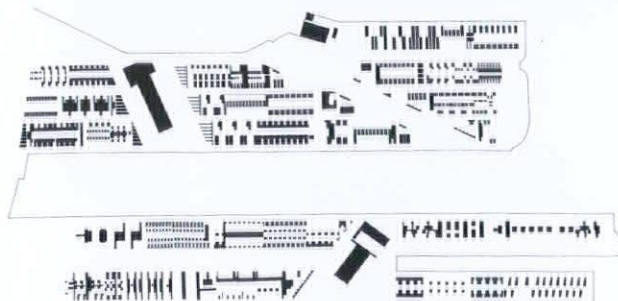
この計画は、アムステルダム東部港湾地区再開発の第4期の計画であり、ここでは23haの敷地に2300戸の住宅が計画された。このプロジェクトの特徴は2、3期工事と同じ100戸/1haという通常なら5～6層の建物を必要とする住戸の密度でありながら、70%が3層の低層集合住宅で構成されていることだ。WEST8は、玄関が1階にあり、プライベートな中庭をもつ住宅をつくることによって港の大きなスケールと対峙する、ヒューマン・スケールでインディヴィジュアルな住環境を提案した。この都市計画案に沿って建築の設計も個性的な内部空間と統一感のある外観がつくられるよう、いくつかの設計ルールによって誘導された。(H.イブリング)



オリエンテーションとなる大きなブロック



極小化されたパブリック・スペース



パティオ

用途：都市計画

敷地面積（計画面積）：21.5ha

住戸：1550戸 / 低層住宅、600戸 / 高層アパート

参加建築家：Steven Holl, Koen van Velsen, Frits van Dongen (Architecten Cie), Helen S, Kother & Salman, Erna van Sambeek, Wim Kloosterboer, Claus & Kaan, Höhne & Rapp, Arne van Herk, Kees Christiaanse, Liesbeth van der Pol, Marilies Rohmer, Herman Zeinstra, Van Berkel & Bos, Willem Jan Neutelings, DKV, Xaveer de Geyter, OMA, Hans Tupker

*この「ボルネオ・スボールンブルグ」のプロジェクトでは、建築家は建物の素材を、同じ種類のレンガ、木、鉄を使用しなければならない。





低層棟集合住宅のプロトタイプとその建築家



ヒーレン5



コーサー&サルマン



エルナ・ファン・サンベーク



ヴィム・クロースタープ



クラウス&カーン



クラウス&カーン



ウーネ&ラップ



アルヌ・ファン・ヘルク



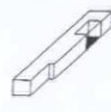
ケース・クリスティアース



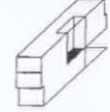
リスベス・ファン・デル・ボル



ハンス・トゥップロー



マルリス・ルーマー



ヘルマン・ゼインストラ



ファン・ベルケル&ボス



ウィリアム・ヤン・ノイトリングス



DKV



クサビエ・ド・ギター



ウィリアム・ヤン・ノイトリングス

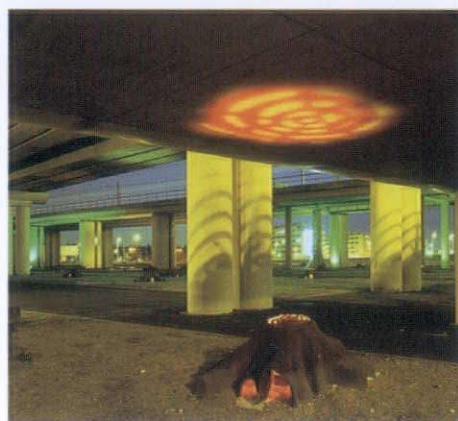
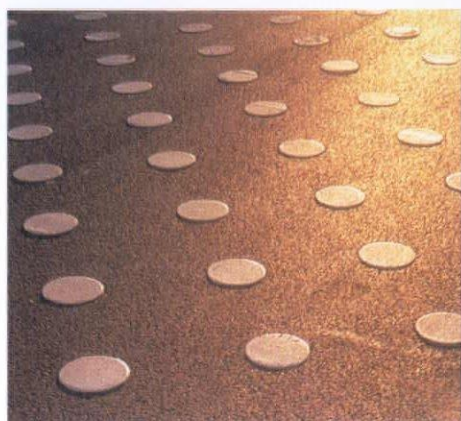


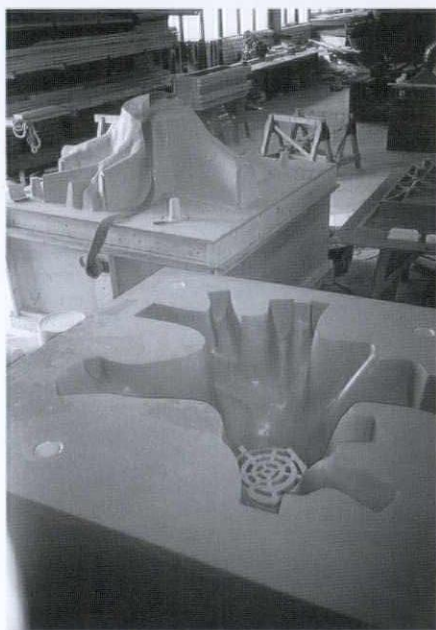
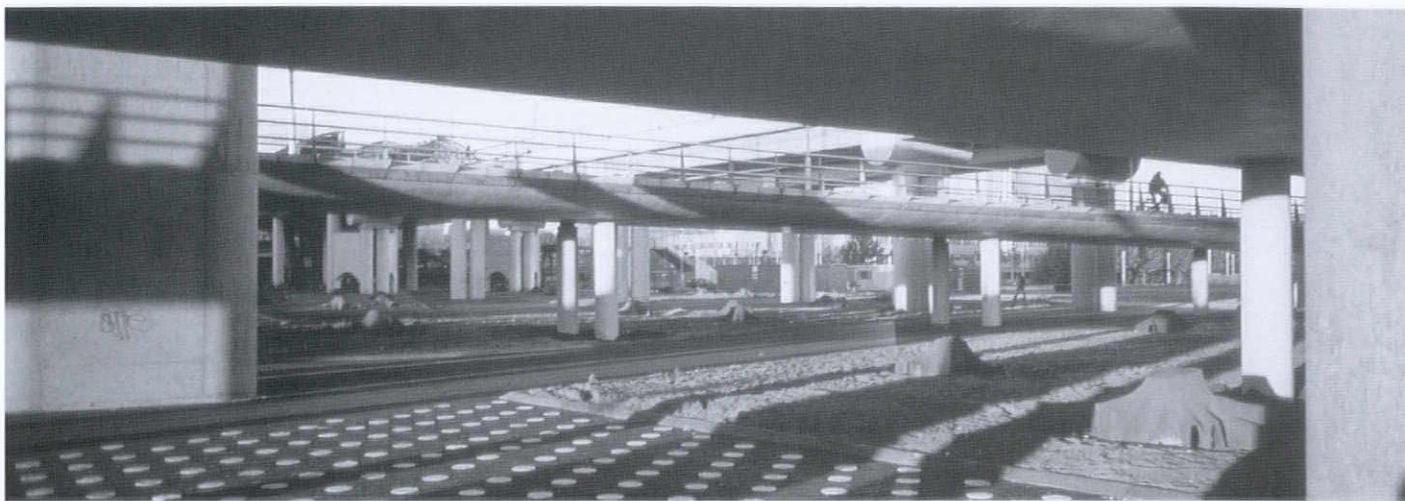
OMA

ランドスケープ・デザイン「カラスコ広場」

"Carrasco Square"

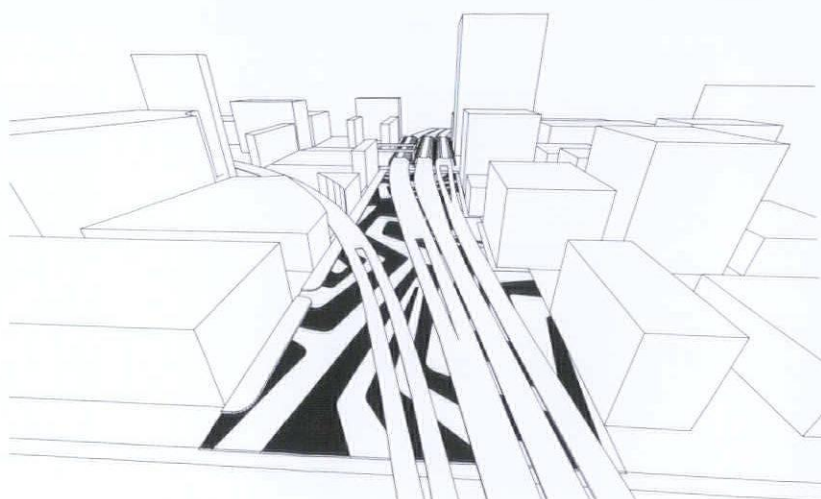
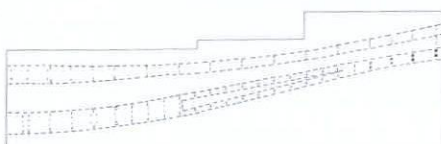
アムステルダム_1997年
Amsterdam_1997





この広場はスロートダイクというオフィスパークの中にある鉄道兼地下鉄駅周辺にあり、広場のほとんどは高架鉄道の下に位置する。WEST8によると、このデザインはアスファルトと植栽によるシュールレアリスムの絵である。2次元の面から唯一飛び出ているのは、夜になると光の灯る腐食させたスティールでできた切り株だけだ。高架鉄道のコンクリートの柱は都市の森として捉えられているので、この柱のうちのひとつは木の幹の形状になっている。(H. イブリング)

用途：公園
敷地面積：45,000m²



カウパー・コンパニオン

Kuiper Compagnons

都市計画「カッテンブルク」

Urban design "Kattenbroek"

profile

アショク・バロートラ | Ashok Bhalotra

1943年インド生まれ。1965年デリー大学都市建築学科卒業。1967年までインド、クウェートなどの建築設計事務所勤務。1967年からバリの建築設計事務所へ移籍。1970年からデルフト工科大学建築都市計画学科で教鞭をとる。1971年からカウパー・コンパニオン事務所で勤務。現在同事務所所長

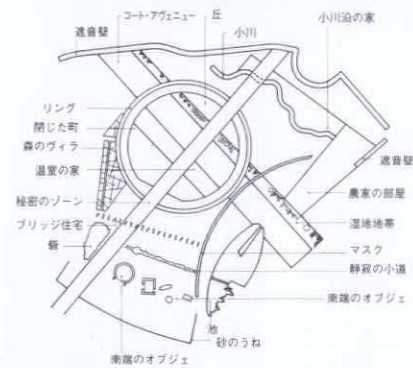
アームスフォート_1992年
Amersfoort_1992



アショク・バロートラは、第二次世界大戦以来ずっとオランダでも最も大規模な都市計画事務所、カウパー・コンパニオンの顔である。バロートラはアームスフォートの住宅地カッテンブルクのアーティスティックな都市計画以来傑出したデザイナーとしての地位を確立した。この都市計画の特徴はそれぞれのエリアがテーマをもっていることである。多くの建築家が参加して、これらのテーマを建築のデザインに展開させた。カッテンブルク以来、テーマ性をもたせて、小さなエリアに分けた住宅地をデザインする都市計画の手法はオランダ中で真似された。一般大衆にも住民にもカッテンブルクが大変人気のあることから、匿名性と均一性を避ける都市デザインを実現するこの手法が間違いなく有効であることは明らかである。一部の建築の質に関して問題がないわけでもないのだが、それも都市計画としての成功に影響するものではない。カッテンブルク以来バロートラは数多くの都市計画を行い、同じようなテーマを使ったデザイン手法を適用している。(H.イブリング)

Ashok Bhalotra is the face of Kuiper Compagnons, ever since World War II one of the biggest urban planning offices. Originally from India, Bhalotra rose to prominence with his artistic urban design for Kattenbroek, a residential district in Amersfoort.

What is exceptional about this district is that each part was given its own theme. Many different architects were involved in the architectural elaboration of those themes. The thematic approach to designing residential districts right down to the smallest units has been much imitated throughout the Netherlands. This design method is undoubtedly successful as a means of avoiding anonymity and uniformity. The huge popularity among the general public and the residents of Kattenbroek is an indication of its success. That the quality of some of the architectural aspects is questionable does not affect that too much. Since Kattenbroek, Bhalotra has made numerous urban plans in which he deploys the same thematic design method. (H. Ibelings)



マスタープラン

アームスフォートのカッテンブルクの都市計画では、約4500戸の住宅が計画されたが、その特徴はメタファーが強調されたデザインであるということだ。これらのメタファーは都市デザインだけでなく、建築のデザインも誘導する場のアイデンティティである。そしてここでは形態として認識されるアイデンティティが選ばれており、リング・マスク・コートアベニュー・秘密のゾーン・小川の5つのテーマがスタートポイントとなっている。そこに5つのランドスケープ（水・森・フィールド・沼・丘）、5つの都市的メタファー（アベニュー・運河・広場・小道・通り）、5つの建築的メタファー（閉じた町・農家・橋の家・温室の家）のレイヤーが重なられている。これらのメタファーの組み合わせによって、カッテンブルクのどのエリアにも明確なアイデンティティが与えられる。（H.イブリング）

用途：都市計画（集合住宅＋ショッピングセンター＋オフィス）
敷地面積：156ha
住戸数：5,000戸
参加建築家：Architecten Kollektief Heijdenrijk BV, Min 2 Producties, Olsmeijer-de Graaf-Algera Architecten en Ingenieurs, Holvast & Van Woerden, Architectengroep Kokon BV, INBO Ontwerpen en adviesgroep BV, Lafour & Wijk, Bakker & Poolen

Max.1

Max.1

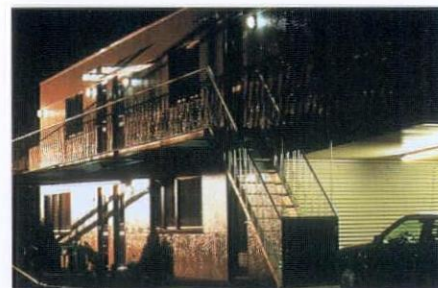
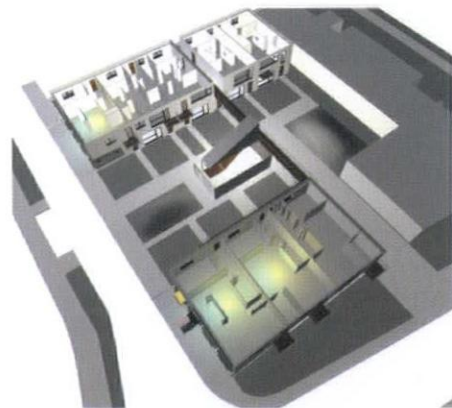
アイントホーフェンの14の住宅

14 dwellings for Eindhoven

アイントホーフェン_1998年
Eindhoven_1998

このプロジェクトでは50歳以上の高齢者のための集合住宅が14棟計画された。戦後直後に建設されたこの住宅地にあっては、MAX1によるこのメタリックな波板の住宅は際立っており、これが新しく挿入された要素であることが一目でわかる。しかしながら、橋によってつながれたこの小さな横長の低層集合住宅は50、60年代に建てられた高齢者住宅に90年代のヒネリを加えたデザインであると言える。この集合住宅の間の空間をMAX1は「ポケット・ランドスケープ」と名付けた。(H.イブリング)

用途：住宅14戸
構造：RC+S造（バルコニー、ギャラリー、橋）
規模：1階
建築面積：300m²
延床面積：750m²



MAX1は、リンツ・ダイクストラとリアンヌ・マッキンクの主宰する建築事務所である。彼らの携わったプロジェクトは、すべて「MAX」という単語と番号が付けられている。MAX1の最も重要なプロジェクトは、ライツェ・ラインの都市計画である。これはユトレヒト市のはずれの農地を開発して、ユトレヒトと同じ位の大きさの町を拡張する計画だ。その他、この町に運河によって分断されたエリアに掛かる橋もデザインした。交通の方向と種類によって表面の仕上がりを変えているので橋のデザインはひとつ一つ違っている。これらのデザインを並べると橋のデザインの可能性を集めたカタログになる。彼らの小規模なプロジェクトとしてはナイトクラブのような美しさを持ったアイント・ホーフェンの高齢者のための集合住宅がある。(H.イブリング)

Max 1 is the architectural practice of Rients Dijkstra and Rianne Makkink, an office that denotes each project by the word Max and a number. The practice is project number 1, the succeeding designs are Max 2, Max 3, et cetera. The office's most important project is the urban plan for Leidsche Rijn, an huge urban expansion district as big as acity, located on the edge of Utrecht. In addition to the urban plan, the office has designed the bridges for this new city, planned for an area bisected by numerous canals. Each of the bridges is different, the form of its surface the result of the direction of traffic flows and the type of traffic. Together they form a catalogue of possibilities. Among the office's smaller projects is the housing for the elderly with nightclub aesthetics built in Eindhoven. (H. Ibelings)

profile

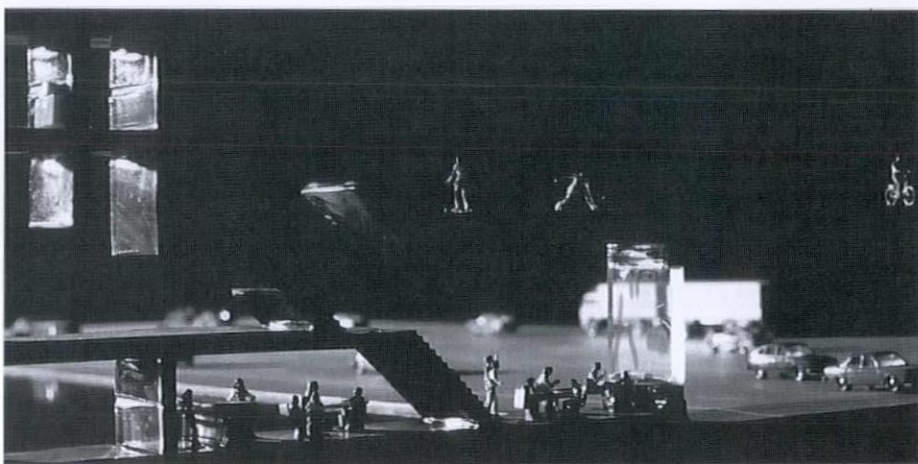
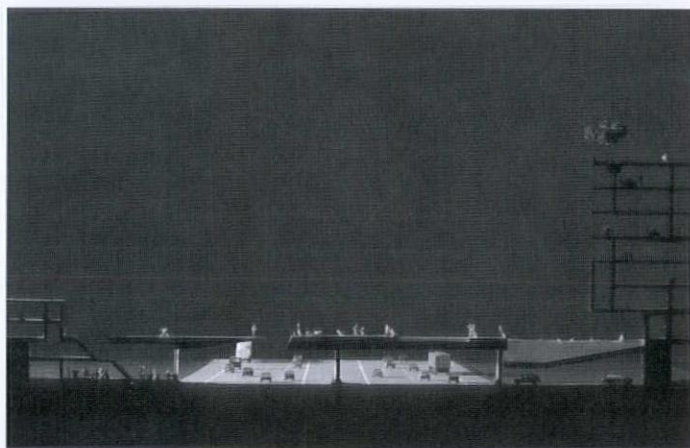
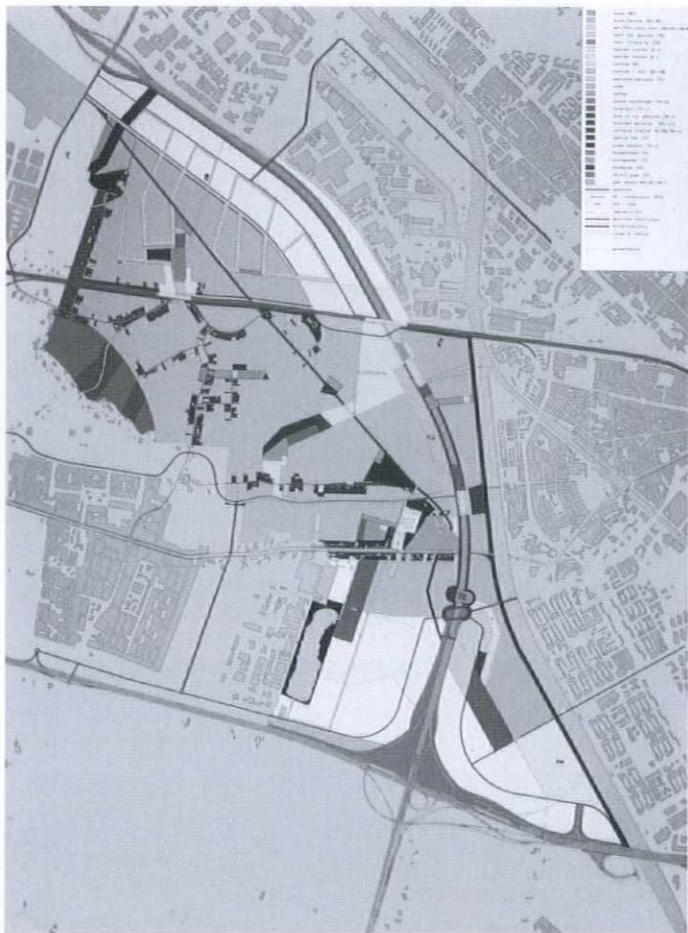
MAX1: 1994年R.ダイクストラとR.マッキンクがMAX1を設立。
リンツ・ダイクストラ | Rients Dijkstra: 1961年デンハーグ生まれ。
デルフト工科大学で建築・都市計画を学び、その後、OMA勤務
リアンヌ・マッキンク | Rianne Makkink: 1964年ホルサル生まれ。
デルフト工科大学で建築を学び、その後、数多くの事務所で研修

「ユトレヒト近郊の町の30,000住戸の都市計画」

"Urban design for 30,000 houses near Utrecht"

ライツェ・ライン_1997-2009年

Leidse Rijn_1997-2009



〈ライツェ・ライン・プロジェクト〉は、ユトレヒト近郊に3万戸の住宅を計画している。MAX1が主要な役割を果たしたこの計画では、通常の都市計画のアプローチとは極めて異なっており、ライデウスラインが将来どのようなエリアになるかということとはあまり詳細まで規定せず、最終段階まで計画を変更することができるようになっている。道路システムも大体の位置のみ規定され、正確な位置はプロジェクトの過程で決定されていく。リンツ・ダイクストラによれば、このフレキシブルな戦略が導入されたのは、都市計画においては計画を遂行するオルグウェア（社会のシステム）が、ハードウェア（建物の最終的な形態）どころかソフトウェアさえも優先してしまうからだと言う。都市計画では組織的政治的情勢こそが実際の物理的地勢以上に都市計画を制御するのだ。そこでMAX1は既存のシステムに都市計画のマテリアルを付加した。プログラム、インフラストラクチャー、ランドスケープがどのようにミックスされなければいけないか、建築がひとつのエリアにどれ位のヴォリュームが必要で、さまざまな機能がどれ位の密度で計画されるのか、ということに関する指標がそれである。（H.イブリング）

用途：都市計画のマスタープラン

敷地面積：25km²

住戸数：30,000戸

プロジェクト・マネージャー：Riek Bakker

設計1（基本計画）：MAX2 / Rients Dijkstra, Laura Weber, Vincent Lo-a-njoe, Harmen van der Wal, Herman Verkerk, Ivan Ivanvski, Crimson / Michelle Provoost, Wouter Vanstiphout, Cor Geluk / Juurlink & Geluk, gemeente Utrecht

設計2（実施計画）：MAX21 (Rients Dijkstra, Kirsten Vandenberg, Catherine Visser, Arjan Klok, Arno de Vries, Christian Muller)

SD9902

42

錯綜する都市問題を解き、都市計画をめぐる新しい職能を確立
オランダ現代都市計画の最先端リック・バックに聞く

▶ リック・バック女史は、今オランダの都市計画を考える上で最も重要な人物のひとりである。都市計画の範疇を遥かに超える彼女の都市構想は、政治家と建築家・ランドスケープを統合する新しいひとつの職能を確立した。それは同時にオランダ社会の潜在性に基づいた可能性の模索である。私たちの生きたる基礎である都市を現代的に翻訳する彼女に今を聞く。



—あなたの活動は都市デザイナーといったものとはかなりの差がある様ですが。各計画のスケールの差が支障を来すことはありますか。

私の計画は全て異なった段階にあります。スケールが支障になることは全くありません。現実的な都市計画は、社会的な問題を常に包含する非常に複雑な構造ですから。デザインは計画の最後の段階にあって、計画意図を満たす提案はさほど困難ではありません。もちろんライツ・ライン計画は白紙を出発点としています。コブヴァンザウド計画(KVZ)のように既存の都市に計画されるインフラの整ったものとは全く異なったコンセプトが必要です。時間や経済などの要因が計画の性格を決定すると言った方が良いでしょう。適応性のある計画と厳密な計画との差でしょうか。

—適応性と厳密性に関して説明していただけますか。また時間はあなたの計画でどのような重要性を持っていますか。

ライツ・ライン計画は、20年間に起こり得る予測できない個人の住宅嗜好の変化への対応が必須で計量的な決定が困難です。住宅の諸条件は大変動し、これを今決定することは計画の失敗を意味します。10年後にまったく予期不能な問題にも遭遇し得るので、本質的に重要な都市領域の確立・性格決定と各計画期間において実施が必要な物理的構造の計画を行いました。オランダ政府が管理する高速道路の軌道変更がまず第一で、市道を補足して既存のコトレヒト市が連続拡張可能になります。大都市公園の指定や新水路の配置、美観など文化的な問題の調整などまとめて適応性を課題とした骨子が完成します。柔軟な計画がインフラを敵視せず、利用することで成立しました。KVZは計画敷地に、正確な経済操作が厳密に存在しており、私達の計画もこれに従って非常に厳密な構造です。どちらの場合も今現在実施を必要とする要素と将来決定すべき要素を分けるコンセプト・アルな面白さが共通しています。

時間は、誤算すれば大失敗を招きかねるので非常に重要です。計画をさらに進行させるためには、人事を含め大規模な変更が必要です。ですから商業的にも政治的にも失敗回避は必須で内容を全体的に総合するのが私達の職能です。オランダは歴史的に他国に比べて都市計画の実現性が高いけれども、時間を鍵にもっと都市

計画を考える必要があります。

—あなたは事務所をどのように組織し、また計画をどのように進めているのでしょうか。

クライアントは私に最も複雑化してしまった計画を持ち込むのが常です。そこで私は都市計画における3つの専門分野を押さえる目的で、建築計画・ランドスケープとプロセスを扱う独立した組織を構成しました。しかし私の事務所はかなり小さく、事務所15人で15の計画を進行中です。高次で複雑性を内包した計画ほど、我々のような公平で正直な職能集団を必要とします。加えて私たちは、建築家やランドスケープ・アーキテクトと密接に連携してさまざまな都市的な要求を解決しなければなりません。市代表、政府代表、オランダ鉄道代表といったレベルの人たちと計画のあらゆる点について話し合います。この会議の後、各々が少しずつスタッフを投入して計画が進行します。こうすることで初めて信頼し合える巨大な都市計画組織が構成できます。

—例えば10年間の計画期間における、あなたの役割とは何でしょうか。

ほとんどの場合、私の仕事は計画を実施に展開することで、実施管理・商業活動はしません。私は都市計画の全般を扱いますので、どんな局面にも条件を設定して進行をコントロールします。私自身、都市計画は道路敷石の最後の一石が置かれて初めて完成すると信じていますが、この仕事は出発点が非常に大切です。計画が市政府に承認された以降は、市が実務上直接計画を進行し、私はスーパーヴァイザーになります。現在KVZは、全行程の半分程を終え、市民になじみながら一方で公共の関心がやや薄れて、今が本当に難しい局面にきています。計画を初めに非常に高いレベルにまで引き上げておかないとこの段階で遅滞する可能性があるのが問題です。オランダには、歴史的に水の問題を解決する社会合意の方法、「ボルダーモデル」がありますが、私はこれを同じ環境を組織するという意味で、今後、都市計画に取り入れていくことが必要なのではないかと思っています。

—非常にエキサイティングな仕事ですが、自分自身の職能のタイトルを表現できますか。

今のところ肩書きはありません。何か名案はありませんか(笑)。明確なのは、私は都市計画局のディレクターと政治家の両面を有する点です。政治家の意図目的を理解し、市場を分析します。そして経済技術面を投資家と算段し、市民の関心を計画に反映し、政府と予算折衝をしてPRし、都市計画を行うといったことを一身にまわっているわけです。そして計画が実現することを保証し、実現の承認を政府から受けることが最も重要な目的です。しかし、私の職務を都市設計家と呼ぶには問題があります。

—建築的な問題をどう捉えていますか？

WEST8やMAX1、MVRDV、OMA等といった建築家と私達は非常に密接な関係を保っています。MAX1は良い相棒です。ここでも私の事務所の構成原理に従い建築家を加えるシステムが可能です。クライアントの心理をよく理解して、可能な限り斬新な計画を作成するよう、私自身デザイン・ミーティングに参加し、クライアントの目的と計画の骨子が合致する様に批評的な意見を述べます。出来る限り高レベルな計画を実行することが最も重要だと信じます。私個人の作品を制作するという意味ではなく10、20年も進行する計画の大きな動力を得るのが目的です。現在オランダの環状都市外部に位置する小都市群の将来は、オランダ人全般の問題としてより重要な問題と理解しています。ダイナミズムのみを追求することではこの国の需要を満たすことは不可能です。重要なのは私達の希求する両方を実現し、徹底的に斬新な臨界にまでブッシュすること！

(1998年11月7日、於：BVR事務所)

profile

リック・バック | Riek Bakker

1944年アムステルダム生まれ。1964-68年RHSTLでランドスケープ・デザインを学ぶ。1968-76年ザントフォールト・ランドスケープ・デザイン事務所勤務。1976-86年バック・&・ブレイカー・ランドスケープ・都市計画事務所所長。1986-91年ロッテルダム市都市開発局局長。1991-93年ロッテルダム市住宅局局長。1994年BVR都市計画事務所の所長に就任



コトレヒト・セントラムの計画

アムステルダム東部港湾地区再開発

オランダ都市計画のメカニズムの現在

吉良森子

アムステルダム港は、17世紀にはヨーロッパのみならず世界の中心港として「黄金時代」を謳歌した歴史ある港だ。19世紀末に鉄道が敷設される時、アイ港を含む東部港湾地区が開発され、アムステルダム港は新たな繁栄の時代を迎えた。しかし第二次大戦後は、コンテナ時代の到来と共に西部港湾地区が開発され、東部港湾地区は次第に寂れていった。

1975年にアムステルダム市は、この東部港湾地区を住宅地として再開発することを決定し、313haの敷地を家畜市場等跡、KNSM島、ジャワ島、ボルネオ・スポールンブルグ島、そしてリート島の5エリアに分け、87年に着工した（*「KNSM」は王立オランダ蒸気船会社、「ジャワ」「ボルネオ」はかつての植民地インドネシアの島に、「リート」は華にちなんでつけられている）。これまですでに3つのエリアの開発が完成し、4つ目のボルネオ・スポールンブルグ島の建設がほぼ終わり、リート島の建設が始まっている。

このプロジェクトの10年間の推移を見ると、この間オランダの社会と都市計画がどれほど大きな変化を成し遂げてきたのか、そしてこの先どのようなヴィジョンをもって21世紀へ進もうとしているのかが明らかになる。さらに都市計画のメカニズム（国、自治体、ディベロッパー、都市計画家、建築家の関係）のバリエーションと、メカニズムと都市計画デザインの関係の発展の推移が検証される。

時代を反映して変化してきた東部港湾地区再開発

東部港湾地区再開発の特徴は、郊外住宅地としてではなく市街地の延長、都市住宅地として開発されたことだ。1haにつき100戸という高密度、価格的にもデザイン的にも種類が多い住戸タイプ、充実した交通機関なども特徴だ。戦後、低密度で庭付き長屋が並んでいる特徴のない郊外の町をつくり続け、市街地の空洞化と交通渋滞問題を生んできたオランダ都市計画の方向転換を強く反映している。

第1期の1987年に建設の始まった、かつての屠殺場、家畜市場、アントレポ港の3つの跡地は、国からの助成金に頼った低所得者向

けのソーシャル・ハウジングを中心とし、市の都市計画課と公共住宅課が都市計画を行うという、典型的な戦後型の都市開発プロジェクトであった。第2期のKNSM島開発から方式は大きく変化する。86年にアムステルダム市の住宅政策が大きく方針を変えたからだ。国のソーシャル・ハウジングへの助成が年々減少する中で、市民に住宅の購入を奨励することでこの変化に対応し、多くの分譲住宅と助成を受けない賃貸住宅を計画するようになる。この変化は、都市計画のシステムとデザイン、そして建築デザインまでも大きく変えてしまう。これまでの特徴のない、機能を重視した都市計画、建築デザインから、マーケットにアピールする特徴ある都市計画、魅力的な建築が重要であるということを自治体もディベロッパーも認識し始めたからである。

KNSM島計画では、自治体の都市計画課ではなく、外部のデザイナー、ヨー・クーネンが都市計画家として選ばれた。ソーシャル・ハウジング時代の低密度郊外型とは対照的な、個々の建築の意匠を重視した、港のビッグスケールに対峙するスーパーブロックのデザインであった。ハンス・コルホフの集合住宅に代表される大きなスケールのオブジェが並んだKNSM島の景観は、対岸からも圧巻である。暴力的でどこか感傷的な港を新しい生活の場に変換しようという意志を強く表している。

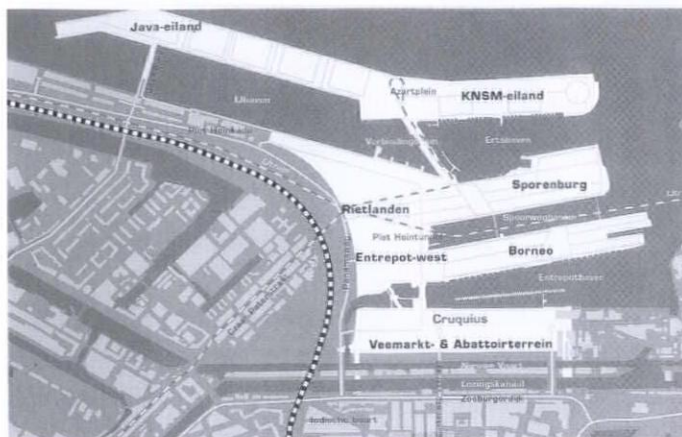
建築の形態をスタートポイントとしたKNSM島の都市デザインと第3期のジャワ島計画の大きな違いは、住戸タイプロジーを重視した点である。市の住宅局によって14の90年代の集合住宅コンセプトが付加された都市デザインがコミッションされた。ライフスタイルを売り物にするマーケット志向の都市開発の到来であった。アムステルダム旧市街の運河沿いの町屋を模した建築家シュータースの案が都市計画案として採用された。さらにKNSM島ではかなり乱暴にミックスされていたソーシャル・ハウジングと分譲住宅は住棟を分けるなど、もっと細かな配慮がなされた。

統一性と個性のテンション——ボルネオスポールンブルグ島の再開発

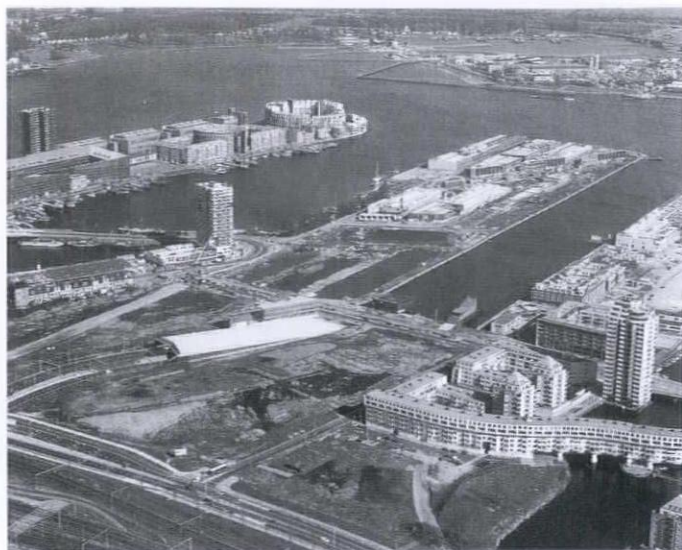
KNSM島、ジャワ島を経たボルネオ・スポールンブルグ島の再開発は、同じ様にマーケット志向の開発でありながら、自治体はまったく方向の異なる計画を求めた。それはこれまでの大きなスケール、モニュメンタルな計画とは対照的に、1haに100戸という住戸の密度は同じでありながら3層という低層の集合住宅を主とするというものだった。これは都市住宅並みの密度を持った住宅を郊外住宅的なイメージでマーケットに乗せることができる、商業的にも非常に有効なプランであった。また実施にあたって自治体はプロジェクト・マネージャーを中心に、都市計画局、開発局、住宅局、港湾局などの代表からなるプロジェクトグループを形成した。また開発側として「ニュー・ディール」というグループが作られ、民営化した3つの住宅公団と建設業者から成る開発チームが作られた。

この市の要求に対して、ランドスケープ・アーキテクトのアードリアン・グーズ（WEST8 主宰）は統一性とバラエティ、共同性と個性のテンションを誘発する極めてユニークな提案を行い、本プロジェクトの都市計画家として選ばれた。グーズのプロポーザルは「住宅の波」をテーマに、どの住戸も隣の住戸との間に庭を持ち、あたかも住戸がルーバーのようにマス、空地、マス、空地、と繰り返すものであったが、その後、市とニュー・ディールは建築家アウテンハークに、この案を基にどれほど異なる住戸タイプが実現できるのか、高品質な住宅が可能なのか、パーキングの問題はないのか、といった問題のスタディをさせた。そしてアウテンハークは、グーズのアーバン・デザインを基に数々の住戸を設計し、このアーバンプランが極めてポテンシャルの高いものであるという報告を行っている。あるデザイナーの案を別のデザイナーがテストするというのはなかなか大胆なことだと思うが、このスタディによってWEST8のデザインの潜在的可能性が証明された。

ボルネオ・スポールンブルグ島計画のデザインの他との大きな違いは、他のプランが港というランドスケープのクオリティのみをスタートポイントとしたデザインであるのに対して、グーズが港のもつ雄大なスケールに対峙する極めて内向的な住戸を提案したことに



アムステルダム東部港湾地区再開発マップ



東部港湾開発風景

ある。その結果、このプランには港、巨大な水面、棧橋、そして対岸のKNSM島の巨大な住宅ブロックという魅力あるコレクティブなクオリティを十分堪能しながら、一旦自分の住宅に入ると極めてプライベートでヒューマン・スケールの住宅と独立性の高い中庭を所有することができる。この統一性と個性、ビッグ・スケールとスモール・スケールのテンションの共存は、アーバン・デザインと建築の関係にも現れている。WEST8によって推薦された建築家のリストから、約20の設計事務所が住宅設計に参加した。グーズによって設定された建築設計のルールは、内部のプライベートな部分をいかに構成するかという点で、建築家はその個性と創造性を発揮し、外に対してはコレクティブな表情を尊重するよう誘導するものであった。建築家は期待に応えて空間的に豊かでバリエーションに富む住宅を数多く実現した。ファサードに関しては、どの住戸も限られた種類の煉瓦、木製の窓枠を使用し、各住戸の内部の個性が間接的にファサードに投影され、画一的ではないが何となくコミュニティを感じさせる路地空間が生成した。オランダの集合住宅の歴史を振り返ってみるとアムステルダム市内の運河沿いの町屋を始め、ペルラーへのプランなど、ファサードの統一性に関しては成功した事例も多い。けれども内部の空間構成に関してはファサードとは切り離されて考えられ、これらの美しいエリアの住宅の平面は驚くほど均一だ。ボルネオ・スポールンブルグ島計画では、近年ますます求められている個性的な住宅空間を都市計画に組み込むことに成功した点でユニークである。そして都市と建築がそのデザインの本質においてせめぎあうストラテジーを考案し、実現したことは都市計画史上においても極めて傑出したプロジェク

トなのではないだろうか。

ダッチ・モデルとしての横割メカニズム

このプロジェクトのマネジメントとしての成功は、自治体の役割とプロジェクトのメカニズムによるところが大きい。かつて全てをコントロールしていた自治体は、外部のデザイナーを多用し、民間企業と共同して開発するシステムを採用した結果、コーディネーターに変わった。自治体側のキー・パーソンであるアムステルダム市の都市計画課のトン・スカープは、自治体の力は以前よりも小さくなっているように見えるが、ディベロッパー、都市計画家、建築家、建設会社の間に入ったコーディネーター役となることによって、時代の潮流を組み込み、明らかなビジョンを持ったプロジェクトを実現することができるようになったと言う。

メカニズムの特色は、関係機関によるさまざまな形の横割の異分野横断的なチームをつくったことである。この結果、迅速、フレキシブルかつ、合理的な計画の進行が実現した。物事の決定も進行も官僚的になりやすい従来の都市開発では、計画の過程で本質的ビジョンが形骸化しやすい。それが目的に応じて適切な拘束力を持ったシンプルでホリゾンタルなチームを形成することによって、むしろこの計画のビジョンはさらに深まっていった。こうして都市計画が決定される以前から自治体とニュー・ディールは、都市計画家の施主となることによってプロジェクトに関っていた。そして市議会がこの都市計画を正式に採択した段階で、土地は自治体からニュー・ディールに都市計画と建築家のリストを条件として売却された。次に建築設計が始

まると、都市計画家、ニュー・ディール、建築家のグループは複数のワークショップを行い、都市デザインのヴィジョンを建築家、ビルダーに伝達し、彼らのフィードバックを組み込んだ。その結果、建築家もビルダーもこの都市計画案を与条件としてではなく、自分たちも共有するヴィジョンと捉えるようになった。その後、自治体と都市計画家は、建築申請許可を拘束力としたスーパーバイザー・グループとしてこのプロジェクトに関りつけ、この計画の本質が最後まで見失われないようにコントロールし続けた。このような複数のホリゾンタルなチームは、さまざまな段階で関係機関が、お互いの職能を肯定的に相互作用させるメカニズムなのだとトン・スカープは言明し、このような方法が成功するためにはかつてのように全てをコントロールする以上の自治体の能力が求められると語った。

東部港湾地区の開発ではダッチ・モデルが最大限に現れている。前のプロジェクトが一応成功を収めているにもかかわらず、各エリアでそれぞれ新しいストラテジーを採用している。時代の要項に合わせてさらに変わっていくという強い意志の持続こそ、オランダ的であると言える。そして状況によって開発のシステム、財源確保の方法などを変えていくフレキシビリティ。自治体内での横のつながり、あるいは公と企業のつながり、異なる職種間の関係を作り上げている。こうしたダッチ・モデルが最終的に都市の景観、建築のデザインの可能性を高め、さらには生活環境を豊かにすることに貢献しているということを強調しておきたい。

●きら・もりこ

「協議の国」オランダの都市計画

建築・都市計画、そして社会の密接な関係

笠 真希

オランダは「プランナーのパラダイス」「100%の土地が計画をもつ」と言われるほど、都市計画制度の発達した国である。しかし、その背後には「協議」の伝統に裏打ちされた「建築・都市計画・社会の密接な関係」が横たわっている。市民の要求が議会を動かし、都市計画の方向を変える。都市計画と深い関わりの中で建築のスタイルが生まれ、また建築や都市計画のスタイルに市民が反発をする。その国で現在、1世紀を経て築かれた公主導の都市計画は大きく方向を変え、民間市場との共存ともいえる方向を模索している。そして今、しばらく忘れられていた個や場のアイデンティティを表現するために、建築や都市のデザインの思想が、再度、社会から要求され始めている。この過程でオランダで行われる挑戦は、民間の原理に振り回されがちな日本の都市計画に、いかに市民や自治体、建築やデザインが参画していけるかを模索している今、大きな手がかりとなるだろう。

「建築・都市計画・社会の密接な関係」が、なぜオランダで構築されてきたか。そして、今なぜ建築や都市のデザインの思想が要求されているのか。その答えは今世紀の歴史にある。しかしその前に、基盤となるオランダの都市計画に関わる特殊性を挙げておきたい。

1: 協議 (discussion)

オランダは、ヨーロッパの中でも抜kindで「協議 (discussion)」を重んじる国であることは、まず特筆すべきことである。その国での都市計画は、常に政策と呼ばれる実現性のあるヴィジョンが不可欠である。市民は実行

力を伴うヴィジョンを持たない政治家を支持せず、議会の政策抜きには都市計画局は動かない。都市計画局も専門家としてヴィジョンを自ら提示する立場にある。政治家・都市計画局・市民がそれぞれ異なる立場で協議を重ね、妥協しつつも結論へ導き、何らかの形で実行に移す。このシステムは、絶対君主をもたず、かつ絶えず水の驚異に晒されている海面下の干拓地を協働で維持管理するためにつくられた小さな共同体が、自らの行動を決定する権利と責任によって培われたと言っているだろう。

2: 空間計画 (ruimtelijke ordening)

次に都市計画法の名前でもある「空間の秩序 (ruimtelijke ordening)」。今日、英語でいう「Spatial Planning (国土計画または空間計画)」としてEU内では市民権を得ている、都市・農村を問わずすべての空間を対象として空間を計画するという概念は、このオランダ語の言葉に起源をもつ。このことは、干拓地で生きてきた人々が、空間に秩序を与えることの社会や経済に対する影響をいかに理解しているかを示している。空間計画法の構成に見られる地区詳細計画から国土計画までという空間の捉え方と、そのすべてのレベルに対する自治体・住民の議論への参加の法的保障が、「協議」の国における空間計画を支えている。

3: 公共性 (public)

都市は「公共 (public)」のものであるという合意 (コンセンサス)。建築の内側以外は居

住者・建築家を問わず、とにかく個人が所有するものではなく、協議の対象であるという認識がある。この概念が、建築と都市計画を深く結び付けている。歴史を考えると、公共のインフラ、つまり排水路なしには生活できず、絶対君主の不在から生まれた、オランダにおける都市の共有に対する感覚は、他のヨーロッパ諸国と比較しても大きく異なっている。「個人」の占める場が狭いのである (ただし、個人が弱いということではなく、その分逆に強い)。住宅ですら公共建築に限りなく近く、そのほとんどは、都市計画の一部として公主導の集合住宅という形で行われ、その建築表現も個々ではなく集合体としてのものなのである。個人の施主による建築家への単体建築物の依頼の割合は、日本と比べると極端に少ない。

「協議」「空間計画」「公共性」。この3つの視点から、オランダでは建築・都市計画・社会が密接に関わりあっていることが見えてくる。スケールを問断なく繋ぎ協議を保障する空間計画を介して、建築や都市空間の表現から市民や政治家の都市計画に対する議論まで、それらはひとつにつながっているのである。

ここから、今世紀の初めより、オランダの建築・都市計画・社会がどのように密接な関係をつくりあげてきたのか、都市計画の発展を軸として追っていく。

1900-30: 住宅法とハウジングの芸術的価値 ——都市計画の誕生

1901年に「住宅法」が制定された。劣悪な住環境の改善のため、採光や通風の条件など



1



2



3

1:都市拡張計画「アムステルダム南部計画」、アムステルダム、1915年、設計＝H.P.ベルラーヘ
 2:集合住宅「ターヘラード」、アムステルダム、1919-22年、設計＝M.デ・クレルク、P.L.クラメル
 3:集合住宅「キーフーク」、ロッテルダム、1925-29年、J.J.P.アウト

4:都市拡張計画「ベンドレヒト」、ロッテルダム、1949-53年、L.スタム・ビース
 5:都市拡張計画「ベンドレヒト」、ロッテルダム、1949-53年、L.スタム・ビース
 6:集合住宅「ステデンヴェイク」、アルミエレ、1984年

の建築規定と民間による乱開発防止のための都市拡張計画の作成が自治体に義務づけられた。この時点から、オランダは住宅供給を柱とする公による都市計画の時代に突入する。そして、オランダの名を一躍有名にしたさまざまな建築のスタイルが、都市拡張計画のハウジングとして生まれた。当時すでに建築家の地位を築いていたH.P.ベルラーヘは、市の依頼により「アムステルダム南部計画」(図1)を作成した。当時の建築家には、新しい主役である労働者に芸術的価値のある住環境を、という風潮があり、この街区計画にも建築家らしく多分に視覚的な美的効果への考慮がみられる。また、その南部地区にも代表作を残すM.デ・クレルクに代表されるアムステルダム派は、低所得者の住宅組合のものとは考え難い豊かなデザインを生む(図2)。対照的に、デ・スティールのJ.J.P.アウトは、シンプルで前衛的な住宅をこれも住宅組合の一街区として設計する(図3)。この時代はまさしく庶民のためのハウジングで建築家が腕を競う時代であった。

同時に、住宅法の一部の都市拡張計画として誕生した都市計画であったが、次第に経体として都市を捉える動きが盛んになり、都市計画が職能としても計画範囲としても確実に広がり始めた。適正住戸数などの予想から統計の専門家、市電や車交通の増加から交通の専門家が必要となり、また、建築家による街区計画では都市全体としての視点に欠けるため、都市計画そのものの専門家が要請されてくる。これらの要求から、ベルラーヘら建築家たちが、1918年にオランダ住宅都市計画協会を発足する。そして、1924年のアムステルダムでの国際会議の決議にあるように、都市拡張計画が周囲の非都市部も含めた地域

計画に発展し、さらに地域計画が集積されて国土計画となるには、国土の狭いオランダではさして時間のかかることではなかった。

1940-60:ファンクショナリズムの台頭——都市計画の独立

終戦後、戦災復興に始まる住宅の大量供給時代が幕を開け、ファンクショナリズムが住宅供給の主役に躍り出る。高・中・低層の住宅と十分すぎる緑のオープンスペースを機能的に組み合わせた街区が、地形による制約のない平坦な土地に判を押したように並んでいる(図4、5)。これは、CIAMのC.ファン・エーステレンらが戦前すでに提唱していたファンクショナル・シティの実現であり、建築・オープンスペース・交通などの要素を機能により分離し適正に配置するという、建築から都市計画まで一貫した主義のもとに成り立っていた。

また、戦前に培ってきた経験をついに住宅法から完全に独立させ、ひとつの法律として成立させるに至る。1962年の「空間計画法」の制定である。背景として「プラノロジー」と呼ばれるコンセプトの形成手法や決定手続き自体を対象にする分野が台頭し、都市計画が紙に描いた青写真だけでは実現し得ないことを強調した。そして、この空間計画法では、地区計画から国土計画までスケールを横断する空間計画の手法だけでなく、国・県・自治体の責任分担、住民の発言権などの協議の仕組みが整えられ、それは今日も重要な基礎を形成している。

1970-80:表現の不在、社会派・機能派による都市計画

70年代、都市計画の方向は大きく転換させられる。60年代の高速道路が街を横切り高層ビルが林立するような計画図に、市民が「待った」をかけたのである。「高速道路・高層ビルよりも近隣の住居を！」(Building in the neighborhood!)という市民の動きは、政治家を動かし、都市計画の方向を動かしていった。大規模再開発に一掃される寸前に取り壊しを免れた戦前築の老朽住宅地区では、新しい「アーバン・リニューアル」という手法のもとに、小さな改修や開発が根気よくあちこちで行われていく。当時、修復後の家賃を最低限に押さえるため、また国の補助を得るために厳しい仕様の制約があり、それらの建築の質はそう誉められたものではない。しかし、特筆すべきは、それが単なる設備改修にとどまらず、地区の社会的な問題の解決を目指したことである。家族として住み続けるために2戸の住宅を1戸にする計画や、地区のために必要な幼稚園・地下駐車場などの小規模な計画が改修不可能な街区に埋め込まれていった。また各地区ごとに、プランナーやソーシャルワーカーがチームを組んでプロジェクトにあたった。

しかし、これまでハウジングを通して一貫して都市計画と関連のあった建築のスタイルは、その点では空白の時期を迎える。それらは、「構造主義(ストラクチュアリズム)」派と呼ばれる、この時期の代表的な建築家ファン・エイクやヘルツベルハーなどの作品は都市計画の主要な流れとは一線を画している。主たる流れは、高層・高速の時代の反動で、歩行者に重きがおかれる伝統的な建築を模した



4



5



6

低層住宅が並ぶ都市像が一般的となる(図6)。集落的な雰囲気すらあるこの都市部は、一見60年代の機能主義とは正反対に見えるが、その裏には依然徹底した機能分離主義的な考えが流れており、交通や配置計画の専門家が活躍したことをうかがわせる(図7)。「アーバン・リニューアル」の動きも合わせると、この時期の建築のデザインは、社会学や交通や配置の理論に主導権を譲ってしまい、都市計画に登場する余地がなかったのだろうか。

1990-: 民間との協働・イメージ戦略、そして都市としてのデザインへ

90年代、またしても転機が訪れる。80年代に傾いた経済は、それまで公の財源基礎としたオランダの都市計画に打撃を与え、民間との協働が必要になり始めた。経済は90年代には盛り返したものの、EUのさらなる統合によって国際都市間競争の時代に突入し、民間路線はより強化されている。加えて、政府はこれまでの「補助付きの住宅組合の借家」という基本路線を持ち家政策に大きく切り替えた。

これをうけて、自治体の都市開発プロジェクトも、積極的に民間資本を取り入れようとしている。必須となる民間投資家の誘致・個人の住宅購入の促進には、戦略的なイメージ、つまり、場所の個性的な魅力が必要となってくる。そこで、自治体はプロジェクトのマスタープランとその中の個々の建築に建築

家を起用するという手法を取り始める。アムステルダムの東部ドックランズ(Eastern Docklands, 図8)、ロッテルダムのコップ・ファン・ザウド(Kop van Zuid)、マーストリヒトのセラミック(Ceramique)などである。プロジェクトによっては、イメージ戦略に傾倒した海外有名建築家の見本市だという批判もあるが、確かにそれは否定できない。しかし、基本的にどのプロジェクトも都市全体の発展という文脈の中で戦略的に行われていることは評価に値する。

加えて、これまでの計画手法の行き詰まりである。各自治体が既存の手法に限界を感じて模索している実験を、担当省が「イメージ・クオリティ」という名で検討している。その目指すところは、各都市のもつイメージをどのように発展させることができるか、という問いである。戦後の、理論重視の場所を問わない都市計画が生み出した画一的な都市像への反動であろうか、場のアイデンティティを重視する傾向がみられる。建築・都市計画への関心の高いヨーロッパ、特に居住地を気軽に変えるオランダでは、優秀なプランナー・デザイナーを起用した都市空間・建築の質が、現在、都市として生き残るための大きな鍵を握っているのである。

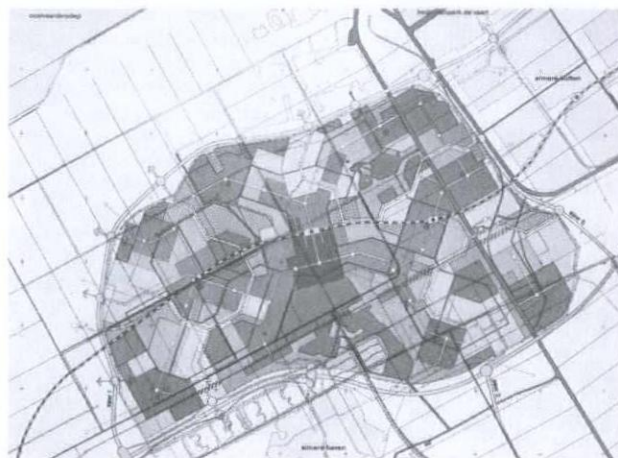
世紀末である現在、1901年の住宅法から100年、1962年の空間計画法からほぼ40年が経とうとしている。オランダの今世紀を振り返ると、建築家とハウジングから出発した都市

計画は、国土計画までその範囲を広げ、また職として分化し、法律が整い、さまざまな側面からのアプローチをもとに、都市を総体として捉える基盤がつくられた。その着実な発展は、約20年を周期として市民の要求や経済が促した都市計画の方向の転換によって積み重ねられてきた。そして、都市計画に関わる建築のスタイルもそれとともに変化し、機能分離主義やアーバン・リニューアル時代には影を潜めていた建築や都市のデザインが、現在、社会から再び要求され始めている。民間資本の獲得という経済的目的もあるにせよ、アイデンティティのある場所を求める動きが、異なる立場の人々の間での協議でどのようなヴィジョンを構築していくか。100年かけて築かれた空間計画の技術に支えられたオランダの建築家や都市プランナーが、この動きにどう答えていくか。その挑戦はすでに始まっている。そして20年後、社会がまたそれを評価するのであろう。

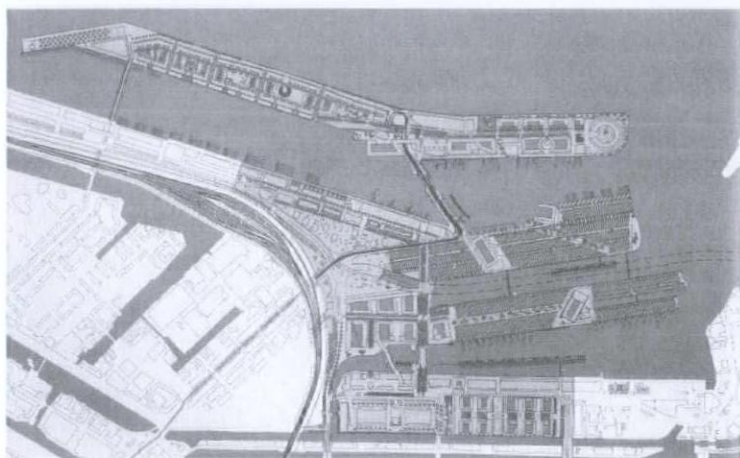
●りゅう・まき/都市計画・都市デザイン専攻、デルフト工科大学在学中

図版出典

- 図1、6、7: Coen Van der Wal, "In Praise of common sense", Rotterdam, 010, 1997
 図2、3: Paul and Vollebaard Groenendijk, "Guide to Modern Architecture in the Netherlands", Rotterdam, 010, 1998
 図4: F De Jong, "Stedebouw in Nederland: 50 jaar Bond van Nederlandse Stedebouwkundigen", De Walburg Pres, 1985
 図5: Hans Ibelings, "20th Century of Architecture in the Netherlands", NAI Publishers, 1995
 図8: Egbert Koster, "Eastern Docklands", Architecture & Natura, 1995



7
 SD9902
 48



8

4月30日は先代の女王の誕生日で「クイーンズ・デイ」と呼ばれ、オランダの町はお祭り騒ぎになる。町中がフリーマーケットとなり、大人も子供も古着や古道具を持ち出して通りで売ったり、お菓子を作って売ったり、パフォーマンスをしたりする。ベアトリクス女王とロイヤル・ファミリーは毎年ひとつの町を訪ね、お祭り騒ぎを見学して歩く。女王の誕生日に女王自らが国民を訪ねていく、という構図はオランダの権威に対する考え方をよく表している。自転車に乗っている女王、大衆車に乗るロイヤル・ファミリーなど、イギリスのエリザベス女王について世界で2番目にお金持ちな女性であるオランダの女王は、国民の親愛を勝ち得るためには女王がいかに普通の人であるかということのアピールしなければならないのである。オランダでは誰もが平等である、という感覚は女王と国民の関係だけではなく政府と国民、企業などの組織内における感覚、有名人に対する扱いなど極めて重要な規範である。そして上に立つ者はこの規範を尊重しなければ、誰もついてこないと思っていい。

ヒエラルキーを嫌い、誰もが平等だという感覚は、絶対君主を持たなかった共和国の歴史、あるいは治水管理という誰もが同じように責任を負ってきた伝統によって育てられてきたのたろう。このことは都市計画と建築の歴史においても明らかである。例えばアムステルダム歴史的市街地は他のヨーロッパの首都にあるような巨大で重厚なモニュメントがない。あえて言えば市の中心にある宮殿だが、これはもともとは市庁舎として建てられたものであり、現在も宮殿前広場は移動遊園地やコンサートに使われる、アムステルダムの中でももっとも大衆的なパブリック・スペースである。国王の絶対権力によって建造されたモニュメントではなく、商人たちの町屋が構成する運河沿いの街並みがアムステルダムの美しさである。それは住宅の街並みであり、特権階級ではなく市民の街並みだ。クイーンズ・デイの日、アムステルダムの広場という広場はコンサート会場となり、文字通り町全体がイベント化する。アムステルダム市はこの他にも年に数回、同時多発的に広場や運河を使った入場無料のイベントを行う。何世紀にも渡る歴史を歩んできた町の広場から広場へ、運河沿いを歩いて次々にイベントに遭遇していくとき、人と都市は一体化していることを実感し、アムステルダムの歴史的街区全体がパブリックな都市空間として機能するのだと知る。(吉良)

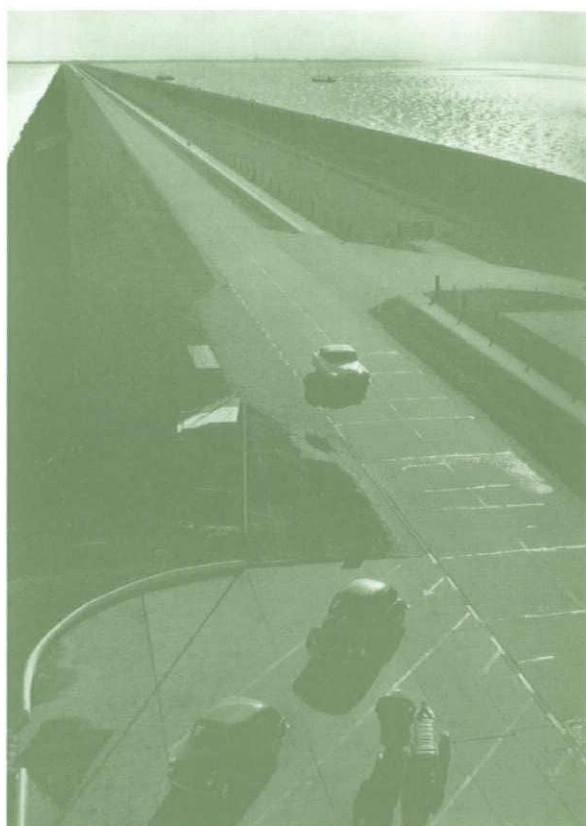
keyword | 03

Horizontality

対等性

構成・編集=Keyword Group





01 | アイセル湖閉め切り堤防



03 | アムステルダム王宮前広場の移動遊園地



04 | オランダの紙幣



05 | 地方分権オランダ



06 | コンサートホールのハウスパーティー



02 | ゲイ・プライドの日の警察官



07 | 川魚の施設

01—オランダ水利工学の粋を集めた、南海を海から閉め切る30kmに渡る堤防の工事は、1928年に始まり5年間の月日が費やされた。伝統的なライスヴェルク(柳の枝を編んで岩や砂などによって沈める)と職人による、文字通り手作りの堤防工事だった。

02—オランダでは相手を威圧してコントロールしようとしても無駄だ。はっきりと状況を説明して、共にやっというスタンスしか受け入れられない。相手を尊重することはダッチ・モデルの基本。写真はゲイ・パレードを警備する警察官とパレードに参加しているゲイ。誰もが安全に楽しくパレードをしたいと思っているのだから仲良く協力して楽しもうよ、といったところ。©藤原かすみ

03—王宮前といえども市民のパブリックスペースだ。王宮前広場をはじめ、美術館前広場などアムステルダムのパブリックスペースはコンサート、政治デモ、古本市など市民のイベントとして最大限に使われている。こうして自然に市民は都市に属し、都市は市民に属している。©嶋川肇

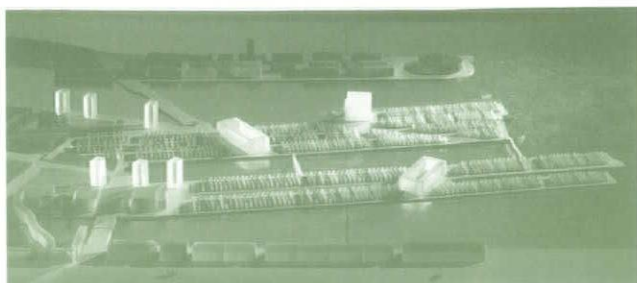
04—オランダ人は誰かを崇めることに喜びを感じない。「誰だって平等でしょ」という国の紙幣には鳥や動物や植物がふさわしい。

05—オランダが一大都市に機能集中せずに、いくつもの都市のネットワークを形成している背景には7つの州の歴史がある。80年間にわたるスペインからの独立戦争はこの7つの州の協力によって実現し、1648年オランダは、ウェストファリア条約において7つの州の共和国として、その歴史を歩み始めた。©Petrus Schenk

06—コンセルトヘボールは、世界でもベスト5といわれる伝統ある由緒正しいコンサートホールである。そんなクラシックな場所で王族が会長を務める文化財団が設立40年を記念して、ビデオ・ジョッキーとオーケストラをミックスしたハウス・パーティーを開いた。元々クラシックコンサートでも老若男女気楽な格好でやってくるのがオランダでは普通だが、その夜はさらにイブニングドレスの老夫婦にマリファナでハイになったお兄さんも一緒に盛り上がった。©Benelux Press、提供=プレニウム・エラスミアス協会

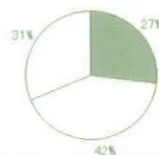
07—産卵のために川を遡る魚は水門を飛び越えることはできない。そこで考えられたのが魚のための迂回階段。約20種類の川魚がこの階段を上っていくそうだ。©Karel Tomei

08—かつての都市計画は自治体から都市計画家、ディベロッパー、建築家、コントラクターとプロジェクトの手順も秩序も非常に縦割りだったが、近年ボルネオスポールンブルグ・プロジェクトでは、水平システムで開発が行われた。計画初期の段階で関係機構すべてによる組織が作られ、計画の実現に向けて相互に協力していく。提供=アムステルダム市DRO、©Hans Brons



08 | ボルネオ・スポールンブルグ都市計画

Building Type in the Netherlands



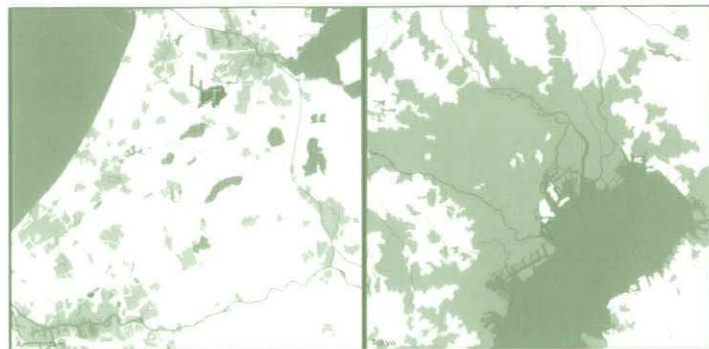
Building Type in Japan



09 | タウンハウス好きのオランダ人



10 | 労働者のバレス



11 | 東京VSランドスタット



13 | みんなのHEMA



14 | オランダ・チームを率いるライカールト



15 | ホリゾンタル・ランドスケープ



12 | ユーロトップへのプレゼント

09—オランダには庭付き住宅は多いが、戸建て住宅はあまりない。戸建てではなく、1軒以上の家を横につなげたテラスハウスがオランダの基本。日蘭とも70%近くの人が庭付きに住んでいるが、オランダではそのうち42%はテラスハウスに住んでいる。庭付きの家に住みながらも、コミュニティ感のある住戸タイポロジーがオランダ人にフィットするようだ。資料作成＝笠真希

10—デ・クレルク設計のアムステルダム・スクール様式の名作〈エイベン・ハールド〉は、1920年に完成した。社会党の支持により労働者の住宅が改善されただけでなく、時代の先端のデザインが適用された。考えてみればその伝統は今でも変わらず労働者住宅がソーシャル・ハウジング、民間の集合住宅とステータスは変わっても、一般市民が新しい意欲的なデザインの建築を歓迎することは変わっていない。

11—東京圏の人口は約1500万人、ランドスタットは約600万人。地理的範囲は実は近いものがあるのだが、オランダはグリーン・ハートという緑地を中心に北から右回りに、アムステルダム、ユトレヒト、ロッテルダム、ハーグが環状ネットワークを形成している。そしてアムスは金融・観光、ユトレヒトは流通、ロッテルダムは工業、ハーグは政府機関とその特色がはっきりと分かれている。©NAi

12—1997年6月のユーロトップでは、ヨーロッパのトップがアムステルダムに顔を揃えた。最後にユーロトップにはエコロジカルな自転車が登場したが、ユーモアを理解できずにむっとしているシラクやコールを尻目に、さすが若きブレアは颯爽と自転車に乗って見せた。

13—オランダのどこの町のどのショッピング・ストリートにもHEMAはある。HEMAはオランダ統一価格会社(1)の略。日用品全般からお菓子まで、安くてデザインもほとんどかっこいいので、オランダにいてデザイナー・ショップには用がなくなる。オランダにHEMAのような無敵のコスト・パフォーマンスの店がたくさんあるのは非常に納得できる。

提供＝HEMA、©Pieter Vlamings

14—彼はオランダのポップスターではない。ワールドカップが終わって新たに選ばれたオランダ・ナショナル・サッカー・チームの監督である。アムステルダム・アヤックス、ACミランなど華々しい経歴を持つ弱冠36歳のライカールト。サッカーばかりが政治家も建築家も、能力があって新風をまき起こすことができれば若手を抜擢してしまうのがオランダだ。

提供＝オランダ王立サッカー協会、©Jan de Koning

15—日本の最高点はいくまでもなく、富士山標高3776m。オランダはなんと一番高いところでも標高322m。それもこれはもうベルギーとドイツ国境付近である。ランドスタットのあたりでは、山どころか丘もなく水平線はどこまでもどこまでもまっ平らだ。

提供＝オランダ水利交通省

政府が建築政策を掲げることの意味 ウィッツ・パティンに聞く

▶ 官庁建築家、ウィッツ・パティンはオランダ政府各省庁の建築アドバイザーである。政府の建築の質を維持し、一般建築に波及するために官庁建築家はVROM省(住宅国土計画環境省)のかなり影響力のあるポジションにある。5年間の任期期間中、一建築家のビジョンが国の建築政策に反映されるオランダならではのシステムだ。

——チーフ・ガバメント・アーキテクトの役割をご説明いただけますか。

一言で言えば国家の所有する建築、アート、モニュメントのクオリティに関するアドバイザーです。私自身が設計を行うのではなく、政府が施主となるプロジェクトの建築家を選び、プロジェクトの始めから終わりまで、マネジメントを行います。関係省庁、テナント、自治体など関係機関の間に立って設計途中に生じる問題解決に当たります。このような建築アドバイザーが政府内のポジションとして確保されているのは、国の建築のレベルを高めることで他の建築のレベルも高めていこうというオランダ政府の政策に基づいています。

——チーフ・ガバメント・アーキテクトというのは、歴史的にも非常に権威のあるポジションですね。

その起源は18世紀にまで遡ることができます。もともとは国の建築家として実際に国の建築物を設計してきたのですが、1960年代になってアドバイザーとなりました。チーフ・ガバメント・アーキテクトというのは古典的で時代錯誤な概念です。それが施主である国と建築家とのコーディネーターという役割に変貌し、非常に現代的なポジションに生まれ変わったわけです。任期の間は国の建築・都市計画に対して、私自身の建築に対する個人的見解を示すことができる非常にパワフルなポジションですから5年経って交代するというのも良いことなのです。

——建築のクオリティを法文化することはできないわけですから、最後は個人が個人の責任において良いか悪いか判断するしかないということですね。このような、ある意味で主観的なポジションが政府の中で制度化されているというのが面白いですね。

建築もアートも、ある個人が創造するものであって、機関がつくるものではないので、それを選ぶ立場にある者の責任は非常に重い。芸術の分野では、純粋に客観的な判断というのはあり得ず、個人として答えを出すしかないのです。とはいえ、権威的にこの建築家が良いのだと押し付ける立場にはなく、このプロジェクトにはこういう理由でこの建築家が適切である、と関係者を説得します。このような主観的な判断を行うことを敢えて公にすることも重要な役割で

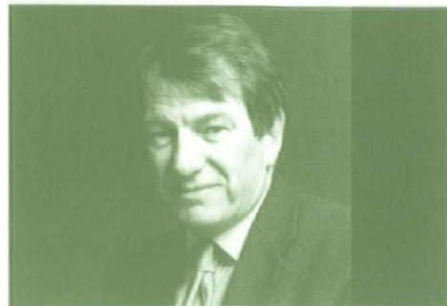
す。言い換えれば、私自身の建築へのヴィジョンに基づいて選択するからこそ、関係機関、関係者のコンセンサスも形成することができるのです。

——日本では、建築にヴィジョンを持った自治体の首長の提唱によって、その人の任期の間は質の高い建築がたくさん建てらるということがあるのですが、なかなか制度化するというところまではいかないようです。

それはオランダでも同じです。建築に理解を持つ施主があってこそ、質の高い建築は生まれるのです。国の役割はいかにそういった施主を奨励するような政策を打ち出していくかということです。施主側で建築を評価することができなければ、良い建築も生まれようがないわけで、各省庁の建築政策をコーディネートし、刺激を与えるというのもチーフ・ガバメント・アーキテクトの役割です。例えば交通水利省は多くの橋や空港などのプロジェクトを行っています。機能重視とは言っても、同時に橋や堤防はオランダの風景の一部です。私の役割は技術的な問題としてだけではなく、デザインの問題としても捉えてもらうように水利省を説得し、ランドスケープ・アーキテクトや建築家を登用することです。

——チーフ・ガバメント・アーキテクトの役割は、都市計画・ランドスケープにも広がっているのでしょうか。

まず第1に都市計画があってその条件に基づいて建築が設計されるのです。つまり、どんなに建築がすばらしくても悪質な都市計画を改良することはできないのです。だから都市計画に関っていくことは避けられないことです。また現在計画されているドイツへつながる高速鉄道のルートは、環境的な視点から大きな問題となっています。オランダではランドスケープの質も非常に重要なアイテムになってきています。ランドスケープと都市計画はひとつになりつつあるのです。政府の建築政策でも重要なテーマとして建築の領域から都市計画、ランドスケープまで政策の領域に広がっていくことが掲げられています。このようなプロジェクトにデザイナーを登用する意義は、ただ単にオランダを美しくすることではなく、彼らがコンセプト作りの段階で加わり、リサーチを行うことで総合的なヴィジョンを展開することができるということです。



——チーフ・ガバメント・アーキテクトとして建築家を選ぶときに適用される、質の高い建築の基準をお聞かせいただけますか。

私は何よりも本質的(intrinsic)なクオリティを第1に考えます。それは美しさを追求する形態的なクオリティではなく、建築、都市計画に関る、機能、技術、環境などすべてのクオリティを統合するということです。設計がこれらすべての問題をあたかも自然に解決しているときに私は感動を受けます。このようなクオリティというのは、デザインのスタイルとはまったく別の問題です。現代はひとつのデザインのスタイルを推奨するような時代ではなく、いろいろな可能性があっているのです。だからこそ建築の美的クオリティではなくて、本質性を問題にしなければならないのです。そして次に大切なのは、建築が社会的なテーマをいかに問題にしているかです。社会的な文脈なしに真に建築を考えることはできない。だから私は常に現時点の社会的テーマとの関りを追求しています。人口の集中、サステイナビリティ、環境問題など。そしてオランダ社会の新しい展開として重要なのは、オランダ国内のインターナショナルリゼーションです。オランダでは異文化をバックグラウンドとした人口が増えています。この結果、オランダ文化も変わってきています。例えば機能性と必要性を重要視する伝統的オランダの考え方では機能的でなければ美しくないのですが、マルチカルチュラルな社会になるにしたがって建築の価値もかなり自由になってきたように思うのです。このように社会の変化は都市計画・建築にも投影されます。(1998年11月18日、於:チーフ・ガバメント・オフィス)

profile

ウィッツ・パティン | Wytze Patijn

1947年ロッテルダムに生まれ。1976年デルフト工科大学卒業。1976-79年ロッテルダム市住宅局調査部勤務。1981-87年ロッテルダム市住宅局建築家・調査事務所長。1987年ロッテルダム市にて建築事務所設立。1993-95年 デルフト工科大学教授。1995年よりチーフ・ガバメント・アーキテクト



設計:
ステファン・ペーニッシュ

パティンが本質性をもった建築として評価する建築(森林自然研究所)

UNスタジオ ファン・ベルケル&ボス

UN studio Van Berkel and Bos

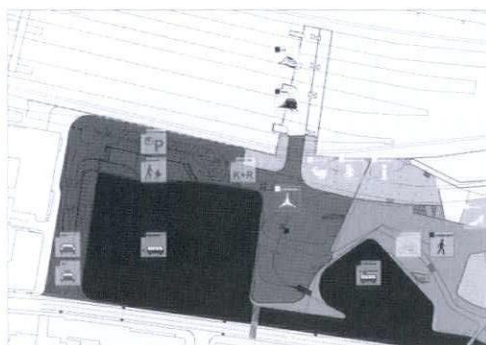
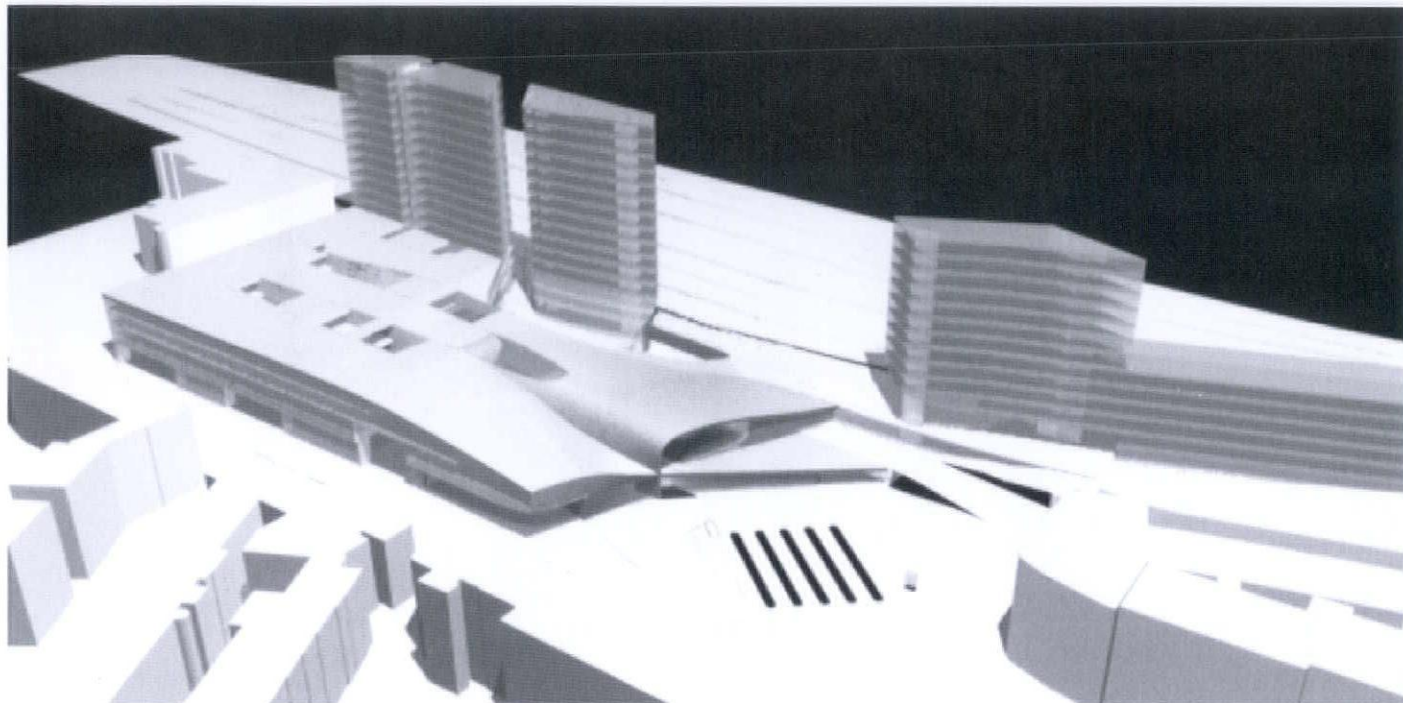
都市計画「アーネム・センター」

"Arnhem Centre"

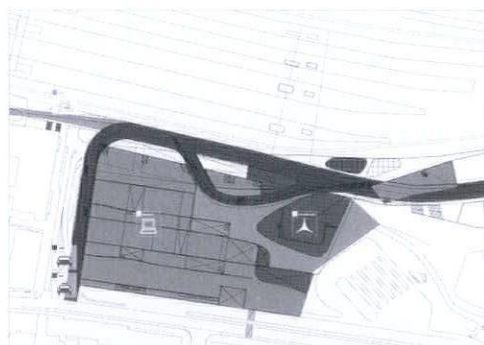
アーネム 1996-年
Arnhem 1996-

profile

ベン・ファン・ベルケル | Ben van Berkel
1957年ユトレヒト生まれ。1977-82年アムステルダムのリートフェルト・アカデミーで建築デザインを学ぶ。1982-87年AAスクールで学ぶ。1988年カロリン・ボスと共同でVan Berkel & Bos Architectuurbureauを設立。コロンビア大学で客員教授、ハーバード大学で客員批評家として教鞭をとり、AAスクール、ベルラーヘ・インスティテュートで卒業計画を指導



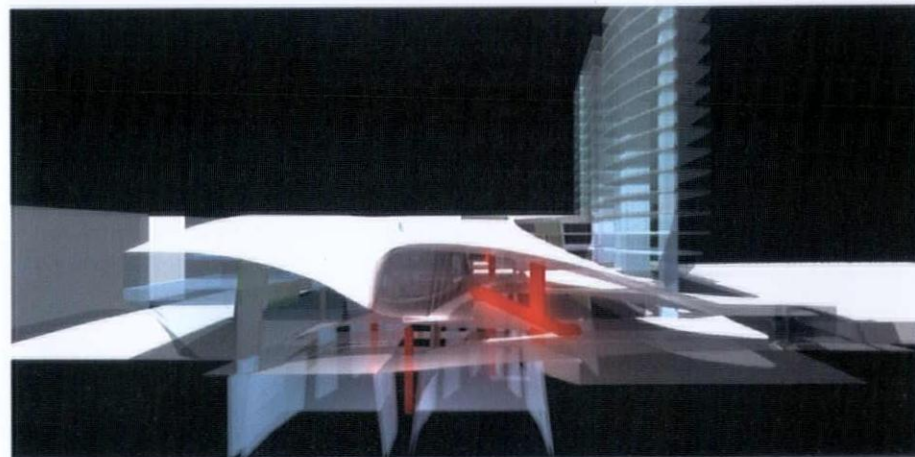
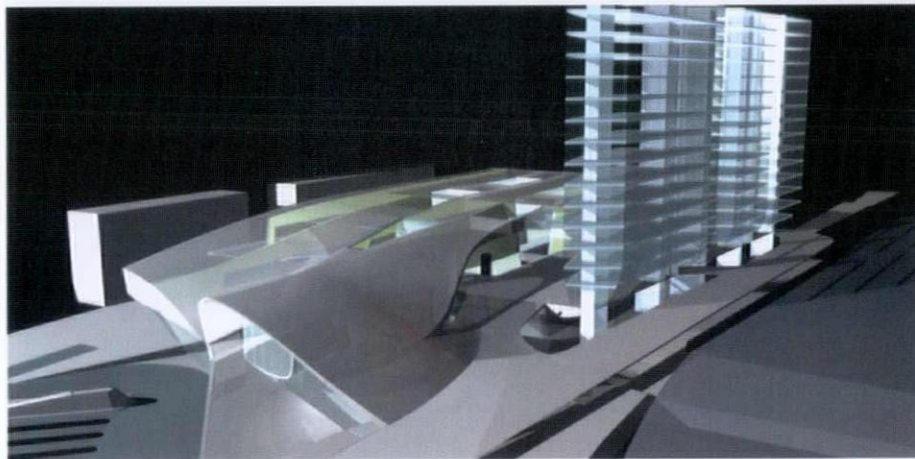
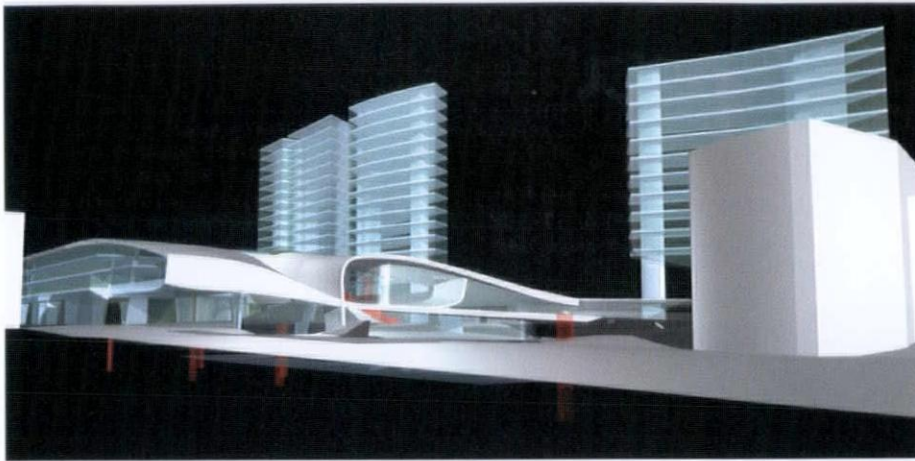
Street level (±0)



Office level (+6.5)

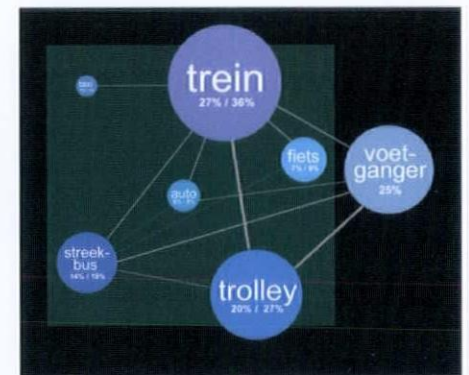
つい最近事務所の名前を「ファン・ベルケル&ボス」から「UNスタジオ」に改名したベン・ファン・ベルケルのキャリアは10年の間に流れ星のような上昇を記した。ファン・ベルケルは80年代の終わり、アムステルダムに事務所を設立するためにAAスクールでの教育を終えてロンドンから帰国した。彼は、インテリアやオフィスビル、変電所などの数多くの小さなコミッションを実現した後、ロッテルダムのエラスムス橋のプロジェクトで建築家として大躍進を遂げた。彼の仕事の進め方もデザイン・ヴォキャブラリーもオランダで一般的なものとは異なっている。デコンストラクティビズム的な彼の建築は、人やものの流れが視覚的、触覚的、空間的印象を生み出す媒体であるという考えに基づいている。ファン・ベルケルは極めて洗練されたセンスの持ち主である。大きなスケールのプロジェクトであっても、ほとんどの彼の作品は非常にデリケートに詳細までデザインされている。彼のデザインの背後にある重要な推進力は彼の世界的な建築観であり、ファン・ベルケルはカロリン・ボスと共に数多くの出版活動を通じてそれを表明してきた。(H.イブリング)

The career of Ben van Berkel, whose practice Van Berkel&Bos was recently renamed UN studio, has undergone ameteoric rise in the space of ten years. At the end of the 1980s he returned from London, where he studied at the Architectural Association, in order to set up in Amsterdam. After a number of smaller commissions for interiors, a company office building and an electricity transformer, he broke through with his architectural design for the Erasmus Bridge in Rotterdam. Van Berkel is an architect whose work method and vocabulary deviate from what is customary in the Netherlands. His architecture, which leans towards Deconstructivism, is based on concepts in which the movement of flowing forms is a means of producing visual, tactile, and spatial impressions. Van Berkel has a strong sense of refinement. His buildings are often extremely delicately detailed, even those that are large in scale. An important force behind his design practice is his architectural world-view, which he has set out together with Caroline Bos in numerous publications. (H. Ibelings)

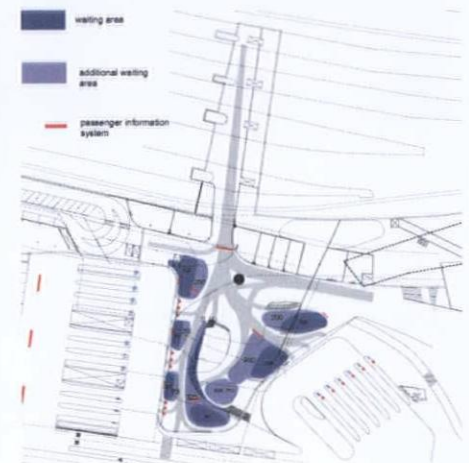


アーネム市議会のコミッションにより、ベン・ファン・ベルケルは、アーネム駅周辺の再開発を計画した。ここではバスターミナル、駅が組み合わせられ、統合された公共交通のエリアが提案された。屋外から遮断された中庭的広場からは列車、タクシー、バス、自転車、駐車場、事務所、市の中心に直接アクセスすることができる。ここでは交通システムをほとんど交差させずに、すべての交通システムにアプローチできるように計画されている。このような場においては空間のオリエンテーションがはっきりすることが重要である。そこで駅やオフィスの入り口など重要な場所に対しては、光を透過させることによって方角を強調している。(H.イプリング)

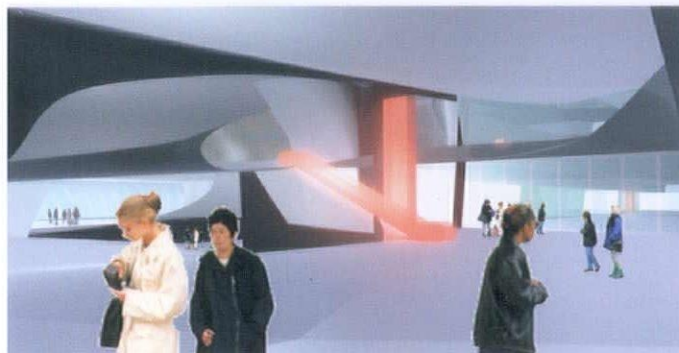
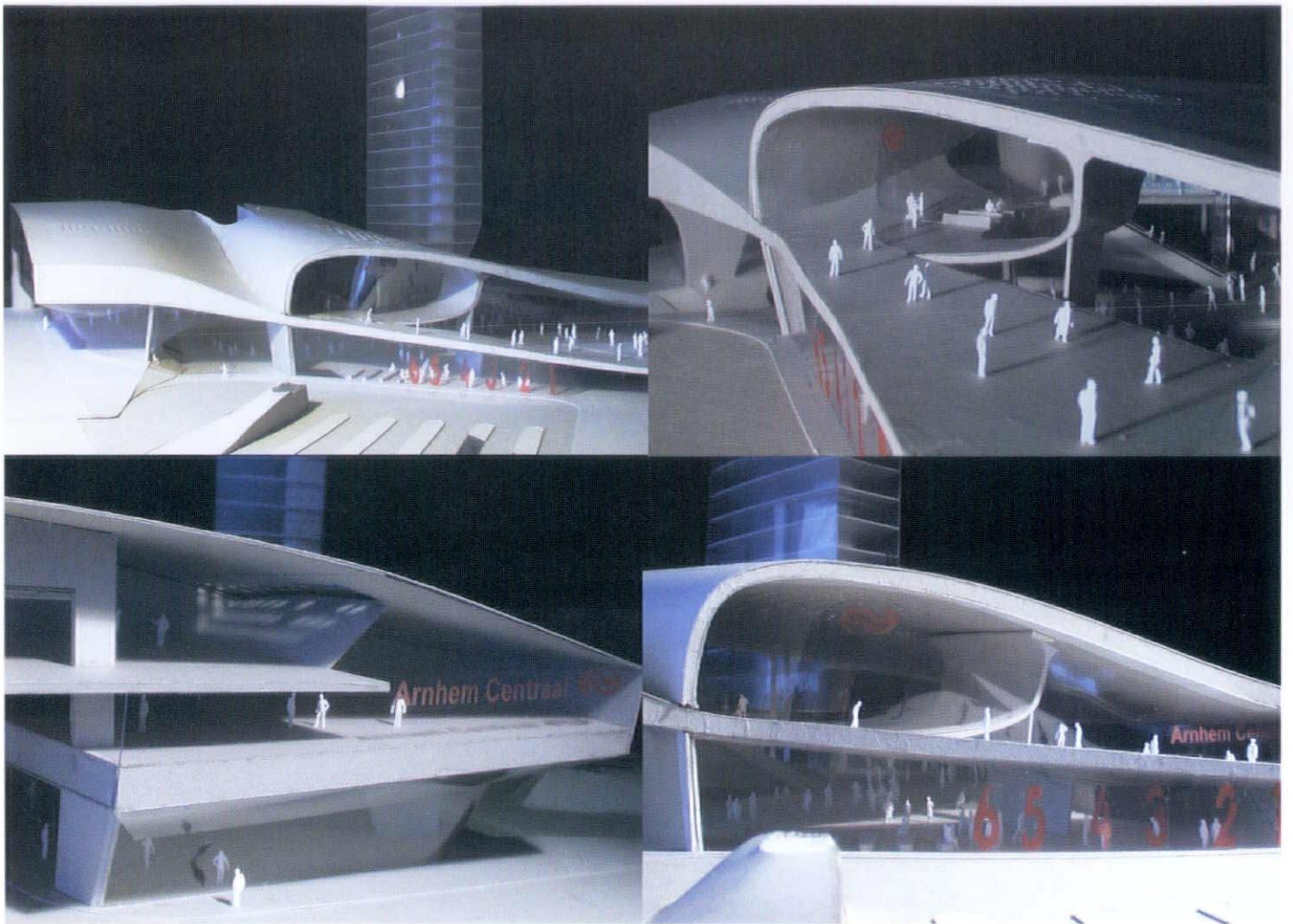
用途：都市計画（交通機関乗換口、バス・ターミナル、トンネル、駐車場）
 共同設計：Over Arup & Partners, London / C. Balmoud
 敷地面積：37,000m²
 延床面積：55,000m²／オフィス、7,000m²／駅、8,000m²／商業施設、レストラン+ホテル+カフェ／25,000m²

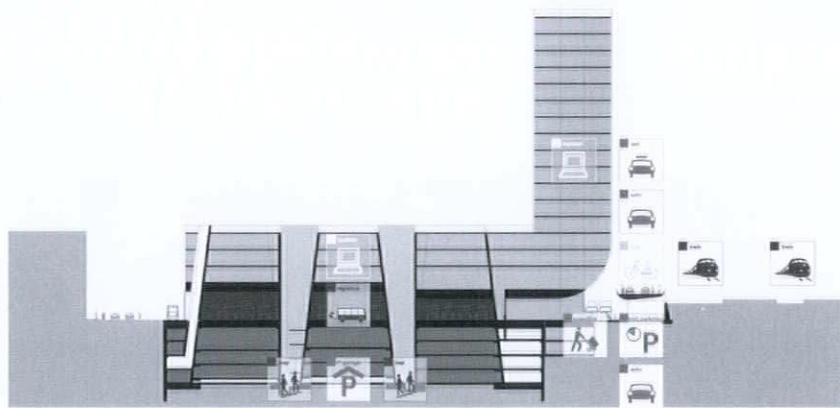
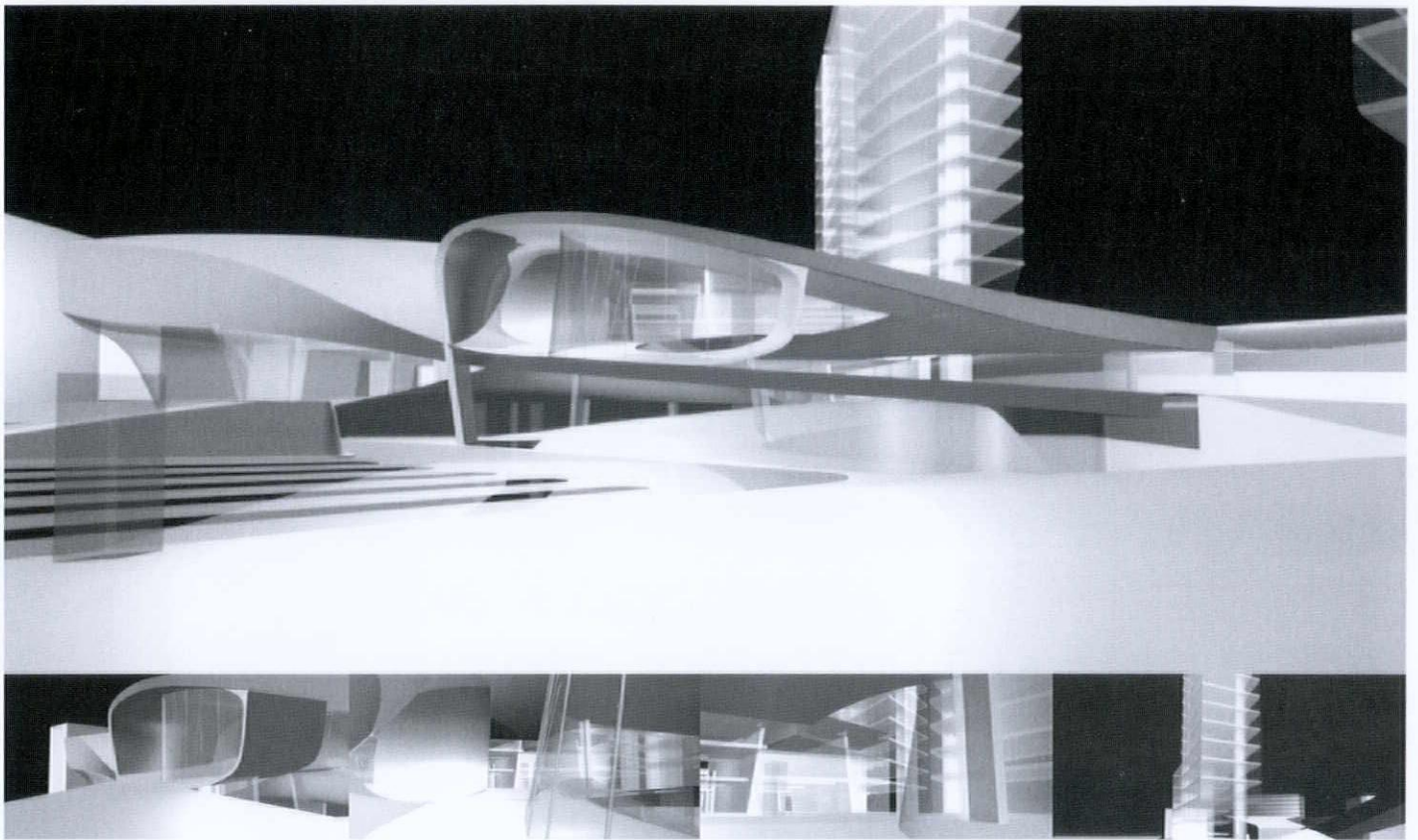


公共交通機関のネットワーク

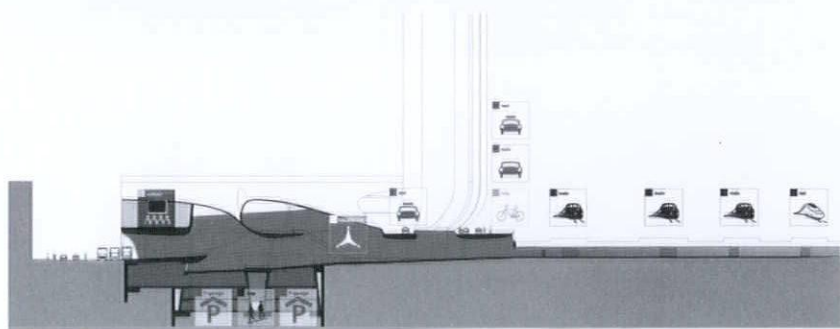


旅客の待ち合いエリア





断面图



断面图

ヴィール・アレツ

Wiel Arets

KNSM島のアパートメント・タワー

Apartment Tower KNSM-Island

アムステルダム_1996年
Amsterdam_1996

profile

ヴィール・アレツ | Wiel Arets

1995年オランダ、ヘーレン生まれ。1983年アイトホーフェン工科大学卒業。1984年ヴィール・アレツ・アーキテクト&アソシエイツ設立。1988年から94年にかけて、AAスクール、コロンビア大学、ベルラーヘ・インスティテュート、クーパー・ユニオン、デンマーク王立芸術アカデミーなどで教鞭をとる

この21階建ての集合住宅は4つの塔が組み合わさってできており、各階に5つの住戸がある。タワーのファサードはゴムの鋳型を使って作られた、自然石のような印象を与える黒いコンクリートのスキンによってできている。寂れた港湾施設が活気ある住宅地として生まれ変わった東部港湾地区にあるKNSM島の中でも最も高い建物である。(H.イブリング)

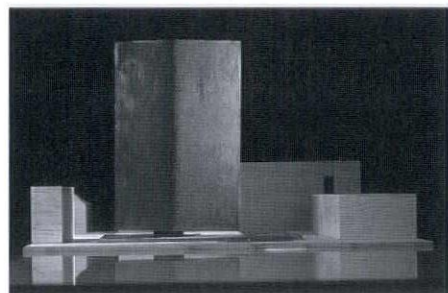
用途：集合住宅（100住戸）

構造：RC造

規模：20階

敷地面積：2,100m²

建築面積：650m²

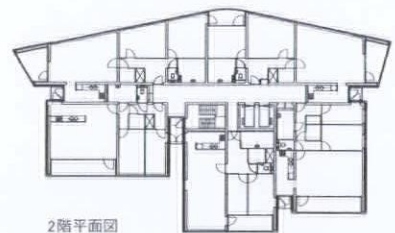
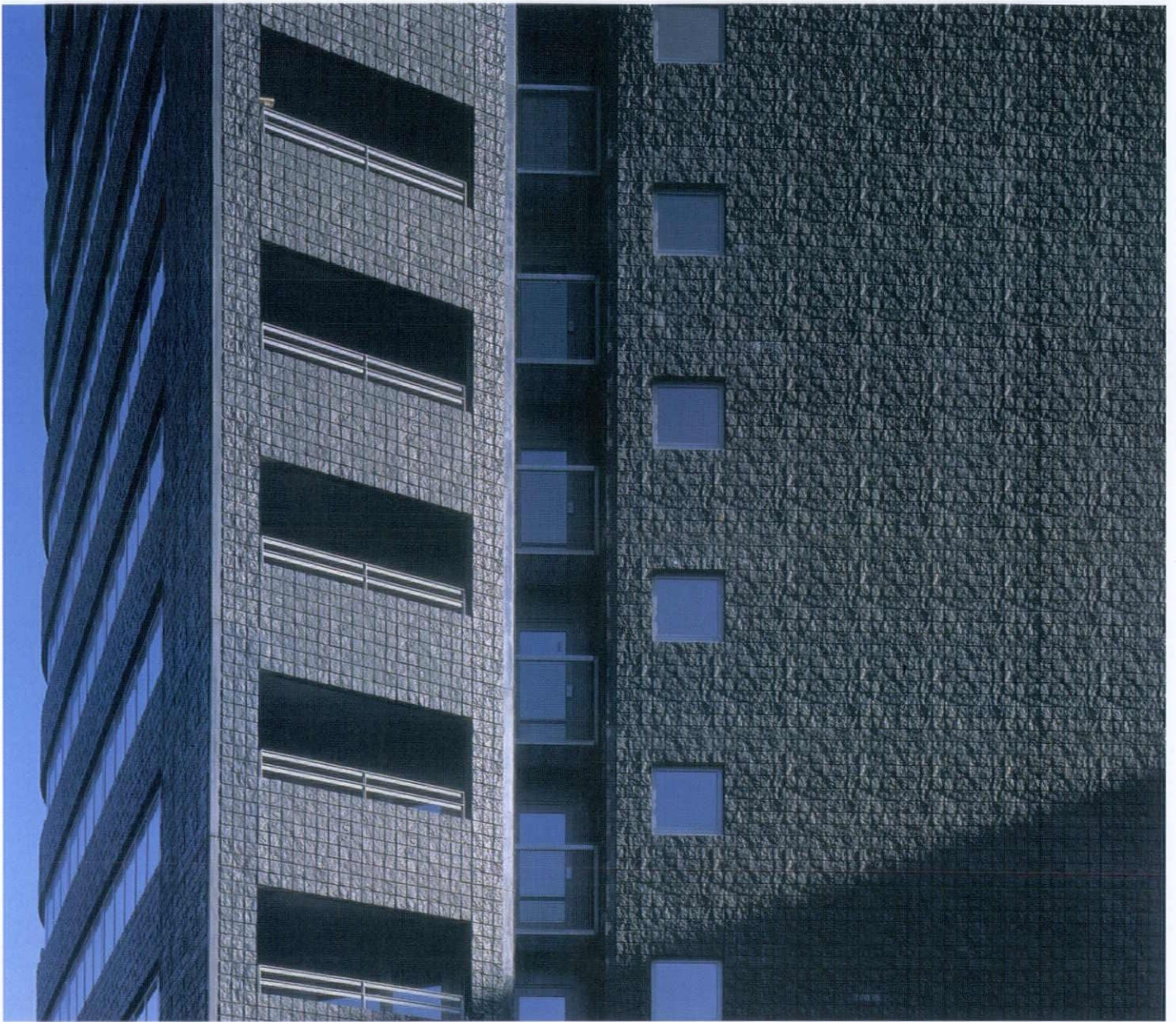


ヴィール・アレツの建築は、とどまることのない抽象的なミニマリズムの研究と表現することができるだろう。それはミース・ファン・デル・ローエから安藤忠雄に至るミニマリズム建築の伝統にそのルーツを見ることができる。近年、この抽象性は建築界においてファッションになっているが、アレツはかなり早い時期からこの抽象性を探求してきたのだ。80年代中盤以来、いくつかの小さなプロジェクトを完成した後、90年代初頭に始めての主要な建築を実現した。マーストレヒトのアートアカデミーがそれである。この建物は歴史的市街区に適応しながら、同時に異質な存在である。アレツ自身ガラスブロックとコンクリートでできたこの建物をウィルスに例えている。つまり、都市空間を貫き、その内部に場所を獲得していく、異質な身体というわけだ。アレツがマーストレヒトで達成した透明性、半透明性は別の形でガラスでできたカウクとボックスルの警察署、ブレダのオフィスビルで繰り返されている。アレツは、このはかない軽快さを常に目指しているわけではない。アムステルダムに実現したマッスなアパートメント・タワーのように存在感のある、ミニマルな抽象性も達成している。(H.イブリング)

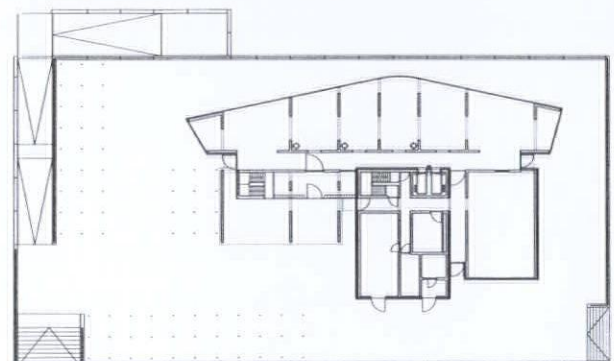
The work of Wiel Arets can be described as a continuing search for an abstract minimalism, which, paradoxically enough, is often rather complex. His architecture is rooted in the minimalist tradition that extends from Ludwig Mies van der Rohe to Tadao Ando. In recent years this abstraction has been very much in vogue, but Arets was exploring this minimalism much earlier. After completing mostly small projects from the mid-1980s onwards, he realized his first major building in the early 1990s, the Academy of Fine Arts in Maastricht. The building is adjusted to its site in the historical city, but at the same time is foreign to it. Arets himself compares this building of glass block and concrete to a virus, a foreign body that has penetrated the urban fabric and claimed a place there.

The play of translucency and transparency that Arets achieves in Maastricht recurs in another form in the glass police stations in Cuyk and Boxtel, and in a company office building in Breda.

This ephemeral lightness is not an aim in itself; he also achieves a minimal abstraction in some buildings that appear monolithic, such as the massive apartment building in Amsterdam clad in black basalt. (H. Ibelings)



2階平面図



1階平面図 S=1:800

ボクステルの警察署

Police Station Boxtel

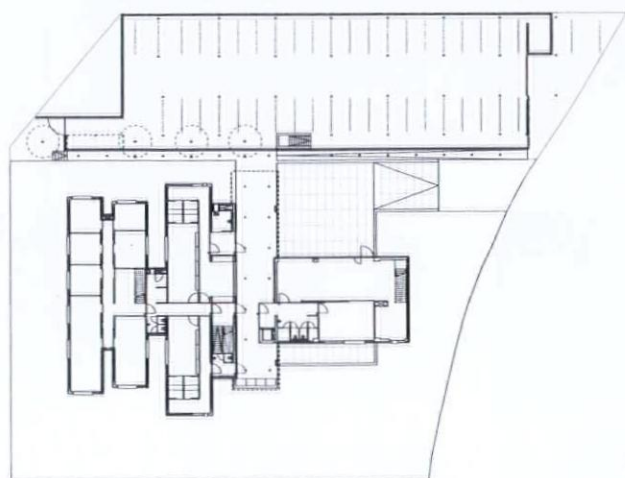
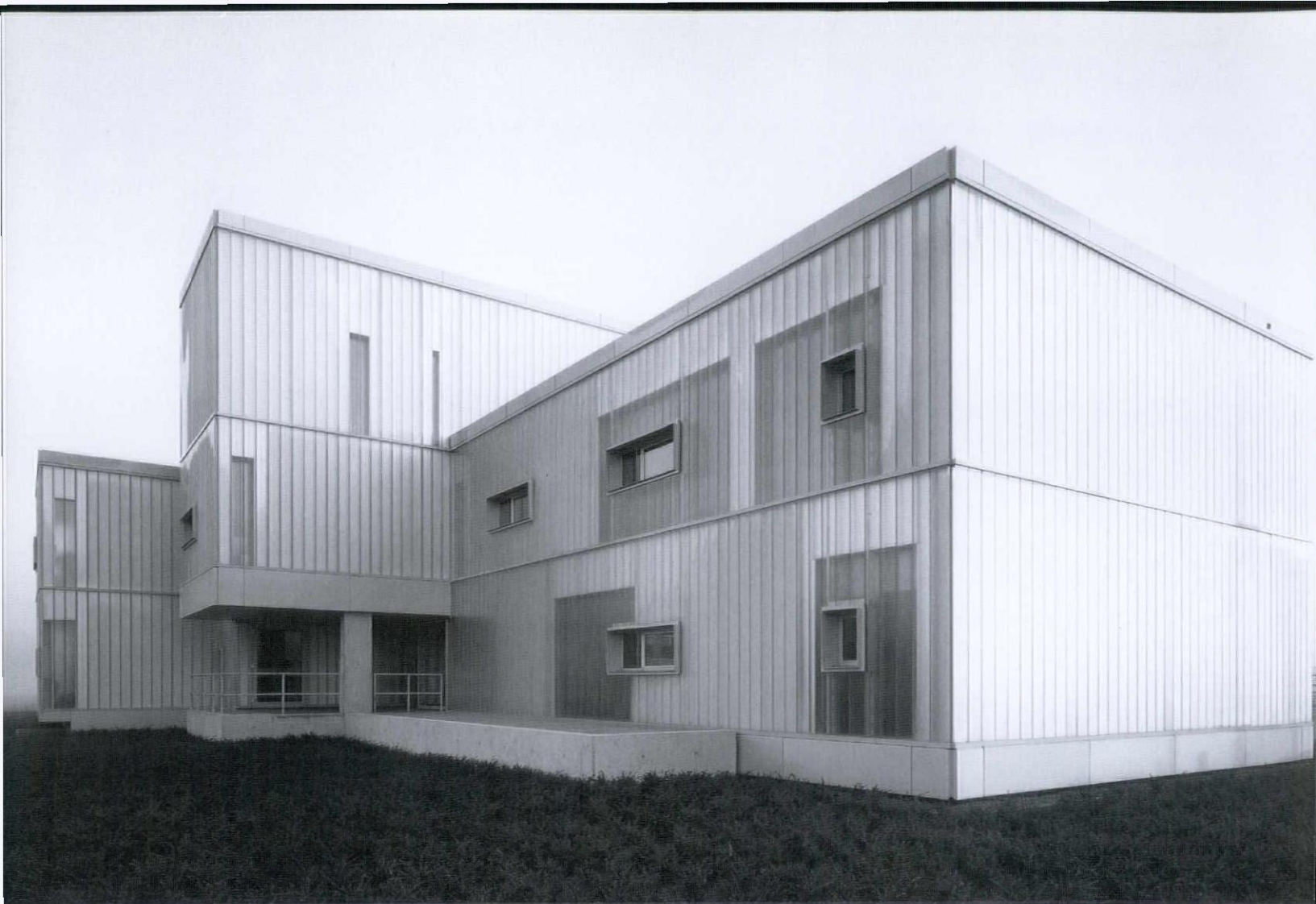
ボクステル_1997年

Boxtel_1997

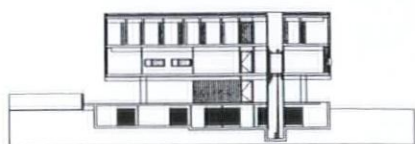


アレツは、ボクステルとカウクにふたつの似通った警察署を設計し、実現している。双方とも同じようなミニマリストックなスタイルで機能も同一だが、コンテキストの違いによって極めて対照的な都市的解法を示している。ファサード全面を覆っているガラスは一部半透明あるいは透明だが、それ以外の部分は不透明である。アレツにとってガラスという材料は、今日警察が達成しようとしている、「社会に開かれた警察」を象徴しているのだ。不透明ガラスが使用されている部分はプライバシーやセキュリティという観点から外部に開くことのできないアクティビティ空間であることを示している。(H. イブリング)

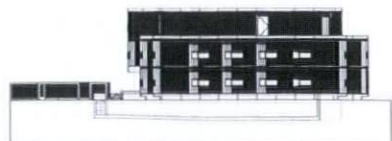
用途：警察署
構造：アルミ造
規模：地上3階、地下1階
敷地面積：8,070m²
建築面積：3,670m²



配置図 S=1:900

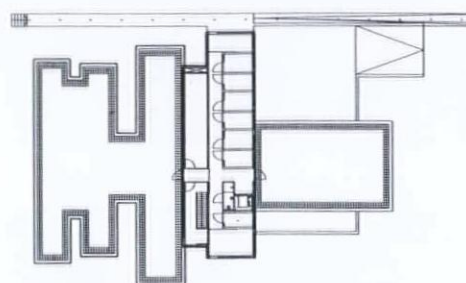


断面図 S=1:900

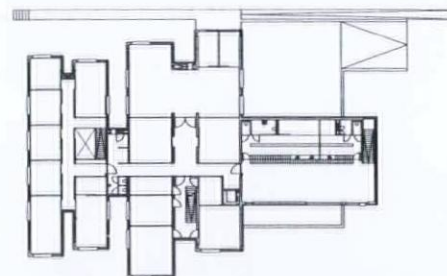


北立面図 S=1:900

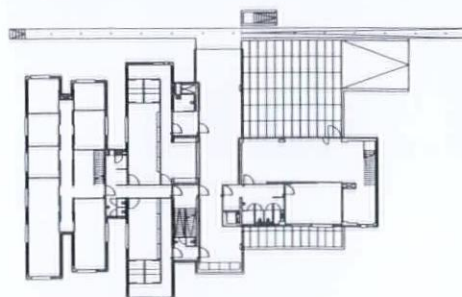
SD9902
60



3階平面図



2階平面図



1階平面図 S=1:900

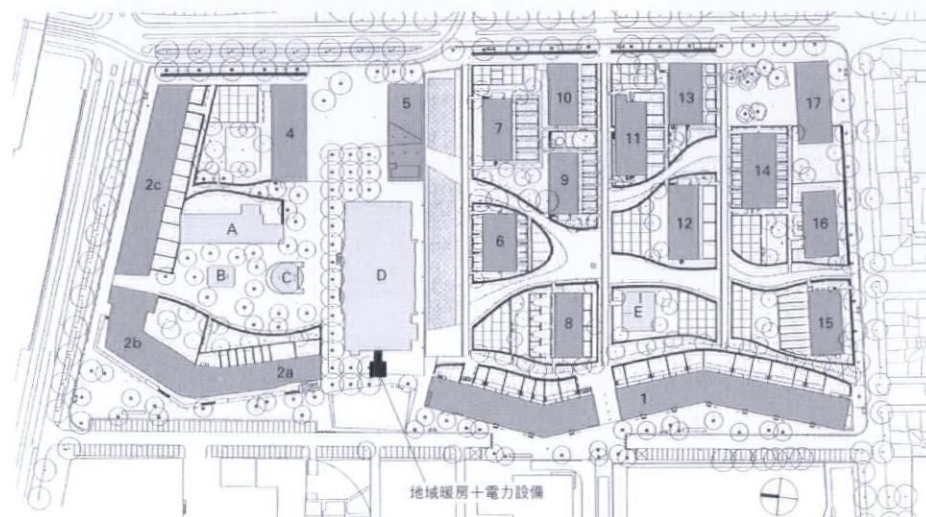
ケース・クリスティアーンズ

Kees Christiaanse

都市計画+集合住宅・市営水道局跡(GWL)

Residential community on the former
Municipal Drinking Water (GWL)

アムステルダム_1998年
Amsterdam_1998



既存の建物

- A: 倉庫
- B: 空調室
- C: 水道塔
- D: ポンプ機械室
- E: エントランス棟

用途: 住宅

構造: RC造

規模: 低層棟/4~5階、高層棟/10階

敷地面積: 60,000m²

住戸数: 600戸

新しい集合住宅

- 1: 設計=DKV Architecten
- 2a/b, 8, 15: 設計=Neutelings Riedijk Architecten bv
- 2c, 11, 13: 設計=Kees Christiaanse Architects & Planners
- 4, 5, 7, 9, 10, 12: 設計=Meyer & Van Schooten Architecten bv
- 6, 14, 16, 17: 設計=Atelier Zeinstra, van Pol

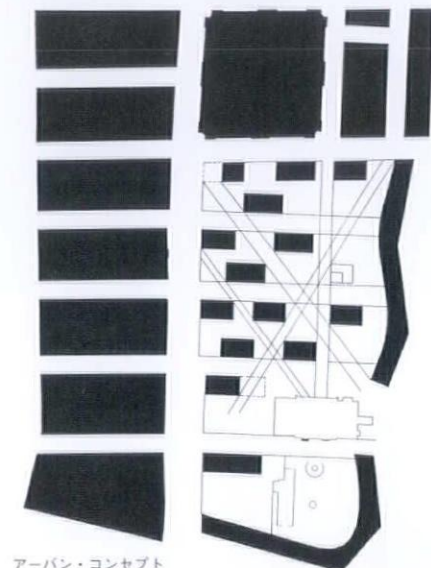


長い間OMAのパートナーを務めた後、ケース・クリスティアーンズは、自分の事務所を設立した。彼のプロジェクトのコンセプトは、明らかに彼がOMAに在籍していた時に彼自身がその展開に貢献したコンセプトを練り直したと思われるものが多い。彼にとって都市計画とは、多くの場合、大きなスケールの統一性を創造することである。このような都市的スケールに対する彼の関心は、建築作品においても明らかであり、時として建築は都市的スケールに従属する存在である。クリスティアーンズの建築は、ロッテルダムのコップ・ファン・ザウアの小学校の煉瓦でできた重々しい外観に表現されているように、妥協を許さないといった性質を備えている。これは市営水道局跡エリアの都市計画でも同じことが言え、その際クリスティアーンズは、この敷地に集合住宅を設計した建築家たちに、すべて同じ種類の煉瓦を使うことを要求した。(H.イブリング)

profile

ケース・クリスティアーンズ | Kees Christiaanse

1953年アムステルダム生まれ。デルフト工科大学にて建築を学ぶ。1980-89年OMAでパートナー、業務担当として勤務。1989年ロッテルダムに建築と都市デザインの事務所を設立。1990年ドイツのケルンにも事務所を設立。1993-95年オランダ政府住宅・建築局の建築・建設施設課の業務担当。1996年からベルリン工科大学建築都市計画教授



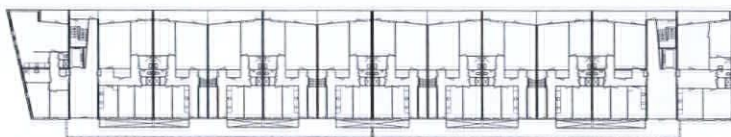
アーバン・コンセプト

近年まで水道局のあった場所に新しく住宅地が計画された。クリスティアーンズは都市計画を担当し、一部建築設計も行った。この他DKV、ノイトリング・リーダイク、メーヤー&ファン・スコーテン、リスベス・ファン・デル・ボルが建築設計を行っている。これらの集合住宅の間の、車が進入できないエリアはWEST8がランドスケープをデザインした。ポンプ棟や水道塔など水道局時代の特徴ある建物のいくつかは残され、それ以外の敷地に新しい建物が建てられた。ふたつの高層集合住宅が敷地の境界に建てられ、交通量の多い道路から敷地を保護している。敷地の近隣道路の延長線上にある集合住宅の3階、もしくは4階には屋内共有廊下と特別の間取りの住宅が計画された。その他メゾネットどころか、4階にわたる住宅、通常のアパートだが、オランダでは珍しく玄関は1階にある住宅など特徴ある住宅もある。外装は1種類だけの煉瓦が使われているが、この一種類の煉瓦によってクリスティアーンズは視覚的統一感を演出している。(H.イブリング)

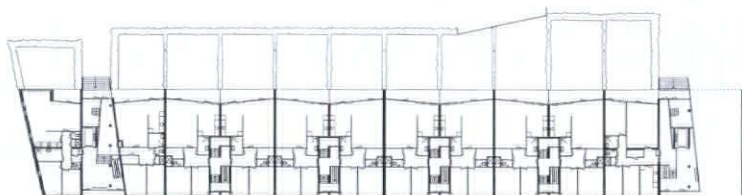
After having been a partner at OMA for a number of years, Kees Christiaanse established his own office. His projects display an unmistakable reworking of concepts that he himself helped to develop during his time at OMA. He is active in the fields of architecture and urban planning, which for him is often the creation of unity on a larger scale. This concern for the urban dimension is apparent in his buildings where the architecture is sometimes subordinate to the urban dimension. Christiaanse's architecture often has an uncompromising quality, as illustrated by the bulky appearance of the brick school built on the Kop van Zuid in Rotterdam. The same is true of the urban plan for the GWL Area, where he required that all buildings in this neighborhood be built using one type of brick. (H. Ibelings)



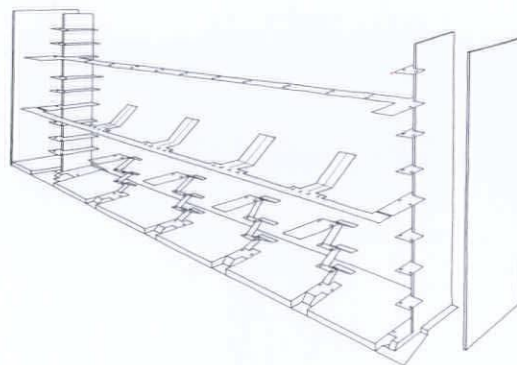
8階平面図



5階平面図



1階平面図 S=1:800



都市計画・オフィス・パーク「バイト・シティ」

Plan Description "City of Bits" Amstel III_Plot 206a.

アムステルダム 1998年

Amsterdam_1998



アムステルダム東南地区のビジネスパークのプロジェクトにおいて、クリスティアンスは9つの事務所ビルのための都市と建築デザインのコンセプトと前提条件を提案した。ここでは情報テクノロジー関連企業のためのオフィスを想定している。立方体のヴォリュームは接続されたり分断されることによって、3次元の迷路を形成していることがコンセプトからは明らかである。結果として生じるブロックの形態はひとつのマッスと捉えることもできるし、同時にひとつ一つを独立した建物として捉えることも可能だ。(H,イブリング)

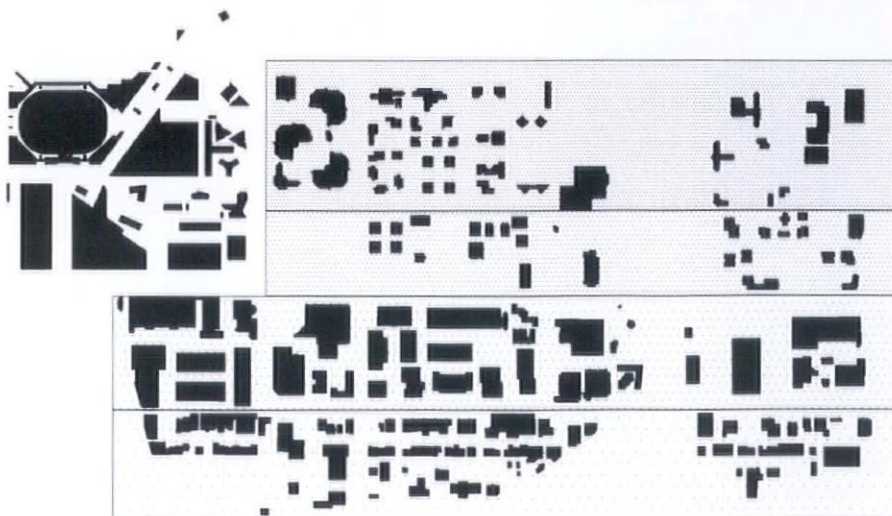
用途：オフィス・パーク

計画建築数：9棟

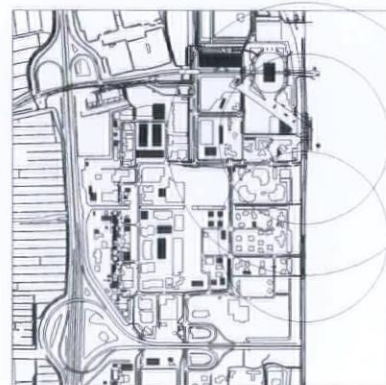
敷地面積：30,679m²

建築面積：20,170m²

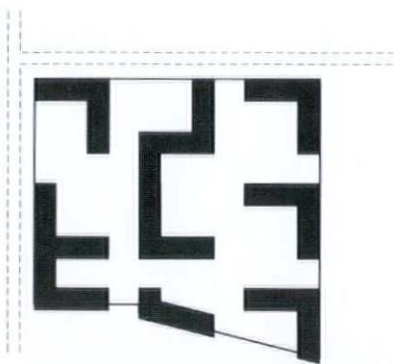
延床面積：オフィス/105,000m²、商業施設/10,000m²、パーキング/30,000m²



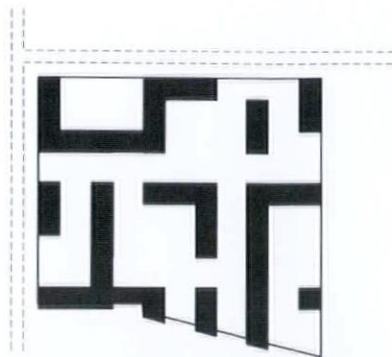
プログラム・ゾーニング



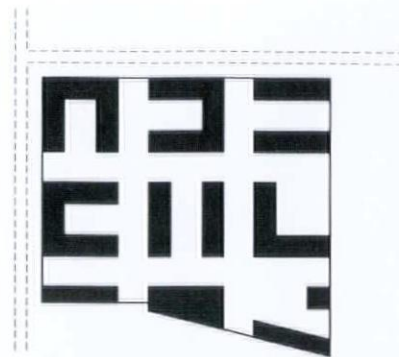
配置図



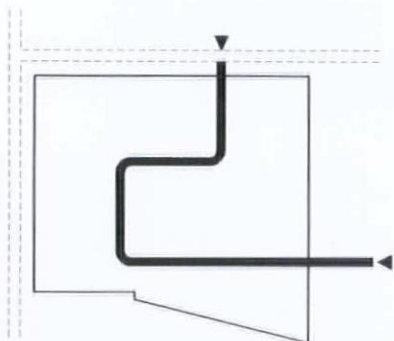
Test Parcelling "Head"



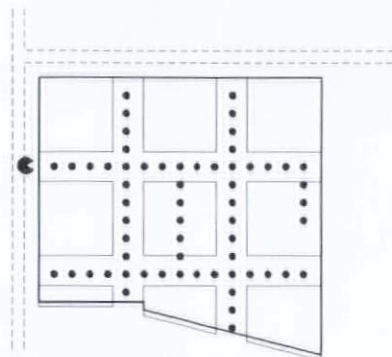
Test Parcelling "Trunk"



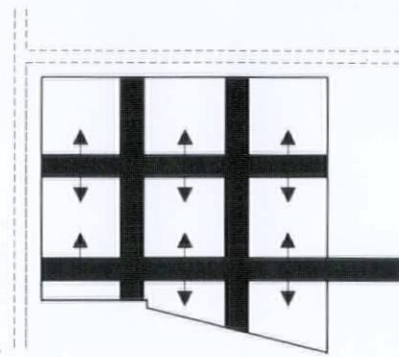
Test Parcelling "Foot"



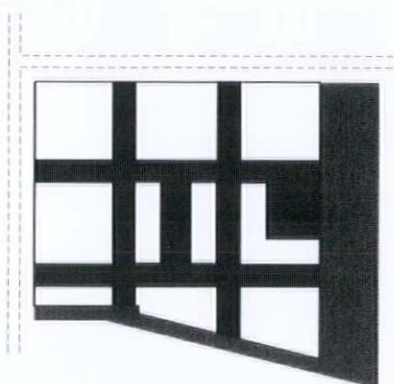
Car Access via "The Loop"



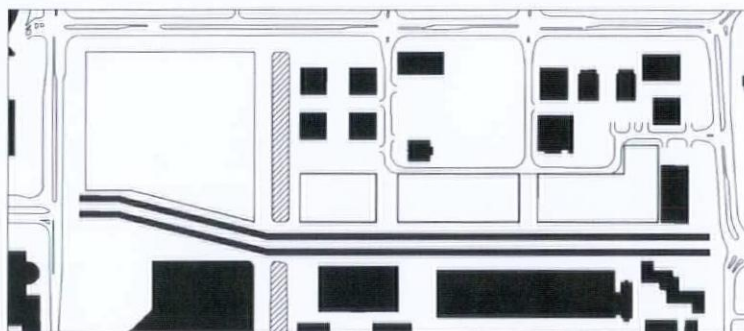
Public Space on the Floating Deck



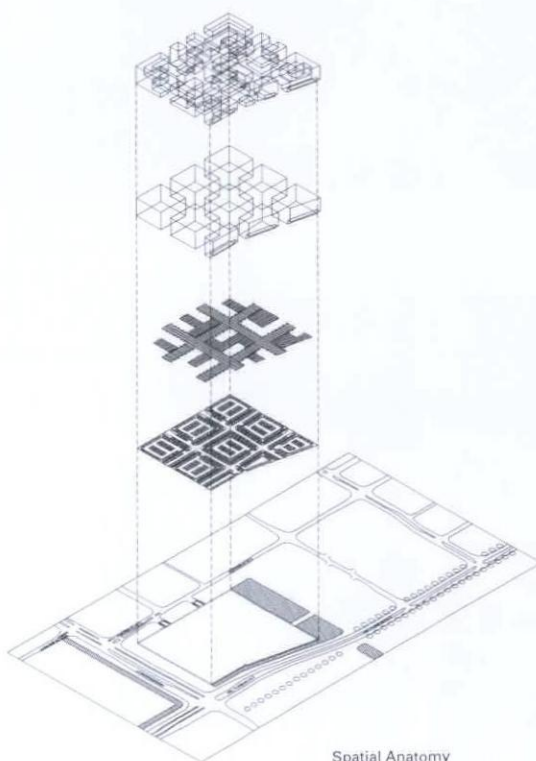
Parking in half sunk basement



Embedding by a Water Front



Context



Spatial Anatomy

フローの空間

オランダのメディアとインフラストラクチャー

ジョン・サッカラ

翻訳=太田佳代子

オランダという国は地理といい、文化といい一見誰の目にも明らかであるかのように見える。人工的に作られた国オランダ——大は景観から小は切手まで、あらゆるものが合理的にデザインされている——だが、自由奔放な面もあって、常軌を逸した行為に走る者もいれば、それに対して皆われ関せずだったり…

…。

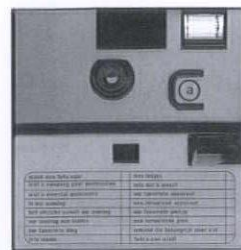
そういう印象はあるだろう。しかし私自身、数ヶ国に暮らした経験から言えば、第一印象というのは過信しない方がいい。ことにオランダの場合はそうだ。一貫性のある文化であるとか、あらゆるモノに秩序があるといった外見にこだわるのは危険である。

これから述べるのは、オランダ文化の中でも特に矛盾の多いエリア、つまりメディアと物質的なインフラストラクチャーの関係についてである。

オランダはひとつの都市

スペインの経済学者マヌエル・カステルスは、ネットワーク経済を「フローの空間」と呼んでいる。言い得て妙なこの表現は、アムステルダム理解にも大いに役立つ。まず、オランダの首都を訪れた人は、あれこれ困惑するはずだ。地理的には、この町は古くて小さい。人口はたったの70万。だから目的地がすぐに見つかると思ってしまう。ところが、U字型に流れる運河が壊れた磁石よろしく、よそ者にうんと遠回りをさせる。これはほんの序の口。都市計画や経済の観点から見れば、アムステルダムはロッテルダムとハーグを含む大都市圏「ランドスタット」の一角に過ぎず、都市計画者たちは過去30年間、オランダ全体をひとつの大都市と見なしてきた。このメガ都市にはスキポールという、ヨーロッパで最も発着便数の多い空港があり、ロッテルダムという世界最大の港がある。こう考

使い捨てカメラ「Cultural Probes」。カメラの裏側には、使い方の指示がプリントされている。©Presence



えると、ふつう観光客がオランダという言葉で思い浮かべる「歴史都市アムステルダム」は、ウィーンやベルリンの古い町並みみたいなものだ——古風で趣きはあがるが、さして重要ではない。

オランダの旧市街があまり重要でなくなった理由は、商取引パターンの変化、業界ごとの浮き沈みに加え、技術革新が移動と通信に大きな変化をもたらしたことによる。たとえばスキポール空港。ここは（一応は）その存在目的である都市そのものより、多くの点で進んでいる。空港ターミナルというのは地球上これほどメディアだらけの場所はなく、しかも何時間もの飛行で疲れ果て、ボーッとした何万人もの人間が常時ひとつの移動システムから別の移動システムへと行き来するので、複雑を極めた空間となる。だから使い勝手のいい飛行場を作るのは至難の業だが、スキポールはそれを難なくこなしている。最近、エ

"The space of flows : Media and Infrastructure in The Netherlands"

John Thackara

I always feel uneasy when I am asked to explain Dutch culture and media to visitors - or, as now, to the readers of foreign magazines. Physically, and culturally, everything in Holland seems to be laid out openly for all to see - 'man-made Holland' in which everything from the landscape to the postage stamps seems to have been designed in a rational way. Here too is *laissez faire* Holland - where outrageous behaviour is tolerated and nobody even closes their curtains....

Well, maybe. But if I have learned one thing from living in several different countries it is never to trust first impressions. This is certainly true of The Netherlands. The appearance of cultural conformity and physical order here can be highly misleading.

In the following words I explore one particular field where contradictions in Dutch culture abound; the relationship between media and physical infrastructure.

Holland as a city

The Spanish economist Manuel Castells talks about the networked economy as a "space of flows". His brilliant metaphor certainly helps us understand Amsterdam. The Dutch capital city confronts the visitor with different levels of

perceptual confusion. Physically, it is old and small, with only 700,000 inhabitants - so you would think it would be easy to find your way around. But Amsterdam's horse-shoe shaped canals act like faulty compasses, and lead strangers in long detours. But that is only the start. In planning and economic terms, Amsterdam is only one small part of a larger city - The Randstad - which encompasses Rotterdam and The Hague. For 30 years, Dutch planners have acted on the basis that Holland is one big city. This megacity has its own airport - Schiphol, one of Europe's busiest - and its own port, Rotterdam, which is the world's busiest. In this context the 'old Amsterdam' that most tourists associate with The Netherlands is rather like the old quarter of Vienna or Berlin: quaint, but insignificant.

The relative unimportance of the old city centres in Holland is the result of changing patterns of trade, the rise and fall of different economic interests, and the impact of new technologies on mobility and communications. Schiphol Airport, for example, is in many ways more sophisticated than the city it allegedly 'serves'. As with all airport terminals, it is one of the most media-saturated places on earth - made more complex by the presence of tens of

thousands of people - tired, stressed, and befuddled by hours in the air, - moving constantly from one transport system to another. Making an airport easy-to-use for passengers is an enormous challenge which Schiphol masters with ease. The quality of Dutch transport infrastructures is one reason The Economist magazine said recently that the Netherlands would replace Hong Kong as the world's most attractive business location by the year 2002.

From main port to brain port

Dutch people take it for granted they will redesign the landscape - and even nature itself. The whole country is a never-ending design project. Continuous and heavy investment in transport and logistics infrastructure is part of an economic strategy nicknamed 'Holland Main Port'. The idea is to make the entire country a transport and logistics hub for Europe. At Schiphol alone, hundreds of thousands of square metres of new buildings are being developed to support the booming - some say out-of-control - air-freight business. But Schiphol is only one element of an immense transformation. All over the country, enormous warehouses and freight interchanges

コノミスト誌はこう予測した——「2002年までにオランダは香港を抜いて世界で最も人気の高いビジネス拠点となるだろう」。その理由のひとつはこうした高水準の輸送インフラを持つことによる。

メインポートからブレインポートへ

オランダ人は、自らの手で景観を変えるのは当たり前のことだと思っている。いや、自然さえ変えられると思っている。国全体がネバー・エンディング・プロジェクトなのだ。輸送供給インフラに絶えず巨額の投資を行なっているが、それは「メインポート・オランダ」と俗に呼ばれる経済戦略の一環であり、国全体をヨーロッパの輸送供給のハブにするという狙いがある。スキポール空港ひとつを取っても、何十万m²もの敷地に新しい建築を計画し、好景気に沸く空輸産業（支離滅裂という説もあるが）をサポートしようとしている。むしろ、これは膨大な変化のごく一部に過ぎない。鉄道、道路、水路が交差する地点にはことごとく、巨大な倉庫や配送センターの建設が進められている。

この大規模な投資政策は公にはあまり取り上げられないが、明らかにこれまでの商業国からの脱却を示すものだ。かつてのオランダは、かの「黄金時代」を含め、資本投資にはさほど力を入れていなかった。植民地から貨物を運んでくる船も高価ではあったが、貨物が生む利益に比べれば微々たるものだった。1回の航海で持ち帰る黒胡椒の価値は、船自

体の値段と変わらなかったのである。

それに対して今日のオランダは巨額の投資を必要とする固定インフラの建設に力を注ぎ、流通のプロセスをサポートするという、商業国の伝統を打ち破るスタンスに方向転換している。

この「メインポート」戦略は、環境保護主義者たちにとっては深刻な問題だ。彼らにとって移動はエコロジーを破壊するものでしかない。また、いわゆる「知識経済」の推進者たちも、ソフトウェアよりハードウェアに投資の比重を置く政策を厳しく批判している。物質的インフラの建設ブームに批判的な人々は、「ブレインポート・オランダ」政策への転換を訴える。道路・港湾・滑走路ではなく、メディア・情報・通信に投資せよ、と言うのである。

一方、政府の政策立案者たちも、ある問題に直面している。オランダは30年で世界一の物質的インフラ開発国となった。運河から空港へ。だが、「知識インフラ」への投資は失敗続きだ。大臣たちにはどのプロジェクトが有望なのか判断がつかない。1998年には、政府はガス業界に対し、600億ギルダー（300億米ドル）の「不意打ち税」を1回限り徴収すると発表した。そうやって「特別インフラ事業」の資金をざっくり捻出しようというのである。その後、各省からこの資金の使い道について提案を募った結果、図書館建設や学校のオンライン化といった情報ベースの事業には全体の5%以下を、残りの約95%はスキ

ポール空港増築や南北間鉄道の建設といった、ハードインフラの拡張につき込むことが決定した。

サイバー都市アムステルダム

皮肉なことに、政府が情報経済を掴みきれなくても、小規模のビジネスはそうでもない。アムステルダムに一気に現われた1,300社ものインターネットないしマルチメディア企業の活躍ぶりは目覚ましく、CNNも最近この町を「ヨーロッパのサイバー都市」と呼んだ。すでに数多くのグローバル・プレーヤーたちがアムステルダムをヨーロッパの活動拠点にしており、最近ではシスコ・システムズ社やフォレスター・リサーチ社がやって来た。

多国籍企業がこうして続々と到来する反面、オランダ国内のインターネット関連制作会社の大半は、あえて小規模かつインディペンデントの状態を保っている。メディアは単なるビジネスではなく、文化活動でもあるという考え方が支配的なのである。ここがアメリカと異なる点だ。アメリカでは、発展性のあるインターネット関連会社のほとんどが過去18ヶ月の間に通信、情報技術、マーケティングのいずれかの企業に買収ないし合併された。当のオランダ政府にはマルチメディア・セクターの存在も、その文化的・経済的価値もよく飲み込めていないが、オランダのメディア文化が「情報社会」事業に多大な貢献を果たしているのは確かである。技術革新とともに生まれたオランダのアート・文化活動は本質

are being built at the intersection between rail, road and water routes.

This enormous but relatively unpublicised investment programme is a break with the country's heritage as a trading nation. In the past, for example in the 'Golden Age', Holland invested lightly in terms of capital investment. The ships which carried valuable cargo back from the colonies were expensive - but far less so than the goods they carried. One shipload of black pepper was worth as much as the ship itself.

Today, in contrast, The Netherlands is investing in a fixed and capital intensive infrastructure to support the *process* of trade which marks a significant break with the country's mercantile tradition.

The 'mainport Holland' strategy is highly controversial with environmentalists, for whom the eco impact of mobility is always damaging. But promoters of the so-called 'knowledge economy' are also becoming very critical of a policy based on higher levels of investment in hardware than in software. Critics of the physical infrastructure boom argue for an alternative policy of 'Holland as brainport' - not Holland as main port. The focus of investment should be on media, information and communication, they say - not on roads, ports

and runways.

But government policy makers face a problem. Over 30 years, the Dutch state has become a world leader in the development of physical infrastructure - from dykes to airports. But attempts to spend money on the knowledge infrastructure* meet with failure. Ministers find it hard to identify qualifying projects. In 1998, for example, the government announced a one-off 'windfall tax' of f60 billion (\$30 billion) on the country's gas industry - a vast pot of money made available for 'special infrastructure projects'. After request for suggestions from different ministries of how to spend this money - less than five per cent was finally allocated to information-based projects such as libraries, or connectivity programmes in schools. The rest - some 95 per cent - was allocated to further expansion of hard infrastructure such as extensions to Schiphol and a new North-South railway line.

Cyber-city Amsterdam

The irony is that although government policy finds it hard to grapple with the information economy, small businesses do not. So high is the level of activity among 1,300 internet and multimedia companies that have sprung up in

Amsterdam that CNN recently described it as "Europe's cyber city". Many global players are making Amsterdam their European centre of operations: recent arrivals have included Cisco systems and Forester Research.

As the multinationals move in, most Dutch web production companies remain small and determinedly independent. The notion of media as cultural, and not just economic, practice, is pervasive. This sets the Dutch scene apart from the USA, where the most dynamic and innovative web companies have been bought by, or merged with, much larger communications, IT or marketing companies during the past 18 months. Neither the existence nor its cultural and economic significance of the multimedia sector is well understood by Dutch policy makers. Yet Dutch media culture makes a tremendous contribution to the 'information society' project. Dutch artistic and cultural practice emerging in relation to new technologies is, by its very nature, diverse, independent, and interdisciplinary. It comprises both production and research. Its practitioners develop creative ways to use new information and communication technologies. Artists are often advanced users of new technologies; their feedback is proving valuable to developers of hardware and software. And interdisciplinarity,

的に多元的、インディペンデント、異分野横断的である。作品制作においても研究においても、新しい情報通信技術をクリエイティブに応用する方法が開拓されている。アーティストが先端技術の優れた使い手であることは珍らしくなく、彼らのフィードバックがハードウェア、ソフトウェアの開発企業にとっても有益であることが認められ始めている。アートと科学のクロスオーバーが当たり前になっているこの分野では、産業と教育の共通目標である異分野横断はすでに実践されている。アーティスト、デザイナー、ミュージシャン、科学者、プログラマー、ソフトウェア開発者、その他さまざまなジャンル間のコラボレーションは日常茶飯事。さらに、最新技術とその応用・結果に対する新しい考え方も押し進められている。本来、現状批判が仕事であるアーティストは、まさに重要な問いを発してくる。メディア文化においては、アーティスト、デザイナー、フリーの研究者それぞれが、革新的なインターフェイスのデザインやデータベース、ヴァーチャル・リアリティ、グループウェア、その他あらゆる応用技術を常時開発している。しかし何にも増して重要なのは、彼らが情報通信技術に対し、「いったい何に役立つのか？」という問題意識を持っていることだ。

リアルタイム、リアルワールド

ユーザーが設計・制作のプロセスに参加することも、オランダのメディア文化ならではの

重要な側面だ。この国では情報通信技術に関する重要な研究は、企業や学校の外で行なわれている。パブリックなイベントでのフェイス・トゥ・フェイスの交流も大きな原動力となる。オランダのメディア文化は情報通信技術を使って、一部をヴァーチャルにしたパブリック・スペースを作り、そこで社会的交流を活発にし、市内の寂れた地域に生氣を与えていくといった社会貢献も果たしている。

オランダのメディア文化はまた、新しい学習方法も開拓している。メディア文化の活動はミュージアム、科学センター、地域社会の施設など、制度外の学習環境で行なわれることが多い。制度教育（学校や大学）自体を変えるのは容易ではないが、メディア文化が外から有意義なインパクトをもたらすことはできる。新技術の商業的ノルマに対して厳しい姿勢で臨むのがメディア文化の本来の使命だ。社会的・政治的な問いを発するという単純な行為が、技術革新の目的と意味をめぐる議論を豊かなものにするのである。

オランダのメディア文化界は、技術の変化がもたらす社会的・政治的影響に対して批判的な議論を展開している。オランダの現状において特に高い関心が持たれているのは、次のような課題である。

- ・情報社会に向けての議論が商業的なレベルに終始する危険性
- ・ヨーロッパ文化が均質化し、ディズニーランド化する危険性
- ・文化というものが娯楽としてのみ考えられ

ることの危険性

- ・民営化により、パブリックな領域が本質的に変化することを理解する必要がある
- ・民主主義の機能と文化の多様性を守る必要があること
- ・プライバシー、暗号技術、著作権を脅かすものへの対策（これらはみな、文化的かつ法的課題である）

オランダのメディア文化は、「情報社会」にはグローバル・プレーヤーの集中が不可欠、という考え方に待ったをかけている。それよりも、利潤追及型の大企業と並んで、個人や小さなグループが自由に活動できるようなオープンなメディア環境を作ることの方が重要だというのだ。確かにヨーロッパの展望としては、その方が好ましいと言えるだろう。

こうした考え方を端的に表わしているのが「ヴァーチャル・プラットフォーム」である。これは小規模だが力のある8つのデザイン・研究センターが緩やかに結合したもので、政府のマルチメディアおよびインターネット政策に対して助言を行なっている。しかし、巨大な施設やプロジェクト、予算は立ち上げない。

コミュニティの連結性

多くの国と同様、オランダでも情報技術が旅行、教育、娯楽、報道・情報、ヘルスケア、社会交流、物流の各市場を変容させている。社会的コミュニケーションやコミュニティの新しい形態が開拓されていくにつれ、子供の

which is a goal of industry and education, already exists in a community which routinely spans art and science. Co-operation between artists, designers, musicians, scientists, programmers, software developers and many others, is part of its everyday practice. Dutch media culture also fosters new ways of thinking about technology, its applications and its consequences. Artists, who are by nature critical, ask important questions. Artists, designers and independent researchers in media culture regularly develop innovative interface designs, databases, VR technologies, groupware and many other applications. Above all, in relation to ICT, they ask "what is this stuff for?"

Real-time, real-world

The involvement of users in the design and creative process is another specific and important aspect of media culture in The Netherlands. Important research related to ICT takes place in The Netherlands outside of industrial and academic laboratories. Face-to-face contact in public events is an important part of this dynamic. Dutch media culture contributes to the construction and transformation of new partly virtual public spaces, in which ICT is used to enhance social

contact and enliven otherwise dead areas of the city.

Dutch media culture also fosters new ways of learning. A lot of media culture activity takes place in informal learning environments such as museums, science centres and local communities. It will never be easy to change formal education (schools, colleges, universities) - but media culture can have a beneficial impact from the outside. Media culture is, by its nature, critical of purely commercial agendas for new technology. This simple act of asking social and political questions enriches the debate about the purpose and meaning of innovation.

The Dutch media cultural community fosters critical discussions about the social and political consequences of technological change. Particular concerns in the Dutch scene are:

- The danger that the agendas for the Information Society are purely commercial.
- The danger of homogenisation and the Disneyfication of European culture.
- The danger that culture may be understood only in terms of entertainment.
- The need to understand the fundamental transformation of the public domain through privatisation.
- The need to protect democratic control and

cultural diversity.

-The challenges of privacy, cryptography and copyright - which are cultural as much as legal issues.

Dutch media culture contests the idea that the Information Society entails an ever tighter convergence of global players. A better vision, certainly in Europe, is freedom for individuals and small groups to operate in an open media environment alongside the large, commercially oriented companies.

A good example of this thinking exists in the 'Virtual Platform' - a loose association of eight small but dynamic design and research centres that advise the government on its multimedia and internet policy but do not attempt to set up enormous centralised buildings, projects or budgets.

Connected communities

As in many countries, information technology in The Netherlands is transforming markets for travel, education, entertainment, news and information, health care, social interaction, trade. From play and learning in childhood, through new forms of work as adults, to self-help in old-age, a vast and largely untapped market is opening up as new forms of social communication and community are explored.

遊びや学習から、大人の新しい勤労形態、老人のセルフ・ヘルプに至るまで、膨大かつほとんど未開拓の市場が浮上してきた。

いわゆる「インフォーマルなコミュニケーション」を例に考えてみよう。ジョークを言って笑う、からかい合う、どんな1日だったかを尋ね合う、といったインフォーマルなコミュニケーションは日常生活では重要なものなのに、電話会社はほとんどそれを見落とししている。たいていの家族はまた、朝、自動車に相乗りして通勤・通学するとか、放課後、子供をスポーツ活動の場まで送り迎えするとか、夜、宿題を手伝ってやるといったことでひんぱんにコミュニケーションし、時間やモノをシェアしている。年間の総通話時間1,000億分の大半は短距離通話である。つまり、ローカルなコミュニケーションに付加価値を与えるサービスの潜在的市場は巨大だと言える。コミュニティの機能にしっかりと気を配っているオランダのような国は、「コミュニティの連結性」にプラスとなるサービスにはとくに関心が高い。

社会が高齢化するにつれ、「コミュニティの連結性」向けサービスへの需要は急成長している。ヨーロッパの成人の50%以上が50歳を越える日は近い。そうすると、高齢者のニーズに合った製品やサービスが必要となるだけではない。もっと重要なのは、彼ら——じき「我々」——が互いに介護し合えるようなものでなくてはならない、ということだ。高齢者にとっては、ハイテクの介護器具より

もコミュニケーション技術の改良の方が先決だ。ヨーロッパの調査によれば、コミュニケーション技術が優れているほど、高齢者による福祉サービス（こちらの方が高くつく）の利用が少なくなることが分かっている。ただし、「コミュニティの連結性」向けサービスは使いやすくなければならない。

高齢者が簡単に使えるコミュニケーション・インフラやインターフェイスの設計は、「プレゼンス」のようなプロジェクトの主要テーマでもある。

オランダのニューメディア事業は、現実のコミュニティを拠点にするケースが増えている。プレゼンスは新しい通信ないしメディア・サービスのためのシナリオや試験的プロジェクトを開発しているが、計画が実行されれば、人とコミュニティへの理解が深まり、新世代のインタラクション概念が生まれ、その概念を実現するための技術処理が新たに行なわれていくことになるだろう。ここで重要なのは、「市民」は革新の主体であって、対象ではないという点である。シナリオを書き、ストーリーを構成し、それを視覚化するというテクニックを使いながら、新しいアイデアが空想科学ならぬ空想社会の可能性として試されていくのである。

プレゼンスには様々な分野からさまざまな視点をもった研究者が参画し、ユニークなパートナーシップを組んでいる。インタラクティブ・システム技術の開発エンジニア、新しいコンセプトを基本構想に移すインタラクシ

ョンおよびプロダクトの設計者、新しいメディア形態を開発するインタラクティブ・メディアのアーティスト、ユーザーと技術の新しい関係性に視点を切り開く人間科学者や社会科学者たち。

この最先端プロジェクトの狙いは、現在市場に出ているエレクトロニクス製品やパーソナル・コンピュータにみられるインタラクション設計の既成概念を超えることである。オランダではコミュニティの機能を高める新しいサービスの開発が、つねに革新、学習、知識経済をめぐる議論の中心なのである。結局、「革新」とは個人、コミュニティ、市民それぞれの複合的なインタラクションを支えるひとつの社会的プロセスなのだということが、我々は気づき始めた。そうした複合的なインタラクションを後押しすることで、コミュニケーション・デザインの「ソフト」面を前面に出すことができる。そしてそのソフト面が、たえず変化する人とアイデアのフローに直結していることで、ダイナミックなコミュニティが築かれていくのである。

●John Thackara / オランダ・デザイン研究所 所長



「Nonnogochi」。お年寄りのいる家族に、「もっと年配の人を大切に」と非直接的でかつ遊び心を持った方法で刺激する。©Presence

Take the example of so-called 'informal communication' - sharing jokes, teasing each other, asking what kind of day you've had. These are an important part of everyday life but modes of communication largely ignored by TelCos. Most families also do a lot of communicating to organise and schedule shared resources: car pools and school runs in the morning; ferrying kids to sporting events after school; getting in touch for help with homework in the evening. A big proportion of the 100 billion minutes of telephone calls made each year are short-distance - so the market for any service that adds value to local, intra-community communications is potentially vast. This is why a country like The Netherlands, with its deep-rooted care for the way communities operate and flourish, is so interested in these services for 'connected communities'.

The consequences of an ageing population are a good example of where huge demand for 'connected community' services are emerging. More than 50 per cent of European adults will soon be older than 50 - and products and services are needed not just to meet the changing practical needs of older people - but, more importantly, to help 'them' - or soon, us - look after each other. For older people,

technology as a means to better communications are probably more important than high-tech physical aids. Research in Europe has demonstrated that better communications can reduce the use made by older people of (highly expensive) welfare services. But the alternative connected community services must be easy-to-use.

Designing communication infrastructures and interfaces that are easily used by older people is an important focus of projects such as Presence.

A growing proportion of new media projects in The Netherlands are based in and among real communities. In "Presence", scenarios and pilots for new communication and media services are developed. Its activities bring together an understanding of people and communities, the generation of new interaction concepts, and the deployment of novel technological solutions to implement them. The key here is to make citizens the subject, not the object, of innovation. Using such techniques as scenarios, stories and visualisation, new ideas are tried out as 'social fiction', not as science fiction.

Presence involves researchers from many different backgrounds and perspectives in a

unique partnership. They include interactive system and technology developers; interaction and product designers outlining new concepts; interactive media artists developing new media forms; human and social scientists achieving new insight into the relationship between users and technology.

The idea in these leading -edge projects is to move beyond conventional thinking on interaction design found in today's consumer electronic products and personal computers. New services to improve the functioning of communities is moving centre-stage in discussions about innovation, learning, and the knowledge economy in The Netherlands. We are beginning to understand that innovation is a social process that involves complex interactions between individuals, communities, and citizens. Fostering these complex interactions brings 'soft' aspects of communication design to the fore. These 'soft' aspects concern the constantly changing flows of people and ideas that characterise a dynamic community.

●Director, Netherlands Design Institute

オランダ人は会議上手だ。楽しんでいるのではないかと思うくらいだ。ミーティングを前にその日のアイテムがファックスで送られてくる。会議はコーヒーとともに始まり、今日の議題は、と議長が全体を説明して各議題を話し合い始める。要するに、さまざまな利害を代表する参加者がそれぞれの立場を明らかにし、話し合いによって参加者全員がそれなりに満足する結論を導き出す儀式がオランダのミーティング文化だ。議論のための議論をせず、感情論や言い訳は言わず、理路整然とポイントだけを発言する。これがマナーであり、コンセンサスを得る過程でできる限り自分に有利な立場を獲得しようとしながらも、同時に他の参加者の利害も尊重する合理的解決を模索する。絶対的対立を好まず誰もがそれなりにハッピーになれる妥協案をアウトラインの枠組みの中で作り上げる。そして時間通りに、その日の懸案事項をすべて話し合ってミーティングは終わり、その日のうちにはミーティングの要約がファックスで送られてくる。

この話し合い、ネゴシエーション、コンセンサス形成は学校教育から始まって、職場、家庭生活、政治、都市計画などオランダで生きていくかぎり毎日通過する儀式だ。その場合、権威的に上から抑圧するというようなコミュニケーションはタブーで、お互いを尊重しあいながら非常に合理的に接点を探っていく。一言で言えばオランダは複数の組織の関係においても、組織内においても横割の関係を重視し、水平方向のシステム作り、コミュニケーションに長けている。例えば都市開発においては自治体を中心として、都市計画家、民間企業、建築家は、非常に巧みなコンセンサスを形成しながら都市開発を進めていく。この横割のコミュニケーションは対立構造ではなく、ハーモニーを前提としなければ破綻する。それを前提として始めて、横に並んだ組織、あるいは個人のそれぞれの能力を最大限に生かすことができ、縦割りのシステムよりも効率よく、フレキシブルかつ現場に即した決定を実行することができる。

例えばオランダにVROMという省がある。これは訳すると「住宅供給・国土計画・環境省」ということになるのだが、国土開発と環境というまったく相反するベクトルを持った省をあえて近年ひとつの省にまとめた。ひとつの組織にすることによって環境問題と国土開発の矛盾を顕在化させバランスをとろうとする意向は、極めてオランダらしいと言えるだろう。実態的に省庁レベルでは必ずしもスムーズに機能しているとはいえないようだが、国が自ら進んでこのようなイニシアティブを取ることによって州や自治体レベルにおいては、もっと具体的に環境問題と都市開発がひとつのプロジェクトとして計画されるなど、極めて良い影響を与えているということである。(吉良)



keyword | 04

Consensus

合意形成

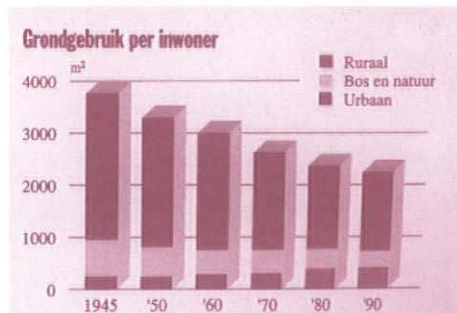
構成・編集=Keyword Group



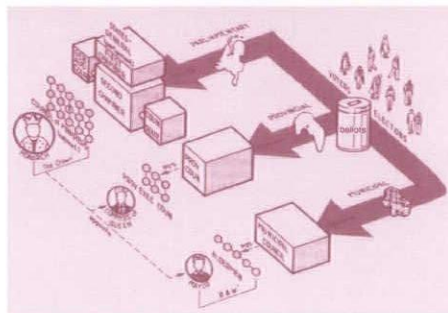
01 | ダッチ・ファミリー



02 | 意見広告板



03 | 高い都市化率



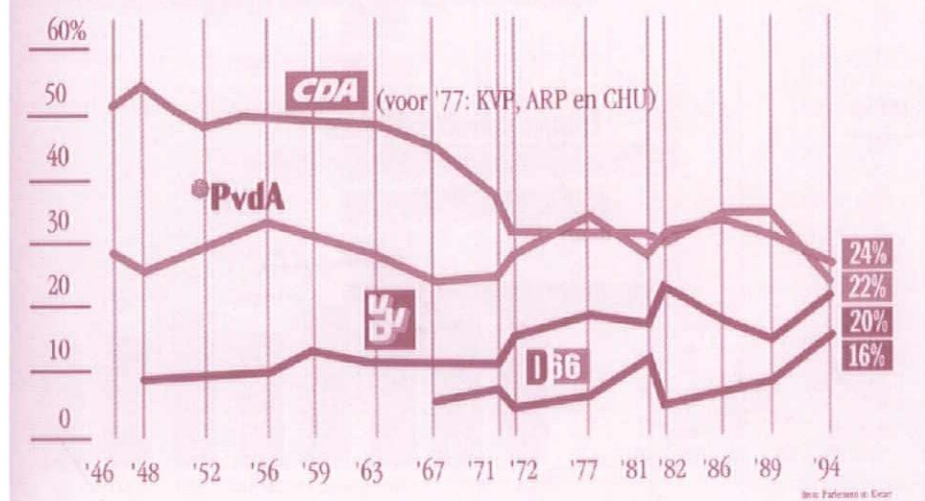
04 | 自治体への権限委譲



05 | 空港拡張問題

Naar elkaar toegegroeid

Uitslagen van de vijftien kamerverkiezingen



06 | 元祖連立政権



07 | ハンディキャップ



08 | シンタクラース

01—どの国にも平均像と言うものはある。ニュータウンのテラスハウスに住んでキャンピングカーをもち、夏休みにはフランスのキャンプ場に家族連れで4週間出掛け、父は夜5時半に帰宅し、6時に家族そろって肉・野菜・ジャガイモの晩御飯を食べ、8時にはテレビでニュースを見ながら家族そろってコーヒーを飲む。

02—オランダのコンセンサス・システムは、近隣住民から宗教グループまで、各グループの意見を公にする機会を与え、それを政治の高いレベルにフィードバックするインフラが完璧に整備されている。このようなパブリックスペースに声明を出すことが無駄ではないと思わせるのがオランダだ。©藤原かすみ

03—戦後直後と比較するとオランダ人一人あたり4千m²あった国土の面積は、現在半分近くに減っている。人口密度はオランダは372人/km²、日本は330人/km²、アムステルダム市は4500人/km²、ほぼ大阪府と同じ。オランダの農業面積、自然のエリアは半分以下に減り、都市化が進み続けている。©CBS

04—オランダの行政は国・州・市によって行われているが、多くの実質的な問題は市のレベルで解決されている。都市計画も住宅国土開発環境省は大きな方向性を決めるだけで、実際の開発は市が独自の方向を打ち出していく。©Arend van Dam

05—現在オランダがコンセンサス形成に最も苦心しているのが、スキポール空港の拡張問題だろう。真っ向から利害の対立する環境問題と経済効率をすり合わせることにさすが

のオランダも苦心惨憺している。第5の滑走路の位置から始まって海上空港案まで、このような問題にはじっくり時間をかけて結論を導き出す。

06—オランダでは国会選挙の度に連立政権を形成する。それでも極めて安定した政権を持続してきた歴史は、オランダがコンセンサス社会だということをよく示している。表にも明らかに年々政党支持は平均化している。

07—異文化に対する寛容性、人間に対する対等感生活実感としてのダッチ・コンセンサス。だから障害者の社会参加も普通のこと。コンピューターなど現代のテクノロジーによって障害者と健常者のギャップは小さくなりつつある。法律で障害者の雇用は全体の5%を目標とし、実際には一般企業も含めて約1.7%だ。

08—12月5日のシンタクラースは、オランダではクリスマスよりも伝統的で大切なお祭りだ。2週間前から子供たちは良い子にしていると毎朝靴の中にお菓子が配られ、当日もプレゼントにユーモラスで教育的な詩をつけて贈るなど、手間暇かけて家族のコミュニケーションを深める伝統行事なのだ。

09—オランダ・サッカーの魅力は特定のスター選手が存在ではなく、各メンバーのずば抜けた個人技を統合した「トータル・サッカー」である。特徴は超攻撃型サッカーだ。最終ラインを浅く保ち、中盤でボールを奪うや間髪を入れずにチームプレーでゴールを狙う。知的かつ機能的なボール・サーキュレーションだ。



Waarvoor heeft Nieuw?

Waarvoor heeft Nieuw geproduceerd? Het programma 47-196, dat op 15 oktober 1976 werd uitgezonden, was de eerste aflevering van een reeks van drie afleveringen. Het werd niet gepresenteerd door Nieuw, maar door de presentator van de aflevering, de heer J. van der Vliet.

De aflevering 47-196, die op 15 oktober 1976 werd uitgezonden, was de eerste aflevering van een reeks van drie afleveringen. Het werd niet gepresenteerd door Nieuw, maar door de presentator van de aflevering, de heer J. van der Vliet.

De aflevering 47-196, die op 15 oktober 1976 werd uitgezonden, was de eerste aflevering van een reeks van drie afleveringen. Het werd niet gepresenteerd door Nieuw, maar door de presentator van de aflevering, de heer J. van der Vliet.

HASH

Maroon	Maroon	1.7 gram	€ 25,-
Maroon	Maroon	1.7 gram	€ 25,-
Nigel	Puberty	1.2 gram	€ 25,-
afgeleid	Power	2.0 gram	€ 25,-

GRASS

Intermittent Day & Night	1.8 gram	€ 25,-
Sensational Poppyseed Band	1.8 gram	€ 25,-
Sensational Poppyseed Band	1.8 gram	€ 25,-
Sensational Poppyseed Band	1.8 gram	€ 25,-
That Union	2.0 gram	€ 25,-

SPECIAL OFFER

Everest Super Shag	€ 7.50	€ 10,-
Sensational Super Shag	€ 1.00	€ 10,-

HIGH QUALITY HASH

Maroon	1.7 gram	€ 10,-
Nigel	2.0 gram	€ 10,-

PRE-BOLDED JOINTS "American Invention"

Intermittent	€ 2.00	€ 25,-
Chop (Intermittent)	€ 2.00	€ 25,-

Religious	Christian	Catholic	Roman Catholic	22
		Protestant	Gereformeerd	7
			Hervormd	11
			Non-Calvinist	Remonstrant Doopsgezind Lutheran etc.
		Non-Christian	Jewish	1.2
			Moslem	2.0
Non-religious	Organized	Humanist + other		} 54.5
	Non-organized	No affiliation		



10—全員そろってコーヒーとアップルパイを食べながら話し合う。冗談抜きでこれがオランダのコンセンサス・コミュニケーションだ。誕生日、結婚式、葬式などの家族行事はもちろん、自分の誕生日には会社に自分でケーキを持って行って配る。年末の業績報告もケーキを食べながら行う。©Iwan Hameleers

11—オランダは徹底した情報開示社会だ。コンセンサス社会たるには情報開示あってこそ。週1度発行される地方新聞には、現在建築申請中のプロジェクトが開示され、近隣は一定期間中抗議、質疑を行うことができる。地方新聞もテレビも建築家には嫌なメディアだがこれも通過儀礼。©アムステルダム・シティ新聞

12—リゾームのプロジェクト・マネジメント。市は関係機関すべての代表によるチームを、ディベロッパーは住宅公団、建設業者でチームを形成し、都市計画家は、建築家、建設業者を集めてワークショップを行い、市と都市計画家は建築家の設計を景観法をもとにコントロールした。徹底した横割りのコンセンサス形成だ。提供＝アムステルダム市DRO、
©Hans Brons

13—ソフトドラッグが一定の管理の下でオランダでは飲める。コーヒーショップにはハッシュのメニューがあるが、客の求めがない限り見せない。モロッコ、ネパール産からオランダ温室栽培など多種を扱っている。麻薬も飾り窓も本人のリスクで自主的に行動することが前提で、強制してはならない。提供＝CoffeeShop Bulldog

14—異なる宗教の割合を示す図。オランダは人種ではなく、信条によって区分される。60年代まで、プロテスタント、カトリック、社会主義等の信条に応じて学校、新聞、放送局、コミュニティを形成し、柱状社会と呼ばれていた。一種の異文化共存社会にとってコンセンサス形成は国家の基盤だ。© Pro.W.Z.Schutter

15—16世紀のポルトガルのユダヤ人から始めて第二次世界大戦中のドイツのユダヤ人、60年代のヒッピー、現代のホモセクシャルまでオランダは他国で迫害される人々を受け入れ、発展してきた。異なるグループが大筋でコンセンサスを形成できれば良いというのがオランダのマルチカルチュラルの秘訣だ。

16—オランダでは居住権の見地から住宅を投機の目的で空家にすることは違法。そこで空家に侵入して勝手に住んでしまう人々、スクワッターにも居住権が生じる。裁判沙汰になり、出ていってもらうために1年はかかる。この結果、短期で住宅が安く貸し出されたり、無茶な住宅投機はやりにくい。これも関係者すべてに権利を与えてバランスをとるオランダの手法だ。©鳴川肇

17— 運河が凍るようになると、自治会では人々がスケートをしに集まる湖や運河の水を整備したり照明をつけたり、暖かいスープを外で売ったりする。所々に氷に穴を開け、鳥たちの水場を作るが、これは鳥たちとの共存のコンセンサスである。©John Hameleers

建築博物館とオランダ建築・都市計画の関係 館長 クリスティン・ファイライスに聞く

▶ ヨーロッパでもっともホットな建築ギャラリーと言われる、ベルリンの〈アエデス・ギャラリー〉を20年間主宰してきたクリスティン・ファイライスが、世界最大規模を誇る国立オランダ建築博物館(NAI)の館長に就任して2年が経過した。果たして建築博物館とはどのような意味をもつのか、就任以来目覚ましい活躍の館長に聞く。

——オランダ建築博物館(Netherlands Architecture Institute: NAI、以下NAI)が国立の機関としてどのようなゴールをもって活動を行っているのか教えてください。

こんな小さな国にあるNAIでも、規模的にもそして収蔵している資料の量は世界で一番大きいんです。このことからオランダの建築と都市計画の文化的位置付けの高さがわかります。芸術と違って建築は、さまざまな機関の利害の関わりの中で存在するものだから、建築博物館の役割は、通常の美術館とは根本的に違います。建築都市計画に関係するすべての人々のメディアとして、それぞれのヴィジョンを吸い上げてひとつのプラットフォームを形成するという役割は何よりも大切です。

——あなたはベルリンで20年間建築ギャラリーを主宰してきました。ドイツと比べてもオランダという環境は、建築にとってかなり違いますか。

実はオランダに来て、その違いに驚いているんです。一言で言えば、オランダ人ってオランダというコミュニティのフィーリングをすごく大切にしているということ。その感覚は日常生活だけでなく建築や都市計画にも強い影響を与えている。例えばオランダの人たちは自分たちが文字通り作り上げてきた文化、国土、そして都市と建築を非常に誇りにしていて、そのためには国も自治体も企業も協力を惜しまない。オランダは若い建築家に多くの機会が与えられる国として知られていますが、自力で国土を作ってきたオランダ人は何よりも将来を信じて、若い世代を育てたいのだと私は思います。事務所を始めようとする若い人たちに政府の助成金があるし、ディベロッパーや住宅公団も若い建築家を登用することを怖がらないし、オランダを代表する万博には常に若い建築家選ばれます。その結果、誰もが新しい建築のスタイルや方法に対して非常にオープンで、建築のスタイルにこだわらないという気風が築かれています。

——NAIは具体的に政府、企業、市民とどのように関わっているのですか。

企業との関係は、スポンサーシップを通して築かれます。NAIは国立の博物館といっても国から出る予算の半分かりのサポートを企業から受けています。その結果、スポンサー企業を通して、さら

に多くの一般市民がNAIに訪れ、イベントに参加するようになりました。建築が単なる経済活動ではなく、誰にとっても大切な文化であるということ、クオリティの高い建築を計画することの意義を理解してもらえるようになってきています。

——生活環境を考える上で建築の質が重要だという認識は、建築家が思う以上に企業にも自治体にも一般の人にも理解されていないということに日本に帰ると痛感します。

確かにオランダは、建築の質が国の文化にとっても生活環境を考える上でも重要であるという認識を伝統的に持っている国です。そういう伝統をNAIがどうやって維持し育てていくのか、ということも重要なテーマです。ディベロッパーに対して、この建築家を起用しなさいとは言えませんが、NAIでさまざまな展覧会やシンポジウムを行い、市民、政府、企業に参加してもらうことによって建築の質を自分たちの問題として捉えてもらうことはできます。建築が誰もが関る日常的問題として、その質を向上させることは、幸せな家庭を持ち、充実した仕事をして自分の望む家に住むことと同じことだというコンセンサスのある社会にしか、建築の将来はないのです。

——建築のクオリティという個々の建築が美しいなどといったエスティックな問題だと捉えられやすいような気がするんですが。

これもオランダのユニークな一面だけれど、建築ひとつ一つのオブジェとしての質よりもそれぞれの関係性やエリア全体のヴィジョンといった統合的な質に注意が向くのです。例えばNAIでハノーバー港とロッテルダム港の将来をテーマにして展覧会を企画したことがあります。ハノーバー港の展示がいかにか港沿いに美しい建物を配列できるかをテーマにしていたのに対して、ロッテルダム港は港全体のヴィジョン、インフラとの関係からそれぞれの場を定義しながら、建築の展示を行いました。オランダ社会の持つコミュニティ・フィーリングや干拓の歴史という背景があって、建築の質を環境全体の質との関係で捉える伝統を育ててきたのでしょう。

——NAIと政府との関係はどうでしょう。

もちろん文部省との関係がもっとも重要だけれども、VROM省(住宅国土開発環境省)、農業水



産省、交通水利省などさまざまな省庁との関係を構築し、政府の政策にいち早く反応できるような体制を作っていくとしています。例えばNAIは、メディアとしてディスカッションの場を提供します。現在オランダではスキポール空港が今後拡大していくべきかどうか大きな政治問題になっています。スキポール空港の拡張は、インフラとしてオランダ経済にとっては死活問題だけれども、環境という視点ではこれ以上の拡大は望ましくない。NAIは、中立的な立場から他国ではどのようにこの問題に対応しているか展覧会を行い、関係者、専門家を招いてディスカッションを行いました。NAIとして、政策に対して意見を言う場合もありますが、いずれにしてもNAIが政府から独立した立場を保つことが必要条件です。協力を受けているからといって政府の立場に立ってしまえば、NAIは建築家、企業、市民からの信頼を失い、最終的には政府にとっても良いことはないのです。

——あなたが館長になってからNAIはずいぶん国際的になりましたね。

今日建築、都市、環境などいかなる問題も地域的なコンテキストの中で解決することは不可能です。地域的なコンテキストの中では問題を解決することができても、他の地域が協力しなければ意味を持たない問題も多いし、グローバル化の結果、世界中で同じような問題を抱えていて、それぞれの地域がそのような問題に対してどのように解決しているのかを知ることが、より迅速で的確に問題解決をするために避けられないのです。

(1998年12月2日、於: NAI)

profile

クリスティン・ファイライス | Kristin Feireiss

1942年ベルリン生まれ。フランクフルトのゲーテ大学とベルリン自由大学で美術史と哲学を学んだ後、ジャーナリストとして雑誌やラジオで活躍。「アクセル・シュプリングガー・ディーンストン」紙などで編集長を歴任。1980年ベルリンにアエデス・ギャラリーを設立。1996年にオランダ建築博物館(NAI)の館長に就任



NAIでの〈ダニエル・リベスキンド展〉風景

ベンテム・クラウエル

Bentham Crouwel

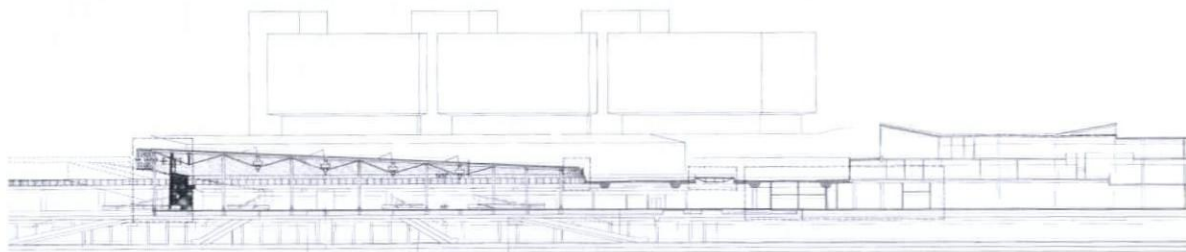
スキポール空港ショッピングセンター「スキポールプラザ」

"Schiphol Plaza" Amsterdam Airport Schiphol

アムステルダム 1995年
Amsterdam 1995

profile

Bentham & Crouwel: 1979年ヤン・ベンテムとメルス・クラウエルが
共同で、ベンテム・クラウエル建築事務所設立。
ヤン・ベンテム | Jan Bentham: 1952年アムステルダム生まれ。
1978年デルフト工科大学卒業
メルス・クラウエル | Mels Crouwel: 1953年アムステルダム生まれ。
1978年デルフト工科大学卒業

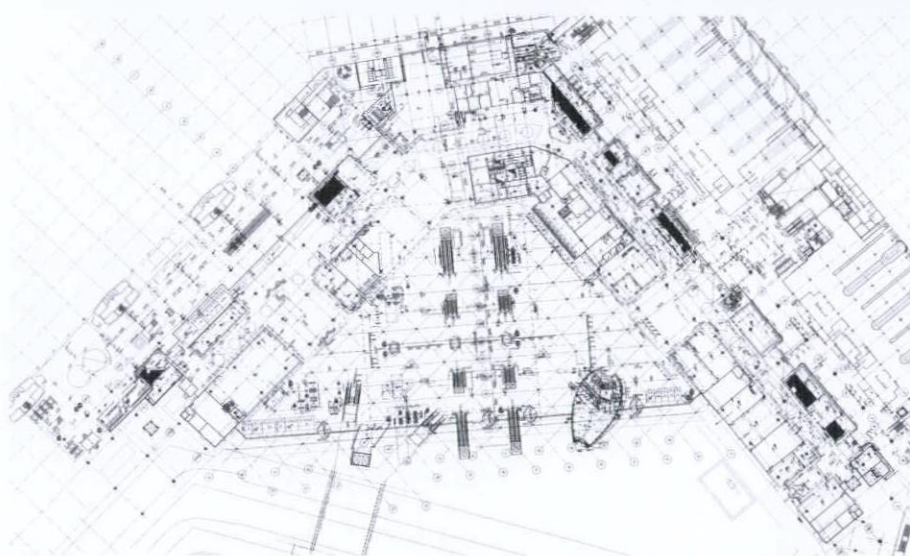


〈スキポール・プラザ〉断面図

ヤン・ベンテムとメルス・クラウエルが建築事務所を主宰した80年代当初、彼らの建築は、その頃人気のあったハイテク建築のラベルを貼られていた。彼らが好んでスティールのスペースフレームとプレファブのパネルを使用したことが、その証拠と見られたのである。明快なハイテクノロジーへの趣向は、今日の彼らの作品にはほとんど見出すことはできないが、最先端の工業製品への親近感、真のシンプルさ、構造的なロジックなどはその名残である。ほぼ20年もの間、彼らは本格的な作品を数多く実現してきた。そこには多くの個人住宅、集合住宅も含まれるが、目立っているのは商業・工業建築である。主要な作品としては、現在も継続しているスキポール空港の増築・改築、スキポール、アムステルダム、ハーグの大規模なオフィスビル、ティルブルグの駐車場とポップ・ミュージックのためのコンサートホールなどがあり、ティルブルグではかつての織物工場を美術館に改築するプロジェクトも行なっている。(H.イブリング)

Since the early 1980s Jan Bentham and Mels Crouwel have headed an office that was initially labelled as High-Tech, popular at the time. Their preference for steel space-frames and prefab panels was seen as proof of this categorization. A demonstrative penchant for high technology is rarely perceptible in their current work. What has remained, however, is an affinity with contemporary industrial products and a concern for pure simplicity and structural logic. In almost twenty years Bentham Crouwel have built up a substantial oeuvre that includes a number of private houses and residential projects, but the emphasis is on commercial and industrial projects. Important works include the ongoing expansion and transformation of Schiphol Airport, large office buildings in Schiphol, Amsterdam and The Hague, and a parking garage and hall for pop concerts in Tilburg where Bentham Crouwel have also converted a former textile factory into a museum.

(H. Ibelings)

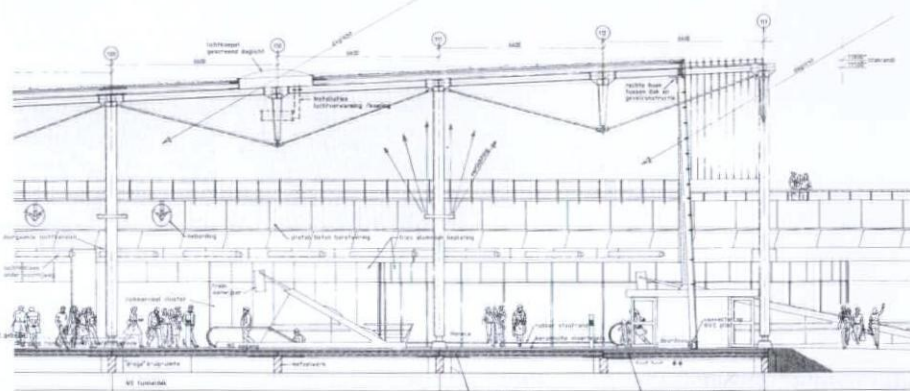


1階平面図



ペンタム・クラウェルは、1988年よりNAVO事務所と共にスキポール空港の改装に携わってきた。スキポールプラザはこのプロジェクトの一環であり、鉄道の駅と旅客の到着・出発ホールの接点となる大きな屋内広場が設計された。この広場は緩やかなカーブの屋根に覆われ、屋根は森のように林立する柱によって支えられている。〈スキポール・プラザ〉は、車で来た旅客のメイン・エントランスにもなっており、空港センター事務所、ホテルともつながっている。周辺のランドスケープはWEST8がデザインした。このプロジェクトは、さらに駅のプラットフォームを4つから6つにする拡張と屋内広場に面するショッピングセンターの設計も含んでいる。(H. イブリング)

用途：空港内の公共スペース
構造：S+RC造
規模：1階
建築面積：20,000m²
延床面積：20,000m²



断面図

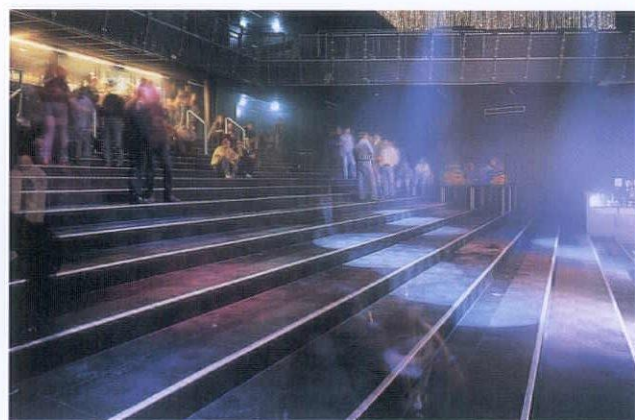
Bentham Crouwel

コンサートホール「ポップクラスター」

"Popcluster / 013"

ティルブルグ 1998年

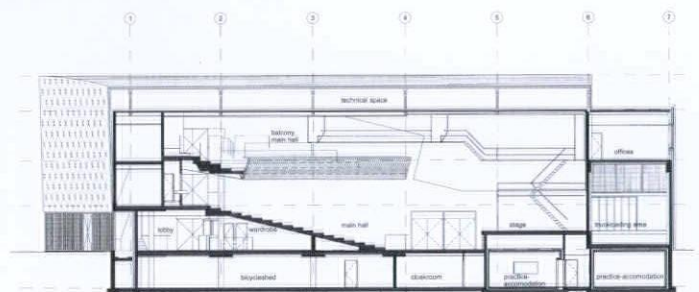
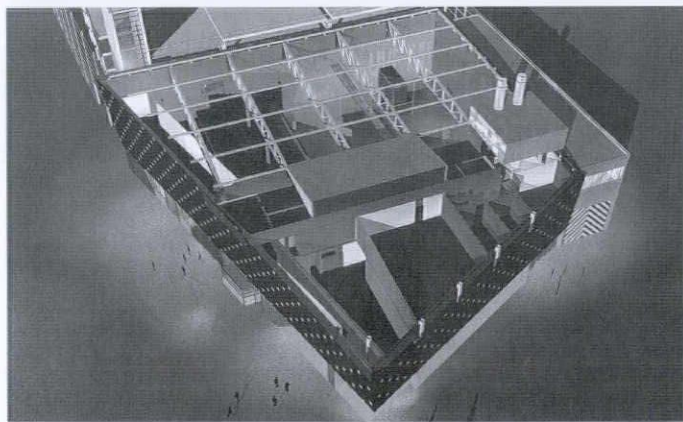
Tilburg_1998



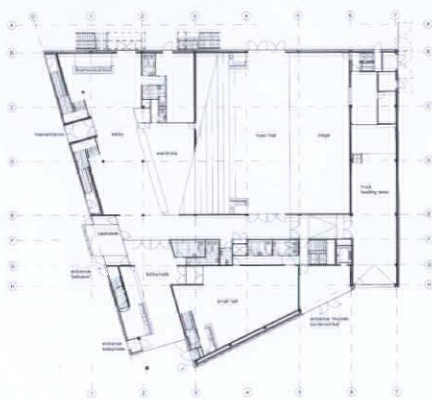


このポップ・コンサートホールは、数年前にペンタム・クラウエルがアベ・ボネアと共に設計した駐車場に面して計画された。黒いゴムの表面にCDが取り付けられたこの建物には、2200席の大ホール、350席の小ホールと250人収容できるクラブ「バット・ケーブ」がある。各ホールの間には防音のために空間がとってあり、ファサードもそのために二重になっている。この建物の中には自転車置き場もある。(H.イブリング)

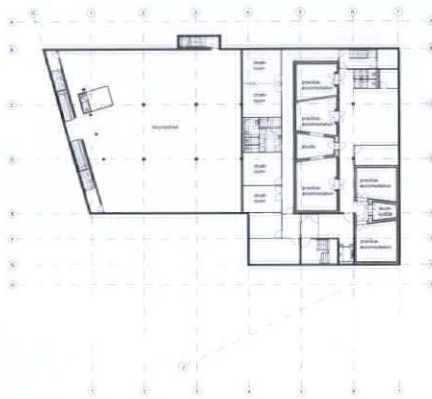
用途：ポップ・ミュージック・ホール
構造：S+RC造
規模：4階
建築面積：1,721m²
延床面積：6,400m²



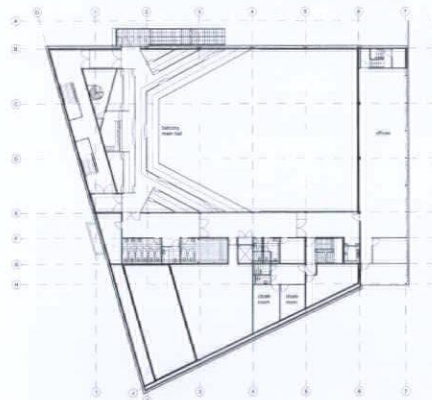
断面図 S=1:600



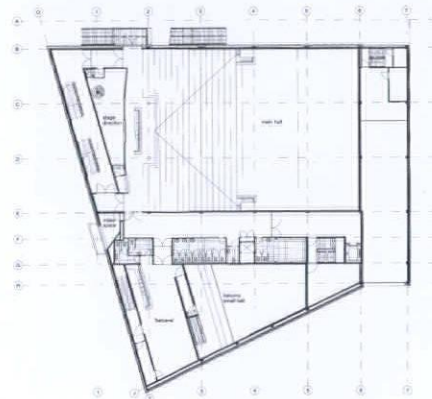
1階平面図



地下1階平面図 S=1:750



3階平面図



2階平面図

ノイトリング・リーダイク

Neutelings-Riedijk

「道路・運河」管理ビル

Road and Water Support Building

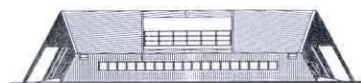
この水利省の管理ビルは道路と運河の検査と管理のための作業基地である。この建物には事務所、作業所そして寒冷時に道路に散布する塩を貯蔵する倉庫が計画された。それぞれの機能は独立しており、不規則な箱型の建物の中に共存している。ファサードは黒いプレートで覆われており、スティールのような印象を与える。(H.イブリング)

用途：オフィス・ビル
構造：S+RC造
規模：地上2階
建築面積：2,500m²
延床面積：2,800m²（パーキングを除く）

ハーリンゲン_1998年
Harlingen_1998

profile

Netelings-Riedijk：1997年ノイトリングとリーダイク共同で設立
ウィリアム・ヤン・ノイトリング | W.J. Neutelings：1959年オランダ生まれ。1977-86年デルフト工科大学で学ぶ。1981-86年OMA勤務。1987年ロッテルダムとアントワープに建築設計事務所を設立
ミッセル・リーダイク | M. Riedijk：1964年オランダ生まれ。1983-89年デルフト工科大学で学ぶ。1989-96年ノイトリングの事務所、同時にJ.D.ベッケリング建築事務所勤務

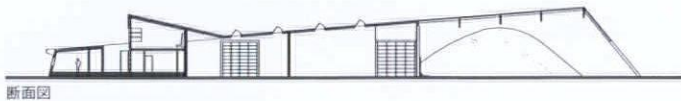


立面図 S=1:1200



ウィリアム・ヤン・ノイトリングとミッセル・リーダイクの建築は、ファッションブルではない一風変わった作風と、極端なまでに推し進められたロジックによって特徴付けられる。その結果、彼らの作品は特異であると言える。実現した作品としては、オランダとベルギーの住宅、集合住宅、商業施設、教育施設、ふたつの消防署などがある。これらのプロジェクトはどちらかというと、どれもぎこちない美しさを備えており、重々しい。彼らは特に住宅作品において、しばしばタイポロジーの実験を行っている。例えば、アムステルダムに建てられたふたつの4階建ての集合住宅では、それぞれの階に住戸があるが、どの住戸も玄関だけは1階に位置している。ノイトリング・リーダイクのラディカルな論理は、ユトレヒト大学の学部事務所であるミネアルト・ビルのデザインからも読み取れる。ここでの建物の機能は、使用される空間とサーキュレーション空間のふたつのタイプの空間に分割されている。そしてほとんどすべてのサーキュレーションは、教室上部の巨大なホール内に収められている。このホールには巨大な水盤があり、集められた雨水は建物のローテクな冷却媒体として使われている。(H.イブリング)

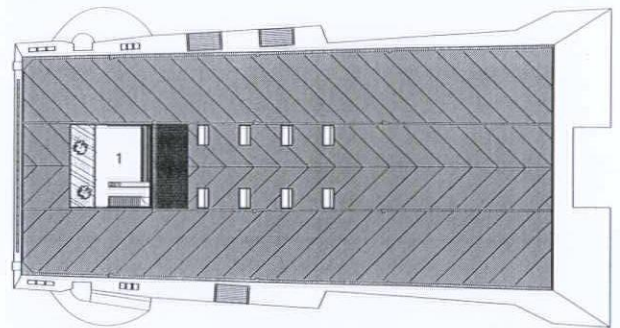
The architecture of Willem Jan Neutelings and Michiel Riedijk is rooted in a peculiarly unfashionable idiom and is typified by a logic pushed to the extreme. These two features give their work a large measure of singularity. The oeuvre of Neutelings Riedijk includes various houses and apartment complexes in the Netherlands and Belgium, commercial and educational buildings, and two fire stations. Typical of these projects is a rather ungainly aesthetic, which gives the buildings a ponderous quality. Moreover, the architecture, and certainly the residential work, shows an tendency towards typological experimentation. A case in point is the project in Amsterdam for two four-story housing blocks with apartments on each level where each apartment has its own front door at street-level. A good example of the radical logic with which Neutelings Riedijk tackle design tasks is the Minnaert Building, a faculty building for the University of Utrecht. Here the programme is divided into two types of space, usable space and circulation. Almost all circulation is gathered into one large space situated above the lecture rooms. This hall has a large impluvium, a basin that collects rainwater and serves as a low-tech means of cooling the building. (H. Ibelings)



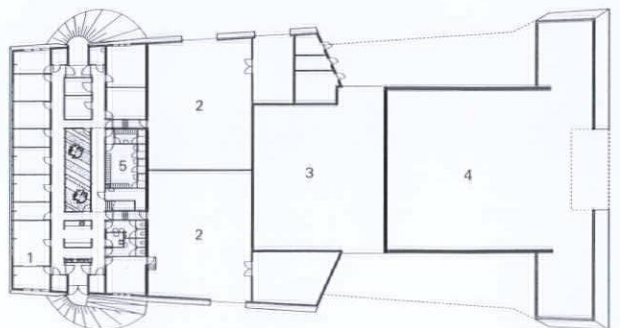
断面図



断面図 S=1:1200

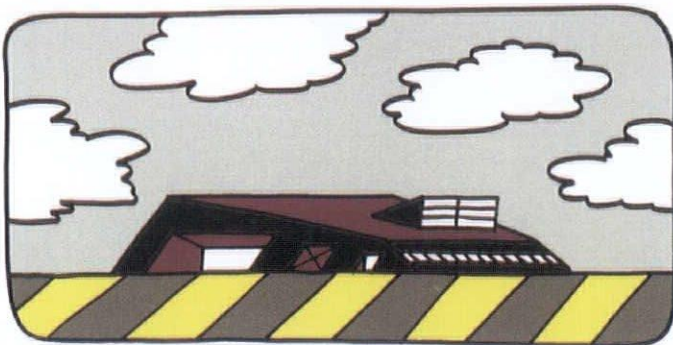


2階平面図



1階平面図 S=1:1200

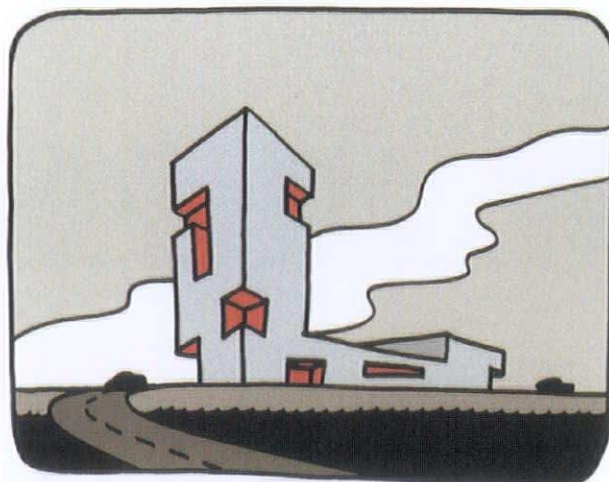
- 1: オフィス
- 2: ワークショップ
- 3: 駐車スペース
- 4: 塩貯蔵庫
- 5: 更衣室

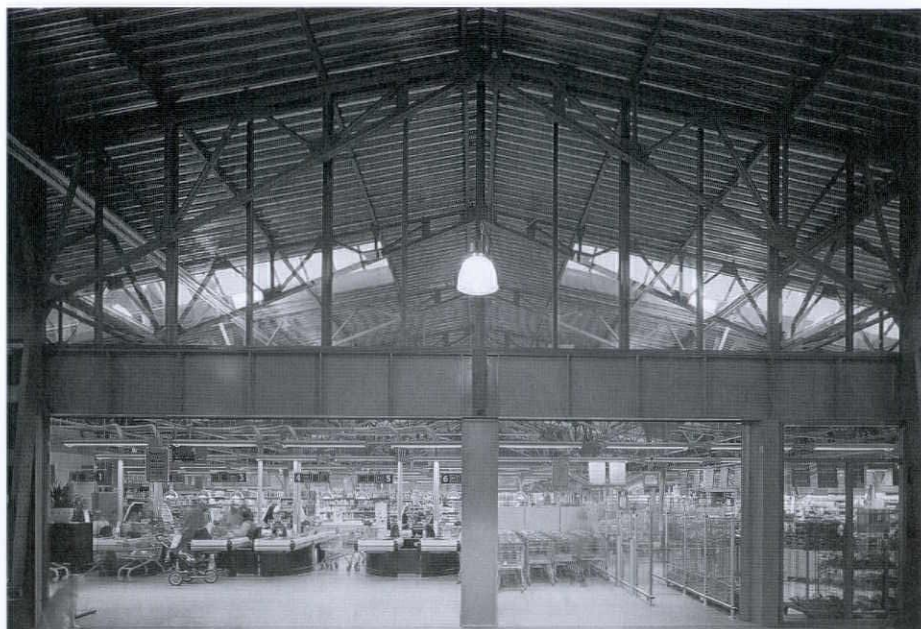


ショッピングセンター「ブラジル」+「IJタワー／集合住宅」

Shopping Center "Brazilië"
+ "IJ-Tower" Eastern Harbor Amsterdam

アムステルダム東部港湾地区 1998年
Eastern Harbor Amsterdam 1998

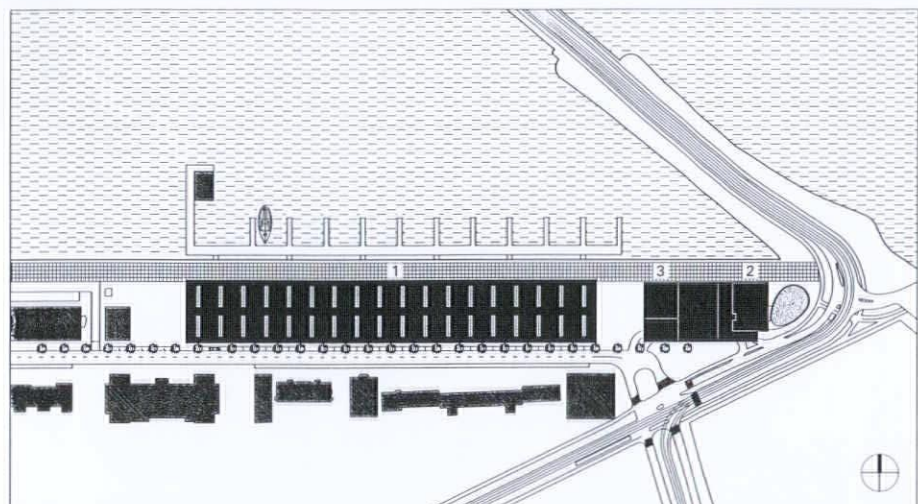




ショッピングセンター「Brazil」

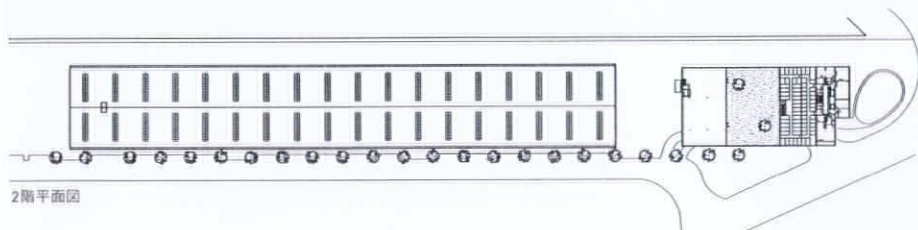


IJタワー住棟

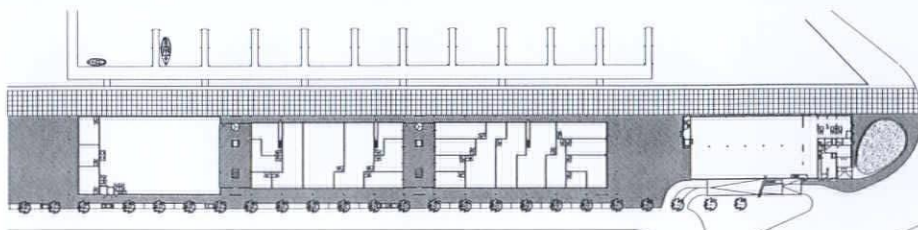


配置図

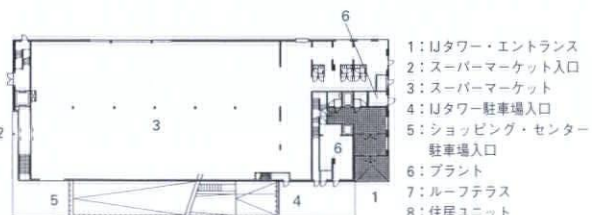
1: ショッピングセンター「Brazil」 2: IJタワー住棟 3: スーパーマーケット



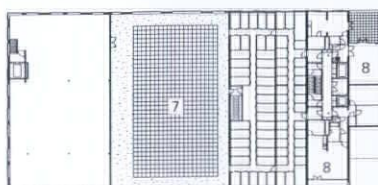
2階平面図



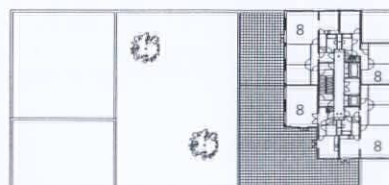
1階平面図 (ショッピングセンター、IJタワー、スーパーマーケット)



1階平面図 (スーパーマーケット、IJタワー住棟) S=1:2000



2階平面図



3階平面図

アムステルダム東部の港湾地区にはアレツによるKNMSタワーがあり、その後建てられたのがアイ・タワーである。この26階建ての建物には68戸の住宅の他に1階に駐車場、スーパーマーケット、マルチファンクション・スペースがある。住宅は小さなスタジオ住宅からメゾネットまで20種類のタイプが作られた。タワーのファサードは、セメント板によって覆われ、その切れ目によって建物の形状は創意豊かなものとなった。ファサードの凹凸は木で作られている。規則正しい窓のパターンによってこの建物の彫刻的性格がいっそう強調されている。タワーの足元にある、かつての倉庫「ブラジル」は屋根を残して全面的に建て直され、ショッピング・センターとして生まれ変わった。(H.イブリング)

ショッピング・センター「ブラジル」

用途: ショッピング・センター+公共施設+駐車場

構造: RC造

規模: 地下1階、地上1階

建築面積: 8,000m²

延床面積: 8,000m² (パーキングを除く)

「IJタワー」集合住宅

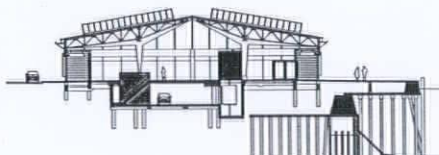
用途: 集合住宅 (68戸) + 駐車場

構造: S造

規模: 20階

建築面積: 5,680m²

延床面積: 10,000m² (パーキングを除く)



ショッピングセンター「Brazil」断面図 S=1:1500

セカンド・モダニティへの建築

バート・ローツマ

翻訳：五十嵐太郎

1980年代の終わりから、一方ではグローバル化と個別化によって、もう一方ではオランダの過密のせいで、オランダの建築界にいくつかの大きな変化が起きている。しかしながら、90年代においてこうした変化が、オランダに典型的な主題や問題に対する新しい意識を引き起こしていることは、それがいつもはっきりと認識されていないだけに興味深い。たとえば、現代のオランダ建築、都市計画、ランドスケープ・デザインの多くが、表面的には近代運動の発見を基本的な手段として使い続けているようにように見えたとしても、それとは完全に異なっている。

最近の『a+u』誌（1998年9月号）におけるオランダ建築の特集号では、ピーター・ブキャナンが新しいオランダ建築を、単なるモダニズムの「サンセット・エフェクト」（訳注：その終わりに輝く、日没効果）としてマクルーハン風に説明している。なぜならば、彼はそれらに対して「コンテキストへの相対的な無関心、発明のための発明の重視、物質的・触覚的であるよりも図像的・視覚的である傾向、そしてほかの様々な要因」を見出しているからだ*1。問題は、オランダの建築家の仕事の状況がこれと異なっており、ブキャナンが思うよりもさらに特殊なことであり、彼らの作品はこうした状況によって、ただ新しい解決法を見出すよう強いられている。そして図像的かつ視覚的なものは、デザインを導くコミュニケーションの過程にしか役立たないのである。実際、例えばNOXとファン・ベルケル&ボスほどに物質的かつ触覚的な現代建築家はいないのであり、同時に彼らは最新の建設的かつ風土学的なテクノロジーとメディアに基づいている。もともと、こうした物質性と触覚性はブキャナンが考えるようなものではないかもしれないが……。

もちろん、オランダのランドスケープは、ほとんどが第二次大戦以降に実現されたが、いまだにモダニストによる大きなスケールの介入の痕跡をはっきりと示している。それらの痕跡はボルダー（訳注：堤防に囲まれた、海を干拓してつくりだした平地）の配置に認められ、デ・スティールのメンバーやCIAMの代表コルネリス・ファン・エステレンの構想が、そのまま大きな規模で形成されたものになってい

る。ちなみに、後者は1920年代から始まったアムステルダム拡張計画の責任者でもあった。大規模なランドスケープは、1945年に施行された土地整理法をもとに再編かつ再計画された農地や、1953年のデルタ法により海岸と河岸に沿って建設されたダムや堤防にも見出せよう。そして当然、オランダのイメージの大部分は、再建の時代につくられたモダニストの建物や街区にまだ支配されている。しかし、こうした時代は明らかに過ぎ去った。すべての巨大なプロジェクトが実現化する楽観的な雰囲気のみならず、政治的・法的なシステムの全体が、近年大きな変化を体験しており、オランダをセカンド・モダニティ、すなわち第二の近代へと突入させたのだ。これはセカンドハンド・モダニズム（中古の近代）とは根本的に違うものである。すでにレム・コールハースは、デルフト工科大学において1990年に彼が企画したシンポジウムで、オランダの近代の伝統に対し、決定的な異議を唱えていた。一方、思慮深い建築家たちは根本的な問いを發しないまま、これを継続するようなことはしなかった。その時以来、ブキャナンがいうような意味でのモダニズムは、汚らしい言葉になり、ほとんど侮蔑的なものになる*2。その代わりに近代性を扱う問題に対する真剣な興味を持ち上がった。それは社会学から科学技術までを含む、われわれの生活と社会を形成する、現代の複雑な要因と影響力の全体を考えることだ。建築家はこうした新しい発展に対応できる建物を生みだそうと努めている。

第二次世界大戦の後、オランダはヨーロッパの典型的な福祉国家に発展した。政府は全市民の幸福に関わるほとんどすべての局面で主要な役割を果たしている。その対象は文化と教育から住宅供給、社会的かつ医療的な安全性にまで至る。また法律、規制、計画に加え、迅速な融資という方法も採用された。が、この福祉国家は非難を受けることになる。最初は、1970年代にオランダが急進的な民主化を経験し、建築と都市計画にアドボカシー・プランニング（訳注：計画家はコミュニティ全体に対してではなく、法廷で弁護するかのように小集団の利益を代表するという考え）という極端な方式がもたらされた時である。その後、1980年代に

*1：ピーター・ブキャナン＝著「イントロダクション：オランダの今」（中田雅章＝訳『a+u』336号、1998年9月号）
*2：B. ローベン、U. デーン、C. グラーフェ＝編『いかにオランダの建築は近代的なのか？』（010、1990年）を参照。
*3：ベン・ファン・ベルケル、カロリン・ボス＝著『流動する力』（ベルリン、1994年）
*4：ウルリッヒ・ベック、アンソニー・ギデンズ、スコット・ラッシュ＝著『反射的な近代化：近代の社会秩序における政治・伝統・美学』（オックスフォード、1994年）
*5：ハント・ジャンニ＝著『カルチャー・ショック：慣習とエチケットのガイド』

批判の第二波が続く。この一因は地球規模の政治的かつ経済的な発展によるものだった。ヨーロッパの統合が進むと、最終的には国境が消失し、それゆえ、各国の国家の法律は互いにすりあわせが必要である。異なる通貨はなくなり、「エキュー」に取って代わられる。通貨統合への道は国家予算に重大な影響を与え、オランダは公共住宅に対して、これ以上費用のかかる助成金を出す余裕を失ってしまう。1994年に助成金は中止され、それに従い、もはや国家はさまざまなプロジェクトに対しての絶対的なコントロールを持たなくなる。つまり突然、これによって市場が決定的な役割をもち、思いがけず、個人住宅の需要が増加することになったのだ。新しい無数の規則と規制のほか、弁護と法律など、別の方法により、今も福祉国家の名残はとどめているが、もうそれほど明確に認識されているわけではない。ファン・ベルケル&ボスがそう呼ぶように、社会は流動的な力の複合した領野となりつつある*3。社会学者のウルリッヒ・ベック、アンソニー・ギデンズ、そしてスコット・ラッシュは、こうした新しい状況をセカンド・モダニティとみなしている*4。ある会社の水平的な組織がこれに相当すると考えたくなるかもしれないが、それは理想主義的過ぎる。決して個々のものを論じているのではなく、常に（アンソニー・ギデンズがそう呼ぶように）専門知識と権力の抽象的な諸システムが説明されているのだ。もしくはこうしたシステムと直面しつつ、それに保護されている状況のことである。例えば建築家にとって、これはもはや単に形態論やタイポロジーによって決定される状況の処理では間に合わないことを示しており、規則と規制、そして異なる集団からの要求など、いくつかの見えない層が条件に加わることを意味する。つまり、気候、騒音、光、安全性、火……など、諸々のことに関する規制になるだろうし、さらには各自で慣れ親しんだ家に住みたい人々や、眺めと同時にプライバシーを確保したい近隣者の要求などである。OMAは、建物の外皮にあたるこの種の付加的な空間の視覚化にもとづくデザイン手法を主に開始したが、MVRDVは自らの生むデータスケープにおける可能性と不可能性を体系的に調査した。実

際、MVRDVによるすべてのプロジェクトは、こうした調査から帰結したものである。データスケープの異なる諸層の痕跡は、常に何らかの見えるかたちで最終段階に残っており、それはしばしば断片的なものであったり、漫画っぽいことさえある。MVRDVは、空間のスプレッドシートや統計といったものを算出するためにコンピュータを用いるが、さらにファン・ベルケル&ボスは形態をつくる技術にもっと関心を抱いているとも受け取れる。しかし、建築家がどんな技術に興味をもっているにせよ、彼らは単に発明のための発明をしたいと思っているのではない。彼らは明らかに抜本的な解決を出すよう強いられているのだ。なぜならば、オランダのますますひどくなる過密は、今や日本の人口密度と同程度か、たぶんそれ以上であるからだ。過密化は、システムを大きな重圧のもとにさらしている。

オランダで建築・都市プロジェクトに関わる多くの集団はまた、いつもたくさんの"overleg" (論議)があるような状況を生んできた。"Overleg"とはオランダに特有の言葉のようであり、英語での正確な同義語をもたない。そこで私はオランダの慣習とエチケットについて述べた、ハント・ジャンンの本で見つけた次の記述を引用したい。

直訳すれば、"to consult together" (一緒に相談する)になるが、英語の言い回し"in conference" (会議中である)の方がより適切である。"Overleg"とは、会合において誰もが参加する機会をもち、時間をかけた合意に基づいた建物の実現をめざす。ここでは共同作業が重要なのだ。その目的は、議長が好む解決案Aにゴム印を押すことではなく、情報を交換し、すべての参加者が支持する遂行可能な折衷案を苦心して考え出すことである。こうした過程を通して決定に導くというのは、時間がかかるものかもしれない。しかし、オランダ人は、時計はすべて同じ時刻を示している、すなわち「我々はみな解決案Bに同意している」と喜んで議長が発表することができれば、長期的にはそれがより早いものだと信じている*5。

だがもちろん、その際、大いに交渉し、妥協することが必要とされるが、たびたび気乗りのしない、はっきりとしない結論を導くことがある。一方で、"overleg"と同意の文化は、雇用者と被雇用者がその年度の賃金を一緒に交渉できるだけではなく、より長い時間のスパンで発展を考えることができる状況をもたらす。ポルダーのモデルでは、結局、もっと多くの仕事とさらに持続可能な経済効果を生み出すために、労働者組合が1年で出来るだけの成果を上げることが望まず、自発的に少

ない成果を望むことさえ起こり得ることが、知られるようになった。同じような"overleg"は、都市と投資者、土建業者と建築家のあいだにも起きている。それゆえ、オランダの建築と都市計画は、突飛で風変わりな建物を独力でつくることのできる、英雄的な個人の物語の一種として決して解説すべきではない。いかに多くの建築家がいまだにそうした役割を演じようとし、いかに外国でそのように理解されているかが、違うのである。オランダの建築家は、始めから終わりまで、あるいは最初のスケッチからディテールに至るまで、計画の過程を管理する創造的な天才ではない。むしろ、傑出したオランダの建築家とは、進行状況において正しい位置のわかる人である。それは適切な波を知っているサーファー、もしくはサッカーにおいて、どこにボールが来るかという感覚の発達した選手、すなわちチーム・メイトからのパスの連続を予期しながら、ことによるとディフェンダーをじらし、最後にゴールを決めるストライカーのようだ。

間違いなく、他のヨーロッパ諸国に比べて、オランダでは、グローバル化がより重要な問題となる。ライン川、ムーズ川、スヘルデ川など、いくつかの川に挟まれたデルタ地帯に位置し、オランダは常にヨーロッパに対して主要な港になっていた。第二次世界大戦の後、さらにロッテルダムは世界で一番大きい港になり、オランダの貨物車はヨーロッパで最も多い交通量を維持している。しかしながら、自動車による交通、飛行機による旅行や輸送の強化、そして新しいメディアのネットワークなど、個人単位の可動性が増すにつれ、ヨーロッパの主要な港というオランダの地位は脅かされている。前述したような革新的なアドホカシー・プランニングと、さらなる過密化の現状において、この位置を改善したり、強化する思い切った手段をとることは難しい。実際、オランダは、新しい鉄道のルートを決めるのが困難であるように思われているために、ドイツとフランスがもつ高速の鉄道網といまだにつながっていない。同じような事態は、ドイツへの新しい貨物列車のルートについても起きている。交通渋滞はオランダ西部の住人と訪問者を悩ませている。スキポール国際空港は、環境主義者の政治的な圧力により、現在の場所ではもう拡張することができない。したがって、おそらく空港は、北海の人工島に移動することになるだろう。我々国民の誇りであるロッテルダム港も、管理、拡張することが難しい。なぜならば、より大きい行政単位、すなわち港沿いのすべての都市と村落を含む、都市領域の一種を形成するよりも、ロッテルダム自体の自治評議会

を確立することの方がたやすいと判明したからである。しかし、他の選択肢として、ロッテルダム港が、飛行機の管制局のような地球規模のコントロール・センターの一種へと発展し、衛星を利用したトラッキング・システムによって、全世界のあらゆる船の動きを管理することもできるだろう。そうすれば、港における物理的な空間は、ちょうど工業におけるジャスト・イン・タイムの生産方式のように、はるかに効率的な使用が可能になり、今まで通りロッテルダムが海運業において指導的な役割を演じることを可能にするだろう。

規則と規制による抽象的なシステムのネットワーク、都市の境界線とアドホカシー・プランニングは、とても厳しく、窮屈なものになったので、ある人々はそれらが国の経済的な発展を塞ぐ、もしくは単純に個人の自由を大きく減らしているという印象を抱いている。ここ2、3年、いく人かの建築家、また芸術家さえもが、それぞれに異なった自由地帯の提案を示しており、それらは中国の特別経済区を漠然と想起させるように、自由な交易状況を生み出すよう完全に組織されている。アドリアン・グーズ/WEST8は、一連の新しい自由活動の振興地域を提案しており、ロッテルダム港沿い、フレイフォラント州南部(最近、開発されたエイセルメール・ポルダー)、スキポール周辺、国の最南端のマーストリヒト州付近に、一連の新制度と促進の地域を提案している。こうした構想においては、1950年代の成長と刷新の楽観的な雰囲気は再生できるだろう。同様にレム・コールハースとOMAも、ロッテルダム港に対し、MAASVLAKTE(Sの代わりにドルの記号を用いていることに注目されたい)と命名された計画を練って、問題提起を行う。現在、社会法と計画法の大部分が宙づりになっている場所である。そして、ついに、だがとりわけ芸術家のユープ・ファン・リースホウトは、ロッテルダム港地域に自らの専制的なコミュニティをもつことを望み、そこで彼は所有する豚を屠殺したり、自分で作った銃という手段を用いて自前の法と秩序を制定するつもりだ。これが実現するかどうかは別にして、彼らがはっきりと表明した傾向は、革新的な変容が進行していること、あるいはオランダ社会がまだ終わっていないことを示している。それゆえ、近い将来にはもっと究極の建築プロジェクトが出てくることが期待されるかもしれないし、全くそうではないかもしれない。

●Bart Lootsma/歴史家、評論およびキュレーション (建築、デザイン、ヴィジュアル・アート)

Architecture for the Second Modernity

Bart Lootsma

From the end of the nineteen eighties on, there have been some major changes in Dutch architecture, that are due to globalization and individualization on the one hand and the congestion of The Netherlands on the other. It is interesting, however, to see that in the nineties these changes caused a new awareness about themes and issues that are quintessentially Dutch, be it that they are not always so clearly visible. Even if an important part of contemporary Dutch architecture, urbanism and landscape architecture superficially seems to continue to use the discoveries of the Modern Movement as a kind of toolkit, it is more than radically different from it at the same time.

In one of the latest issues of *A+U* on Dutch architecture, Peter Buchanan presents recent Dutch architecture as merely a McLuhanian sunset effect' of modernism, because of what he sees as "relative indifference to context, the emphasis on invention for its own sake, the tendency to the graphic and the visual rather than the physical and tactile, and many other factors". 1) The problem is that the context Dutch architects work in is a different and much more specific one than Buchanan expects it to be; that they are simply forced by this context to come up with new solutions; that the graphic and visual only play a role in the communication process that leads to a design; and the truth is that there are hardly any contemporary architects that are more physical and tactile than for example NOX and Van Berkel & Bos—maybe not the physicality and tactility Buchanan likes to see, but one based on the latest constructive and climatological technologies and media.

Of course the Dutch landscape still clearly shows the traces of large-scale modernist interventions that were for the largest part realized after the second World War. They can be seen in the layout of the polders, that were literally largely shaped by the vision of De Stijl-member and CIAM-president Cornelis Van Eesteren, who was also responsible for the extensions of Amsterdam from the nineteen twenties on. They can be seen in the agricultural areas, that were reorganized and redesigned on the basis of the Land Consolidation Law from 1945 and they can be seen in the dams and dikes that were built along the coast and the rivers according to the Delta-act of 1953. And of course the image of The Netherlands is still largely dominated by

modernist buildings and quarters that were realized in the period of reconstruction. But this period is clearly over. Not only the optimistic atmosphere in which all these gigantic projects were realized, but the whole political and juridical system recently underwent a major change that forces the Dutch to enter a Second Modernity—which is something radically different than a secondhand modernism. It was Rem Koolhaas who questioned the Dutch modern tradition already so radically in a symposium he organized in 1990 at the TU Delft, that no serious Dutch architect would dare to simply continue that without asking some fundamental questions. Modernism in the sense Buchanan uses it became a dirty word since then, almost an insult. 2) Instead of that came a serious interest in issues that deal with modernity: the whole complex of contemporary factors and forces that shape our lives and our society, from the sociological to the technological. Architects try to produce buildings that will accommodate these new developments.

After the Second World War, The Netherlands developed into a typically European welfare state', in which the government tried to play a crucial role in almost all the aspects regarding the well-being of all its citizens: from housing, culture and education to social and medical security and more; and just as well by means of immediate financing as by means of laws, regulations and planning. This welfare state came under fire. First in the nineteen seventies, when The Netherlands went through a process of radical democratization, resulting in extreme forms of advocacy planning in architecture and urbanism. And after that a second wave of criticism followed in the nineteen eighties. This was partly because of global political and economical developments. The unification process of Europe will finally lead to the disappearance of national borders and therefore the laws of the different countries have to be adapted to each other. The different currencies will disappear and be replaced by the ECU. The process that leads to this one currency has consequences for the national budget and for that reason The Netherlands can no longer afford costly subsidies on public housing. These subsidies ceased to exist in 1994, which has as a consequence that the state no longer has the absolute control over planning activities: the market suddenly plays a decisive role and this results suddenly in an increased demand for individual houses. In a different

way the welfare state remains present in countless new rules and regulations, in advocacy and in jurisprudence, but it is not so clearly recognizable any more. The society has become a complex field of 'mobile forces', as Van Berkel & Bos call them. 3) Sociologists like Ulrich Beck, Anthony Giddens and Scott Lash see this new situation as a Second Modernity. 4) One might be tempted to see this situation as comparable to the 'horizontal organization' in some companies, but I would say that is to idealistic. One never deals just with individuals, but they almost always represent abstract systems' (as Anthony Giddens calls them) of expertise and power or they are confronted with or protected by these systems. For the architect, this means for example that he does not deal with a context that is just morphologically or typologically determined any more, but that to this context several invisible layers of rules, regulations and demands from different parties are added. This could be regulations about climate, noise, light, safety, fire, etc., but also demands from people that want to live in their own highly individually customized house or from neighbors that want to keep a view or privacy, and so on and so on. It was OMA that started a design method that was largely based on the visualization of these kind of additional spatial building envelopes, but it is MVRDV that systematically investigates the possibilities and impossibilities they produce in their DATASCAPES. In fact, all the projects of MVRDV are a result of these kind of investigations. The traces of all the different layers of datascares always remain somehow visible in the final result, that often looks fragmented or even cartoon like. Van Berkel & Bos use a similar input, but they treat the data in the computer in such a way that they produce a much more coherent, continuous, smooth and synthetic result. One could say that where MVRDV use the computer to produce a kind of spatial spreadsheets and statistics, Van Berkel & Bos are more interested in morphing techniques. But whatever technique architects may be interested in, this is not because they just want to invent for the invention. They are forced to come up with seemingly radical solutions, because of the increasing congestion of The Netherlands, that have today the same population density than Japan, probably even a higher one. This puts the system under high pressure.

The many parties involved in any architectural

or urban project in The Netherlands also lead to a situation in which there always has to be a lot of 'overleg'. Overleg is a word that seems to be typically Dutch and has no exact equivalent in English. I will therefore use the description that I found in a book on the Dutch customs and etiquette by Hunt Janin: "A literal translation would be 'to consult together', but the British phrase 'in conference' is more to the point. Overleg is a slow, consensus-building exercise in which everyone at a meeting has the opportunity to participate. Teamwork is important here. The goal is not to rubber stamp the chairperson's own preference for Solution A but to exchange information and to hammer out a workable compromise which all the participants can endorse. Reaching a decision by this process can be time-consuming, but the Dutch believe that things move faster in the long run if the chairperson can announce with pleasure, *de klokken zijn gelijk gezet* -the clocks are all showing the same time, i.e. we all agreed on Solution B." 5) Of course, a lot of negotiating and compromising is involved here, that more than often leads to halfhearted and unclear results. On the other hand this culture of overleg and consensus has also led to a situation in which employers and employees can negotiate together not only about this year's wages, but are also able to think about developments over a longer period of time. In this 'Poldermodel' as it has become known it can even happen that workers' unions themselves do not want the highest possible result for this year, but voluntarily ask for less, because this will create more work and a more sustainable economy in the long run. The same kind of overleg works between cities and investors and between contractors and architects. This is also why Dutch architecture and urbanism should never be read as a kind of story of individual heroes that are just by themselves capable of producing these wild and outrageous buildings -how much some of them still like to play that role and how much it is perceived that way from abroad. Dutch architects are not so much creative individual geniuses that control the planning process from the beginning to the end, or from the first sketch to the detail, but the outstanding Dutch architects are the ones that know to find the right place in a process, like a surfer knows which are the right waves or like a striker in soccer that has developed a feeling for where the ball will come, anticipating a long series of passes from his team mates, teasing some defenders maybe, and finally scoring.

Globalization certainly plays a more crucial role in The Netherlands than in other Western European countries. Situated in the delta of several rivers -the Rhine, the Meuse and the Schelde- The Netherlands have always been an important main port for the rest of Europe. After the second World War, Rotterdam even became the largest port in the world and The Netherlands still have the highest density of trucks in Europe. With the increased individual mobility because of car traffic, the intensification of air travel and -transport and the new media networks the position of The Netherlands as the 'Main Port' to Europe is however under pressure. In the current situation of a radical advocacy planning as described above and the increasing congestion it is difficult to take radical measures to improve or reinforce this position. The Netherlands are still not really linked to the networks of high speed trains in Germany and France, because it has appeared difficult to fix the route of the new railway lines. The same happened with routes for new cargo trains to Germany. Traffic jams torture the inhabitants and visitors of the western part of Holland. The national airport, Schiphol, can not expand any more on its present location because of political pressure from environmentalists -probably it will be moved to an artificial island in the North Sea. And our national pride, the Rotterdam harbor, is difficult to manage and to expand because of the fact that it has proven easier to establish borough councils in Rotterdam itself than to form a larger administrative unit, a kind of city-province including all cities and villages along the port. But another option could be that the Rotterdam harbor would develop more into a kind of global control center, that, like a flight control center, would control all shipping movements all over the world by means of a satellite tracking system. That would make it possible to make a much more efficient use of physical space in the harbor, just like systems that are used for industrial 'just in time' production, and still would enable Rotterdam to play a leading role in shipping

The networks of abstract systems of rules and regulations, urban frontiers and advocacy planning have become so tight and suffocating that some people have the feeling they block the economical development of the country or simply reduce the individual freedom too much. The last couple of years several architects and even artists came up with different proposals for free zones that vaguely

remind of the special economical zones in China, that are completely organized to produce a climate for free trade. Adriaan Geuze and West 8 proposed a series of Innovation and Acceleration zones along the port of Rotterdam, around Schiphol, in Zuidelijk Flevoland (the most recently developed IJsselmeerpolder) and near Maastricht in the extreme south of the country. In their vision, the optimistic atmosphere of growth and innovation of the nineteen fifties could revive. Rem Koolhaas and OMA developed a similar polemical plan for the Rotterdam harbor, named MAASVLAKTE -note the dollar symbol instead of the S- in which a large part of the current social and planning laws would be suspended. And last but not least the artist Joep van Lieshout wants to have his own autarchical commune in the Rotterdam harbor area, where he would slaughter his own pigs and provide his own law and order by means of the guns he produces himself. Whether these projects will be realized or not, the tendencies that are manifested through them show that the process of radical transformation or the Dutch society is not over yet. So maybe there will be even more extreme architectural projects to be expected in the near future -or none at all.

● Historian, Critic and Curator in the fields of architecture, design and the visual arts.

1) Peter Buchanan, Introduction, *Netherlands Now*, "a+u" 98:09, 336.

2) See: Bernard Leupen, Wouter Deen, Christoph Gräfe (ed.), *"Hoe modern is de Nederlandse architectuur?"*, with contributions by ao. Rem Koolhaas, Ed Taverne, Ben van Berkel, Bart Lootsma and Hans van Dijk, Rotterdam, 010, 1990.

3) Ben van Berkel, Caroline Bos, *"Mobile Forces"*, Berlin 1994.

4) Ulrich Beck, Anthony Giddens, Scott Lash, *"Reflexive Modernization, Politics, tradition and aesthetics in the modern social order"*, Oxford, 1994.

5) Hunt Janin, *Culture shock*, "a guide to customs and Etiquette".

オランダをこよなく愛する私にも何年経ってもかなわないと思うことがある。それは世に有名なオランダ人の究極のコスト・パフォーマンス感覚だ。ヨーロッパで日本の新しい車を売り出そうとすると、オランダで市場調査をすると良いという話を聞いたことがある。なぜならオランダの市場は価格と性能のバランスに対して非常に厳しく、安くて良い車でないと絶対売れないからだという。オランダ人の財布の紐を緩めさせるのは簡単なことではない。それは日常的なレベルから組織のレベルまで、そして景気の良いときでも悪いときでもオランダ人のコストに対する冷静さを見ていると、この国は何があっても減びない、と痛感する。早朝の通勤列車のファーストクラスに座っているエグゼクティブがスーツケースをあけて、ピーナツバターなどが挟まった食パンの束をビニール袋から取り出して、水筒からコーヒーをついで一服している、などという風景は信じられないかもしれないが当たり前のことだ。ビジネスにおいても、付加価値をつけて少しでも高く売り、そしてそのような付加価値をこよなく楽しむ日本人にとっては、徹底的にコストを下げ、価格を下げてその枠で許される最大限のクオリティの商品を大量に供給するオランダのビジネスを目の当たりにしたときに、目からうろこが落ちるだろう。オランダほど企業のトップクラスの人々がエコノミークラスの飛行機チケットで出張に行かされる国はないし、お金持ちであればあるほど質素な格好をするのが美德であるカルピニズムの生き方は、依然としてこの国の文化の中核である。

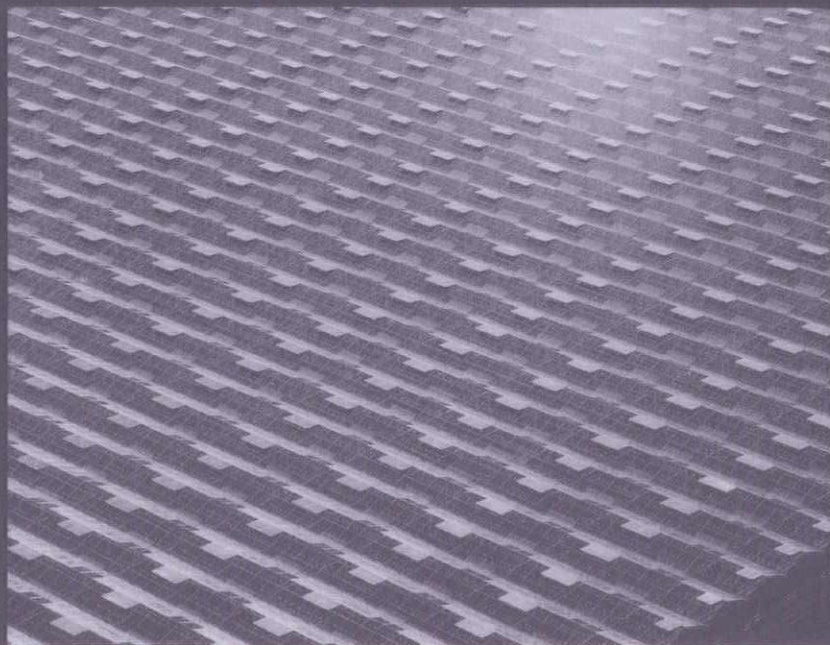
いかにお金をかけずに最大限の効果を上げるか。言うまでもなく、都市計画と建築の現場でも非常に厳しい制約となる。オランダの建築費の平米単価の平均はドイツの半額であり、スイスの3分の一である。その反面、新しい考え方、若い建築家、変わったデザインに対する理解は広く、若手に与えられる機会は他のヨーロッパの国とは比較にならないほど多いだろう。コストの問題も含めて、新しいアイデアによって問題解決ができるとなれば、これまでになようなデザインであっても、若い建築家であっても、やってみようじゃないかと考えるのが、オランダのプラグマティズムでもある。West8のボルネオスホールンブルグ島の都市計画が成功を収めたのも、中層集合住宅並みの密度の住戸を実現しながら3層という低層で、各戸とも1階に個別のエントランスを持ち、自分だけの中庭があるというマーケットのニーズにはまるフレームワークを逆手に取り、新しい都市計画タイポロジーを生み出したことにある。いかにクリエイティブに合理主義と付き合うかというのがオランダにおける建築都市計画を考える上でのひとつの鍵である。(吉良)

keyword | 05

Pragmatism

.....合理主義

構成・編集=Keyword Group

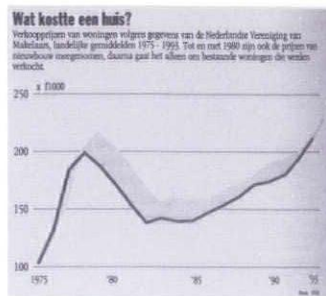




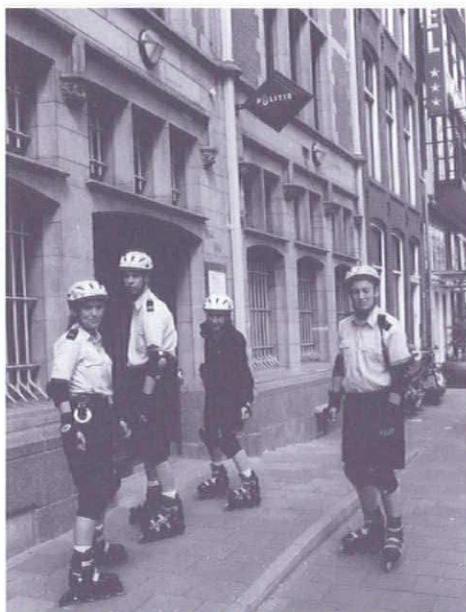
01 | 効率性第一



02 | 理想の主婦



03 | 住宅ローン



04 | ローラースケート・ポリス



05 | ハウスボート



06 | 小銭を数える修道士



07 | ボルネオ・スボルンブルグ都市計画



08 | チーズの薄切りナイフ

01—オランダは効率性の国である。そして人口密度も高い。空港も港も高速も住宅地も職場も何もかもが近接している。その結果、この写真のようにふと見渡すと住宅もオフィスも牧草地も一望できてしまうような場所がたくさんある。

02—オランダの主婦の役割は財布の紐を締めることだ。無駄なことに一切支出しない儉約性はオランダ人のDNAの一部と思われるほど。彼らは質素さを積極的に生きている。ファッションも華美さ贅沢さは受けない。「アクト・ノーマル」(普通にやれ)は、オランダの社会規範だ。提供=アムステルダム歴史博物館

03—オランダでは住宅ローン金利は税制優遇措置が取られ、国民の住宅所有比率は急速に高まり、住宅ブームを招いている。ここ数年の住宅の価格の上昇はそのためだ。賃料補助、ソーシャル・ハウジングへの政府の助成金などの負担を減らそうという政府の戦略は大成功。©CBS

04—合理的で効率第一のオランダ人は体裁や伝統を平気で無視して、新しさや先進性を追求する。人気とりのためにおまわりさんにローラースケートを履かせて警備させてしまうのもオランダならではの。提供=アムステルダム警察

05—サンフランシスコではハウスボートに住むことはファッションだが、オランダではプラグマティズムのひとつである。場所の限られた運河のある旧市街はボートによって居住面積を拡張しているのだ。ボートハウスには電気もガスも引かれ、郵便も配達される。運

河のある旧市街の家に住むのと比べれば値段もかなり安い。©藤原かすみ

06—オランダ人は儉約家でお金にケチな国民というレッテルを貼られた。質素を美德とするカルビニズムに裏付けられ、合理的でないお金には一切支出しない。しかしオランダ人は開発協力などNGOには多くの寄付をする人々である。NGOやボランティアは暇人の趣味ではなく、必要なものと理解しているのだ。

07—この計画でWEST8は、アムステルダムの近くで郊外型の戸建て感覚の家に住みたい、という人々の夢に合理的に対応し、さらにそれをもとに新しい都市デザインを展開した。提供=アムステルダム市DRO、©Hans Brons

08—オランダ人は朝食にパンと1~2枚の薄切ったチーズを食べる。このチーズが見事に薄い。かつては一度に数枚もチーズを食べるのは贅沢として嫌われた。

©Iwan Hamelers

09—オランダは湖の周りに堤防を築き、干拓し、土地を造り出してきた。国家の必要に応じ、国土を造り、変えてきた。自然すら人工的に作りだし、作り替えてきたのである。そして今も変わらず、すでに2005年、2030年の国土計画が作られ、その開発のヴィジョンや場所等が決められ、着々と進められている。



during Roman times



9th century



13th century



17th century

09 | 土地と自然を操作するオランダ人



12 | エグゼクティブのブリーフケースの中身



13 | OVカード



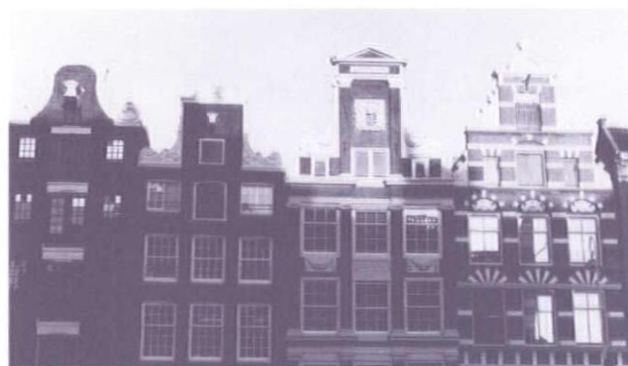
15 | 高速道路を横切るジャンボジェット機



10 | 歴史的ファサードにくっついた荷物用フック



11 | FEBO



14 | 間口にかかる税金



16 | 裏庭のパーティー

10—アムステルダムの運河沿いの町屋は、16世紀からの美しい町並みとして世界中の観光客を集めているが、ファサードには荷物を上の部屋へ上げるためにフックがついている。間口が狭く廊下も階段も狭い家に荷物を運び込むためだ。ファサードが傾いているのは、荷物がぶつからないようにするためだという。これも問題解決志向のオランダの合理主義を象徴している。©Iwan Hammeleers

11—オランダ人の食生活はもともと機械的で効率的だが、彼らのファースト・フード方式はそれを象徴している。最も数の多いFEBOではコロッケやソーセージがひとつづつガラスの箱の中に入っていて、好きなものにお金を入れて取り出す。効率的過ぎて味気ないがFEBOの前はいつも混んでいる。©Iwan Hammeleers

12—早朝の列車のファーストクラスに座ると、新聞を取り出すトップ・エグゼクティブのブリーフケースからはまず間違いなく、薄切りチーズをはさんだ食パンの入った透明ビニール袋とオレンジ、バナナ、りんごなどのフルーツが目飛び込んでくる。極めてバランスのとれた健康的朝食とはいえ、何度見てもショッキングだ。オランダ人の倹約性と合理性がいかに徹底しているかを実感する瞬間だ。©Iwan Hammeleers

13—オランダでは何でも統合（インテグレーション）してしまう。このカードはオランダ全国の列車、電車、地下鉄など、公共交通は何でもOV（公共交通）の統一カードで、これを持つと全国美術館統一入場カードももらえる。ちなみにオランダの学生は、奨学金と共にこのOV

カードを支給されている。お金ではなく、なるべくサービスで補助をするという体制である。

14—アムステルダムは運河を築いて街を作ってきた。運河沿いの場所は限られているし、流通拠点ともなるため貴重だ。そこで17世紀には間口の大きさに応じて税金が設定され、間口の小さい、しかし奥に細長く伸びた建物となった。これもオランダ人を実際のかつ倹約的性格にした風土のひとつかもしれない。©藤原かすみ

15—スキポール空港脇の高速道路を走っていると、突然トンネルの上の道路を巨大なジャンボ機が通っていくのに出会う。飛行機が道路を越えた向こう側の滑走路に向かっていく姿である。アムステルダム市から15分、花の生産地に近い、すべてが密集したエリアに空港をつくるということも起こり得る。そうならば飛行機が高速を横切れば良いと、現実的で自由なオランダ人は考えたのだろう。

16—みんなそろって話ができれば良い、というのがオランダのパーティーの考え方。だから服装もラフだし、食べ物も大したものはない。ポテトチップにサラダにたくさんのビールとワインといった具合でスーパーで適当に何か買ってくるだけでも楽しいパーティーができるということをオランダにしていると知る。

建築と都市をトータルに操作するツール、 インフラストラクチャーとランドスケープ 建築家ヴィニー・マースに聞く

——MVRDVの設計していく上での問題意識とは、どういったものなのでしょうか。

大きな問題意識としては、3つ挙げることができます。まずひとつは都市の発展をどう受け止める、それをどうワン・ステップ先に進めるか？次に、どのように最近のカオスなどの都市議論から抜け出すことができるのか？そして、カオスを理解するための、または取り扱うためのツールを考案することができないか？我々は、このような3つの大きな問題に取り組んでいく上で、インフラストラクチャーは非常に重要な要素であると考えています。

——都市計画と建築の設計の接点について話してください。

例えばアルメールでは、4つの事務所が都市計画を依頼され、合同でワークショップを行ったのですが、建築が都市に気化していくように、建築と都市という両方の視点からのテーマで行なわれました。私は建築がどうしても操作不可能で、平凡で月並な都市の広がりを持った「海」を操作するためのツールに成りつつあるのではないかと考えています。つまり、そこでの建築と都市はもうすでに繋がっているのです？

——どのようなプロジェクトだったのですか。

アルメールでは3万戸の新しい住宅の計画、そして町がどのように発展していくべきかを考えたインフラストラクチャーの提案を求められました。3万戸をどこにどう配置すべきかといった提案です。アルメールは典型的なオランダの新興都市で、美しいランドスケープが町を囲んでいます。まるでツンドラ草原のようで、それはオランダでもまれな広範囲にわたっています。もともとこの広大な平地に3万戸の住宅が計画されていて、この小さな自然一面に建設されそうだったのですが、私たちは自然を残して3万戸の住宅を既存の町に挿入することを提案しました。町とランドスケープは高速道路A6号によって切断されています。この高速道路という空間は都市の巨大な「穴」です。そこは騒音の問題があり、何にも使われていません。そこで

今回3万戸の住宅全部をそこに建てることによって、この都市の「穴」の問題に触れるのによい時期ではないかと思いました。つまり、この都市を分断している土地を「連結」するためにも使えないかと考えたのです。長さ6km、奥行き500mの高速道路の空間に3万戸の住宅を挿入することによって、突然、都市のオブジェ、組み立てられたブロックのようなものが出来上がることになります。問題は、高速道路のアクセスです。これはアルメールだけでなく、オランダ全体の問題ですが、もっともアクセスしやすいルートに繋がっているようにみえて、アクセスの仕方、セーフティ・ゾーンを考えると実はまったくそうではないのです。そこで我々がスタディしようとしたのは、アドレス(番地)の数を最大にすること(高速道路に面した建物の敷地面積を最大にする)、セーフティ・アクセスの角度とそれがどのようにスピードに関係しているか、ということです。いくつかの平行な道路網を提案することによってネットワークをつくりあげ、高速道路から車で、直接かつ簡単にガレージ、プラザ、建物の中に入るシステムを提案しました。

——この後、国の調査機関と共に国に交通網に関する調査を行いましたね。

我々が提案したのは、ロッテルダムの国道A20号に関するものです。高速道路では同じレーン数でもスピードの違いによって必要な容量は変化するので、異なるスピードのためのゾーンを設定した場合、もっと多くの車を走らせることが可能で、輸送、交通にとって、もっとアクセスしやすくなるのです。こうすれば新しい道路が必要でないことが分かりますし、エコロジカルなのです。高速道路近辺は都市のウィーク・ポイントであり、そう考えられている所を通過しています。つまり市街地の外です。この場所をいかに魅力的な場所に变えるか。そしてどのように立体的な高速道路を適用するか。つまり、違った高さからアクセス可能な3次元的な高速道路広場の提案です。もしそこに建物があれば、住所自体が「100km、90km、70km」というようなものになるでしょう。高速道路と住所の複合です。これは、バーティカル・アーバンイズム(垂直指向の都市論)



で、これはオランダの建築家、都市計画家が長い間求めている希望、宿命のような気がします。

——あなたの「過密度や過密のプログラム」が、水平指向でオープンな広がりや好むオランダの社会や人々を説得できるのでしょうか。

オランダの都市は人口密度が非常に高く、そして都市は国中に広がっています。そういう状況で、人々は今現在、フルネス(飽和の状況)を体験しています。どのように、そのフルネスを扱うか、というのは大きな問題です。ベルギーに移住したり、休暇にオランダの外へ行くのは当たり前になってきているのです。だからこそ、このオランダの水平指向な空間を操作するので、ここに密度を持ち込むことによって、他の空間をつくる事が出来るのです。我々はオランダのフルネスに気付くしかないのです。

——あなたがたのプロジェクトはインフラが重要視され、ランドスケープに密接に繋がっているところが面白いですね。

それにはふたつの理由があると思います。ひとつには、ランドスケープは都市と建築を考える上で重要なツールであり、そして多くの人々に好まれていると言うことです。もちろん、ランドスケープの欠如という現実もあります。しかし、私はさらにランドスケープはカオスを扱うツールになり得るのではないかと考えているのです。なぜならば、ランドスケープは都市を概観する、都市の実体であり、そして、ランドスケープは、都市と建築のトータルネス(総合性)を意味していると考えているからです。(翻訳: 大松俊紀)

(1998年11月19日、於: MVRDV事務所)

profile

ヴィニー・マース | Winy Maas

1959年オランダ、スウェーデン生まれ。1978-83年RHSILボスコープでランドスケープを学び、1984-90年デルフト工科大学で建築・都市計画を学ぶ。ナイロビのユネスコ、カウパー・コンパニオン、OMAを経て、1991年ヴィニー・マース、ヤコブ・ファン・リー、ナタリー・デ・フリスの3人でMVRDV設立

MVRDV

MVRDV

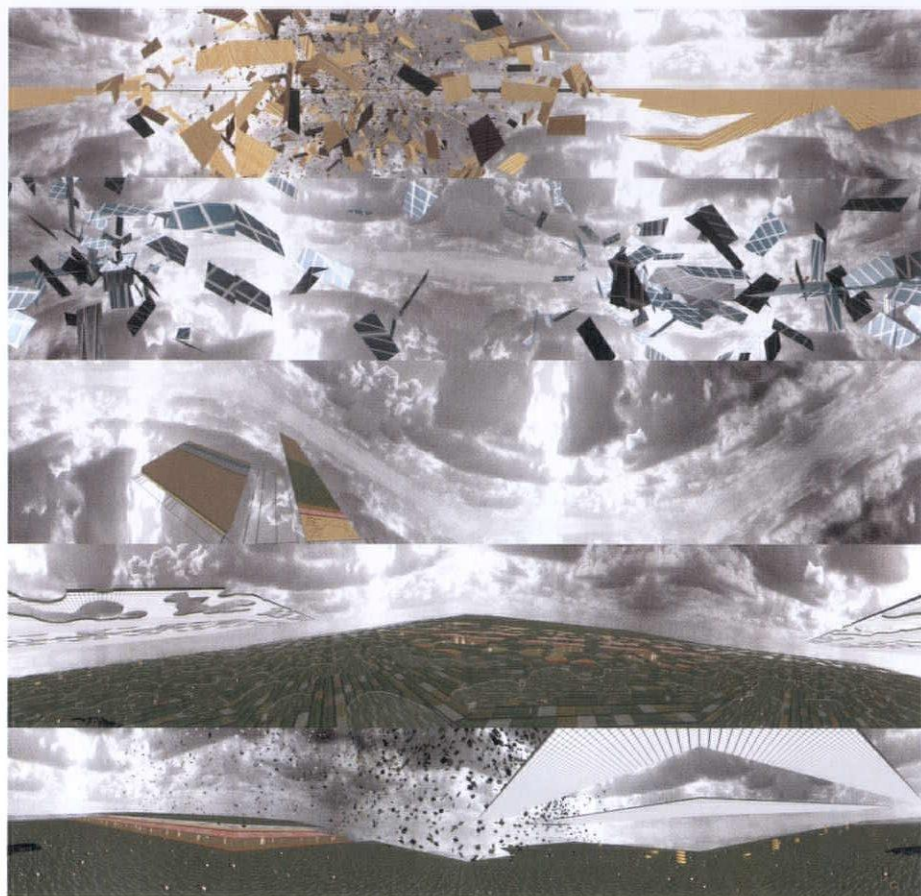
仮想都市「メタシティ／データタウン」の3Dシミュレーション

Metacity / Datatown

デン・ハーグ_1998年
Den Haag_1998

このプロジェクトはデータに基づいてデザインされた仮想の都市である。ここではもともとなる地形はなく、全ての地形がデータを表象しているのだ。そして高速鉄道で1時間の距離である400km²の面積で現在のオランダの4倍の人口密度（現在372人/km²）の都市に必要なあらゆる活動（食・住・労働・レクリエーション・ごみ処理等）に関するデータをもとにしている。メタシティ／データタウンは、都市と都市に関する数量を明らかにするために都市活動をアルファベット順に並べて構成されている。そしてそれぞれの活動に関して複数のバリエーションがデザインされた。（H.イブリング）

用途：展覧会プロジェクト
規模：16,000,000ha
展覧会会場3.5m×3.5m



Agriculture-sector

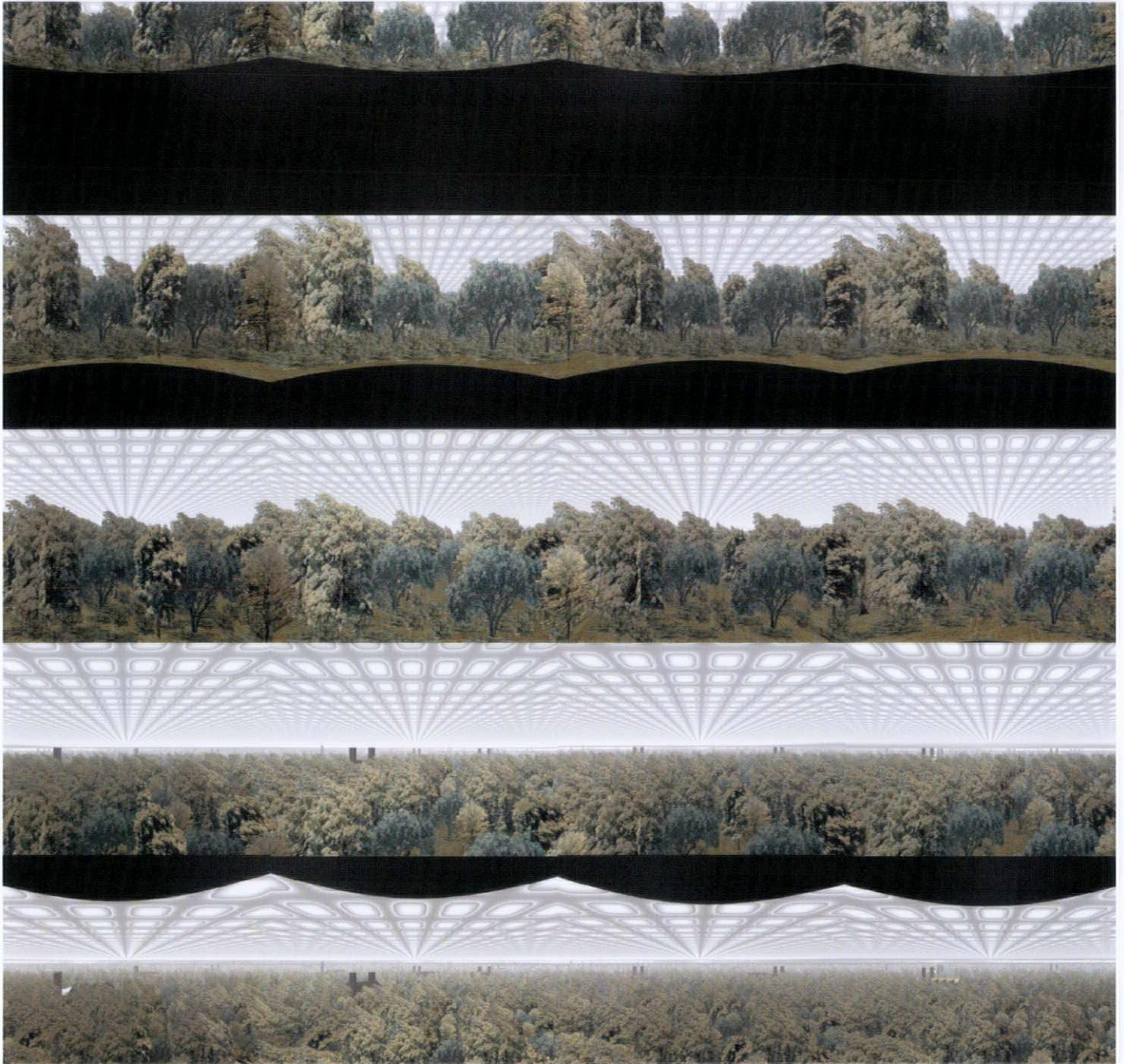
1991年に設立されたMVRDVの5つの文字は、この事務所を主宰する3人の建築家の頭文字から取ってつけられたものである。ヴィニー・マース、ヤコブ・ファン・ライス、ナタリー・デ・フリスがこの3人だ。彼らが設計してきた建物は、現在オランダでも最も注目している。彼らは90年代始めから、独自の建築と都市計画のアイデアによって旋風を巻き起こしてきた。これまでに実現した作品に、ホーホ・ペデューにある国立公園の管理人の家、アムステルダムのおスドルプにある高齢者のための集合住宅、ヒルベルサムのVPROおよびRVU放送局オフィスなどがある。また彼らは2000年のハノーバー万博のオランダ館も設計している。彼らの建築は、空間パズルのデザインと呼ぶことができるが、彼らは極めて精巧にこのパズルを仕組み、そして解き明かしている。合理性と説明不能な要素を巧妙に組み合わせることによって、MVRDVは常に思いもよらないデザインを実現してきた。建物の機能と建築基準法などの決まりを創意に富んだ方法で取り扱い、組み合わせているのだ。そしてそこには、コールハースに代表されるようにオランダの建築家によく見られるアイロニーが込められている。MVRDVは、最近『FARMAX』という本を出版した。そこには彼らの建物、デザイン、研究、そしてエッセイがまとめられている。（H.イブリング）

profile

MVRDV: 1991年 W.マース、J.V.ライス、N.D.フリスの3人で設立
ヤコブ・ファン・ライス | Jacob van Rijs: 1984年アムステルダム生まれ。1983-90年デンハーグ自由アカデミー、デルフト工科大学で学ぶ。ラベニャ&トレス、ファン・ベルケル&ボス、OMA勤務
ナタリー・デ・フリス | Nathalie de Vries: 1965年オランダ、アッピンゲダム生まれ。1984-90年デルフト工科大学で学ぶ。ラベニャ&トレス、ファン・ベルケル&ボス、メカノ勤務

Behind the five letters of MVRDV, established in 1991, are three architects responsible for some of the most notable recent buildings in the Netherlands: Winy Maas, Jacob van Rijs, and Nathalie de Vries. Since the early 1990s they have been creating astir with their original ideas about architecture and urban design. Among their completed projects are porters' lodges for De Hoge Veluwe national park, housing for the elderly in Amsterdam-Osdorp, and office buildings for the VPRO and RVU broadcasting companies in Hilversum. They have designed the Dutch pavilion for the Expo 2000 in Hannover.

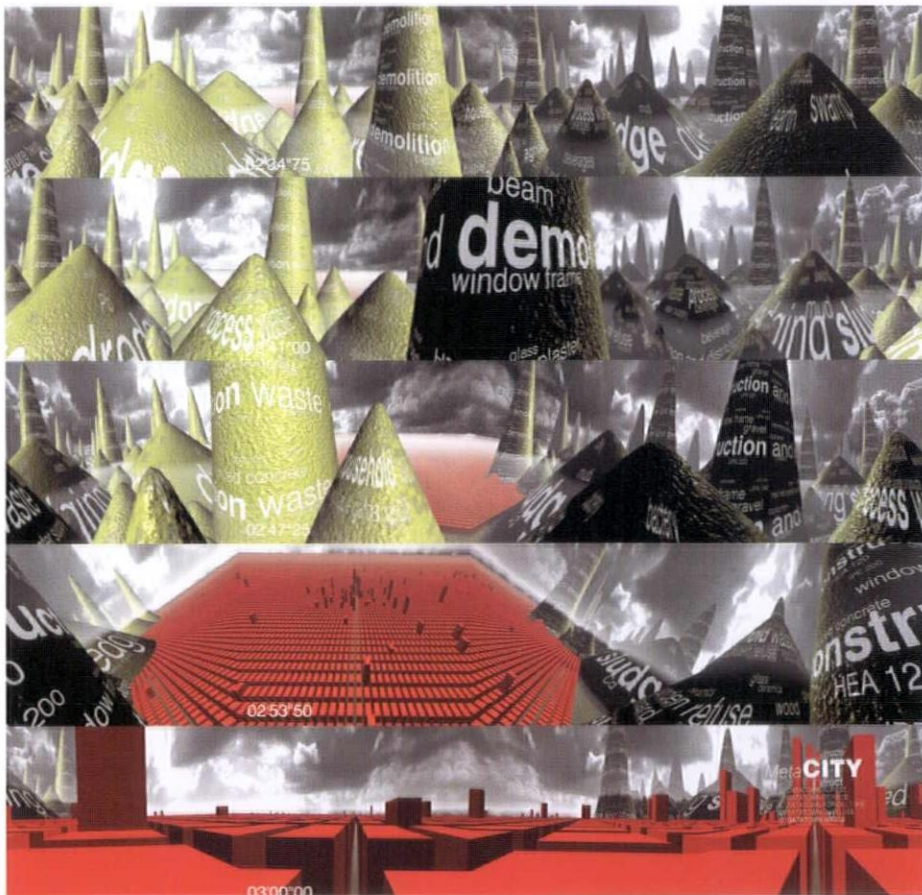
Their architecture can be described as the design of spatial puzzles, which they devise and solve with equal ingenuity. With a curious mixture of pragmatism and intractability, MVRDV continually manage to produce unexpected results. They combine an inventive handling of building programmes and of rules and regulations with an irony common to other Dutch architects, most notably Rem Koolhaas, with whom two of the three worked for some time. MVRDV recently published the book "FARMAX", a collection of their buildings, designs, studies, and written work by themselves and others. (H. Ibelings)



CO2-sector



Medical-sector



Waste-sector

Credits

concept
mvrdiv
Winy Maas, Jacob van Rijs and Nathalie de Vries

research & production
Bas van Neijenhof
Mathurin Hardel
Ximo Peris Casado
Margarita Salmeron Espinosa
Eline Wieland
Marino Gouwens
Ali Rahim
Kok Kian Koh
Penelope Dean
Christoph Schindler
Nicole Meijer
Paul Ouwerkerk
Joost Grootens

Editing
Eline Wieland
Marino Gouwens
Bas van Neijenhof

soundscape
Joost van Rijckevorsel
Marcel van Rijckevorsel

Hardware
Marino Gouwens
Trigital (Amsterdam)

Mexico City film
Jose Castillo

Sao Paulo film
Patricia Cezario Silva

Metacity / Datatown is made possible by financial contributions of Stroom HCBK (The Hague), het stimuleringsfonds voor de architectuur (Rotterdam) and Het fonds voor beeldende kunsten, vormgeving en bouwkunst (Amsterdam).

オフィス・パーク都市計画「パークレーン」

Urban design "Parklane"

アイトホーフェン_1998年
Eindhoven_1998

Might it be a viable proposition in the coming decades to radically strengthen the green image of Almere, the most successful new Dutch polder town, and combine this with the required growth of an extra 20,000 to 30,000 houses in the period 2005-2015, by concentrating this growth in the existing urban area? And might it also be feasible to fill Almere with a new, inner urban environment, thereby avoiding overcapacity of the existing daily living environment? Could we then, after fifteen years of avoidance planning, bring about a fusion of periphery and centre by celebrating rather than avoiding the hindrance zones of the urban programme?

The key to these questions lies in the position of the A6 highway. If in other places urban corridors are found in the periphery, in Almere just such a corridor cuts through the heart of the town. By siting most of the building programme in this zone, a 'boulevard' could emerge where dwelling and work would gain more than local significance by virtue of their position

on the A6.

Such a boulevard would serve a host of utterly disparate 'addresses' strung along the A6/A9 from Zandvoort to Lelystad. The North Sea would consequently connect Almere Strand, Weerwaterstad (of which more later) and the waters of Oostvaardersplassen in a chain of landscape and urban elements that would include the coming floral extravaganza Floriade 2002, Schiphol, the woods south of the capital (Amsterdamse Bos), Amstelland green zone, Amsterdam-Zuidoost (Bijlmermeer), the Arena stadium and Naardermeer lake. Pumping more programme into this boulevard would increase the chance that the A6/A9 could be reconfigured as the elongated pivot of the north flank of the Randstad.

Almere now



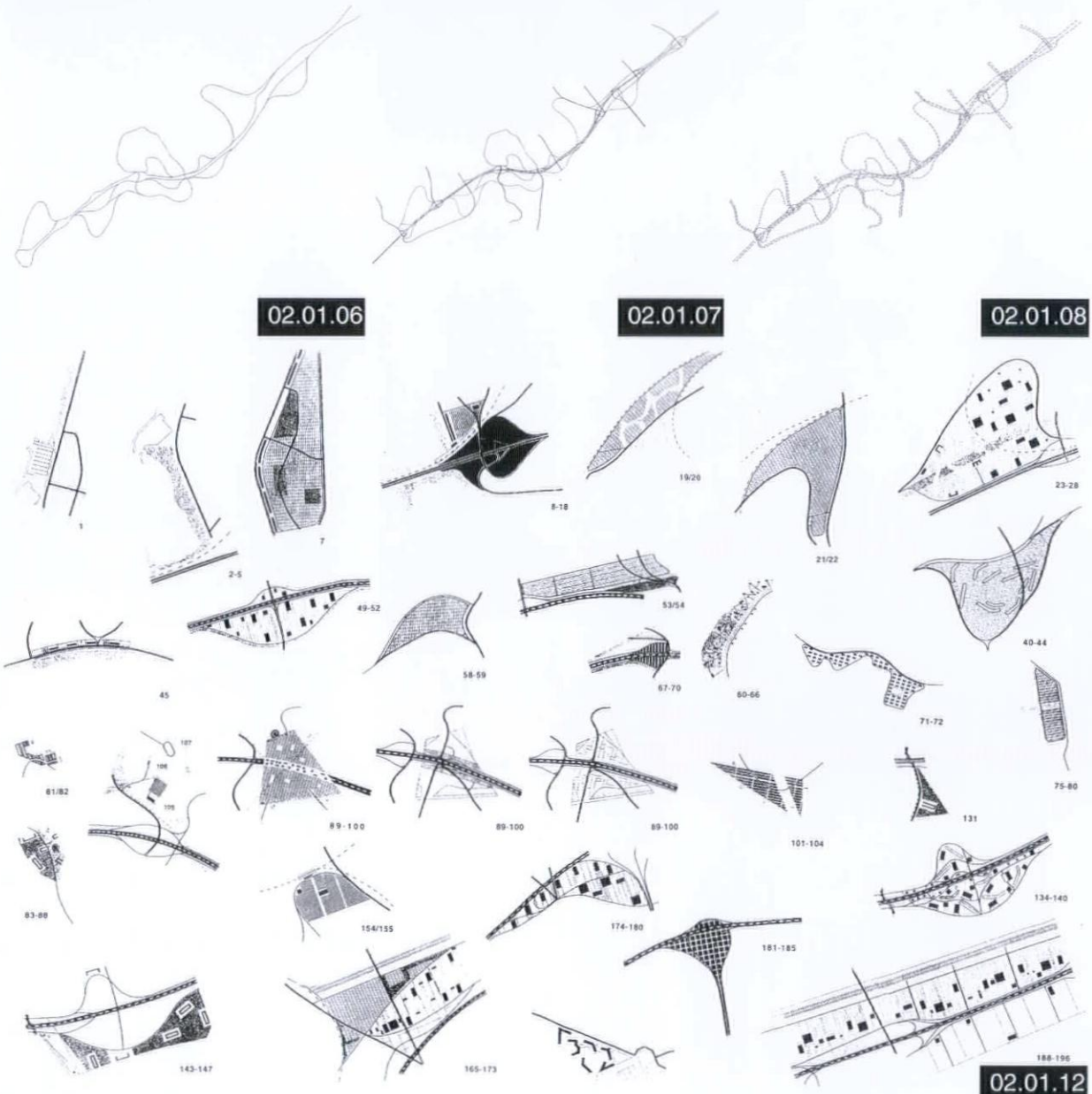
02 infrastructure / 01 A6 boulevard

02.01.02

parallel lanes

boulevard

directions



02.01.12

このプロジェクトは、これまでの高速沿いにつくられてきたビジネス・パークのコンセプトとはまったく異なるアプローチをしている。高速道路とオフィス・パークが織り込まれているのだ。道路が分岐するたびにそれがオフィスの敷地となる。この結果どのオフィスも道路に対して最も適した敷地を得るこ

とができる。そして道路が分岐すればするほどオフィスの敷地は増加していくというわけだ。この計画は特定の場所に対するプロポーザルだが、MVRDVはこの計画は高速沿いの開発の将来的なモデルとして提案している。(H.イブリング)

用途：オフィス・パーク都市計画
敷地面積：680,000m²
建築面積：210,000m²
延床面積：260,000m²

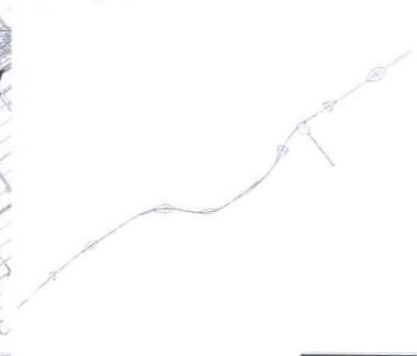
Almere 2015?



proposed envelope Almere



existing Almere



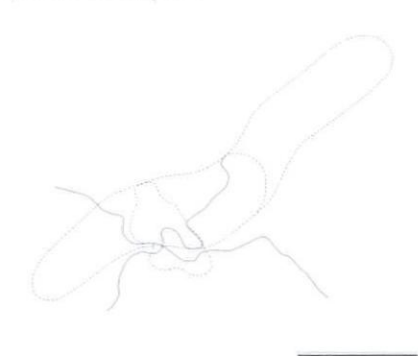
02.01.03

02.01.04

02.01.05

public transport

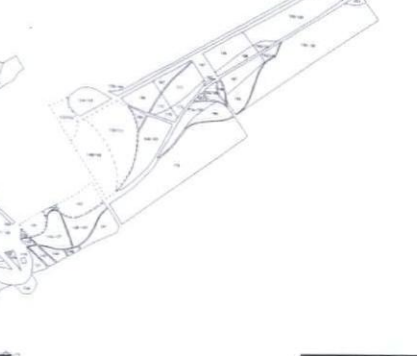
addresses



02.01.09



02.01.10



02.01.11



02.01.13



02.01.14

02.01.15

02.01.16

A6 Boulevard, 1996

Town planning study for 20,000 houses in Almere.

Client: Municipality of Almere/BVR, Utrecht.

Design: MVRDV: Winy Maas, Jacob van Rijs and Nathalie de Vries with Tom Mossel, Lukas Felder, Frank van Manen, Eline Strijkers, Alex Brouwer, Grisha Bourbouse.

Model: Parthesius& de Rijk.

Individual modes of transport will always play a part in our society. No matter how far we keep stimulating public transport, or try to subside the automobile with higher taxes, more expensive petrol and planning measures. It might be more plausible to develop an energy-saving, self-driving, self-repairing car. Should we decide to stimulate self-driving cars instead? Congestion would disappear, cars for a solution would become easier to use.

In this light perhaps we should be deploying the motorways to intensify, and to densely, instead of building extra motorways. The existing ones could be concentrated. Lateral noise zones around these roads are earmarked for development precisely because of their extreme (potential) accessibility. The shield structure that is thrusting the motorways into the landscape 'normal' can be removed. These freeways can be harnessed into urban boulevards, particularly those in urban areas, and added to the city as a new brand of urban district.

02 infrastructure / 02 urban boulevards

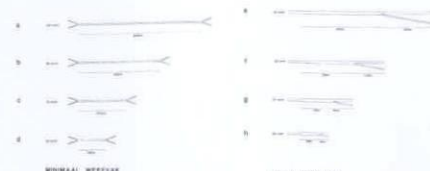
Radical reflection is of the essence. It seems, if these zones become accessible, without traffic-related strategy and some should be deployed to achieve intensive use of such zones (known to us from Porte de Bagneux in Paris), zones where you can drive into your house or office at 120 km per hour, at an address nearby on the A10 or A20? Could these urban boulevards be reimagined using a refined system of parallel lanes and stream into some for city streets linking rather than clearing apart neighbouring city areas?

By transforming the expansions required for such urban highways into through- and local lanes we can provide more highways, thereby generating a strong of motorway advantage.

The various driving speeds, and their attendant design parameters of lane and weaving lengths can give rise to a Brussels face of roads. Comparing the parallel lanes in one-way systems makes for smoother circulation and permits relatively higher speeds, as



02.02.02



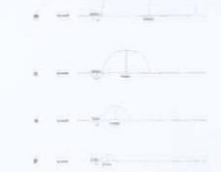
02.02.03

IN EN OTTOGEN

02.02.04

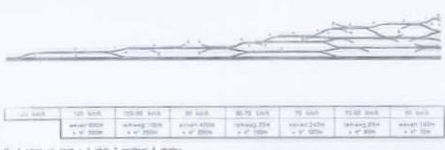


02.02.05



MINIMALE ROOSTERSTRUKTUUR

02.02.06



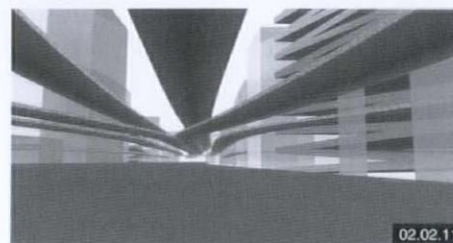
02.02.07



02.02.08



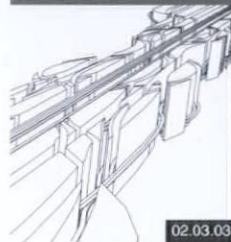
02.02.09



02.02.10

urban boulevards, 1997
Study of Mobility Scenarios in The Netherlands.
Client: Ministry of Housing, Spatial Planning and Environment, The Hague.
Design: MVRDV, Wim Maas, Jacob van Rij and Nathalie de Vries with Caroleen Lichtenberg, René Maes, Tom Mossel, Bas van Nieuwen, Willem Timmer, Frans de Witte, Dusan Doopel and Bernd Feilinger.
Acoustical Research: DGM, Arnhem
Traffic Research: Arndt en Sanhout, Utrecht.

02.02.11



02.03.03



02.03.04

02.03.05



03 case Rotterdam A20



02.03.02

Can we make new light industrial areas more compact by placing buildings next to each other or stacking them?

In this way more space is created for a park-characteristic landscape that can also be used for an intensifying operation in the future.

In the middle of a fierce competition with other light industrial areas, Meiswoud Oost - areas for suburban quality that is enabled by the nearby Eindhoven Airport and the A2 highway.

Can the design of Meiswoud Oost be seen as a first phase in the development of the total A2 zone?

In the middle-year the main connecting infrastructure is a four-lane road.

By separating the lanes, a super-central reservation is created which allows the cut through the forest and park less right. The experience of a parkland is created.

The absence of oncoming traffic leads to safer and more comfortable roads. It is also possible to create more addresses along the main road.

From an economical point of view this is very attractive, all sites become prime locations! By pulling the lanes further apart the number of possible addresses is increased even more. This strategy can be exploited until the point when the capacity of the plots in the curves is big enough to house all light industrial fabric program.

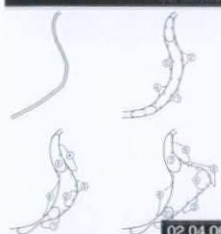
The route of the high-speed-bus-link is designed without crossings. Consequently, the speed of the buses is increased which makes two extra stops (for offices) possible.

When entering from the city, the parkland is crossed by a tunnel and a viaduct. The difference in elevation offers both parkland users and bus passengers an overview of the Meiswoud landscape.

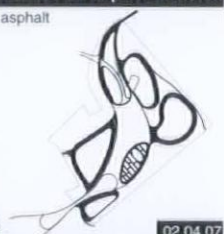


02.04.02

02 infrastructure / 04 Airport Eindhoven



02.04.06



02.04.07



02.04.08



02.04.03



02.04.04

02.04.05

How can a centre be created on a restricted plot where total accessibility to motor traffic is coupled with a car-free promenade?

By cutting into and stretching out the required parking space, enormous 'alcoves' are created between parking levels, where space can be provided for shops, supermarkets, medical facilities, a social cultural centre, a library, a church, a sports hall and about 60 dwellings.

A continuously rising parking street is created with a continuous urban level on top of it.

The range of different gradients encourages a range of different uses: from terrace landscapes with market stalls, through level areas for footpaths, streets for non-food services, shops and galleries and settings with auditoria to a flat area containing public dwellings. A variation in width allows the capacity of the urban level to satisfy demand, and the parking requirement.

To be adjusted to the superposition programmes, in this way a crystalline park-like elevation is created on the park side.

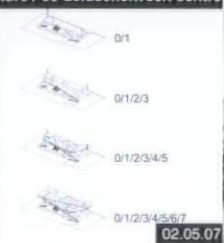


02.05.02

02 infrastructure / 05 Leidscheveen centre



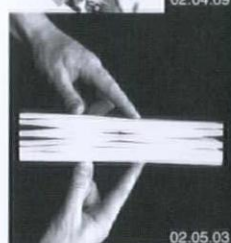
02.05.06



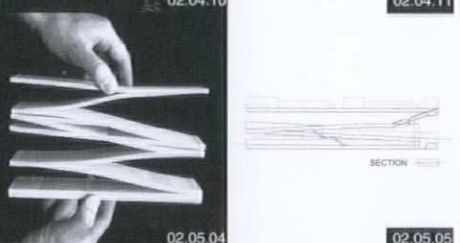
02.05.07



02.05.08

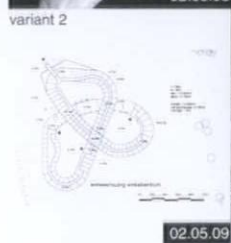


02.05.03



02.05.04

02.05.05



02.05.09



02.05.10

02.05.11

Airport Eindhoven, 1997:
Urban plan for an industrial area connected to the Eindhoven Airport.
Client: Eindhoven Airport N.V.
Design: MVRDV, Wim Maas, Jacob van Rij and Nathalie de Vries with René Maes, Andrew Tang, Fokke Moerel, Kristina Aderssen, Jaap van Dijk, Bouke Kaptein and Bas van Nieuwen.

Leidscheveen centre, 1997
A centre for the new district of Leidscheveen.
Client: Leidscheveen Development company and Mahon bv.
Design: MVRDV, Wim Maas, Jacob van Rij and Nathalie de Vries with Tom Mossel, Stefan Willeman, Dusan Doopel, Bernd Feilinger, Caroleen Lichtenberg, Marco de Francesco and Frans de Witte.

オランダ近代建築の地勢

ホリゾンタル・メガストラクチュア・パラダイムの形成と延伸

石田壽一

オランダは、しばしば人為的に構築された巨大な構造だと言われる^{*1}。一種の「メガ・ストラクチュア」である。60年代に建築思潮を席卷した件のパラダイムのことではない。ここでいう巨大構造はオランダの「地勢」である。ただし、10世紀以前のランドスケープを指し示すものでもない。加えて南部丘陵地帯もこの構造には含まれていない。この巨大構造としての「地勢」は、中世後期から近世にかけて人為的に環境構造化されたオランダ北西部に位置する「低地オランダ」と称される一帯のことを表している^{*2}。チューリップ、風車、運河、木靴という、何とも牧歌的な諸オブジェクトがその景観特性を表象するこの一帯は、その実、牧歌性とは対極的な、西ヨーロッパでもっとも過密で過酷と言われる人々の定住環境を内包する巨大な構造を形成している。この構造は、標準水位±5m前後の厚みと、奥行き50km以上にもおよぶ薄く平坦な海面下の表層領域からなる。

この「地勢」の出自と形成の過程に認められる物的特性は、実際、土木技術の離れ業と賞賛されるに足る、特筆すべき点を多く所有している。が、この「地勢」の一層興味深い点は、それが単に低地オランダの物的表象としてのランドスケープに留まらない点である。言い換えれば「容器」の特性のみならず、そこで生起するさまざまな「営為」の基幹形式を決定する上でも、少なからぬ影響をおよぼす意味的環境をこの「地勢」が形成している点である。つまり一種のメタ——否、海面下であることを思い起こせばインフラ——レベルに措定される解題テキストということになるだろうか。

もちろん、このようなメタ／インフラのテキストの解釈を建築・都市計画実践の「下部構造」と見なし、その表層の展開を関数的対

応として解題することには限定辞が必要とされるだろう。隣接諸国からの影響や史的展開を等閑に付して国内的な特殊事情によってのみ、オランダ建築の解題を求めることの愚について、慎重であるべきことは付言するまでもない。が、その一方で、こうした前提を充分受け入れたにせよ、オランダ近代建築の出自なり、その形成のプロセスなりを、モダニズムの主要国と呼ばれる独仏伊露等の隣接国と対照した場合に、そこには微妙に背景を異ならせた前史が浮かび上がってくることも指摘されるべきである。このことはモダニズムの社会背景の側面に目を向けても自ずと了解されよう。18世紀後半のイギリスに起こった産業革命以降の工業化、都市化の波の伝搬は、独仏伊露といった隣接国と同じようにこの低地の堤を洗ったわけではない。重工業化、未曾有の労働人口の都市集中、スラム、環境改善という局面に対する両極的な都市ヴィジョン——一方を工業都市とすれば、他方は田園都市——に対するオランダの受動的な態度は、こうした背景差を要約しよう。両大戦への中立表明(第二次大戦はナチス侵攻によって打ち破られたにせよ)にも、重工業化とは方向を異ならせたフィールドに都市文化の発展を捉えるオランダの固有性が映じている。

ともあれ、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ロシア以西のヨーロッパがおしなべて共有した機械化、重工業化、大都市化、革命、独裁政治、戦争等のモダニズムを巡る社会パラダイムと物的環境に関わる経験が、オランダにおいても同様に適応されるという前提を無条件に受容することは困難であろう。これはとりもなおさず、この低地が中世ヨーロッパにおいて全くの辺境にありながら、産業革命以前の17世紀に国王不在の市民社会と交換価値を前提とした資本主義パラダイムを十全

に獲得し、急速にヨーロッパ社会の中心を為す、メガ・ストラクチュアの出自にまつわる一種のパラドクスの理解に重なるものであろう。

オランダ近代建築の「地勢」を考える上で、この「水平で巨大な構造」——とりあえずそれを「ホリゾンタル・メガストラクチュア」なる物的・空間的パラダイムと呼んでおこう——は、こうした関心について示唆的な「下部構造」を為しているように思われる。総じて「先進的」と見なされるオランダ近代建築は、20世紀初頭に認められる限定的な史実というよりは、時代性を超えた「恒常性」を体现するものであり、それはランドスケープ、アーバンスケープ、建築、住居といったスケールとプログラムに関わる常套の枠組みや、古典主義的延伸としてのヨーロッパ・モダニズムといった従来の文脈を飛び越えて顕示されるもののように映じる。ここではそのメガ・ストラクチュア・パラダイムがいったいどのように形成され、それが如何なる「容器」×「営為」のマトリクスを形成し、また今後どのような方向に延伸を遂げるのかを推察するために、その「容器」「営為」の特性についてざっと概観してみたい。

地勢1：コンテナ／「容器」

このメガ・ストラクチュアの「容器」としての特性は、中世後期から開始された人為的定住環境の獲得の歴史を記す上で不可欠な堤防・干拓技術に要約されるものである。ポルダー(干拓)、カナール(運河)、ダイク(堤防)、ダム(堰)等の物的要素が「容器」としての「地勢」を形作る。「母国が何から何まで人工の国であるだけに、オランダ人にとって『不測のことがら』は存在しない」と『錯乱のニューヨーク』の冒頭をコールハースが始める通り、その「地勢」は全く人為的



海面下のホリゾンタル・メガストラクチュア：「低地オランダ」の典型的なランドスケープ

なものである。が、「不測のことがら」の存在しないこの人工の母国は、その出自において「先進性」とは対極的な環境から構築されたものであることが分かる。周知の通り、「地勢」は「水・風・泥」といった先進テクノロジーと呼ぶには些かプリミティブな印象を与えるネイティブな材質とパッシブなエネルギーによって出来上がっている。石材、木材の欠落に加え、建築物を支持する地帯力の不足のみならず、不断の水と風の脅威に晒された泥の地勢にあって、泥を固め堤を築き、風を用い水を排し乾かした地表に、やはり泥を固めて拵えた煉瓦を積んで軽量の建築を建てている。今風に言えば、実にサステナブルでエコ・フレンドリーな環境構築術によって「母国」は完成されたとも言えなくもないが、それは自発的な選択と言うよりは、過酷な環境下において余儀なくされた結果の感が強い。低地オランダにおける人々の定住環境の獲得期である12、3世紀から17世紀にかけては、海面下の湖沼地帯に広がる「物的優位の存在しない『不足の地帯』」から、コールハースの記述する「『不測の事態』の存在しない人工の母国への変貌」の時期にちょうど重っている。こうして獲得された「容器」の特性が「即物・機能的」であること、つまり「余計なもの」を一切受け入れない合理性をア・プリオリに選択し、その結果、同時代に隣接諸国を覆っていた象徴ロマン主義的クラシシズムとは別の文脈において、「過密な都市文化」が形作られていったことは指摘されて良い。いずれにせよ、メガ・ストラクチュアの「容器」としての特性は、こうした「不足＝不測」を巡る「地勢」の変換の前史と分かち難く結びついているわけである。

地勢2：アクティビティ／「営為」

メガ・ストラクチュアの「不足＝不測」を巡る「地勢」の変換も、決して一朝一夕に得られたものではない。それはこの低地を覆う「水」の脅威から定住地を守る不断の「営為」によって獲得された結果にほかならない。この「営為」の特性は、前述の「ポルダー」と呼ばれる干拓定住地の維持システムに要約さ

れる。ポルダーとは人為的に同一水面を保つ水理学上の単位である。同一水面とは言え、もちろん標準海面下である。表層水を集め、堤防外周の環状運河に揚水することで容器内部の人的環境が維持される。この標準海面マイナス5m前後のメガ・ストラクチュア内部にはサイズの異なる無数のポルダーが存在する。所与の水流に応じて環状堤防が築かれ、内部の水位を便宜的な「地面」より下げることでポルダーは維持されるが、2、3haから数万haにおよぶパッチワーク状のポルダーは、いずれもほぼ均質な細長い形状によって分割され、管理される。この基本要素の反復による「等価性」は、強い中心性を示す要素の不在によって一層強調されることになる。ポルダー内の物的環境として、集中的な中心が構築されることは皆無であり、同一水位が人為的に保たれた内部環境は常に基本要素の反復による均質性が示される。加えて、ポルダー間のヒエラルキーは原理的には存在しない。これも堤防維持という単独集落では、いかようにもし難い環境特性によって説明されよう。常に集団として協同することによってのみ、単位を形成する各ポルダーの安定性が補償されるという「個」と「全体」を巡る媒介項不在の「等価性」がメガ・ストラクチュア維持の原則を為している*3。低地オランダのランドスケープを包括的に踏査したA.M.ランバートは、この構造獲得の過程に認められる未曾有の経験が、神の加護のもと奇跡を信じ祈願を続ける「信仰」のイデオリズムに先行して、堤防を築造し、ポルダーを維持するための「実働」を優先するリアリズムの源泉を誘因したとしているが、「ヴェルギリウスのアルカディア」なるローマン・パラダイムの伝搬は、豊穡な「地勢」不在の湖沼地帯に遭遇して、その現実的与件の特殊性を前に座礁したとも言えよう*4。

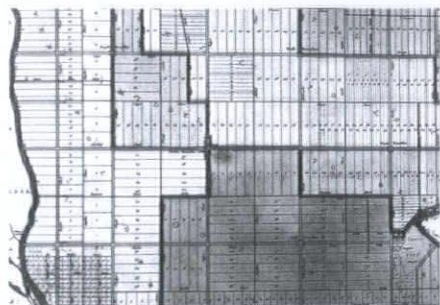
いずれにせよ、常に「集団の実働」として「等価性」が維持されるこのメガ・ストラクチュアの「営為」的特性は、「中心＝周縁」、あるいは「エレメント＝システム」なる水平なヒエラルキーを自動律として想起させる。ここでは管理空間に関わる全体・部分を規定

する垂直的ヒエラルキーは消失し、代わって「個＝要素」の自律性が最大限に補償される水平な社会モデルが誘因されるわけである。

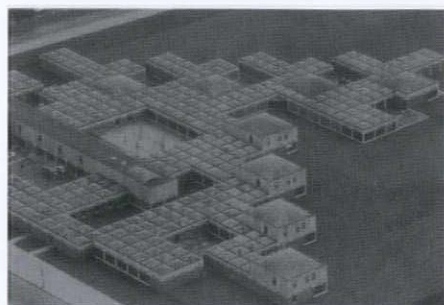
地勢3：「容器」スケルトニズム／構造主義
構造主義（ストラクチュアリズム）と呼ばれる思潮は、一般に戦後のCIAM傘下の機能主義と決別したチーム・テンおよびフォーラムグループに属した建築家と作品の総称としてしばしば用いられている。1962年にローマ賞にノミネイトされたピエト・ブロムとファン・ステイフト両者の作品とも同時代の構造主義的スタイルを要約するものだが、とりわけファン・ステイフトの計画意図は構築的である。ステイフトは「基本形態」と呼ぶ単一要素の反復によって複雑な全体を獲得するスペース・ストラクチュアリングなる伸縮自在な構成手法を用い、内部に大小さまざまな空間単位を内包することを可能にしている。そして、この内部に形成された単位空間は単一で存在するのではなく、常に複数形、集団型として重ね合わされ、フレキシブルなユーティリティを拡張する。つけ加えるまでもなく、ステイフトのヴィジョンはこれに先行して、1960年に建設されたアルド・ファン・アイクの孤児院計画からの影響を受けている。アイクの孤児院においても、最小限要素の規則的反復が全体の基本構成を為し、その集合の差違によって、小規模な個室から比較的大きなホールなどが形成され、基本単位とは独立した「インナー・ストリート」と呼ばれる空間横断的な動線が全体を連繋する。その結果、最小／最大、開放／閉鎖といった場所の不均質性が、均質な同一基本要素の組織的反復によって獲得されるというストラクチュアリズムの空間拡張原理が要約されるわけである。ヴィム・ファン・ヒューヘルが指摘するように、ダッチ・モダンの文脈における構造主義の根は、単に60年代の実践の呼称に留まるものではない*5。30年代の新機能主義を牽引した空間ヴィジョンや、さらにその基底を形成したH.P.ベルラーへのそれに遡って認め得る合理的な構造形式の選択は、昨今の若手建築家の実践を含めて、オランダ近代建築総体を



等価な基本要素の反復によって形成される群島状ポルダー



17世紀の代表的干拓地ベームスターの地割り図



ファン・アイク設計の〈ヴェースハイブ〉（1995-60）

貫通する弁別的な空間言語であり、それは同時に「不足＝不測」の「地勢」に認め得る「余計なもの」を一切消失した「即物・機能」的価値の優先に回帰する属性でもある。あるいはそれを「エレメント＝システム」なるボルダーモデルに重ね合わせることもできよう。この特性を、その晒された構造が包囲する透明な空間としての「スケルトニズム」と呼ぶことも可能だが、これはダウカーの外気学校やサナトリウムに独占的に示される形態言語ではなく、件のメガストラクチュアの「容器」に認められる没時代的な変換特性である。

地勢4：「営為」ブルーリズム／多元共存主義
ブルーリズムとは、元来、複数の人種・宗教・政治的信条などが平和的の共存を見せる状態と要約される。このような状態において、集中的で支配的な核は存在せず、複数の局所的核が常にヒエラルキーを伴わずに、「営為」を継続させる場が保存される。オランダ近代建築の20年代史を繙くときに、隣接列強国との差違が顕著に感じられるのは、この多元主義的視観においてであろう。仏独伊露に認められる機能主義擁護の思潮の展開とその難題を巡っての抑圧、対立、革命等の声高な局面は、モダニズムの先進国の中でオランダが最小であることをつけ加える必要はないと思われる。ダッチ・モダン・ムーヴメントの主要な震源を為したアムステルダム、ロッテルダム、ユトレヒトは、通史的には表現主義、即物主義、新造形主義の牙城と見なされるわけだが、一方で、これら前衛運動が、その思潮的言説を巡って、当局から退潮、破綻、解体を余儀なくされた事実は皆無である。独伊露に表じられる独裁政治、仏のアカデミーといった前衛と体制との対立の構図はオランダに見られない。デ・アフトのごとき言説性を優先した集団や、スタムのようなレフティストが存在しないわけではないが、それは保守的なデルフト派や匿名的な行政当局同様、ひとつの集団以上のものではない。むしろ異質な要素の同時存在は、このメガ・ストラクチュアの顕著な特性でもある。J.J.P.アウトに見ら

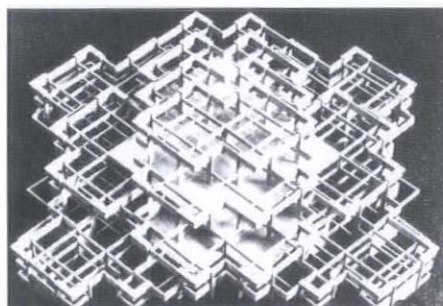
れるように、複数の集団に身を投じ、また行政当局の役人としても都市計画に関わると言った両義性こそが、しごく自然と見なされることは、オランダの許容性を顕示するものである。あるいは機能主義グループもグランブレ・モリエールが主導したデルフト派のごとき保守的集団の営為を度々継承したりもする。こうした横断面もまたメガ・ストラクチュア維持における「信仰」のイデオリズムではなく、「実働」のリアリズムに優先を与える「地勢」に無関係ではなかろう。この「地勢」においては、対立は究極的な解体を求めものではなく、それとは反対に能産的な対話に連繋し、そこで「必要」とみなされた事物は、その思潮的背景に拘泥せず取り込まれる許容度を示しているのである。

地勢5：「容器」×「営為」サブマリンの浮上
メガ・ストラクチュアを巡る人為的な環境構築がコールハースの主要な関心であることは『錯乱のニューヨーク』執筆の意図にも明確に判読される。曰く「マンハッタンがそれ自身のメトロポリス的アーバンイズム——過密の文化なるもの——を創造したという事実を明らかにする」ためであり、「メトロポリスにはメトロポリス固有の特殊化された建築が必要にして相応しい」という副次的議論を照射する意図があった、ということになる。垂直性の極限モデルとしてのマンハッタンイズムを、そのまま平坦で水平な低地オランダのメガ・ストラクチュアの前身に敷衍することは些か無理があるように思われるかもしれないが、否、垂直・水平の方向性こそ異なれ、低地オランダは西ヨーロッパにおいて最も過密で過酷な人的定住環境でもあるマデロン・フリーゼンドルフ画の「フロイト・アンリミティッド」は、海面下に構築されたメガストラクチュアの無制限な浮上に関して深長なタイトルを呈している）運河と風車の一見牧歌的な「地勢」は、メガ・ストラクチュア構築の「計画性」に深く依拠した設えられた外観である。すなわち「海面下の低地には海面下の低地固有の特殊化された建築が必要にして相応しい」なるコールハースの箴言をパラフレ

ーズすることもできよう。が、この箴言の背後には、一層深長な副次的主題が見え隠れしている。それは西ヨーロッパにありながら、古典主義的文脈からは乖離した、アンチ・ロマンで、感情移入不能で、中心も周縁も存在せず、離散的で、余計なものがなく、にもかかわらず物的過密性と極限的な環境が固有の文化を形成する、そうした「新たな都市主義」としての「水平で巨大な構造」を巡るパラダイムの浮上である*6。繰り返すように、低地オランダが海面下の「地勢」、つまりサブマリニに置かれた「過密な文化」であることを思い浮かべれば、クラシカルなロマン主義に彩られた華やかなりし都市文化としてのタイタニックの沈没を、傍らで無表情に眺める即物的で機能的なサブマリニ、すなわち潜水艦という噴飯ものの連想も首肯されよう。すなわち20世紀の都市文化なる海面において、華美な老船が、無装飾なくろがねの潜水艦にとって代わられるわけである。

ともあれ、21世紀前半にはその「水平で巨大な構造」の全貌が海面に浮上する「ランドスタット」と呼ばれる低地オランダの環状メトロポリスは、「過密の文化」なるものとしての都市主義に新たな外観を与えることになろう。それは、従来の常套的な建築・都市計画実践からは「容器」「営為」のマトリクスを異ならせ、その一方で件のホリゾンタル・メガ・ストラクチュア・パラダイムの恒常的な特性を顕在化する横断面を記すことになろう。
●いしだ・としかず／建築家、九州芸術工科大学芸術工学部環境設計学科助教授

註
*1: Joseph Buch, "A Century of Architecture in the Netherlands 1880/1990", 'Context and background'の章を参照, NAI Publishers
*2: G.P. Van de Ven, "Man-made lowlands", UITGEVERIJ MATRIJS, 1996を参照
*3: 産業革命以前の低地オランダの固有の空間パラダイムの形成過程と原因については、拙著『低地オランダ——零状発展する建築・都市・ランドスケープ』参照、丸善株式会社1998年
*4: Audrey M. Lambert, "The Making of Dutch Landscape", London, 1971参照。低地・高地を含めたオランダのランドスケープの形成と変遷を包括的に踏査した著。
*5: Wim J. Van Heuvel, "Structuralism in Dutch Architecture", UITGEVERIJ 010 Publishers, 1992参照
*6: コールハースの"SMLXL"所収の「アトランタ」や「ジェネリックシティ」で取り沙汰されている主題に重なるものである。



J.ファン・スティフト（児童村計画）、1962



ダウカー設計の（外気学校）



マデロン・フリーゼンドルフ「フロイト・アンリミティッド」
出典：『錯乱のニューヨーク』



01

アーキテクテン・グループ
de architectengroep

集合住宅「ウーバーパッド」、アムステルダム、オランダ、1998年
Housing "OVERPAD", Amsterdam, NL, 1998

Dick van Gameren | ディック・ファン・ハメレン
デルフト工科大学卒業、1987-91年Mecanoo、その後 Enric Miralles
事務所勤務

Bjarne Mastenbroek | ビャヌ・マステンブルック
1964年生まれ。デルフト工科大学卒業。Yago Conde, Enric
Miralles事務所勤務

その他のプロジェクト |

"Houses and business accommodation" (Nijmegen, NL, by
Dick van Gameren)

"Double villa" (Utrecht, NL), "Westerdokhuis" (Amsterdam,
NL, by Bjarne Mastenbroek with MVRDV)

Photo: Christian Richters



02

アーキテクテン・シイ
de Architecten Cie

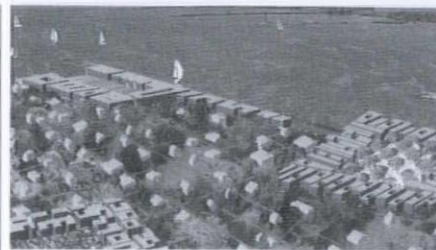
ロッテルダムの集合住宅、ロッテルダム、オランダ、1997年
Woningbouw, Rotterdam, 1997

Frits van Dongen | フリッツ・ダン・ドンガン
1946年オランダ生まれ。デルフト工科大学卒業、1985-88年事務所
設立

その他のプロジェクト |

"De SchillePrison" (Rotterdam, NL, 1989), "Paliament Building"
(Rotterdam, NL, 1991), Apartment (Den Haag, NL,
1992)

Photo: Daria Scagliola&Stijn Brakkee



03

B&B都市計画・ランドスケープ・デザイン事務所
B+B landscape architect

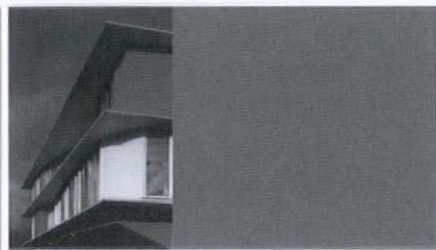
「住宅地の島」[デ・ニールト]、カウク、オランダ、1998年
"Residential island De Nielt", Cuyck, B+B landscape architect
NL, 1998

1977年に設立されたデザイン会社で、約20人のスタッフ（ランド
スケープ・アーキテクト、都市計画家、工業デザイナー等）がい
る。主宰する建築家のパートナーは、マリーク・ティヌーマンス、
マルティン・ファン・フリット、ペペイン・ゴドフロイ、アンジェ
ラ・コルティニ（Marieke Timmermans, Martine van Vliet,
Pepeijn Godefroy, Angela Cortini）。

その他のプロジェクト |

"Landscape design for the Dutch Pavilion, World Expo"
(Hannover, Germany)

"Hellersdorfer Graben, Berlin, Germany," "Kromhoutpark"
(Tilburg, NL), "Renovation of Park Valkenberg" (Breda, NL)



04

ボス・ハセレット
BOSCH HASLETT

ロナルド・マクドナルド・ハウス、ユトレヒト、オランダ、1998年
"Ronald McDonald House", Utrecht, NL, 1998

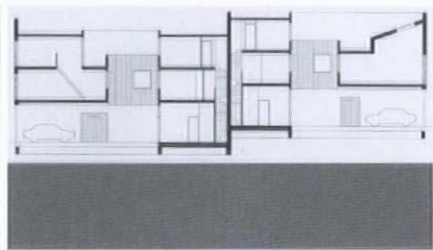
John Bosch | ジョン・ボス
1960年オランダ生まれ。デルフト工科大学卒業。Rudy Uytengaak,
Richard Meier and Partners事務所勤務

Gordon Haslett | ゴードン・ハセレット
イギリス生まれ。リバプール大学（イギリス）、オレゴン大学（ア
メリカ）卒業。Page and Park (UK), Walter Chatham (USA),
Richard Meier and Partners (USA) 事務所勤務

その他のプロジェクト |

"Tjlook House" (Amsterdam, NL, 1993), "Poolhouse"
(Tilburg, NL, 1995), "City Building" (Rotterdam, NL, 1996),
"150 houses" (Ypenburg, NL, 1998)

Photo: Luuk Kramer



05

クラウス&カーン
Claus En Kaan Architecten

194戸の集合住宅、アムステルダム、オランダ、1998年
"194 Individual houses", Amsterdam, NL, 1998

Felix Claus | フェリックス・クラウス
1956年オランダ生まれ。デルフト工科大学卒業

Kees Kaan | ケース・カーン
1961年オランダ生まれ。デルフト工科大学卒業

その他のプロジェクト |

"Kindergarden" (Utrecht, NL, 1988), "Children's Day Care
Center" (Amsterdam, NL, 1990), "Borneo-Sporenburg
Housing" (Amsterdam, NL, 1994-98), "International Building
Exposition" (Tilburg, NL, 1996)



06

クリムゾン
Crimson

ロッテルダム市街地第2次再開発「オグ・ワース」、
ロッテルダム、オランダ、1998年
"Org-wars" (A proposal for the second urban renewal),
Rotterdam, NL, 1998

Crimson

1994年、エバウト・ドルマン、エルンスト・ファン・デル・フーフェン、
ミッシェル・プロフォースト、バウター・ファン・スティフハウト、カ
ッザンドラ・ヴィルキンス(Ewout Dorman, Ernst van der Hoeven,
Michelle Provoost, Wouter Van Stiphout, Cassandra Wilkins)
の5人の建築史家(全員フローニンゲン大学で建築史を学ぶ)によっ
て設立。その後、さまざまなアーティスト、建築家と共同作業を始める。

その他のプロジェクト |

"Leidse Rijn 30.000 dwellings" (near Utrecht, NL),
"Remodelling of the postal office" (Rotterdam, NL),
"Master plans for different quarters" (Rotterdam, NL)



07

ドブラー・デ・コーフェル・デ・フローム建築設計事務所
Dobbelaar de Kovel de Vroom Architecten bv

住宅公社本社、ロッテルダム、オランダ、1994年
"Hoofdkantoor Volkswoningen", Rotterdam, NL, 1994

Dolf Dobbelaar | ドルフ・ドブラー

1952年オランダ生まれ。デルフト工科大学卒業

Herman de Kovel | ヘルマン・デ・コーフェル

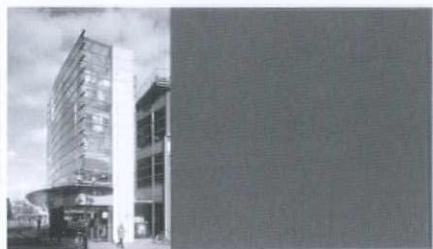
1953年オランダ生まれ。デルフト工科大学卒業、1980-81年OMA
(Rotterdam) 勤務

Paul de Vroom | ポール・デ・フローム

1953年オランダ生まれ。デルフト工科大学卒業、1982-84年OMA
(Rotterdam) 勤務

その他のプロジェクト |

Housing (Rotterdam, NL) 1988, Architecture+kindergarden
(Rotterdam, 1994), Urban Villa (Veserbroek, NL), Stationsgo-
bled (Apeldoorn, NL, 1998)



08

建築スタジオ ヘルマン・ヘルツベルハー
Architecturestudio Herman Hertzberger

ファン・デル・フェーネ・デパート増築、アッセン、オランダ、
1998年

"Extension Vanderveen Department Store", Assen, NL, 1998

Herman Hertzberger | ヘルマン・ヘルツ・ベルハー

1932年オランダ生まれ。1958年デルフト工科大学卒業、1990-95
年ベルラーヘ建築学校校長

その他のプロジェクト |

"Students'house" (Amsterdam, NL, 1959-66), "Extension
to 'Centraal Beheer' office" (Apeldoorn, NL, 1990-95),
"YKK Dormitory / Guesthouse" (Toyama, Japan, 1998),
"Bijmermonument" (corporation with George Descombes,
Amsterdam, NL, 1998)

Photo: Duccio Malagamba



09

ルディ・アウテンハーク建築設計事務所
Rudy Uytengaak Architectenbureau bv

ザーン島の集合住宅、ザーンスタット、オランダ、1996年
"Zaaneiland toekomen", Zaanstad, NL, 1996

Rudy Uytengaak | ルディ・アウテンハーク

1949年生まれ。1973年アイントホーフェン工科大学卒業、1978-
84年建築雑誌 "FORUM" 編集員

その他のプロジェクト |

"Apartments with Parking" (Amsterdam, NL, 1989),
"Koningin Wilhelminaplein Housing" (Amsterdam, NL,
1991), "Cultural center" (Apeldoorn, NL, 1993), "Town Hall
Extension" (Landsmeer, NL, 1993)



10

ヨー・クーネン建築設計事務所

Jo Coenen & Co Architecten

市民文化施設「クンストクラスター」、ティルブルグ、オランダ、1996年

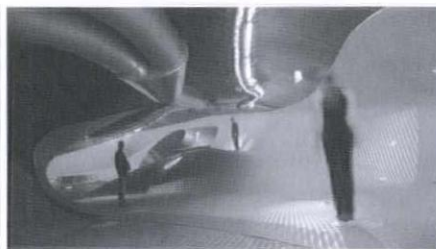
"The Kunstkluster", Tilburg, NL, 1996

Jo Coenen | ヨー・クーネン

1949年オランダ生まれ。1975年アイトホーフェン工科大学卒業。1979年Van Eyck and Bosch勤務

その他のプロジェクト |

"Renovation of Driessen bakery" (Nuth, 1981), "Master plan for housing project KNSM-island" (Amsterdam, NL, 1989), "Library for the Technical University in Delft" (NL, 1992), "The Netherlands Architecture Institute" (Rotterdam, NL, 1993)



13

NOX

NOX

水のバビロン、ジールランド、オランダ、1997年

"freshH2O expo", Zeeland, NL, 1997

Lars Spuybroek | ラース・スプューブルック

1959年オランダ生まれ。デルフト工科大学卒業

その他のプロジェクト |

"Full moon" (Ginza-Tokyo, Japan), "Off the Road/103.8Mhz" (Eindhoven, NL, 1998), "Tommy" (NL, 1998), "V2Lab" (Rotterdam, NL, 1998)



16

クイスト・ヴィンターマンス建築設計事務所

Quist Wintermans Architecten

リスボン万博インテリア、リスボン、ポルトガル、1998年

"Expo '98 Oceans, the heritage for the future", Lisbon, Portugal, 1998

Paul Wintermans | ボール・ヴィンターマンス

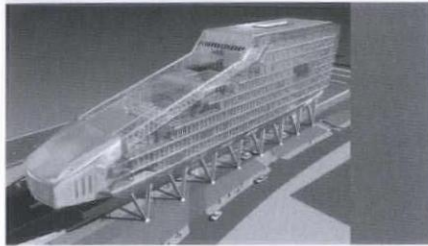
1950年生まれ。アイトホーフェン工科大学卒業

Wim Quist | ヴィム・クイスト

1930年オランダ生まれ。アムステルダム建築アカデミー卒業

その他のプロジェクト |

"Museum 'Beelden aan Zee'" (NL), "Technical center 'De Geusselt'" (Maastricht, NL), "Cobra Museum" (Amstelveen, NL), "Main office in Schiphol Airport" (Amsterdam, NL)



11

メイヤー&ファン・スコーテン建築設計事務所

Meyer en van Schooten Architecten bv

ING銀行グループ本社、アムステルダム、オランダ、1998-2001年

"ING Groep N.V." (Amsterdam, NL, 1998-2001)

Roberto E. Meyer | ロベルト・E.メイヤー

1959年生まれ。1983年ユトレヒト工科大学、1984-86年アムステルダム建築アカデミー卒業。1989-90年アーン建築学校卒業

Jeroen W. van Schooten | ヨーレン・W.ファン・スコーテン

1960年生まれ。1983年ユトレヒト工科大学、1984-86年、アムステルダム建築学校。1989-91年アーン建築学校

その他のプロジェクト |

"Orthodontist's office" (Almere, NL, 1992), "60 dwellings" (Vespucistraat) (Amsterdam, NL, 1995), "Social housing project of 21 dwellings 'De Tagrijn'" (Amsterdam, NL, 1993), "Primary school 'Nicolaas Maesschool'" (Amsterdam, NL, 1996)



14

ワン・アーキテクチャー

One Architecture

「ユーデンブルグ・ウエスト」、オーストリア、1998年

"Judenburg-West", Austria, 1998

Matthijs Bouw | マティス・バウ

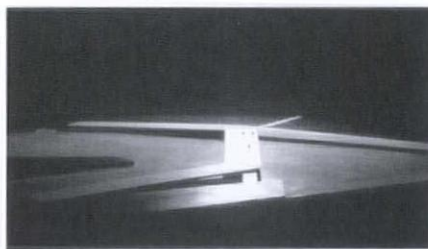
1967年オランダ生まれ。1995年デルフト工科大学卒業

Joost Meuwissen | ヨースト・メウイセン

1951年オランダ生まれ。デルフト工科大学、アイトホーフェン工科大学卒業

その他のプロジェクト |

"Reprado" (competition with Max.1, Crimson and Kamiel Klaasse, Prado, 1995), "Stiegl / ASK" (competition, Salzburg, Germany, 1996), "Almere social housing" (Almere, NL, 1996), "Vision Westcorridor" (Eindhoven, NL, 1998)



17

VMXアーキテクト

VMX, Architects

第3のシティブリッジ、ロッテルダム、オランダ、1996年

"A Third City Bridge", Rotterdam, NL, 1996

Don Murphy | ドン・マーフィ

1965年アイルランド生まれ。1989年サウスバンク大学 (ロンドン) 卒業。1991年ベルラーヘ建築学校卒業

Leon Teunissen | レン・テウニセン

1965年オランダ生まれ。1992年デルフト工科大学卒業。1992年 de Architecten Cie勤務

その他のプロジェクト |

"Heaven. Can Wait" (European compe, 1993), "Souks. Of. Beirut" (competition, 1994), "T-House" (1997), Private house (Amsterdam, NL, 1998-99)

Photo : J. R. Kikkert



12

NL アーキテクト

NL Architects

パワープラント施設「ヴォス8」、ユトレヒト、オランダ、1998年

"WOS 8", Utrecht, NL, 1998

NL Architects

ピーター・バネンベルグ、ワルター・ファン・ダイク、カミーユ・クラッセ、マーク・リネマン (Pieter Bannenbergh, Walter van Dijk, Kamiel Klaasse, Mark Linnemann, 全員デルフト工科大学卒業) の3人が、共同で1997年NL Architectsを設立

その他のプロジェクト |

"Parkhouse" (Amsterdam, NL), "Pixel City, European competition" (Den Haag, NL), "The refurbishment of a seventies movie complex" (Amsterdam, NL), "30,000 new dwellings" (Leidse Rijn)



15

バルムボーム&ファン・デン・バウト都市計画事務所

Palmboom & v. d. Bout stedenbouwkundigen bv

都市計画「フラーディングン・ハウズンガット」、

フローニンゲン、オランダ、1997年

"Vlaardingen Buizengat", Groningen, NL, 1997

Frits Palmboom | フリッツ・バルムボーム

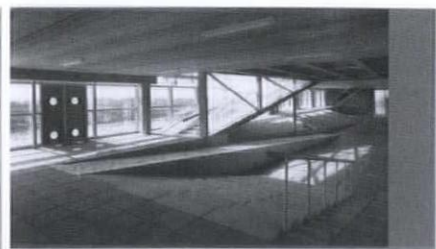
1951年生まれ。デルフト工科大学卒業

Jaap van den Bout | ヤープ・ファン・デン・バウト

1953年生まれ。デルフト工科大学卒業

その他のプロジェクト |

"Middelveldse Akerpolder" (NL, 1990), "Lelystad Haven" (NL, 1994), "Leidse Rijn" (NL, 1996), "Stationsgebied Middelburg" (NL, 1998)



18

ヴィクトール・マニ建築デザイン事務所

Victor Mani Architecture and Design

スポーツ博物館、レリスタット、オランダ、1993年

"Sports Museum", Lelystad, NL, 1993

Victor Mani | ヴィクトール・マニ

1951年オランダ生まれ。1981年デルフト工科大学卒業。1981-89年 Architecture Office BOA Contractor 主宰。1984-88年 Cooperative Association Utopia 主宰

その他のプロジェクト |

Interiors for a hospital, offices and customs (W. T. C. Schiphol Airport, NL), streetfurniture, several exhibitions, housing, industrial building and museum

フォト・クレジット Photo Credit

Karel Tomei 表紙, p.28-29, p.85
Euro Television p.9
Sanne Peper p.12
Hans Werlemann / Hectic Pictures p.16-19
Michel Boesveld p.20-21
Christian Richters p.22-25, p.77-80
Flower Auction Aalsmeer p.27左
Het Ministerie van Verkeer en Waterstaat p.27右
Kees van Son p.32
Jeroen Musch p.33, p.35-37, p.38上1点
Peter de Ruig p.34上
West8 p.38上4点
Kuiper Compagnons p.39-40
Max.1 p.41-42
Anda van Riet p.43
藤原かすみ Kasumi Fujiwara p.49
Philip Mechanicus p.52上
Edwin Walvisch p.52下
Kim Zwarts p.57-60
Luuk Kramer p.61-62
Tom Croes p.72上
Bitter & Bredt p.72下
Jannes Linders Fotostudio p.73-76
Foto Jutte p.88

編集協力 Editorial Cooperation

長坂寿久 Toshihisa Nagasaka
上原雄史 Yushi Uehara
Hans Ibelings
Iwan Hameleers
Sander Schroevers
大松俊紀 Toshiki Omatsu
Marjolein de Jong

翻訳 Translation

リン・リッグス Lynne Riggs p.8
吉良森子 Moriko Kira (p.14-94の作品解説)

デザイン Design

森大志郎 Daishiro Mori



The Entropic Forest

Urban Infrastructure

photographs Heiner Schilling text Hiroo Yamagata

連載 2
イントロの森 都市のインフラストラクチャー
 写真ハイナージ・ジリング / 文 山形浩生

photograph 1

そこらじゅうので、かい、備蓄設備や通信塔や高梁、その向こうにもまたセル街が見えるんだを、バックに、あるいはセルの窓から、みんなこちをじつと見つめてる。無表情に。何の感情も見せずに。こわい。でも見るだけ。なにもしない。ろくに覚えても、いないし、よ。こないだこゝろでキルギス人が殺されたことも、見ていた年寄りはいくらもいたはずなのに、目撃者はぜんぜん出ていない。

『年寄り、寝てゐる。』

最近ではこんなふうには、昼と夜は実にはすがすがしくはつきり分かれちゃつてゐる。夕方、年寄りは自分のセルでテレビを見てゐる。夜には、寝てゐる。昼間、年寄りはテレビを見てゐる。食料を、無駄なエネルギーと排泄物に変換しながら、みんな生産活動に従事する気は特にない。たまに飽きると、ずっと窓から外を見物。そこには、果てしなく続く同じようなセル街があるだけなのだけれど。それとも、ここを貫通して通過するだけの輸送動脈を走る車両を眺められるかもしれない。いまや自分とは無縁の、生産現場の片鱗を懐かしんでゐるのかもね。でも小一時間もすると、それにも飽きてテレビに戻る。

でも、いまは夜。年寄りたちは、寝
ていろ。

そしてやがて朝になつても、市街地は相変わらずどこまでもどこまでも、どこまでも広がり、無数のセルが散らばつてゐる。あの輸送動脈沿いにちよつと北にいくと、新興の輸入労働地区にたどりついて、あそここの様子はまたぜんぜん違つてゐるけれど、それはまた別の話だ。

まもなく年寄りたち、そこらじゅうを埋め尽くす。ほら、こらん。貴重な年少者たち、いずれ年寄りどもの奴隷となるべく、そしてやがてはその年寄りに加わるべく、大切に囲われて飼われて、いるだらう。あてこむじこに、無数の年寄りに囲まれて、無数の視線に晒されることになるんだよ。

まったく、と彼女、ムカつくわ。

まったく、と彼女。ムカつくわ

photograph 1 JR京葉線葛西臨海公園駅高架支柱

photograph 2 左から、シェラトングランデ・トーキョーベイ、第一ホテル東京ベイ、NKホール、ビッグサンダー・マウンテン、東京ベイヒルトンインターナショナル、シンデレラ城、東京ベイホテル東急、スペース・マウンテン、サンルートプラザ東京、メインエントランス・ゲート、富岡エスレート(手前)

photograph 3 墨田区立堤小学校、首都高速道路6号向島線、隅田川、東京ガス千住工場、東京ガス千住アパート

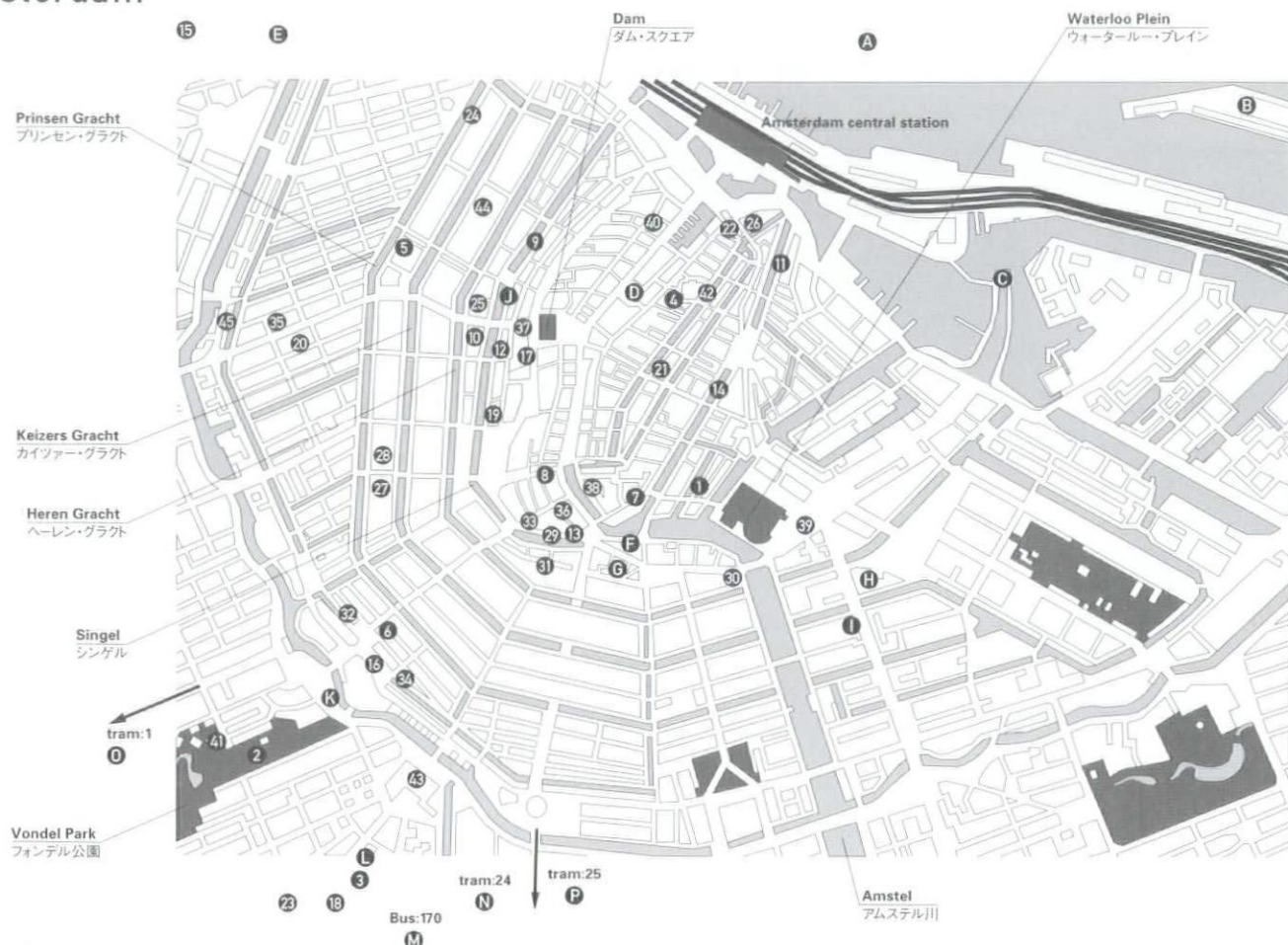
design: Shin Akiyama / Les sœurs Papier

オランダ建築旅行ガイドマップ

アムステルダム | ロッテルダム | デン・ハーグ | ユトレヒト

KLM(オランダ航空)の拠点であるアムステルダムは、飛行機の乗り継ぎで訪れる機会が多い。1日でアムステルダムの主な見所を押さえた旅行の強い味方が自転車である。この街は首都でありながら自転車サイズの街なのである。MacBike[39]でレンタルするのがいいが、Roxy[29]周辺やCafe de Jaren[7]近くの橋でジャンキーから買う自転車は、1台25ギルダー(1500円)と安い。違法行為なのでお勧めはできない。スキポール空港から電車でセントラルステーションに着いたら、証券取引所[D]を左に見ながらダム・スクエアまで歩き、王宮を写真に収めてカルファーストラートを散策。このショッピング街の終わりを右に曲がれば、ジャンキーが待っていることが多い(要注意)。4月30日の「クィーンズ・デイ」と12月31日大晦日のアムスの町中のあらゆる場所で同時に打ち上げられる花火を見るのはお勧め。

Amsterdam



アムステルダム・ガイド・ウェブサイト

AMSTERDAM COFFEE SHOP GUIDE
<http://www.geocities.com/Augusta/5173/index.html>

Gay Amsterdam Tourist Guide
<http://www.gayamsterdam.com/guide/>

Red Light District
<http://www.amsterdamhotspots.nl/redlights.shtml>

Club
<http://www.amsterdamhotspots.nl/club.shtml>

アムステルダム・ホテル・カフェ・レストラン・ショッピングガイド | Hotel, Cafe, Restaurant, Shopping, etc Guide Amsterdam

- Youth Hostel**
- 1 | **Stadsdoelen** | スタット・デウールン
街の中心にあって便利なユースホテル
Kloveniersburgwal 97
1011 KB Amsterdam
Tel: 020-6246832

- Vondelpark** | フォンデル公園
アムステルダムのセントラル・パークの中にある
環境抜群のユースホテル
Zandpad 5
1054 GA Amsterdam
Tel.: 020-6831744
Fax: 020-6166591

- Hotel**
- 3 | **Washington** | ワシントン
アットホームでお手頃な価格のホテル
(FL120-180)
Frans van Mierisstraat 10
1071 RS Amsterdam
Tel: 020-6796754
Fax: 020-6734435

- 4 | **Grand Westin Demeure Hotel** | グランドホテル
17世紀から市庁舎として使われてきた5つ星
ホテル。中庭もインテリアも良い。街の中心。
高いけれど記念に。(FL500より)
Oudezijds Voorburgwal 197
1012 EX Amsterdam
Tel: 020-5553111
Fax: 020-6266286

- 5 | **Pulitzer Hotel** | ビューリツファー・ホテル
アムスらしい運河沿いの町屋を改装してホテル

- に。正統派ホテル。(FL350より)
Prinsengracht 315-331
1016 GZ Amsterdam
Tel: 020-5235235
Fax: 020-6276753

- Cafe & Restaurant**
- 6 | **De Blauwe Hollander** | ブラオ・ホルンダー
料理批評家お勧めのオランダ料理のレストラン。
お値段お手頃。
Leidsekruijsstraat 28
1017 RJ Amsterdam
Tel: 020-6233014

- 7 | **Cafe De Jaren** | カフェ・デ・ヤーレン
お天気の良い日は運河に面した
テラスでリラックスするのがお勧め。
サラダバーが充実している。
アムステルダム大学学生のたまり場。
Nieuwe Doelenstraat 20/22
1012 CP Amsterdam

- 8 | **Luxembourg** | ルクセンブルグ
ちょっとお洒落な人たちが集まる。
Spui 24
1012 XA Amsterdam

- 9 | **Bep** | ベップ
今話題のカフェ。
Nieuwezijds Voorburgwal 260
1012 RS Amsterdam

- 10 | **Dante** | ダンテ
インテリアが美しい感じ。
Spuistraat 320
1012 VX Amsterdam

- 11 | **Stevens Bv** | ステーフセン
地もとの人が集まるローカルなカフェ。
アップルパイ、スープがおいしい。
夜はFL15の定食(Dag Schotel)がお勧め。
Geldersekade 123
1011 EN Amsterdam

- 12 | **Het Paleis** | ヘット・パレイス
アムスらしいカジュアルなカフェ。
アーティスト、デザイナーが夜は集まる。
Paleisstraat 16
1012 RB Amsterdam

- 13 | **REPLAY** | リプレイ
アメリカンスタイルの新しくて、広い店
Singel 463
1012 WP Amsterdam

- 14 | **Maximiliaan A'Dams Brouwhuis**
マキシミリアン・アムステルダム・
地ビール・バー
自家製のビールがおいしい。
ビール醸造機をそのままインテリアにしている。
Kloveniersburgwal 6-8
1012 CT Amsterdam

- 15 | **West Pacific** | ウェスト・パシフィック
食事もおいしいお手頃価格(FL30位)。
夜10時くらいからダンスクラブに変貌。
人気の場所。
Haarlemmerweg 8
1014 BE Amsterdam
020-5974458

- 16 | **De Balie** | ドゥ・バリ
劇場と一緒にいるカフェ。
アムス・カルチャー中心地。
Kleine g plants 10

- 1017 RR Amsterdam
tel: 020-5535151

- 17 | **Seymour Likely Lounge**
シーモア・ライクリー・ラウンジ
ヒップなカフェ。イン・クラウドが集まる。
Nieuwezijds Voorburgwal 250
1012 RR Amsterdam
020-6271427

- 18 | **Bodega Keyzer Restaurant**
ボデガ・カイザー
オランダのクラシックなカフェ・レストラン。
コンサート・ホールでのクラシックコンサートの
後などびったり。
Van Baerlestraat 96
1071 BB Amsterdam
020-6711441

- Indonesian Restaurant**

- 19 | **Kantjil en de Tijger**
カンティユ・アンド・タイガー
元植民地インドネシア料理。
大勢だったら色々な料理を一度に楽しめる
ライスターフェル(Rijsttafel)はお勧め。
Spuistraat 291-293
1012 VS Amsterdam
Tel: 020-6200994

- 20 | **Lonny's** | ロニーズ
インドネシア料理。おいしい。
Rozengracht 46
1016 ND Amsterdam
Tel: 020-6238950

- Chinese Restaurant**
- 21 | **Chop Sticks Express**
チョップスティック・エクスプレス
チャーシューメンがおすすめ。
Geldersekade 1
1011 EH Amsterdam
020-6205676

- 22 | **Chang Express** | チャン・エクスプレス
うまい。安い。早い。
Nieuwebrugsteeg 16
1012 AH Amsterdam
020-4207884

- French Restaurant**

- 23 | **Bark** | バーク
夜12時までオーダーできる。季節の魚。
茹メニューが充実している。1人FL100くらい。
Van Baerlestraat 120
1071 BD Amsterdam

- 24 | **Bordewijk** | ボルド・バイク
1人FL100-150で、とても満足な
フランス料理を楽しむ。カジュアルな雰囲気。
Noordermarkt 7
1015 MV Amsterdam
020-6243899
020-6383693

- 25 | **Christophe' Restaurant** | クリストフ
ミシュランでは1つ星。モダンデザインの
インテリアでメニューもクリエイティブ。
2人でFL300はかかるけれど、その価値有り。
Leliegracht 46
1015 DH Amsterdam
020-6250807

アムステルダム・建築ガイドマップ | Architecture Guide MAP_ Amsterdam



A | OMA
アイ広場(都市計画・集合住宅) | 1982
IJ-Plein 1982
Meeuwenlaan e.o.
Amsterdam



E | M.De Klerk
労働者住宅 エイヘン・ハールド | 1920
Housing Eigen Haard 1920
Spaandammerplantsoen
Amsterdam



I | R.H.M. Uytendaele
集合住宅 | 1994
Housing Block 1994
Weesperstraat
Amsterdam



M | J. Duiker
外気開放小学校 | 1930
Open Air School 1930
Cliostraat 40
Amsterdam



B | J. Coenen, West 8, Wiel Arets, H. Kollhoff
KNSM島(都市計画・集合住宅) | 1994
KNSM-island 1994
Amsterdam



F | J. Duiker
映画館シネアック(現在プラネット・ハリウッド) | 1934
CINEAC 1934
Reguliersbreestraat 31-33
Amsterdam



J | TH.J.J. BOSCH
アムステルダム大学文学部 | 1984
Language Faculty 1984
Spuistraat/ Raadhuisstraat
Amsterdam



N | A.E. van Eyck
孤児院 | 1960
Orphanage 1960
Ijssbaanpad 3
Amsterdam



C | R. Piano
科学博物館 ニュー・メトロポリス | 1997
Science Centre New Metropolis 1997
Oosterdok
Amsterdam



G | H.L. De Jong
映画館「ツィンズキー」 | 1921
Tuschinski Theater 1921
Reguliersbreestraat 26-28
Amsterdam



K | OMA
複合施設ビザンチウム | 1991
BYZANTIUM 1991
Stadhouderskade/ Tesselschadestraat
Amsterdam



O | MVRDV
高齢者向け集合住宅 | 1997
Shelterd Housing Complex 1997
Ookmeerweg
Amsterdam



D | H.P. Berlage
証券取引所 | 1903
Exchange 1903
Beursplein / Damrak 277
Amsterdam



H | H. Hertzberger
学生寮 | 1966
Student's House 1966
Weesperstraat 7-57
Amsterdam



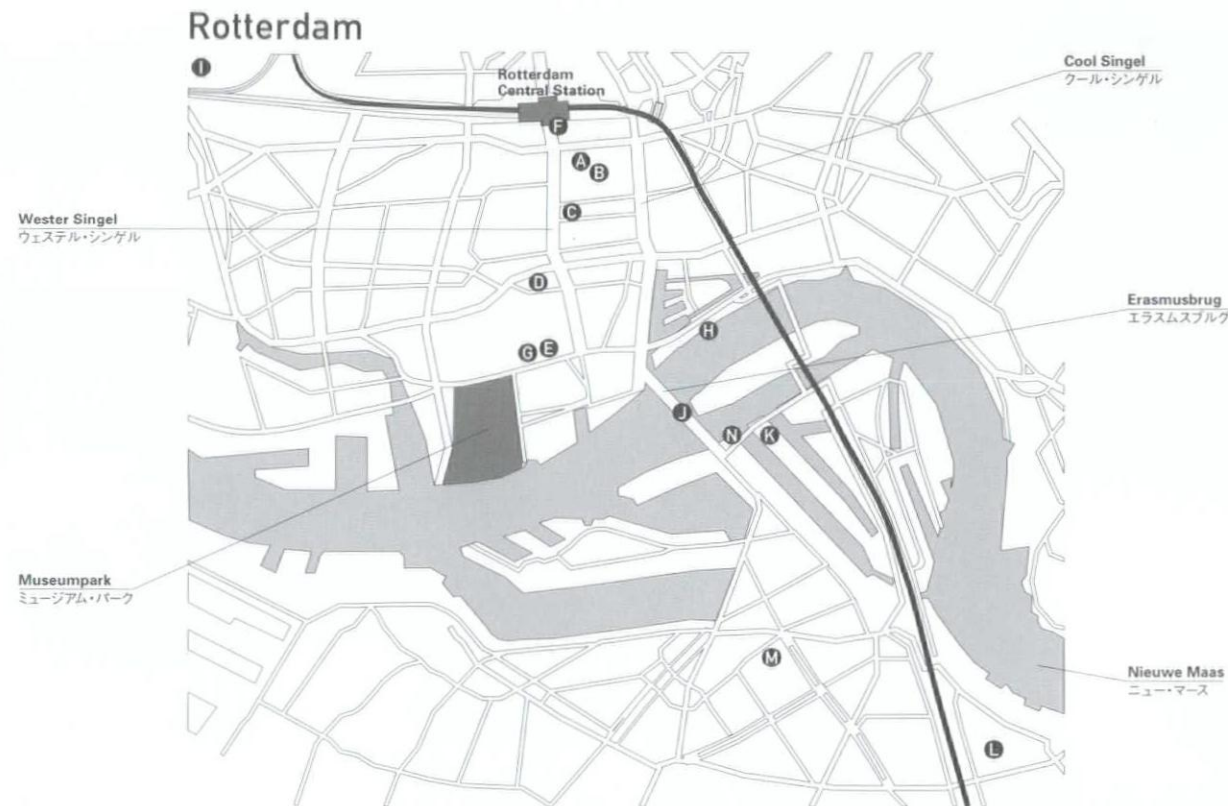
L | Reitveld van Dillen van Tricht
ゴッホ美術館 | 1973
Rijksmuseum Vincent Van Gogh 1973
Paulus Potterstraat 13
Amsterdam



P | H.P. Berlage
アムステルダム南部 都市計画 | 1917
Amsterdam south 1917
Vrijheidslaan, Minervalaan e.o.,
Amsterdam

ロッテルダム・建築ガイドマップ | Architecture Guide MAP_Rotterdam

アムステルダムとは対照的に、ロッテルダムの駅前の風景は、スカイスクレーパーがOMAのバス停[F]の周りに立ち並ぶ。新しい建物が目立つこの町は、第二次世界大戦で徹底的に破壊されてしまった背景を持つ。世界最大級のロッテルダム港の存在が爆撃の対象になったのである。この駅前の広場から始まるMauntswegを歩いてゆくと、West8のSchouwburgplein[B]が左に見えてくる。巨大な照明クレーンを自分で動かして彼らのデザインを体験してほしい。Multiplex[A]はこの広場に面している。時間があたら映画をみよう。さらにMauritswegを進み、Cafe De Unie[C]を過ぎて右に曲がると、オランダ建築博物館、NAI[D]が見えてくる。博物館の中の建築専門書店は覗く価値あり。Kunsthal[E]はその後ろに広がる公園の中にある。この美術館からは、ベン・ファン・ベルケルのエラスムス橋[J]も歩いて行ける。エラスムス橋の手前メカノのレストラン[H]近くから出ている観光船「Spido」(所用時間75分)は、スケールアウトした産業都市ロッテルダムを見る良い手段だ。延々と巨大コンテナの続く港を見学できる。



A | K.J. Van Velsen
映画館コンプレックス | 1996
City Multiplex 1996
Schouwburgplein 101
Rotterdam



B | West 8
市立劇場前広場ランドスケープデザイン | 1997
Schouwburgplein 1997
Schouwburgplein
Rotterdam



C | J.J.P. Oud
カフェユニ | 1925
Reconstruction Cafe de Unie 1925
Mauritsweg 35
Rotterdam



D | J.M.J. Coenen
オランダ建築博物館(NAI) | 1993
Netherlands Architecture Institute 1993
Museumpark 25
Rotterdam



E | OMA
美術館(クンストハル) | 1992
Kunsthal 1992
Westzeedijk 341
Rotterdam



F | OMA
バス停 | 1987
Bus Station 1987
Stationsplein 1
Rotterdam



G | E.L.J.M. van Egeraat
自然博物館 増築 | 1995
Extension to Natural History Museum 1995
Westzeedijk 345
Rotterdam



H | Mecanoo
レストラン ボンピュ | 1990
Redevelopment Boompij; Restaurant 1990
Boompjes 1
Rotterdam



I | Brinkman & Van Der Vlugt
ファン・ネレ工場 | 1931
Van Nelle Factory 1931
Van Nelleweg 1
Rotterdam



J | Van Berkel & Bos
エラスムス橋 | 1996
Erasmusbridge 1996
Leuvehaven
Rotterdam



K | de Architecten Cie (F.J. van Dongen)
集合住宅 | 1997
Apartment Buildings 1997
Landtong
Rotterdam



L | Brinkman & Van Der Vlugt
フェイェンノード・スタジアム | 1936
Feijenoord stadium 1936
Olympiaweg 50
Rotterdam



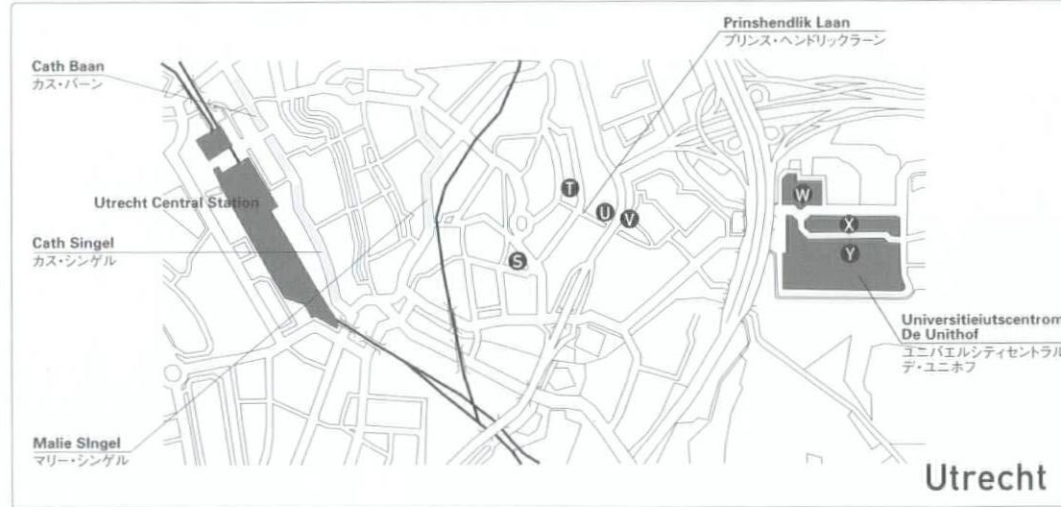
M | J.J.P. Oud
キーフック・集合住宅 | 1929
Housing; Church 1929
Kieftshoekstraat/Lindtstraat; Eernstein 23
Rotterdam



N | Bolles+Wilson
橋管理者のキャビン | 1997
Bridgemaesters' cabin 1997
Wilhelminapier e.o.
Rotterdam

ユトレヒト・建築ガイドマップ | Architecture Guide MAP_Utrecht

アムステルダムからだと車で20分程で着くオランダ第四の都市で、アムスからの半日旅行にちょうどいい町である。町の中心の路面より5mほど下を流れるアウデ・グラフト運河(Oude Gracht)の両岸には、その水面と路面との高低差を利用して埋め込まれたカフェやレストランがたくさんあり、ユトレヒトならではのカフェ風景を楽しむことができる。ショッピングやユトレヒトらしい落ち着いた町並みを楽しみたいければ、駅前周辺から散歩すると良い。しかし、建築見学となるとシュレダー邸はもちろんのこと、郊外のユトレヒト新大学都市にはバスで行く必要がある。この大学エリアに行けば、OMA、メカノ、ノイトリング・リーダイクの作品など、オランダ現代建築の状況を概観することができる。大学施設なので、日曜日は閉まっていることに要注意。



S | G.T.H. Rietveld
運転手の家 | 1928
Chauffeur's House 1928
Waldeck Pyrmontkade 10
Utrecht



T | MVRDV
住宅 | 1997
Private Houses KBWW 1997
Koningslaan 124
Utrecht



U | G.T.H. Rietveld
シュレダー邸 | 1924
Schroder House 1924
Prins Hendriklaan 50
Utrecht



V | G.T.H. Rietveld
ふたつの集合住宅 | 1934
Two Housing Projects 1934
Erasmuslaan 5-11; Erasmuslaan 1-3/
Prins Hendriklaan
Utrecht



W | W.J.M. Neutelings
ユトレヒト大学 ミナエルト・ビル | 1997
Minnaert Building 1997
Leuvenlaan
Utrecht



X | OMA
ユトレヒト大学 エデュカトリウム | 1997
Educatorium 1997
Leuvenlaan
Utrecht



Y | Mecanoo
経営・経済専門学校 | 1995
School of Economics and Management 1995
Padualaan 101
Utrecht

デン・ハーグ・建築ガイドマップ | Architecture Guide MAP_Den Haag

オランダ第三の都市デン・ハーグは、政府機関、大使館が集まっている政治の中心地である。建築の見どころは、ほとんどセントラル・ステーションの駅前に広がっていて、アムステルダムからだとデン・ハーグHS駅で中央駅行に乗り換えるか、トラムに乗る必要がある。現在その近くを、OMAによるサービス・トンネルのプロジェクトの工事も行われている。OMAのダンスシアター[P]は、公演がない限り中を見えないが、右手奥の出入口の係員と交渉する価値あり。時間があれば、Aaltje Noordewijestraat 4にあるアルド・ファン・アイクの教会(1964)に寄っていくのも良い。ハーグ見学は半日もあれば十分。



O | R.A. Meier
市庁舎・図書館 | 1995
City Hall and Library 1995
Spui/Lkalvermarkt
Den Haag



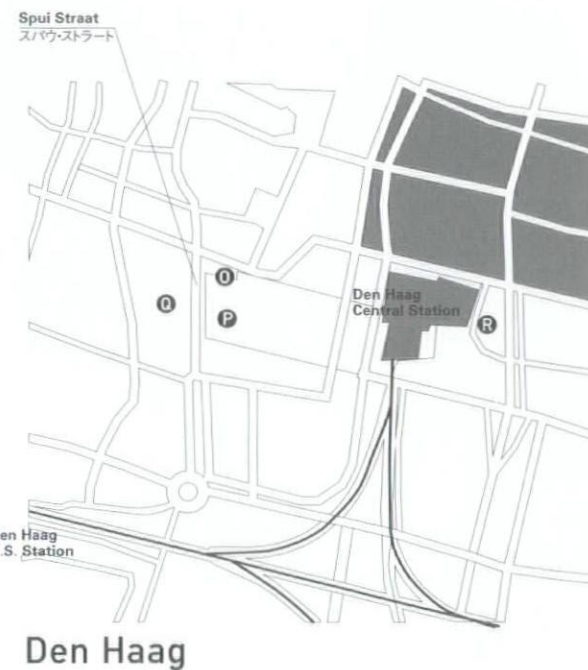
P | OMA
ダンス・シアター | 1987
Dance Theatre; Concert Hall 1987
Spui
Den Haag



Q | H. Hertzberger
劇場センター | 1993
Theatre Centre 1993
Spui 187
Den Haag



R | Benthem Crouwel
VNO本社 | 1997
Headquarters VNO 1997
Bezuidehouthsew
Den Haag



「僕のうちにも、もうすぐCATV。」

■情報通信メディアの明日を創る——ここにも、きんでん。
光通信やCATV、携帯電話……これら情報通信の総合設備にも
先進の技術力が光っています。

きんでんは情報・エネルギー・環境の各分野にわたって、
人と技術の調和を目指した総合設備エンジニアリング事業を展開。
社会と暮らしのさまざまな場面に、きんでんの先進技術が活かされています。

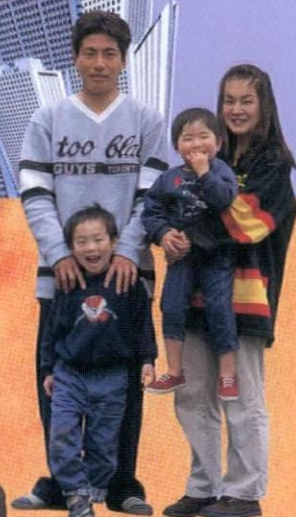
あつぎきんでんだ。

「人にも地球にも

大切なエネルギーだから。」

■安全に安定してエネルギーを供給する
設備とシステムづくり——ここにも、きんでん。

地球環境に優しく、経済的なエネルギーの開発と
有効利用の実現に向けて、日夜取り組んでいます。



「マルチメディアは簡単になるんだ。」

■情報化社会を全方位でサポートする——ここにも、きんでん。
これまで個別だった音声・データ・映像の配線を統合したり、
光ファイバ融着技術等の新工法に取り組むなど、
多面的なネットワーク環境を構築しています。

「システムインテグレーションで、人に優しい。」

■繊細に感性豊かにシステムを制御する

——ここにも、きんでん。

多様なオフィスビルや工場などの環境と生産体制に対応した、
人間中心のシステムづくりを開発・提案しています。

「良くなるね。街も人も。」

■ビルでオフィスで地域社会で、より快適な環境を創る

——ここにも、きんでん。

地域冷暖房プラントなどの環境設備。オフィス空間の機能性・快適性を提案する内装設備。
これらの多面的で総合的な設備事業を展開しています。

「海の向こうでも

活躍してるんだって。」

■地球上の各地域におよぶ海外工事の実績

——ここにも、きんでん。

1950年代に始まるきんでんの海外経験。
習慣や国民性の異なる世界各地でも、
きめ細かな活動が続けています。

株式会社 **きんでん**

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号
東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号
国内事業所185カ所／海外事務所12カ所／国内関係会社19社／
海外関係会社4社／海外合弁会社7社

いま開幕、 スポーツ ニューステージ。

多目的スペースがスポーツアリーナに一変！



ロビンス・オールスターは、シカゴブルズなどのNBA公式戦やアトランタオリンピックのメイン会場など、世界中で広く使われている本格的なフローリングによるポータブル・スポーツ・フロアシステムです。

- プレーヤーへの衝撃を吸収する弾力性に加え、永年の使用にも反りや狂いを起こさない高品質設計。
- 独特のジョイント・ロッキング方式により、短時間での組立て・取外しが可能で、しかも優れた収納性。

コンベンション施設、インドアスタジアムを短時間でバスケットボールやバレーボール、バトミントンなどに最適なスポーツアリーナに変身させることができるフローリングシステムです。

ロビンス FIBA・JBA・NBA公認コート

オールスター

ポータブル スポーツフロア システム

good new days

人間らしい美しい未来を

ヤナセ

総輸入元 株式会社 ヤナセ
商事事業部

東京都港区芝浦一丁目6-38 千105-0023
TEL. (03) 3452-4311

本 社 大阪支店 名古屋支店 福岡支店 札幌支店 ヤナセ東北 ヤナセ静岡
03(3452)4311 06(488)9801 052(241)2531 092(522)1331 011(231)2313 022(221)4171 054(261)4105

詳しい資料を差しあげます。ハガキに資料請求券を貼付のうえ、ヤナセ 商事事業部までお送りください。

展覧会レポート

「Alvar Aalto 1898-1976」

—会場で思い出した立原道造のこと、それからいもづる式に考えた日本のモダニズムのことなど—

梅宮弘光

「アルヴァー・アールト：20世紀のモダニズムの人間主義」展
会期：1998年12月19日(土)～1999年2月15日(月)
会場：セゾン美術館

セゾン美術館のアルヴァー・アールト展を、へえーとかほほうと感心しながら見た。セゾンのいつもの展覧会のように、といってもMoMAからの巡回展だが、とにかくもりだくさんで、それが年代順に並ぶ親切的な構成。アールトといえば、サナトリウムと片流れと花瓶くらいしか思い浮かばない私には、深読みしようにも知識がない。だからいきおい、拝見させていただきます、という感じになる。いいなあ、こういう気分の展覧会は。自分の専門に近いと、こうはいかない。原図の中の消してある文字まで読もうとするから、疲れる。それに比べて今回は、端から見ていけば、会場を出る頃には「アールト？ 知ってますよ」と胸を張れるわけだから。こんなお気楽な調子で見始めたのが災いしてか、にわかアールト通になるつもりが、いつのまにかアールトのことはうわのそらになっていた。というのも、ちょっとしたきっかけから、途中で日本のモダニズムのことを考え始めてしまったからだ。

展示としては地味なアールトの自邸兼アトリエ(1935-36年)を見ながら、思い出していたのは立原道造のことだった。アールトときて、サナトリウムと片流れと花瓶の次が立原というのもいびつな知識形成だが、かといって、突飛な連想でも、ましてやオリジナルの発想でもない。つまりそれは、磯崎新が聞き手となった生田勉のインタビュー「建築家：立原道造」(初出は『都市住宅』臨時増刊住宅第2集、1972年6月。後に磯崎新『建築の一九三〇年代』鹿島出版会、1978年所収)の記憶による。一高～東大建築科の友人であり、往復書簡の相手であるこの人物のインタビューの中に、アールトはこんなふうに登場する。

生田—吉田(鉄郎)さんの中央郵便局、それから山田(守)さんの通信病院にきて、ほとんど日本の建築界というのはその2人で代表されたかと思われるような時代が、昭和14年ごろにありました。それに対して丹下(健三)さんは敢然とそういうこと(白いタイル貼りの中郵便通信病院は「衛生陶器」だという批判)を言って、多少いやがらせというか、喚

呵を切っているというようなところがありましたけれども、しかし決然たる見識だったと思います。

(1行あいて、そのまま生田の発言が続く)

生田—そういう鋭い問題意識は立原は整理されてはいない。むしろ感覚的に早くからわかって、完成してあったんだと思う。それはちょうど短歌の中で新古今だけを愛したというようなものが建築についてもあって、はじめからしまいでアールトであって、コルビュジエでもライトでもないというようなことが、はじめからあったと思うんですね。(カッコ内は筆者補筆)

ここで生田が指摘しているのは、モダニティをめぐる世代間の違和である。つまり、吉田や山田ら(1895年前後生まれ、分離派建築会世代)と立原、丹下、そして生田ら(1910年代前半)の世代。この両者(じつはこの間に1900年の0年代前半世代を入れる必要があるが、論じる紙幅が今はない)を対置させた上で、後者の多様性をいながら立原の場合はその嗜好がアールトだったという主旨である。この嗜好があらわれているのが立原の卒業設計や「ヒアシンスハウス」だが、生田が立原にアールト的というときの意味は、その作品にあらわれた片流れ屋根や板羽目といった外見よりも、リージョナルな環境(それも北方の)の中で育まれる個人的な夢が人間一般に敷衍されるロマンティシズムにあるように思われる(私見では、それは分離派建築会世代の初期にも親しいものなのだが)。

こうしたことを、アールト自邸のところで考えたのには前段があって、それは石本喜久治自邸(1939年)である。石本自邸を掲載した当時の『新建築』(1939年5月号)編集子の評論の中にも、アールトが登場していたからだ。

石本氏がセセッションの若き一人として重きをなした事は周知の事、其れから時代は早やone generationは過ぎ、建築界は混沌の中に動いている。……建築家の家を多く吾々は見た。又建築家の設計した住宅も数知れず見た。だがアルバー・アトルー自身のホームを

見た強い印象を石本邸に再び甦らし得た事を喜ぶものである。

『新建築』はすでに前年の8月号で『アーキテクチュラル・レビュー』の複写を使ってアールト自邸を紹介していた。ここで編集子が指摘しているのは、分離派建築会世代のひとりの建築家自身の変容、つまり世代内でのモダニティの変節である。1930年頃の石本のスタイルは、東郷青児邸に代表されるような、いわゆる白い家だった。それが、ほぼ10年を経てアールト風になった(ほんとうにアールト的かは、ここでは問うまい)。その変節を、編集子は明らかに歓迎している。この家の担当者のひとりがじつは石本事務所に入所したての立原道造だったことは強調し過ぎない方がいいだろうが、「アルバー・アトルー自身のホーム」という風変わりな言い方に、立原が気にいっていたという石本の言葉「ハウスを作るのは易しいが、ホームを作るのは難しい」が反映しているのは明白で、すなわちこの石本評には、「ホーム」をつくることのできるすぐれた建築家というアールト評が入れ子になっているのだ。

日本のモダニズムの中で起こりつつあった変化は、戦争でいったんかき消されながら、戦後、「ヒューマニズム」をキーワードに新たな姿を現わす。1940年を前にしたこの変化の胎動期にアールトが参照されたことの意味を考えるためにも、うわのそらで見過ごしてしまったアールトの戦後をもう一度見直さなくては。展覧会は2月15日まで。

●うめみや・ひろみつ／近代建築史、神戸大学発達科学部講師



アイノ&アルヴァー・アールト自邸およびアトリエ(同展カタログより)

展 覧 会 レ ポ ー ト

原広司:25の譜面台—様相論
的都市における記号場」展より

松永英伸

「原広司:25の譜面台—様相論的都市における記号場」展
会期:1999年1月12日(火)~1月17日(日)
会場:代官山ヒルサイドテラス内ヒルサイドプラザ

原広司によるインスタレーション「25 MUSIC STANDS -A SEMIOTIC FIELD IN A MODAL CITY」が、1月中旬に代官山のヒルサイドプラザに於いて開催された。これは1995年6月にデンマークのルイジアナ現代美術館で開催された“JAPAN TODAY”展のために製作され、その後ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ドイツを巡回し、今回日本では初めての展示となる。

地下へと続く階段を下りると、暗闇の中に様々な光が点滅し出す。ネオンや発光ダイオードのほの暗い明かりがフラクタルな模型を瞬時に照らしたかと思うとすぐ闇の中に埋没する。潮の満ち引きや呼吸にも似た静かな鼓動を空間に与えるこの光群は、縦横5列、計25台の譜面台の上に取り付けられている。これらは1台のコンピューターによって制御され、クラシック音楽のようにフォルテとクレッシェンド、デクレッシェンドを繰り返し演奏していた。パンフレットには、「コンピューターは、光源に対応した135のチャンネルに、1秒ごとに個別の命令を送ることができ、それぞれのチャンネルへの出力は256段階、変化時間、ホールド時間、開始遅延時間は、それぞれ0.1秒単位で制御可能となっている。プログラムされた演出は、自動的に繰り返し演奏される。つまり、これは5×5のマトリックス上に展開する多様な光の記号群の、複雑な明滅と重なりを、高い自由度を持って演出することができる装置であり、人々は背後の壁面を除いたあらゆる角度から鑑賞することができる。演出の長さも自由に設定できるが、今回は12分3秒のプログラムが用意された。」とある。

この「25 MUSIC STANDS」は、1984年の多層構造モデル「影のロボット」の延長線上にあるといえる。そこでは譜面台の替わりに幾重もの層を成したアクリル板にエッチングを施し、発光ダイオードを取付け、それぞれが違う周期によって明滅される仕掛けを内包していた。光の種類と量を微妙にコントロールし、静けさや騒がしさ、緊張、弛緩、躍動、滲みいる、といった様々な空間の状態を作り出すという点では両者とも同じである。原は「影のロボット」の作品解説で、「全体として

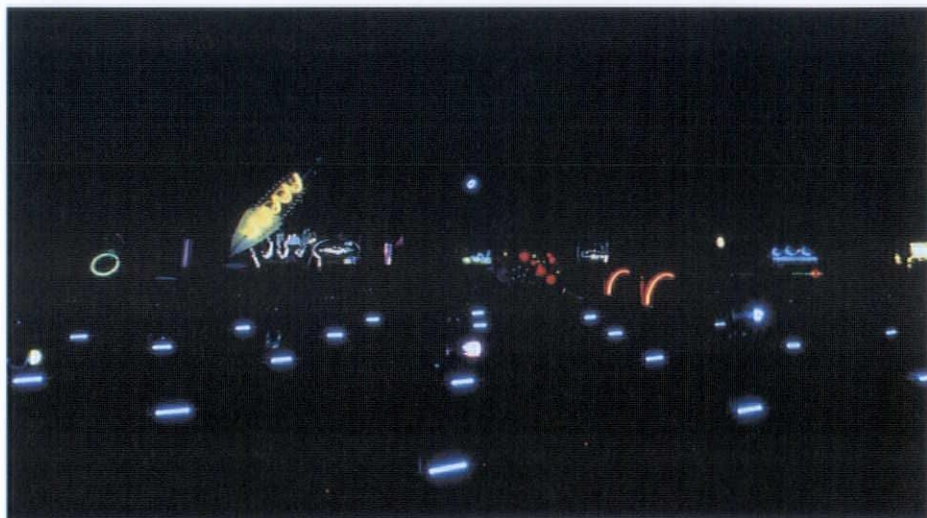
はオーケストラ装置であると考えられる。現在は一定の曲を反復演奏しているが、曲を作りさえすれば無限の図像の組み合わせが誘導できる。」としている。そして「表現内容は〈意識ののぞきこみ〉であり、私の意識の流れを私が観測する空間を実現するという意図を持っている。意識の取りとめのない流れは、まさに様相論の対象である。この多層構造モデルは、部分的な図像は計画的に抽出してあっても、電光による組み合わせの総体は予想できない。この点においても、予期しない構想を生む意識の働きと類似している。したがってこの作品は図像生成の装置である。」と結んでいる。「様相」とは、「事象の在り方の総体を示す概念」であり、これらの装置は“部分として抽出した図像要素の境界を曖昧にする”という著しい特徴をもつ。

「影のロボット」での「様相」は、図像を複雑に重ね合わせる＝オーバーレイという手法に依っていた。それは今にして思えば、面的な構成による3次元的なものであったといえる。'80年代のヤマトインターナショナルのファサードや田崎美術館の“映りこみ”を意図した中庭の折れ板ガラスはその時代の代表作であり、そこでの多層構造(混成系の状態)はまだ視覚的な捉え方をされるものであった。しかし'90年代に入り相鉄文化会館の三角形のトラス屋根が出現した頃からその「様相」が4次元的に展開されはじめる。様々な要素を持つ空間を〈記号場〉と捉え、その

要素を“離散的”に配置することで視覚的というよりも意識の中での「様相」を追求したのである。つまり“諸々の情景図式を要素とする、諸部分の全体化がなされた情景図式に依って生成される意識”がここでいう「様相」なのである。そして大阪の連結超高層の足許に設置された通称“ドラム”といった一見建築の意味を持ち得ない要素が出現し、それ以降、様々な要素が“アトラクター”として認識され始める。建築的要素である手摺や階段、換気塔に留まらず、サインや広告までもが“アトラクター”となる。“アトラクター”とは人々の誘因装置として認識されるものだが、これらが離散的に配置されることで、記憶の情景図式が多層化し混成系の状態となった意識が重要なのである。

「25 MUSIC STANDS」とは、譜面台を“アトラクター”と捉えた4次元的な「様相」を創出する装置なのである。もちろん“部分とそれらを適当に重ね合わせることによって生じる不可測の図像の全体を操作する装置”としては「影のロボット」と同じであるが、「25 MUSIC STANDS」への変遷が意味する建築表現上の違いは大きい。メタファを誘起することを表現目標としているのではなく、メタファが生成される意識のメカニズムを表出していることが、社会的に共有されている曖昧な尺度と合致し、現代建築の一方向性を示唆しているといえよう。

●まつなが・えいしん/建築家、CLIP共同主宰



写真=大河内学

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



横浜ベイシェラトン
ホテル&タワーズ(神奈川)



山田照明株式会社

本社/ショールーム 〒100-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11 TEL 03-3253-5161
横浜支社/ショールーム 〒220-0005 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL 045-311-1731

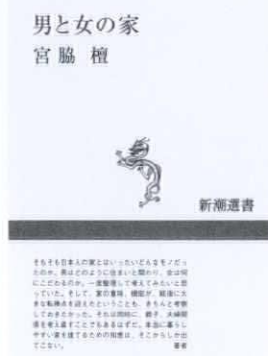
仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34 TEL 022-267-1630	札幌営業所 〒003-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL 011-811-2215	大阪支社 〒570-0006 東大阪市橋根 2-2-6 TEL 06-745-6811	福岡支社 〒812-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61 TEL 092-414-8531
広島営業所 〒730-0806 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL 082-293-6119	北関東営業所 〒370-0051 高崎市上中居町 51-1 TEL 0273-26-4111	名古屋事務所 〒460-0001 名古屋市東区泉 1-21-35 TEL 052-963-8411	宇都宮事務所 〒321-0871 宇都宮市海道町 818-2 TEL 0286-60-1381

書評

『男と女の家』

評者＝光藤俊夫

あとがきのない本——これは宮脇檀の自分史だ



『男と女の家』
宮脇 檀＝著
新書判 224頁
新潮社 1100円

宮脇檀の『父たちよ家に帰れ』(1996年2月、新潮社)が文庫本になるというので、その解説を依頼され、彼とのおよそ30年に渉る家族ぐるみの交際のいろいろなこと、あるいは彼がいつも念じていた「住宅のあり方」に対しての真摯な姿勢や、そのことを実証しての作品群の「具体性」の一端にも触れながら、とにかくこれほど多くのテキをつくりながら、またこれほど多くの人から愛され続けた建築家は「稀有ではないか」と書いたのだが、まったく専門外のことで専門家以上にやってのけてしまう器用極まりない才能は、とても私達の及ぶところではなかった。テレビに出れば本物のキャスターを食ってしまうし、海外旅行では隣のツアーのこれまた本職のコンダクターに知恵を貸してやったり、かと思えば、銀座の一流のギャラリーで、そんなことは誰もやったこともない、そう、世界を歩いて拾い集めた、観る人によっては単なる石ころや紙屑でしかないような「ガラクタ」展を開いたり……と、向かうところ敵なしという具合だった。そして著作も何十冊とこれまた並みの作家以上の活躍ぶりだから恐れ入ってしまう——などと紹介した上で、「今日、檀さんは故あって病床にある。(中略)それにしてもちと病院暮らしが長過ぎないか。世の『父たちよ家へ帰れ』と勧めるのもいいが、檀さんも早く元気になって『家へ帰れ』。決して優れた腕前とは思っていないが、おまえさんの洒落た手料理で明日にも一杯やりたいのだ」と括っておいた。しかし、彼はついに「家に帰る」ことなく逝ってしまった。そして、著者がそのまえがきで触れているように、あれだけ住宅に関する文章をすでにして何万枚も書いてきたにもかかわらず、この際「書いておかねばならないところが、まだまだいくつもある」と、今日まで気にかけてながらも、なかなか纏め切れなかったことども、つまり

は「山の小動物たちが木の洞に隠して」積んでは置いたものの、忘れてしまいそうになっている、しかし大切なイロイロ、すなわち「家の原点は家族」だとの再認識を軸としながら「家に無関心な男たちとご執心の女たち」の盲点を、ときにしらしらしく、ときに気障っぽく聞こえるのにも照れることなく、たとえば『「住む」が男と女が同棲するという意味になることについて』とか、「家を子宮と同一視するわけ」とか、あるいは『「家づくり」というのは本当に女だけの責務なのか』、「やがて物置化してしまう『書斎』とは男の一体何なのか」とか、果ては「男が裁縫や料理するために早く家に帰って来たっておかしい」やら「セックスの場としての家と向き合っの設計に何が必要か」などと、菌に衣着せずに鋭く衝いて展開される、しかも彼自身の自分史とも言えるだろう、実にユニークな住宅論『男と女の家』が、いみじくも彼が息を引き取ったまさにその日に本となって遺された。その目次には「あとがき 220」とあるが、実は本文には一行のあとがきもない。喉頭癌の宣告を受け、その手術後さらに肺への転移を知らされ、いよいよ死へのゴールが近いと悟ったときにも、なお生への執着を燃やし続け、「どこが痛いというよりも声を出して話せないのが辛い」とメモして見せながら、パソコンに最後まで文字を刻み続けていた、そしてあの几帳面な彼がそんな大事な締めくくりを忘れるわけがない。まだまだ「もの申したいこと」が一杯あったのだ。「あとがき」は、いずれと期していた、もっと壮大な物語のためにとっておかれたのに違いない。なんだか、世の申しっぱんに寂しくなってしまった。

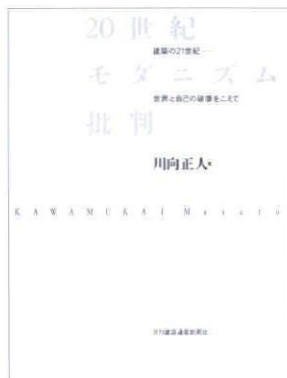
●みつふじ・としお／建築家、昭和女子大学教授

書評

『20世紀モダニズム批判』

評者＝桂英昭

これからの建築副読本



『20世紀モダニズム批判』

川向正人＝著

A5判 272頁

日刊建設通信新聞社 2700円

この本は、21世紀に向けての「建築副読本」と呼ぶのがふさわしい。

著者である川向正人は、近現代を専門とする建築史家である。東京や東北などの大学で教鞭を執り続ける教育者であり、地域づくりのオーガナイザー等の実践者として活躍している。さらに十数年間にわたり、全国各地の建築家へのインタビューを通じて、対話と観察を絶やさない評論家でもある。常に、それ

ぞれの「現場」にいる。このスタンスが、この本そのものだ。ただし、すべてにかかわることは、各現場における意見の語気を弱め、相互調整して伝える危険性を含んでいる。

本書は、欧米、日本における近現代建築事情やその周縁思考の多彩な史的考察(第2～4部)を「あんこ」に地域文化の憂うべき現状の直視(第1部)と、地域から生まれる可能性(第5部)の「側」でサンドイッチした構成となっている。

個人的には「あんこ」にあたる史的考察部分が興味深い。川向は、モダニズムを弾劾する論拠のひとつとして、「新しいものを美德とし、必要がなくなれば壊す行為」の愚かさ強調する。その行為が、単に建築だけでなく、人間の心の豊かさ、地域文化をも破壊してきたとする視座を全面的に押し出すことにより、一元的な価値観が全てを支配するモダニズムを批評する手法は、これまで意外とお目にかからなかったような気がする。

愚かさの反証として、第2部では、欧米の歴史的建築と地域イメージの保存継承の事例を列挙しているが、馴染みのある事例を挙げても、過去のこと、海外の出来事としてではなく、読者に新の関心を示してもらわなくては意味がない。そのことを意識してか、川向の巧みな演出が見受けられる。山田守と吉田鉄郎のエピソードを挿入したり、若者に人気のハンス・ホライン設計のハースハウスを事例に創造的保存について、独自の考察を加えている。また、チューゲンハート邸(ミース設計)やキーフワーク集合住宅(J.J.P.アウト設計)などのモダニズム建築自体が、保存の対象となるという紹介は、皮肉っぽく刺激的で読欲を増す。

続く第3部の欧米編では、歴史主義再評価からレム命名の「マンハッタンニズム」などを話題に、「様式」や「主義」、「中心と周縁」等々に言及。第4部の日本編は、堀口捨己、今井兼次に始まり、伊東豊雄、谷口吉生、そして内藤廣ら建築家の思想、作品をナイーブな論点を見落とさずに掘り起こすことで、日

本の流れ、未来への兆しを追う形式を取る。

いわゆる建築史ではなく、世界的視野において、20世紀という時代のうねりを多彩な思考と建築家の具体的な作業をもとに再整理することが、モダニズムに翻弄された日本、特に地域の崩壊をより鮮明にするであろうという川向の批判戦略は、見事に成功しているようだ。やはり詰まった、よく練られた「あんこ」は、満足感を与えてくれるものだ。

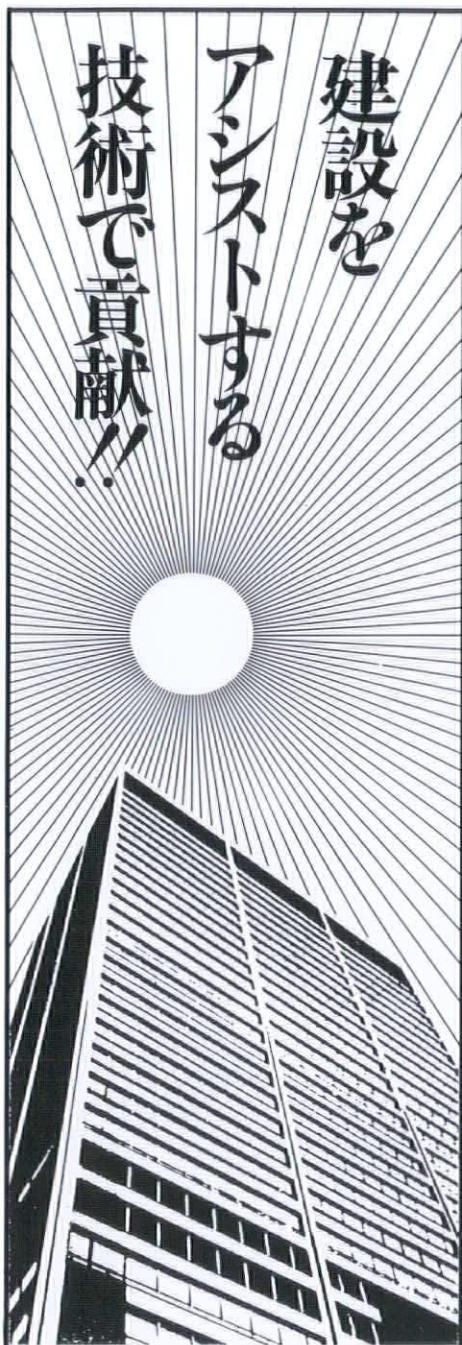
さて、「側」の部分である。第1部は、学生課題の話題などから、緩やかに地域崩壊の問題提起を展開する。最終第5部は、自ら関わってきた「白石デザインフォーラム」や設計コンペなどをとりあげながら、建築と地域の成熟のあり方を模索し、「国際性と地域性」の関係をテーマに締め括っている。この部分だけでも、一冊の本として成立するであろう。川向の地域への継続的で熱い取り組みを初めて目にする読者には、新鮮に違いない。

だが、この単行本が「ミクロコスモスからの発信」と題する新聞連載コラムをベースとし、建築家との対話の数々をまとめた『風土・地域・身体と建築思考』(1997年、日刊建設通信新聞社刊)の姉妹編であることを知る者には、少し物足りなさが残るのは否めない。逆を言えば、既刊と並行して本書を読むことを勧める。「あんこ」の部分に着目した意味を理解してもらえるであろう。「あんこ」と「側」は、「国際性と地域性」の関係とっていただいてもよい。

これからは、各自の「身近な世界(=地域)」からの再スタートしかないのであるとする著者の結論に共感する。そこでは、共通のバイブルも教科書も無力であろう。21世紀の建築・地域づくりの実践者—建築家、学生、行政、そして住民に必要なのは、「情報公開」と本書のような「副読本」ではないだろうか。

偶然にも、この原稿を書く傍らにチャールズ・ジェンクス『THE ARCHITECTURE OF THE JUMPING UNIVERSE』がある。

●かつら・ひであき／建築家、熊本大学専任講師



- 一般電気設備工事＝設計施工
- 防爆電気設備工事＝設計施工
- 計装工事＝設計施工
- 電気加熱保温工事＝設計施工
- 静電気接地用リール——販売

ASTEC
SHOWA ASTEC

昭和アステック株式会社
(旧社名 昭和電機工業株式会社)

取締役社長 浦 道 雄

- 本社／東京都港区東新橋2丁目7番3号
電話03(3437)3851(代表) 〒105-0021
- 支 社＝関東・中部・関西・中国
- 営業所＝新潟・鹿島・千葉・四日市・堺
倉敷・岩国・徳山・坂出・松山
新居浜・大分・福岡
- 駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン・タイ
シンガポール・マレーシア

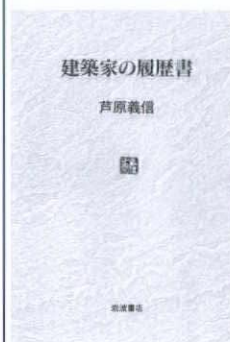
新刊紹介

『建築家の履歴書』

芦原義信＝著
新書判 148頁
岩波書店 1500円

芦原義信は、1942年に東京大学建築学科を卒業、ハーバード大学大学院に留学し、1953年に卒業。M.プロイヤー事務所勤務を経て、事務所を設立する。著者は銀座ソニービル、駒沢公園体育館、管制塔など重要な建築を手掛け、また建築・都市の理論家として『外部空間の構成』、『街並みの美学』、『隠れた秩序』といった著作を著している。そこでは建築の形を問うのではなく、街路やそこに住む人々との関係の中でこそ建築の構成が決まるのだという主張を一貫して繰り返してきた。その結果が、建築関係者だけでなく一般の人々にも親しまれる息の長い建築として結実したように思う。鈴木博之も指摘しているように、著者の時代はすでに近代建築の論理と手法が確立され、新たな課題を見出すことを迫られた難しい時代であったが、その点で著者は、その課題に真摯に取り組み、見事に解決したと言える。本書では、著者のそうした思考の軌跡を垣間みるとともに、当時の建築の現場も見え隠れして興味深い。

著者は昨年末に文化勲章を受章し、その業績が広く認められている。



『防災と市民ネットワーク』

三船康道＝著
A5判 208頁
学芸出版 2300円

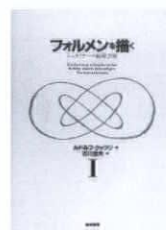
全国各地の防災計画に携わる著者が、全国アンケートの結果を基に、災害時における市民ネットワークの重要性に焦点をあて執筆。人的・物的ネットワークや情報インフラの構築など実践例が豊富で直接の参考になる。地味ではあるが、有意義な一冊である。



『フォルメンを描くI・II』

ルドルフ・クッツリ＝著
石川恒夫＝訳
B5判 248+320頁
晩成書房 5200円

シュタイナー教育における重要な科目として挙げられる「フォルメン線描」。上下12章から成る本書はその実習書。カンディンスキーら前衛芸術家に影響を与えたという思想の一端に触れられる。



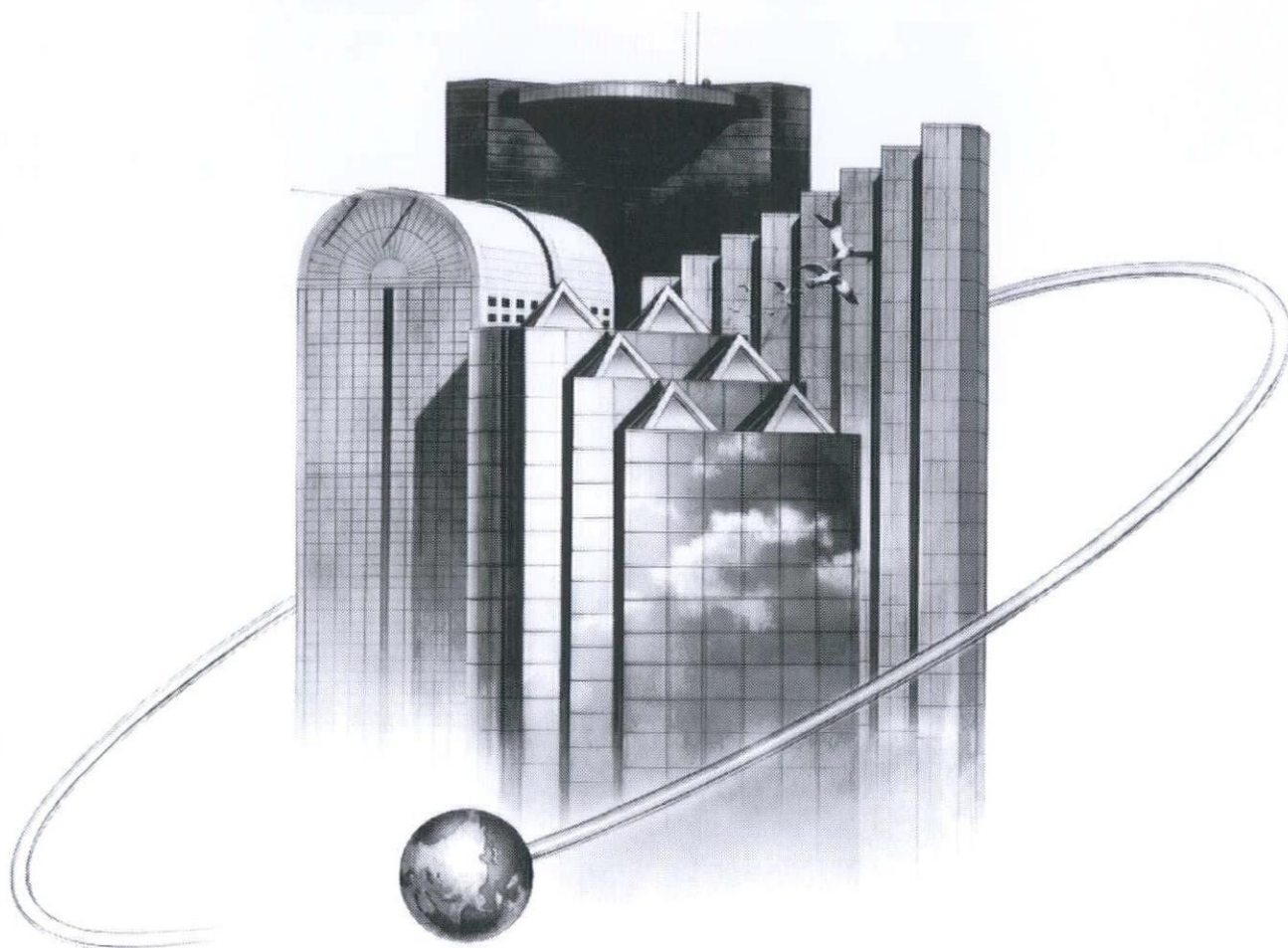
『光の21世紀』

石井幹子＝編著
B6判 200頁
NHK出版 2000円

日米欧の第一人者らが、それぞれ21世紀の照明を考える。オフィスやキャンパスといった場の照明について、あるいは光源の種類や技術面、デザインについて、それぞれ来る世紀を見据えた照明のあり方を考える。



快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

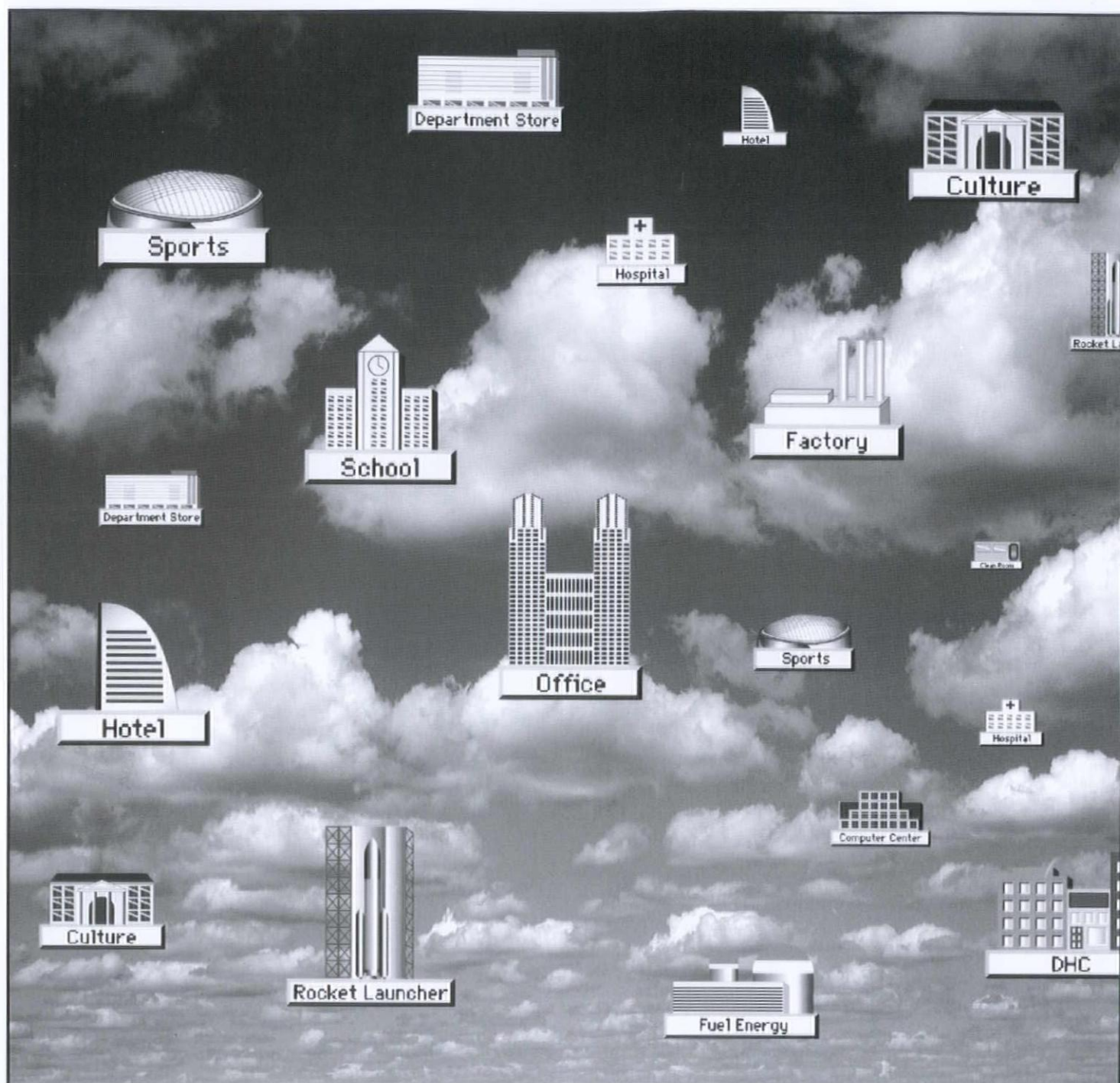
その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111



空気のメニュー。

オフィス、工場、学校、病院…。それぞれの建物には、もっとも適した空調システムがあります。

新菱冷熱は「さわやかな世界を創る」という思想のもとに、

用途に合わせたオーダーメイドの空調システムを、設計・施工しています。

バリエーション豊かな私たちの空気のメニューから、21世紀の新しい都市環境が始まります。

◆ 新菱冷熱
SHINRYO CORPORATION

3DCGレンダリング・アニメによる 空想家電展

「いままではなかったけれど、こんなものがあつたら欲しい」というエンドユーザー発のアイデアとこだわりを実現するために、あらゆるメディアを通じた商品企画、マーケティング活動、チャンネル開拓を実施する企業「elephant design」の設立一周年を記念した展覧会。ストリート系男子高校生たちのアイデアをカタチにし、ローソンで限定販売された話題商品「携帯電話カバーPq-1」の製作過程の紹介や、空想上あるいは開発段階の情報端末、家電製品を展示。

会期：1999年1月29日(金)～31日(日)

時間：9:00～20:00

会場：AXIS Gallery 東京都港区六本木5-17-1 アクシスビル4F(入場無料)

問い合わせ：elephant design株式会社

Tel：03-3373-5471

URL：http://www.col.co.jp



第5回関西建築家大賞 作品募集

近畿地方で活躍する建築家に対し、その優れた建築活動を顕彰し、過去10年間に実現、もしくは提示された3つの作品を対象として、唯一の建築家を選考するものである。

資格：JIA正会員であること。但し非会員の方が応募する場合は事前に入会手続きをし、応募時点でJIA会員資格を取得していること。

作品：3点。1989年1月1日～1998年12月末日の間に近畿地方で完成したもの。1点は実現を前提としたプロジェクトでも良い。前回応募作品も可。

応募期間：1999年1月～3月

申し込み方法：応募予定用紙に必要事項を記入の上JIA近畿支部事務局へFax。

審査委員：原広司

賞：大賞1点(賞状、賞碑、副賞100万円)

申し込み・問い合わせ：JIA近畿支部

Tel：06-229-3371、Fax：06-229-3374

TNプローブ シンポジウム・シリーズ PROBE-1「世界化する都市と建築」

建築家と社会科学、人文科学の専門家との幅広い議論の中で、世界化という問題が、今日の都市という集住体にとどのような影響をもたらしているのかという問いに対し、現況認識と共に、問題や課題の抽出を試みる。
プログラムA：建築家はいかなる場所と空間を開きうるのか

講師：多木浩二、横文彦、伊東豊雄、山本理顕

日時：1999年2月26日(金)18:30～21:30

プログラムB：世界化する都市の存在論

講師：内田隆三、見田宗介、鷺田清一、今福龍太

日時：1999年2月27日(土)14:30～17:30

プログラムC：「都市」という概念は生き延びるか

講師：伊東豊雄、今福龍太、多木浩二、山本理顕、鷺田清一

日時：1999年2月27日(土)19:00～21:30

会場：TNプローブ

入場料：1000円／1プログラム

定員：200人

申し込み方法：官製ハガキ、e-mailのいずれかで、希プログラム名、氏名(ふりがな)、会社名、住所、電話番号を明記の上下記へ

申し込み、問い合わせ：TNプローブ

東京都港区六本木5-14-35 Tel：03-3505-8800

E-mail：tnprobe@obayashi.co.jp

大江 匡 講演会

内容：解放の速度—コンピュータという武器に潜む光の速度

日時：1999年2月26日(金)18:00～19:30

場所：山一ホール 京都市下京区四條境町東入

Tel：075-221-5517

入場料：1000円(一般)

800円(建築士会会員、学生)

問い合わせ：京都建築士会 Tel：075-211-2857

中央工学校 建築・設備・インテリア卒業作品展

会期：1999年2月24日(水)～26日(金)

時間：10:00～17:00 入場無料

会場：中央工学校STEP(85周年記念館)

平倉直子 特別講演会

日時：1999年2月26日(金)15:00開演

定員：300名(入場無料、当日先着順)

問い合わせ：中央工学校

東京都北区王子本町1-26-17

Tel：03-3906-1211 担当：建築工学科/小林

もしのかつら 若野桂 & マイケル・エコノミー展 GO-GO-GO SHOW

日米ふたりの気鋭アーティスト、若野桂とマイケル・エコノミーに共通するのは、クラブシーンでのつながりがイラストレーションをはじめきつかけに繋がっている点で、その作風に色濃く反映されている。マイケル・エコノミーは現代ニューヨークを代表するイラストレーターのひとり、若野桂は、United Future Organization、Monday満ちる、テイ・トウワ、DJ KRUSH、竹村延和、オーディオアクティヴ、イルマッパ、ソウルスクリーム、三木道三、モンドグロッソなどのアーティストに作品を供給し続けている。

会期：1999年2月19日(金)～3月22日(金)

時間：10:00～20:30(会期中無休)

会場：バルコギャラリー 東京都渋谷区宇田川町15-1 渋谷バルコパート18F

入場料：一般500円、学生400円、中学生以下無料

問い合わせ：バルコギャラリー

Tel：03-3477-5873



DJ KRUSH

©KATSURA MOSINO

SPIRAL TV

ヴェネツィア・ビエンナーレに出展したファブリス・ユベールを中心に、スパイラルをテレビ局に見立て、様々なアーティストたちの映像作品を番組構成していき放送局しながら流していく企画。

会期：1999年3月10日(水)～3月28日(日)

時間：11:00～20:00(会期中無休)

会場：スパイラルガーデン 東京都港区青山5-6-23

Tel：03-3498-1171

入場料：一般1000円、学生800円、小学生以下無料

キュレーター：南條史生、三木あき子

問い合わせ：アートダイナミクス 磯村

Tel：03-5722-6311

海外レポート

パリ〈建築シテ〉プロジェクト

from Paris

山名善之

建築博物館を中心に建築総合研究センターとなる〈建築シテ〉創設のプロジェクトが、昨年の2月に発表されてから1年が経過し、次第にその輪郭がはっきりしてきた。今回はこのプロジェクトを立ち上げ、その責任者としても昨今、活躍のめざましい建築史家ジャン・ルイ・コーエン氏に〈シテ〉実現に向けての抱負を語ってもらった。

—80年代にはフランクフルト建築博物館、モントリオール・カナディアン建築センターなどが、1993年にはロッテルダムのオランダ建築博物館(NAI)がオープンしました。パリの〈建築シテ〉も、これらの延長線上にあるものと考えてよろしいのでしょうか。

建築博物館をもつ機関ということで共通するところがありますが、建物規模の面からも、組織の多様性の面からも、〈建築シテ〉はかなり大掛かりなものになります。例えばフランクフルトのものとは比べると9倍ほどの床面積があります。

—それではフランスで、今までに〈建築シテ〉のような構想はあったのでしょうか。

〈建築シテ〉の部分的なものは、すでに存在し、運営されているものはいくつかあります。この〈建築シテ〉は、セーヌ河をはさんでエッフェル塔の向かいにあるシャイヨ宮内に2002年オープンを目指しています。ここに現在「古建築保存・歴史研究所」、「フランス文化財博物館」がありますが、これらと私がディレクターをしているオデオン界隈にある「フランス建築インスティテュート(IFA)」などは、既存の組織です。これらの今まで活動がばらばらであったいくつかの建築高等機関に有機的関連性を持たせるようにと、地理的にも1カ所に集合させ、ひとつの組織にしようとい

うものです。といった意味で、80年代からフランスでいくつか計画された建築博物館・研究センター構想とは、性格が異なります。

—すると新たな〈建築シテ〉は、この3つの既存組織が柱になると考えてよいのでしょうか。

必ずしもそういった訳ではありません。新たな〈建築シテ〉は、これらが主にベースになることは確かですが、新たに3つの部門に再編させます。「建築博物館部門」「建築・文化財コレージュ部門」「建築創造部門」の3つですが、それらは例えば「建築博物館部門」ですと、もともとIFA内にあった「近現代建築アーカイブ」のコレクションと、「文化財博物館」のコレクションを統合させ「建築博物館」のコレクションとするといったように、既存のものを一度解体し、再編させます。これはつい先日決まった話ですが、「建築アカデミー」のコレクションもここに合流することになります。このようにパリに散在する建築コレクションの数々を、ここに集約させる予定です。そして、このコレクションを展示していくだけではなく、「建築創造部門」内に置かれる展覧会企画部によってつくられる企画展覧会も行っていく予定です。これは今まで、横文彦、伊東豊雄、長谷川逸子、象設計集団といった多くの日本の建築家をパリで紹介してきたIFAのギャラリーが発展した形のひとつと考えていただいても良いかもしれません。

—「建築・文化財コレージュ部門」という教育研究部門は、どのようなものになるのでしょうか。新たな建築大学院大学を設立するということでしょうか。

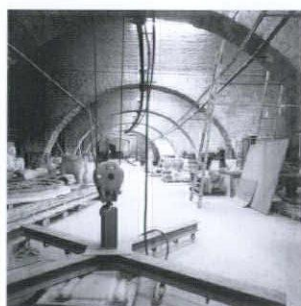
これは大学組織とは違ったものになります。

「建築博物館」の文化活動と、「建築創造部門」の今日的創造活動の間に位置するのがこの部門です。まさにシテ設立の目的のひとつである、このふたつの側面の有機的交流のために非常に重要な役目をコレージュ部門は担います。具体的には現在シャイヨ宮内にある「古建築保存・歴史高等研究所」で行われている古建築の修復と保存技術の教育研究活動を継続させ、それと並行させて、今まで建築に関する研究を行ってきた大学、建築学校、国立科学研究機構と連携を取りながら、建築博士の学位を授与できるような組織をつくっていくと考えています。この他に「アーバン・プロジェクト研究所」、「高等建築研究所」などをこの「コレージュ」内に設置すると共に、建築あるいは都市計画の注文主である行政官や政治家のためのフォーラムやシンポジウムを開催していこうと思っています。

—今からとても実現が楽しみな〈建築シテ〉ですが、プロジェクトが発表されてから1年が経ちましたが、反応はいかがでしょう。

私自身も驚くほど、このプロジェクトは好意的に受け入れられ、当初予定していた予算を上回る設立資金が集まる気配で、まずは上々のスタートがきれたと言えます。ただ、内容が盛りだくさんな分、これから解決しなければいけないこともたくさんあります。2000年から〈建築シテ〉主催の展覧会をスタートさせますが、その後、シャイヨ宮の改修が終わる2002年からは、年間に大小の企画を十数本程度を行うことを考えています。

●やまな・よしゆき／パリ・ベルヴィル建築学校DPLG課程、パリ第一大学博士課程、フランス政府給費留学生



1, 2: 改修工事の進むシャイヨ宮内部
3: インタビューに応えるジャン・ルイ・コーエン
©Jacqueline Salmon

海外レポート

ブエノスアイレス・ビエンナーレ:
テーマを排した建築会議

from Buenos Aires

瀧口範子

去る1998年11月20日から24日まで、アルゼンチンのブエノスアイレスで、「ブエノスアイレス建築ビエンナーレ」が開催された。日程5日間、建築家を中心にして講演者の数60人、のべ聴衆約5000人、展覧会場2ヶ所という大がかりなイベントで、ブエノスアイレス現代美術館の館長であるホルヘ・グルースバーク氏が仕掛人である。ブエノスアイレス・ビエンナーレが始まったのは1985年。独裁政権が崩壊した時に構想を進め、今回はすでに7回目にあたる。開催のための経費70万ペソ(約70万ドル)は、グルースバーク氏が集めるさまざまな協賛金によって賄われる。

たいていの建築展、あるいは建築会議には「テーマ」がある。その時代性と地域性に合わせて、主催者側がそれなりの問題意識を提示して、それに添ったかたちで議論が進む。そうは言うものの、建築家は現在進行中のプロジェクトや最近完成したプロジェクトを語るのが常で、たいていは聴衆の側にテーマとの関連性をたくましく想像し、思考する自由が与えられる。何らかの会議を傍聴した読者なら、これはすでにご存じのことだろう。

驚いたことに、このブエノスアイレス・ビエンナーレには最初からテーマがない。テーマがない上に、各建築家に与えられた発表の時間はわずか30分。講演会は午後2時半から夜10時まで、市内の劇場で行われるのだが、世界中から集まった建築家が次から次へと壇上に上がり、スライドを背にしてプレゼンテーションを高速で繰り返す。聴衆の方も、お目当ての建築家の講演に合わせて来場し、しばらく耳を傾けた後に席を立って会場を去り、また後ほどやってくるといった具合で、出入りが激しい。これが5日間続く。まじめくさったテーマを掲げた気むずかしい会議を見るつもりで出かけたのだが、このビエンナ

ーレは建築家たちが次々に好きなことを言って帰るという意外な展開を見せ、聴衆もそれを十分承知の上でつまみ食いをする、実にフレキシブルな様式になっていた。

主催者のグルースバーク氏はテーマを設けないことについて、次のように説明する。「テーマをでっちあげても、それは言い訳でしかありません。主催者側が設定したテーマを建築家たちに強制するようなことはしたくありませんし、ある程度のクオリティとクリエイティビティを備えた建築家なら、どんなテーマでもそれなりにあてはまるものです」。

というわけで、各建築家は講演に自分なりのタイトルをつけて登場した。若手より熟年層が目立った点を除けば、参加した建築家は多岐にわたり、その主張するところも分散している。日本から参加したのは、菊竹清訓、伊東豊雄、長谷川逸子である。グルースバーク氏は、招待する建築家の基準を「自分にとって面白い人」とだけ説明する。ただし「フランスには十分考慮した」とも。たとえばレオン・クリエアピーター・アイゼンマンは、ヒットラーの第三帝国時代の建築家、アルバート・シュペアを評価するが、グルースバーク氏自身はシュペアが戦犯者だという理由で、個人的には評価の対象からははずすべきとする主義だ。だが、建築家としての評価は公正になされるべきだという観点から、クリエアやアイゼンマンも招待リストに加える。基本的には、理論家と実践的な建築家を混ぜ合わせたという。

ところで、このビエンナーレはメディアとしての建築家会議の意味を考えさせるものでもあった。アルゼンチンには現在あまりあるほどの建築家がいるという。ブエノスアイレス大学には独立した建築学部があり、そこで学ぶ学生は15,000人。建築はこの国にとって重要な位置をしめる職業なのだが、いつも

国際的なディスカッションの外側に置かれてきたというのが、この国の建築家たちの意識である。50年続いた独裁政権による孤立、そしてどこからも遠い地理的な条件、さらに近年ではシーザー・ペリやラファエル・ヴィニョリなど、国際的な成功を収めるには国外に出ずには不可能なのではと思わせる前例がある。

町の中とは言えば、ヨーロッパの影響が強く、道路を歩いているとふとスペインにでもいるような錯覚に陥るほど「アルゼンチンらしさ」を把握するのが難しい。国民の多くがスペイン、イタリア、ドイツからの移民で成り立っているというこの国の歴史を考えれば、それも納得のいくところだ。ここならではの現在進行形の試験を見る機会はありません。大雑把に言い切ってしまうと、国際的な論議からはずされながら、自らのアイデンティティも築き損ねたという、アルゼンチン建築の現実がある。だがその一方で、たとえばウォーターフロントのプエルト・マデラ地区のように、倉庫を改造した新しい開発が進んでいる地域もあり、事態はゆっくりだが変化を見せ始めている。

グルースバーク氏は、ウルグアイのアーティスト兼政治家だったペドロ・フィガリーの「リージョナリズム(地域主義)」の定義を引きながら、アルゼンチンのポジションを説明する。「ラテンアメリカのアーティストは、国際的な言語を使いつつ、しかしそれをローカルな問題に応用すべきである」。

「地域的に離れているからこそ、アルゼンチン人は情報のパラノイアになっています」。盛りだくさんのビエンナーレは、そうした地元建築関係者たちの情報飢餓感を満たしつつ、アイデアとアクションのカタライザーの場、現場的なメディアとして作用しているのだ。

●たきぐち・のりこ／ジャーナリスト



ビエンナーレ主催のホルヘ・グルースバーク氏



アルゼンチン建築家の近作の展覧会風景



講演に参加した伊東豊雄、ザハ・ハディッド、ヴォルフ・プリックス



ブエノスアイレスの新しいウォーター・フロント開発地、プエルト・マデロ

海外レポート

データ・スケープ／
社会性のある建築を求めて

from Rotterdam

大松俊紀

MVRDVのヴィニー・マースとヤコブ・ファン・ライスは研究し続けているデータ・スケープなるプロジェクトに参加する機会をオランダ、アムステルダムのベルラーヘ建築研究所で得た(本特集のp.89～91でも紹介)。主旨は、データ(統計資料)からどのような形態、風景が導き出されるか、そしてそれが数値の変動によってどのように変化するか、というものであった。具体的な手順としては、パラメーター(媒介変数)をひとつだけ選択、設定し、それを極限值までもっていった際(実際の世界では極限值を目にすることはほとんどない)、現状の風景や今まで視覚化されていなかったものが、どのように変化するか、視覚化され、形態、風景として現われるかということであった。この場合、パラメーターは、高速道路での自動車の騒音の広がりなど何でもよい。

例えば、地球温暖化にも直接関係する二酸化炭素の問題。この問題の場合、(1)都市が排出する二酸化炭素、(2)木一本が吸収する二酸化炭素、(3)木一本が産出する酸素、(4)人間1人が呼吸のために必要な酸素の量、というサーキュレーションの中の4つのパラメーターの数値が要求された。以上より、酸素計算でオランダの全人口を考えた場合、20億本のBetulaという木を植えるため、オランダ国土

の1.8倍に相当する9300万haの土地を必要とする。そして、2150年のオランダ。人口は3200万人(現在の2倍)になるとデータより推測され、その酸素呼吸を満たすためには上記の木が50億本必要になる。つまり、オランダ国土の約4倍の敷地がその木のために必要となる。ここまでは1種類の木で検討されたが、他の22種類について同様のことが検討され、どの木が一番有効であるか、つまりもっとも少ない体積で、もっともたくさん酸素を供給するのはどの木か、ということが求められた。その結果、Abiesという木であることが分かり、これを利用すると、オランダ全人口の酸素供給のために必要な木は8億本で、140万ha(国土の約40%)。すなわち、前述のBetulaという木の半分以下の量で良いことが分かる。今度はこの木を立体的(ダイアグラムの)に積み重ねると考えると、一辺6.5kmのフォレストキューブ(立体森林)、つまり、4000haの表面積で済むことになる。このあとアムステルダムを1例として研究は続くのだが、以上の研究は岐阜県林業センター、京都大学農学部森林学科、オランダの森林関係者の協力で行なわれた。

これらの数値は、あくまでデータによる計算であり、実際完全に働くかどうかは当然誰にも分からない。それに酸素の問題など深刻

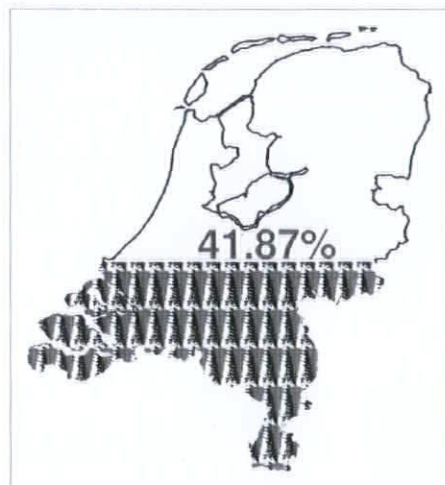
に思われないかもしれないが、二酸化炭素の問題は御存知の通り、かなり深刻になりつつある。ヴィニーいわく、「データより今まで目に見えなかった社会問題を(三次元的)ダイアグラムでも良いから視覚化することで、問題を扱う糸口を見つけることが出来る」と。

前述したようにデータはデータであり、現実はずっと複雑であることは誰にでも分かるが、データスケープの特異な点は、データというものを不確定な都市の未来、そこにある建築デザインの「許容度、限界点」を風景として(ある意味数学的証明のごとき説得力で)視覚化するところにある。

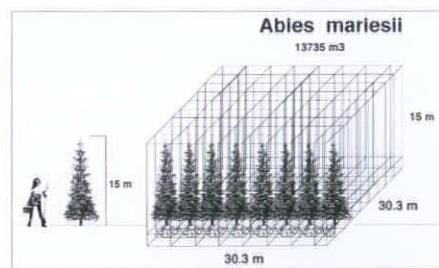
もちろんデータ自体を扱うことは何も新しいわけではないが、それをダイアグラム等によって、建築の分野で捉える次元に置き換えようとしているところに社会・文化的問題と建築をつなげるという意味で、その社会性がうかがえる。

このデータによる仮想都市(Datatown)の風景は、ただのヴァーチャルな世界ではなく、現実の風景のすぐ傍に存在する可能的風景なのである。都市、建築の可能性の限界とは一体何なのであろうか？

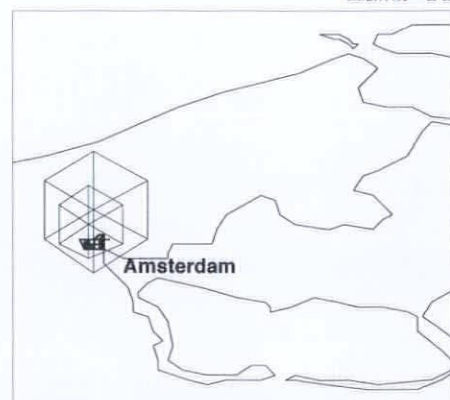
●おおまつ・としき／在ベルラーヘ・インスティテュート



オランダ全人口の酸素供給のために、Abiesが占める国土(41.87%)



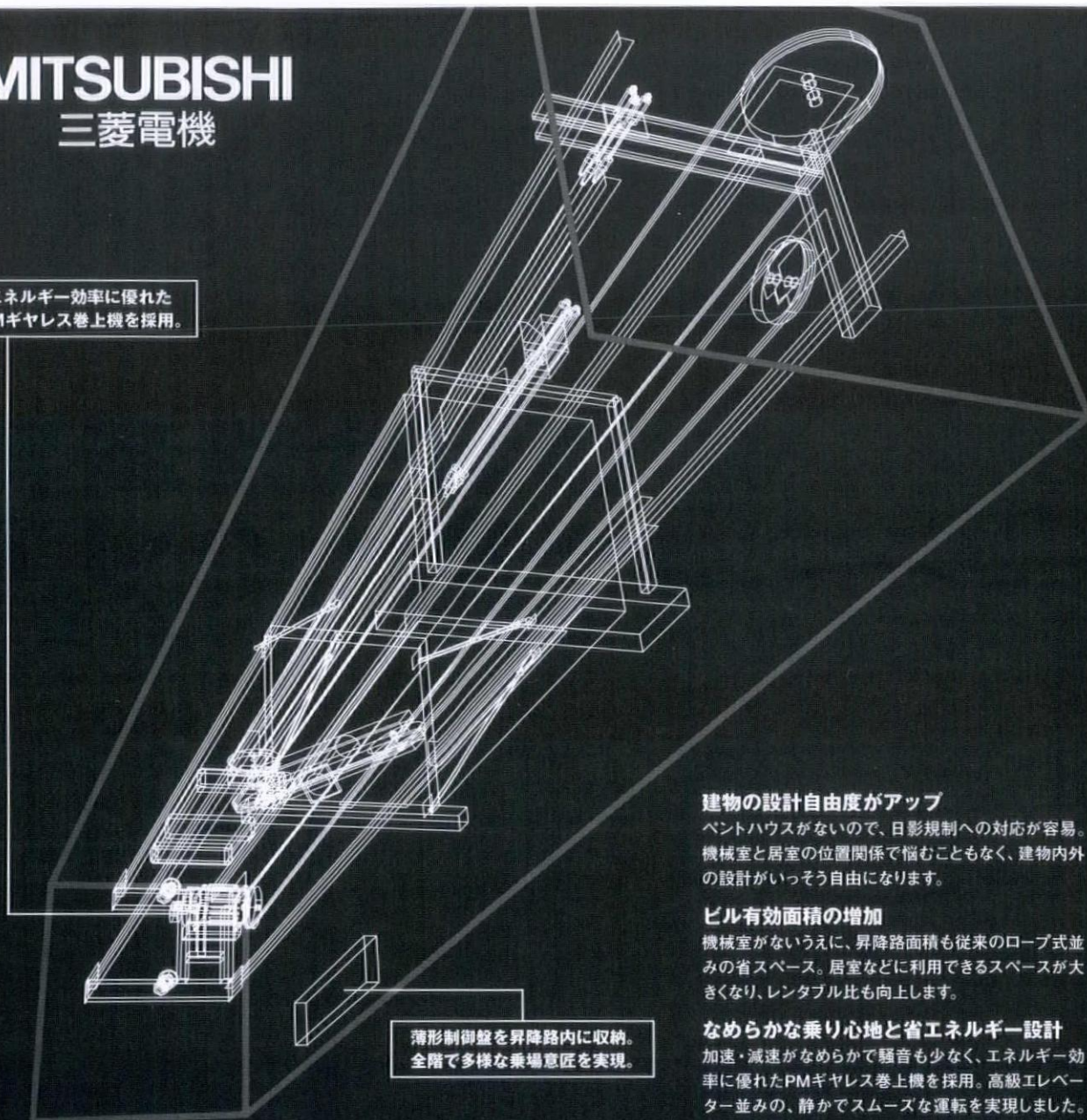
1人分の酸素供給のための木の本数(57.3本)とそのスペース



アムステルダム上に置かれたオランダ全人口の酸素供給のための立体森林

MITSUBISHI
三菱電機

エネルギー効率に優れた
PMギヤレス巻上機を採用。



薄形制御盤を昇降路内に収納。
全階で多様な乗場意匠を実現。

昇降路だけの エレベーター 三菱〈エレパック〉誕生。

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制

新登場

エレパック

ELEPAQ

三菱エレベーター／機械室レスタイプ

御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

建物の設計自由度がアップ

ベントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レントラブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく (Efficient)

信頼性に優れ (Reliable)

快適な移動空間の創造 (Comfortable)

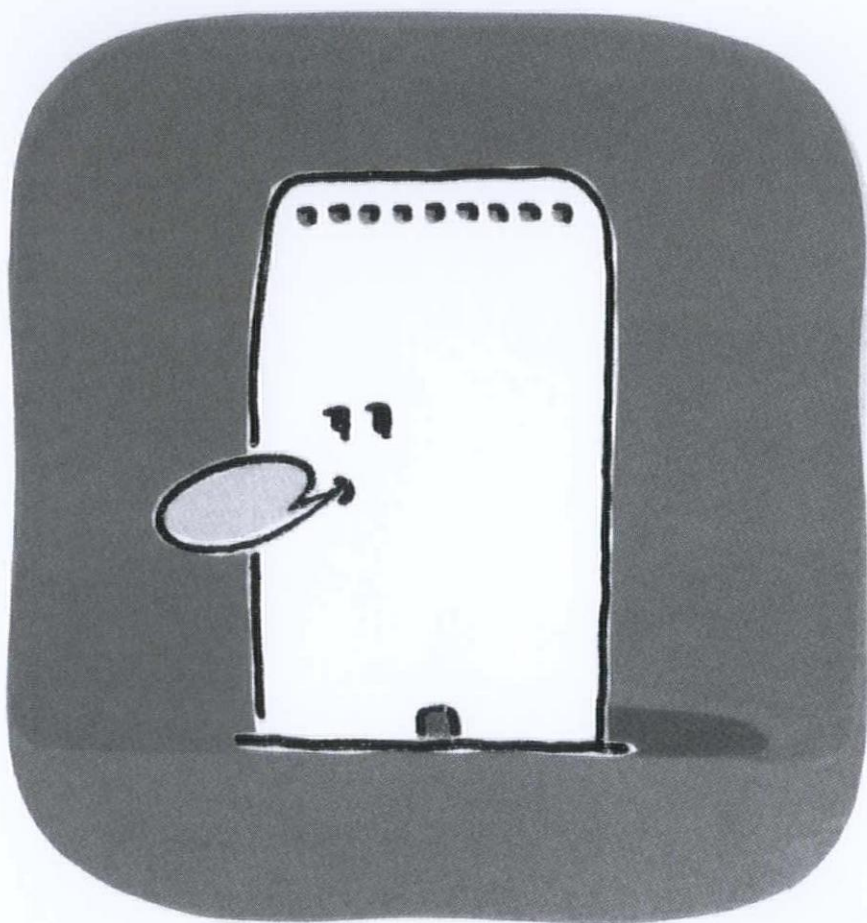
エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……三菱電機株式会社 〒107-6150 東京都港区赤坂5-2-20 (赤坂パークビルディング)

本社ビル事業部 TEL.(03)5573-3793

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は

自然の呼吸に

支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

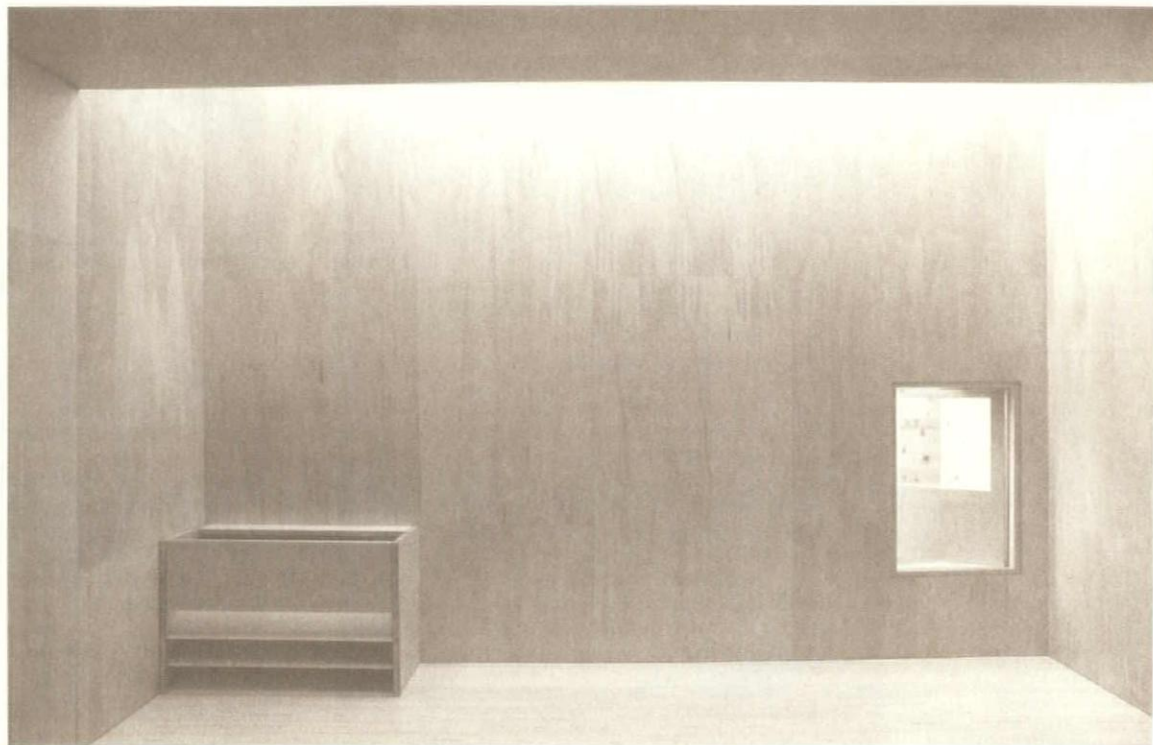
東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド
東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)



静かな家／河西立雄

9903

特集

木の空間：木素材による快適建築

近年、建築に木材をさりげなく使った事例をよく見かける。「木＝木造建築」という従来の概念を超えた新たな表現を可能にする素材として、さまざまな建築家たちが多種多様な使用方法を模索し始めているようだ。そこでは作家性の追求ということに重点が置かれるのではなく、「何気ないけど良い空間」を創るという最近の空間表現の動向を見いだすことが出来る。こうした物質指向・ローテク指向は時代の加速度的なデジタル化への反動か、経済活動の停滞という社会的な制約によるものか、はたまた来るべき次世紀へと向かう緩やかなトレンドか。イデオロギーを強烈に主張するのではなく、五感で良いと感じられるバランス感覚のあるものづくり。これからの空間はこうあるべきだとでも言いたくなるほど、それらは当たり前のように自然体で、そして何よりも心地良い。本特集ではこうした次世代スタンダードを示唆するイマドキの木の使われ方を、具体事例を中心に紹介する。

●作品紹介

国内：木箱210／葛西潔建築設計事務所、台形集成材の家／趙海光、トイズファクトリー・Cross World Connections・花見季／インテンショナルリーズ、大町の家／みかんぐみ、静かな家／河西立雄、I & S・pas de calais・FAVORITE H／H DESIGN
海外：Casa Ugarte／Mathias Klotz、Studio in Schopfheim／Dieter Thiel、GucklHupf／Hans Peter Wörndl

●コラム

SELL HOUSE：SE工法による次世代木造住宅の可能性 文＝播繁

社内デザインコンペから生まれるユニーク家具たち―ウッドユウライクカンパニーの木製家具

現代に蘇るマエストロの技―家具職人・相田貞夫の椅子づくり

無印良品が提案するライフスタイル―浸透するコーポレート・アイデンティティと確約されたクオリティ

いすコレ―リビングデザインチェアコレクション '99 インタビュー＝鈴木恵三

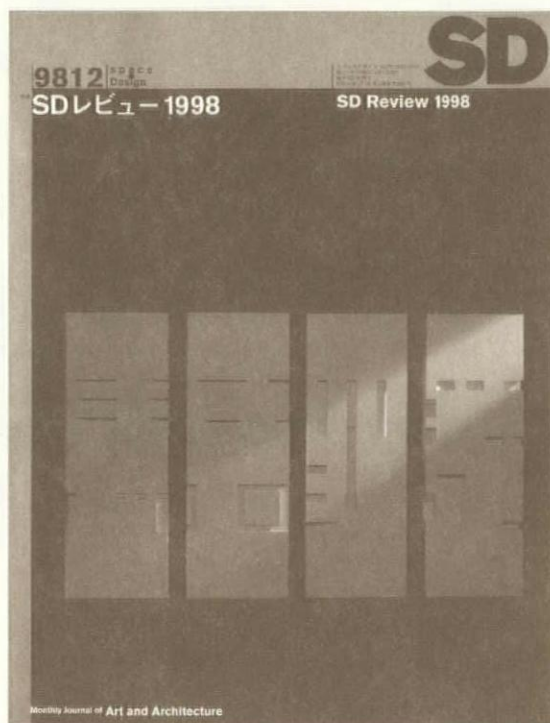
連載：

海外レポート：ニューヨーク、チューリッヒ

エントロピーの森―都市のインフラストラクチャ 3 写真＝ハイナー・シリング 文＝山形浩生

SD

バックナンバー



9812

特集

SDレビュー1998

17回目を迎えたSDレビュー。今年も9月と10月に東京・大阪の2箇所で巡回開催された。鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞の4賞の誌上発表、および審査員のコメントも含め、入選作15点を紹介する。

【審査員】

林 昌二(建築家)、播 繁(構造家)、岸 和郎(建築家、京都工芸繊維大学助教授)、團 紀彦(建築家)

【入選者】

アルヴァロ・ヴァレラ+サイド・シエド、アンドリュー・バリー+ ミヌストリー・アーキテクチャー、遠藤政樹+池田昌弘、岡村和典+石井米二郎+清水里司/日本設計九州支社、尾沢俊一、川嶋彦一郎、駒井貞治/駒井貞治の事務所、ジン・タイラ+三好隆之、手島浩之+都市建築設計集団/UAPP、手塚貴晴+手塚由比/手塚建築研究所、長倉威彦、廣谷純弘+石田有作/建築研究所アーキヴィジョン、三上晴久+三上建築事務所、山田幸司建築都市研究所、和田吉貴

小特集4題

シャルロット・ペリアン

20世紀を生き抜くインテリア・デザイナーの思考プロセス

"ハプニング"展—デザイナーズ・カタログ

アアルトの空間構成—有機的建築手法の考察

HALFTECTURE PROJECT

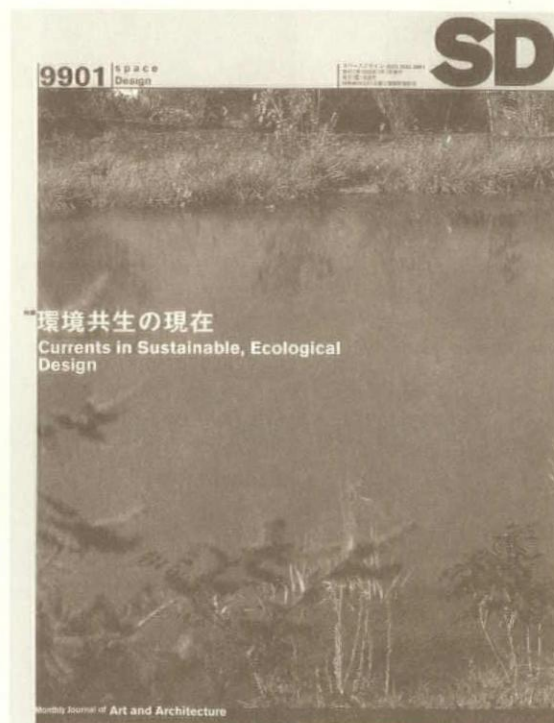
メタルシート・ストラクチャによる遠藤秀平の近作

連載:

海外レポート:ヘルシンキ、ベルリン

森島紘史の起こし絵図—日本のかたち紙考 12(最終回)/森島紘

定価=2,000円/本体1,905円



9901

特集

環境共生の現在

20世紀の終わりへ向けて、限られた地球環境の中で社会を永續させるには、環境に与え、与えられるインパクトをトータルに評価することが必要であることが認識されてきた。もはや建築・都市機能の中で、環境共生のプライオリティは高まる一方である。ここでは、環境共生あるいはサステナブルという問題に対してひとつの解答を出した幾つかのプロジェクトを紹介しながら、その近年の動向を俯瞰し、次世代のヴィジョンを示唆する。

●事例

1章:自然循環系の回復・創造

ウォーターワークス・ガーデン/Jones & Jones、他

2章:資源の合理的利用

東京ガス<アースポート>/日建設計、東葛テクノプラザ/日建設計、Commerzbank Headquarters/Norman Foster、他

3章:ライフスタイルの提案

世田谷区環境共生住宅/岩村和夫、鹿島京都山科寮/鹿島建設、他

4章:歴史と風土の保存・回復

デュイスブルク北ランドスケープ公園/ベーター・ラッツ、他

●次世代へのビジョン

2005年国際博覧会構想案/隈研吾・宮城俊作、東京サイクルグリーニング構想/宇野求、

●環境共生へ向けた5つのアクション

建材一体型太陽光発電システム/YKK-ap、余暇住宅「山海寮」/エポネット、他

●論文:小玉裕一郎、梅干野 晃、伊香賀俊治、他

連載:

海外レポート:バルセロナ、ヘルシンキ、ベルリン

エントロピーの森—都市のインフラストラクチャ 1 写真=ハイナール・シリグ 文=山形浩生

特別定価=2,700円/本体2,571円



SD別冊32号

スポーツのための空間——スポーツ施設の新しい風

日本設計+SD編集部

総頁数：180頁

価格：3800円(本体3619円)

スポーツを行い、楽しみ、観戦するための空間は、多くの課題を抱えている。

巨大化する競技イベントへの対応、利用頻度の向上を求めている多目的化、新たな魅力付加を求めている複合化、高度な観戦空間を求めている専用化、あるいは既存施設の再利用や機能の向上など。

また、高齢者、身体障害者、女性など、スポーツ参加層の急激な拡大や変化に対応することも早急に求められている。

本書では、そうした課題の解決に挑戦し、大きな成果をあげている最新事例を豊富に取り挙げ、詳しい解説を付し、今後のスポーツ施設の設計に明瞭な指針を与える内容としている。

第1部：スポーツの空間の新しい風

- 1：専用または共用
- 2：屋外または屋内
- 3：都心または郊外
- 4：複合化と多目的化
- 5：再生と改修
- 6：仮設と転用

第2部：最新事例紹介

海外：ベルリン・オリンピック自転車競技場及び水泳場、フランス競技場、ウィンブルドン新コート、2000年シドニーオリンピック公園、香港スタジアム、アムステルダム・アリーナ、アトランタブレーブズ新球場、オリオールパーク球場、バンク・ワン球場、シアトル・マリナース新球場、マディソン・スクエア・ガーデン改修、ミレニアム・ドーム、ナッシュビルアリーナ、ユナイテッドセンター、ユービック地下スポーツホール

国内：横浜国際総合競技場、武蔵野の森競技場、東京ドームシティ、大阪ドーム、西武ドーム球場、Jヴィレッジ、ツインリンクもてぎ、他全40例

第3部：空間の拡張と参加層の拡大

スポーツの空間の拡張：代用、自然、ヴァーチャルリアリティ、放送メディア

スポーツ参加層の拡大：簡易スポーツ、高齢者、身体障害者、女性

SD別冊

SD選書出版案内

〈各巻四六判・函入〉

建築思潮(建築家の建築論)

ユルバニズム

ル・コルビュジエ著 樋口 清訳 本体1,800円

私と日本建築

A.レーモンド著 三沢 浩訳 本体2,000円

建築をめざして

ル・コルビュジエ著 吉阪隆正訳 本体1,800円

輝く都市

ル・コルビュジエ著 坂倉準三訳 本体1,800円

住宅論

篠原一男著 本体1,800円

続住宅論

篠原一男著 本体1,800円

建築とは何か

B.タウト著 篠田英雄訳 本体1,800円

続建築とは何か

B.タウト著 篠田英雄訳 本体980円

モデュロールI

ル・コルビュジエ著 吉阪隆正訳 本体1,800円

モデュロールII

ル・コルビュジエ著 吉阪隆正訳 本体1,800円

人間の家

ル・コルビュジエ他著 西沢信弥訳 本体1,800円

街路の意味

竹山 実著 本体1,500円

オレゴン大学の実験

C.アレグザンダー著 宮本雅明訳 本体1,800円

三つの人間機構

ル・コルビュジエ著 山口知之訳 本体980円

四つの交通路

ル・コルビュジエ著 井田安弘訳 本体980円

ラスベガスー忘れられたシンボリズム

R.ヴェンチュリ他 石井和敏・伊藤公文訳 本体1,800円

東方への旅

ル・コルビュジエ著 石井 勉他訳 本体980円

住宅と宮殿

ル・コルビュジエ著 井田安弘訳 本体1,200円

エスプリ・ヌーヴォー(近代建築名鑑)

ル・コルビュジエ著 山口知之訳 本体1,200円

建築について(上)

F.L.ライト著 谷川睦子・谷川正己訳 本体1,800円

建築について(下)

F.L.ライト著 谷川睦子・谷川正己訳 本体1,200円

建築家の発想ー私の師匠たち

石井和敏著 本体1,800円

建築の多様性と対立性

R.ヴェンチュリ著 伊藤公文訳 本体1,500円

プレシジョン(上)

ル・コルビュジエ著 井田安弘・芝優子訳 本体1,500円

プレシジョン(下)

ル・コルビュジエ著 井田安弘・芝優子訳 本体1,500円

アルド・ロッシ自伝

A.ロッシ著 三宅理一訳 本体1,800円

ミース・ファン・デル・ローエ

D.スペース著 平野哲行訳 本体1,800円

表現主義の建築(上)

W.ペートン著 長谷川章訳 本体1,500円

表現主義の建築(下)

W.ペートン著 長谷川章訳 本体1,500円

カルロ・スカルパ

A.F.マルチアノ著 浜口オサミ訳 本体1,500円

住宅

コミュニティとプライバシー

S.シャマイエフ他著 岡田新一訳 本体1,800円

現代のコートハウス

D.マッキントッシュ著 北原理雄訳 本体980円

建築VS.ハウジング

M.ボウリー著 山下和正訳 本体980円

「いえ」と「まち」ー住居集合の論理

鈴木成文他著 本体1,800円

建築環境論

岩村和夫著 本体1,500円

都市・住宅論

東 孝光 本体1,800円

評論(現代建築)

近代建築

V.スカリー著 長尾重武訳 本体1,500円

アメリカの建築とアーバニズム(上)

V.スカリー著 香山寿夫訳 本体980円

アメリカの建築とアーバニズム(下)

V.スカリー著 香山寿夫訳 本体980円

建築の現在

長谷川亮著 本体980円

アメリカ住宅論

V.スカリーJr.著 長尾重武訳 本体980円

インターナショナル・スタイル

H.R.ヒチコック他著 武沢秀一訳 本体1,800円

ル・コルビュジエ

C.ジェンクス著 佐々木宏訳 本体1,500円

近代建築の失敗

P.ブレイク著 星野郁美訳 本体1,800円

イタリアの現代建築

V.グレッゴッティ著 松井宏方訳 本体1,200円

建築論

実存・空間・建築

C.ノルベルグ=シュルツ著 加藤邦男訳 本体1,800円

空間としての建築(上)

B.ゼーヴィー著 栗田 勇訳 本体1,800円

空間としての建築(下)

B.ゼーヴィー著 栗田 勇訳 本体1,800円

建築空間(尺度について)

P.ブドン著 中村貴志訳 本体980円

思想としての建築

栗田 勇著 本体980円

モラリティと建築

D.ワトキン著 榎本弘之訳 本体1,200円

古典建築の失われた意味

G.ハーシー著 白井秀和訳 本体1,800円

芸術としての建築

S.アバークロンビー著 白井秀和訳 本体1,800円

SD選書出版案内

〈各巻四六判・函入〉

デザイン

現代デザイン入門

勝見 勝著 本体1,800円

日本デザイン論

伊藤ていじ著 本体1,800円

道具考

栄久庵憲司著 本体1,500円

環境とデザイン

G.エクボ著 久保 貞訳 本体2,000円

日本美の意匠

水尾比呂志著 本体1,500円

建築鑑賞入門

W.W. コーディル他著 六鹿正治訳 本体1,800円

バウハウス —その建築造形理念

杉本俊多著 本体1,800円

水空間の演出

鈴木信宏著 本体1,800円

木のこころ —木匠回想記

G. ナカシマ著 神代雄一郎他訳 本体1,800円

水のデザイン

D. ペーミングハウス著 鈴木信宏訳 本体1,800円

環境照明のデザイン

石井幹子著 本体1,800円

屋外彫刻

M.A. ロビネット著 千葉成夫訳 本体1,800円

トーネット曲木家具

K. マンク著 宿輪吉之典訳 本体1,500円

インテリアデザインとは何か

三輪正弘著 本体1,800円

椅子のデザイン小史 —様式からポストモダンへ

大廣保行著 本体1,800円

都市の道具

栄久庵祥二著 本体1,500円

日本の伝統工具

土田一郎著 本体1,800円

行動・文化とデザイン

清水忠男著 本体1,800円

環境デザインの思想

三輪正弘著 本体1,800円

ディスプレイデザイン

魚成祥一郎監修 本体1,800円

フラクタル造形

三井秀樹著 本体1,800円

建築家論

フランク・ロイド・ライト

谷川正己著 本体1,800円

アルヴァ・アアルト

武藤 章著 本体1,800円

ライトと日本

谷川正己著 本体1,800円

タリアセンへの道

谷川正己著 本体980円

アドルフ・ロース

伊藤哲夫著 本体1,200円

ブルネッレスキ —ルネサンス建築の開花

G.C. アルガン著 浅井朋子訳 本体1,500円

ジュゼッペ・テッラーニ

B. ゼーヴィ編 鶴沢 隆訳 本体1,500円

オットー・ワーグナー —ウィーン世紀末から近代へ

H. ゲレツェッカー他 伊藤哲夫他訳 本体1,800円

ルイス・マンフォード

木原武一著 本体1,500円

オーギュスト・ペレ

吉田鋼市著 本体1,500円

アントニオ・ガウディ

鳥居徳敏著 本体1,800円

ボッロミーニ

G.C. アルガン著 長谷川正允訳 本体1,800円

ヴィオレ・ル・デュク

羽生修二著 本体1,800円

トニー・ガルニエ

吉田鋼市著 本体1,800円

パラディオへの招待

長尾重武著 本体1,800円

ウィリアム・モリス —近代デザインの原点

藤田治彦著 本体1,800円

エーロ・サーリネン

穂積信夫著 本体1,800円

美術・文化論

きもの文化史

河鱈実英著 本体1,800円

現代絵画の解剖

木村重信著 本体2,000円

芸術空間の系譜

高階秀爾著 本体1,800円

日本美の特質

吉村貞司著 本体1,800円

イタリアの美術

A. プラント著 中森義宗訳 本体2,000円

幻想の建築

坂崎乙郎著 本体1,500円

キュビズムへの道

D.H. カーンワイラー著 千足伸行訳 本体1,800円

空間の生命 —人間と建築

坂崎乙郎著 本体1,500円

部族社会の芸術家

M.W. スミス編 木村重信他訳 本体780円

光の死

H. ゼーデルマイヤ著 森 洋子訳 本体980円

西欧の芸術1ロマネスク 上

H. フォション著 神沢栄三他訳 本体1,500円

西欧の芸術1ロマネスク 下

H. フォション著 神沢栄三他訳 本体1,800円

西欧の芸術2ゴシック 上

H. フォション著 神沢栄三他訳 本体1,500円

西欧の芸術2ゴシック 下

H. フォション著 神沢栄三他訳 本体1,800円

鏡〔虚構の空間〕

由水常雄著 本体980円

さあ横になって食べよう —忘れられた生活様式

B. ルドフスキー著 多田道太郎監修・奥野卓司訳 本体1,800円

SD選書234

さあ 横になって食べよう

忘れられた生活様式

B.ルドフスキー著 多田道太郎監修 奥野卓司訳
四六判 224頁 本体1,800円＋税

人間の生活様式である、
食べる・眠る・座る・洗い清める・入浴する…
の五つの基本行動と、それに関連する家具や
道具の珍しい実例をあげ、
「私達に必要なのは、新しい技術ではなく、
新しい生活様式である」ことを説く。
[目次]最後の晩餐のテーブルマナー、
みにくい座り方、評判の悪い衛生法、
にぎやかな風呂場、時代遅れの寝室。

SD選書76 キモノ・マインド

新庄哲夫訳 四六判 250頁 本体2,000円＋税

外国人のみた日本人および日本文化に対する批判書

SD選書184 建築家なしの建築

渡辺武信訳 四六判 184頁 本体1,800円＋税

世界全土の土着建築を集めた写真コレクション

みっともない人体(からだ)

加藤秀俊・多田道太郎訳 菊変形 376頁 本体2,900円＋税

古今東西の事例を駆使した“人体と服飾の文化史”

驚異の工匠たち

知られざる建築の博物誌

渡辺武信訳 A5判 436頁 本体3,800円＋税

人類文明の多様化を積極的に肯定しようとする建築論

人間のための街路

平良敬一・岡野一字訳 A5判 344頁 本体3,800円＋税

未来の街路のモデルへの示唆を与えた文明批評の書

現代の民家再考

降幡廣信著 四六・240頁
本体2,900円＋税

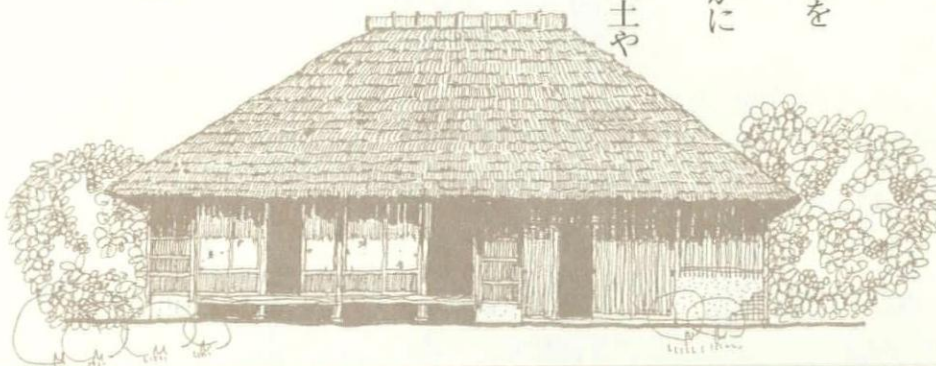
忘れかけている日本の伝統民家と、風土環境に根づく
現代の住宅を、木造民家として捉え直し、その味わい
から室礼等について再考。多くの民家再生技法で培つ
た経験と実績により、写真を多用してそのディテール
を紹介。

民家のこころ

道塚 元嘉 著 四六判 144頁 本体1,600円＋税

- 第一章【入口部】
- 第二章【土間部】
- 第三章【小屋裏部】
- 第四章【炉端部】
- 第五章【各室部】
- 第六章【縁・軒・庇・壁・屋根部】
- 第七章【その他】

ふる里の暮らしと生活状況を
住まいの原点として捉え、
民家の空間要素を诗情豊かに
綿密な取材で述べる。
悠久の時間をこえ土地の風土や
習俗にあった民家、
誰もがここに刻む
思い出の情景を、
写真・イラスト入りで解説。





9710 Architecture in Glass: Introducing architectures which adopt the characters of glass in such as optical and structural aspects. Searching for the present situation and possibility in the future: Extension of the Winterthur museum of Art, Hotel P, Konami Nasu Seminar House, etc. Text: Kazuhiko Nanba, Masao Ando, etc. ¥3,000



9711 Kengo Kuma: Digital Gardening: Introduces recent leading works of Kengo Kuma, advocate of post-modern architecture and winner in 1997 of the Architectural Institute of Japan Prize and the Benedicta Prize. Memorial Park and other designs. Articles by Youichi Iijima, Greg Lynn, etc. Discussion: Fumihiko Maki and Kengo Kuma. ¥2,800



9712 SD Review 1997: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Shigekatsu Takayasu Architects+Tatsuya Sakuma+Hirotada Hashizume+Hiroyuki Shigetomi, Hiroshi Kawahito, Sosuke Hujimoto, etc. **Spaces of Light and Color: Glass Artsits of Czecho** ¥2,000



9801 SD Review 1982-96
16th anniversary retrospective of SD Review looks at entries later built, examines relation to and significance in the world of architecture, and considers future directions. Text: Fumihiko Maki, Hiroshi Hara, Youichi Iijima, Osamu Nakasuiji, ect. Round-table discussion: Makoto Motokura, Ryoji Suzuki, Akira Kuryu, and Kazuhiro Kojima ¥2,800



9802 Transparency in Architecture and the City: Swiss German Architecture Explores the appeal of the Swiss German sphere through an understanding of the background of Swiss architectural works and the context in which they came into being. Architects introduced are Herzog & de Meuron, Gigon & Guyer, etc. Texts by Momoyo Kajima, etc. ¥2,200



9803 Czech Cubist/Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution: Featuring extant Cubist and Rondocubist architecture in Prague; original photos. **Hiaso Kohyama: Drawings and space:** introduces Hisao Kohyama's architectural space and handling of detail through the architect's own drawings. ¥2,000



9804 Versatile Architects of the New Generation: Introduces the works and creative activities of young architects in their thirties to portray a sense of the times: INTENTIONALLIES, MIKAN, etc. **Desktop Community** ¥2,000



9805 The Cutting Edge in Space Design: Introduces specific examples of collaboration between architects and designer artists: Kazuko Fujie, Kinpei Nakamura, Susumu Shingu, etc. **House for Frida Kahlo and Diego Rivera: Juan O'Gorman's Architecture and Mexican Modern** ¥2,000



9806 Landscape Creation Today: The Challenges for Landscape Architects: Introduces landscaping set apart from the natural environment and purposefully designed to serve society. Architects introduced are Yoji Sasaki, PLACEMEDIA, Hiroki Hasegawa, Toru Mitani, Makoto Noborisaka, N. Finley+M. chiba, Ken Smith, Kyathryn Gustafson, Douglas Reed, etc. ¥3,000



9807 Coelacanth Architects: Traces their activities over twelve years, mainly through introduction of their works. Kibikougen Elementary School, Suijo Fire Station of Osaka City, Sotogaoka Exchange Forum, etc. Text: Hiroshi Hara, Yoshitake Doi. Interview: Riken Yamamoto ¥2,600



9808 Design Vocabularies of Light: LPA Works 1990-1998: Introducing a selected list of 40 concepts from LPA's design vocabulary, this book is a bible of illumination lore for the overall study of space created by light. Text: Arata Isozaki, Kaoru Mende ¥2,500



9809 The Landscape of Detail: Its Art and Techniques
Introduces the details of architectural works with photos and drawings. Hiroshi Miyazaki, Akira Watanabe, Takenaka Corporation, Yoshio Taniguchi, Kajima Design, Shinichi Ogawa, Waro kishi, Fumihiko Maki, Yoshihiko Iida. ¥2,300



9810 Office Environments for the Near Future
Introduces recent developments in office environment design through specific examples. Works: Dentsu Interactive Solution Center, etc. Text: Ryusuke Naka, etc. **Machiya Restored: The Future of Central Kyoto and The Development of Machiya Restoration** ¥2,000



9811 135 Outstanding Works of Modern Design
Introduces 135 coffee and tea services, glassware, and other utensils made of white ceramic or clear glass. KasimirMalevich, Gertrud Vasgaard, Trude Ptri, Wilhelm Wagenfeld, Josef Hoffman, Peter Schlumbohm, etc. Text: Sori Yanagi, Angelo Mangiarotti, Shukuro Habara, etc. ¥3,000



9812 SD Review 1998
The 17th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. **Four Small Features: Charlotte Perriand, Designer's Catalogue of "Happening", Aalto's Space Composition, Shuhei Endo's Recent Works in Metal Sheet Structure** ¥2,000



9901 Sustainable and Ecological Design Today
Specific Projects that have achieved symbiosis with the environment provide a bird-eye view of recent trends and display the vision of the upcoming generation of architects. Emscher Park, Tokyo Gas "Earth Port", Setagaya-ku Fukazawa Symbiotic Housing, etc. ¥2,700

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. SD endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of SD is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life: 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work: Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980: Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix: List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections: Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrich Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

● 内装建材

ホームテリアMV 断熱玄関ドア ウィンテックMV23

● 新日軽株式会社



新日軽では、インテリア断熱サッシ、アルブラ70MWの室内側サッシ色に色調を合わせた、内装建材、ホームテリアMVと断熱玄関ドア、ウィンテックMV23を新発売した。

特長

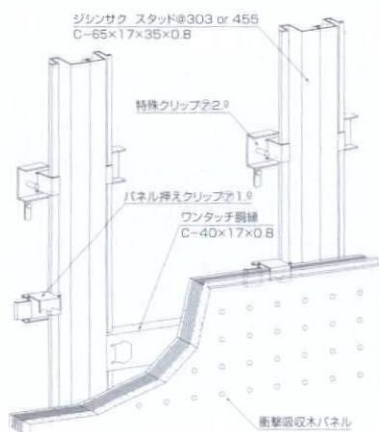
- ①色は、美しい艶と明るい風合いを持つ、樺桜材の色、マイルドチェリーである。
- ②アルブラ70MWおよびウィンテックMVと色調を合わせてあるので、室内および玄関・室内側におけるカラーコーディネートができる。
- ③造作材、内装ドア、内装引戸、クローゼット、収納、階段、床材など家一棟分の内装材を品揃えた。
- ④高級感のあるモールタイプのデザイン（ドア・引戸・クローゼット）を品揃えた。
- ⑤モール付本体デザインの装飾性をより高める、ケーシングMタイプを用意した。
- ⑥床およびドア用のレバーハンドル、引戸用の引手、クローゼットの把手は全て抗菌仕様になっている。

新日軽株式会社 広報課
東京都江東区本場2丁目7番23号
〒135-0042 Tel 03-3820-2127

● 衝撃吸収壁

ジシンサクバッファ

● 株式会社マンテン



株式会社マンテンでは、体育館、室内競技場、各種教室、柔道場、剣道場、室内人工スキー場などに最適な衝撃吸収壁、ジシンサクバッファを新発売した。

特長

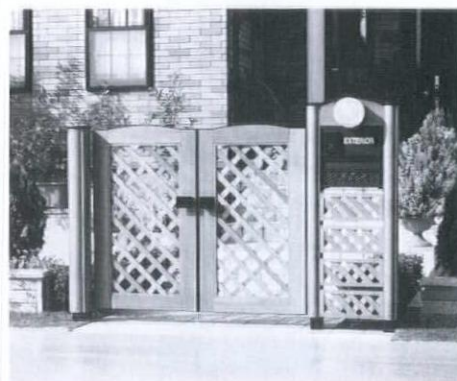
- ①バッファ用特殊クリップの採用により、屋内運動での壁面衝突時の衝撃をやけらげ、安全を確保する。
- ②衝突時のショックをやわらげる安全設計（クリップ工法）を採用した。
- ③層間変異1/60に対応する耐震性能を有する。
- ④最小壁厚は、40mm以内に収まる。
- ⑤鋼製下地材の部品はわずか5種類と単純である。

株式会社マンテン
大阪府浪速区日本橋東1丁目10番6号
〒556-0006 Tel 06-6644-2151

● 門柱

木調機能門柱

● 三協アルミニウム工業株式会社



三協アルミニウム工業株式会社では、ガーデニングによる住まいづくりが定着してきた今、自然との調和をより密接にしたエクステリア提案を図るため、自然素材の天然木を使用した木製商品として、木調機能門柱(WB1・2型)(WP1・2型)を新発売した。

特長

- ①WB1型は、3種類の木製意匠パネルを用意しているので、当社木製門扉・フェンスとのデザイン・コーディネートプランが楽しめる。
- ②鋳物調機能門柱用の鋳物パネルを取付けることもできるので、同社の鋳物門扉をはじめ、形材門扉との幅広い組合せを選ぶことができる。
- ③意匠パネルを倒せば、フラワーテーブルとして使用でき、門柱の側面にフラワーポットを取付けられる。
- ④可愛い花台が、デザイン設定されている。
- ⑤WB1型、WB2型、WP1型、WP2型を基本に、門扉と組合わせた使用や機能門柱としての単体使用など、多彩な納まりが可能である。
- ⑥ガーデングッズ（ポスト・表札・照明・インターホン・サインプレート・サインボード・フラワーポット・フラワーガードなど）を自由に選んで、オリジナリティあふれる住宅設計が楽しめる。

三協アルミニウム工業株式会社 広報室広報課
富山県高岡市早川70番
〒933-8610 Tel 0766-20-2332

木質インテリア建材

ラフォレスタ EシリーズII型

YKKアーキテクチュラル プロダクツ株式会社



ラフォレスタEシリーズ 集合住宅用
室内ドアII型 DE-B

YKKアーキテクチュラル プロダクツ株式会社では、マンションなど中低層集合住宅向けとして、木質インテリア建材、ラフォレスタEシリーズII型を規格追加、新発売した。

特長 (室内ドアII型)

- ①集合住宅に適した枠として、ノンケーシングタイプ95mm、110mm枠の2種類を新たに用意した。
- ②扉については、集合住宅を意識したドア幅=792mmを新たに設定した。
- ③デザインは、片開きドアが7デザイン、トイレドアが3デザインある。
- ④3方向調整可能な丁番、消音ラッチ、樹脂板を採用。

特長 (室内引戸II型)

- ①集合住宅に適した枠として、ノンケーシングタイプ95mm、110mm枠の2種類を新たに用意した。
- ②デザインは、片引き戸が7デザイン、トイレ片引き戸が3デザイン、引違い戸が5デザインある。
- ③上下左右方向に調整が可能な戸車、下枠段差解消(下枠厚み15mm)、樹脂板の採用。

特長 (クローゼットII型)

- ①扉を固定させるビレットタイプと左右の移動が可能なフリータイプの2種類を用意した。

YKKアーキテクチュラル プロダクツ株式会社
東京都千代田区神田和泉町1番地
〒101-0024 Tel 03-3864-4134

サイクルポート

サイクルポート

トステム株式会社



トステム株式会社では、新たに4種類のサイクルポートを新発売した。屋根材やサイドスクリーンに、耐衝撃荷重に対する強度がガラスの約200倍のポリカーボネートを採用。ポリカーボネートは適度に光を通すので明るく、人体に有害な紫外線を100%カットする。

プチパーク (写真タイプ)

戸建て住宅向けで、駐輪場のみではなく幅広く活用できる汎用屋根として使用できる。敷地の限られたスペースでも利用でき、今までにないサイズ(2,400mm×900mm、2,400mm×1,200mm)を用意。施工も簡単で、柱内蔵式の雨樋でデザインもスッキリしている。オプションとして物干し、サイドクリーン、プランターや小物などが吊るせるハンギングバーを用意。

ルアパーク

戸建てまたは集合住宅用で、風雨の吹き込みを防ぐようアクリル板(またはポリカーボネート、波板)で3面を囲った3面囲い仕様が基本。

カーブパーク

戸建て、集合住宅兼用で、人気のカーブタイプ屋根。

レークパーク

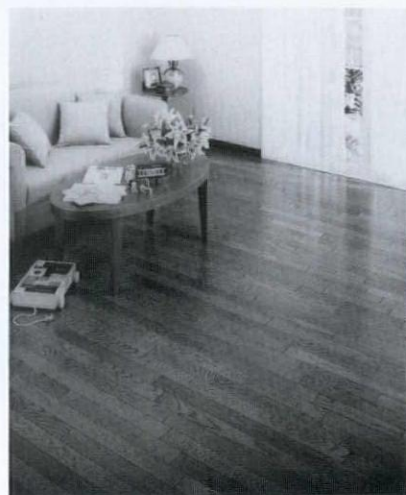
戸建て、集合住宅兼用で、シンプルな直線的デザインを採用した。

トステム株式会社 広報部
東京都江東区大島2丁目1番1号
〒136-8535 Tel 03-3638-8115

張床

防音木質フロア 木質フロア

東リ株式会社



東リ株式会社では、防音木質フロアおよび木質フロアを新発売した。同製品は、人体に好ましくない物質ホルムアルデヒドの放散量をJASの基準値で最高基準値である「F1」グレードに合格した、健康に配慮した人に優しい木質フロアである。

ウッドフロアTDF40EX

規格: 300mm×909mm×14.5mm (厚)
価格: 16,500円/㎡ (材料価格・税抜き価格)
色数: 4色

LL-40の優れた防音性能を誇り、施工性に優れる雁行タイプ。住宅金融公庫割増融資適合品。

ウッドフロアTDF45EX

規格: 300mm×909mm×14.5mm (厚)
価格: 11,650円/㎡ (材料価格・税抜き価格)
色数: 4色

防音性能の主流であるLL-45、施工性に優れる雁行タイプ。住宅金融公庫割増融資適合品。

ウッドフロアTDF-E

規格: 300mm×909mm×11mm (厚)
価格: 8,100円/㎡ (材料価格・税抜き価格)
色数: 4色

直貼り可能の簡単施工。非防音タイプ。

東リ株式会社
兵庫県伊丹市東有岡5番125号
〒664-8610 Tel 06-6494-6604

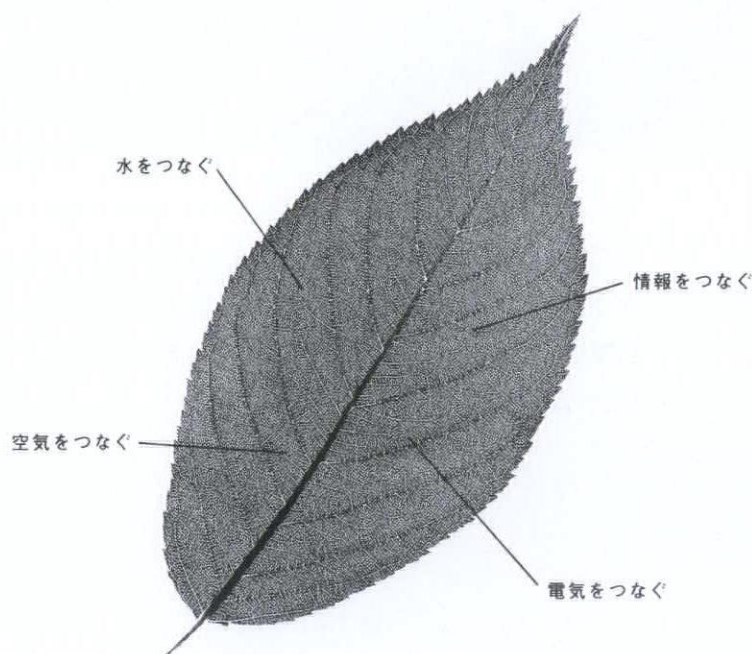
ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の

リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(6537)3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

より快適な
水環境を
めざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

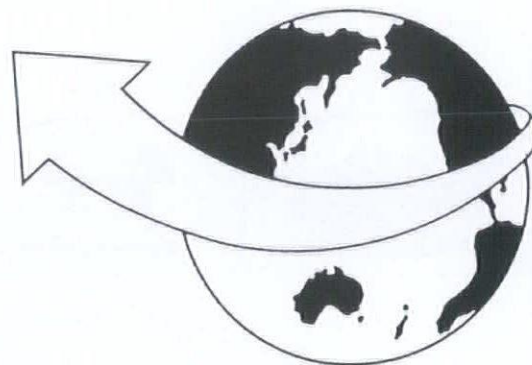
水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18 TEL.(03)3452-7441大代表 支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋 事業内容/給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

未来に向って…

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5711

大阪支社 〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(6302)2273

支店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

N 日章工業株式会社

代表取締役社長 福田 三 丈

●本社 〒101-0047 東京都千代田区内神田3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000

●大阪支店 ●横浜支店 ●仙台支店 ●広島出張所 ●福岡出張所

日立製作所電機特約店

日立化成工業特約店

日立機材特約店

日立建機特約店

旭化成建材代理店

新明和工業特約店

大和ハウス工業特約店

大昭和製紙特約店

施設商品

エレベータ・エスカレータ

ホームエレベータ

機械駐車設備

ゴミ処理設備

バスユニット・流し台

洗面化粧台

集中浄化槽・パネルタンク

空調衛生電気設備工事

受変電・自家発電設備

空調機・ポンプ・送風機

監視防犯システム

節水バルブ・節水トイレ

建材商品

PHCパイル・シテイガイ

イーゼット・現場造成杭

地盤改良

ヘーベル・グランデ

押出成形版・金属パネル

屋根・硝子工事

フリーアクセスフロア・OAフロア

クリーンルーム床工事

ハイベース・ハイスプリット

ユーボード・軽量鉄骨

プレハブ規格建築

大昭和ユニボード

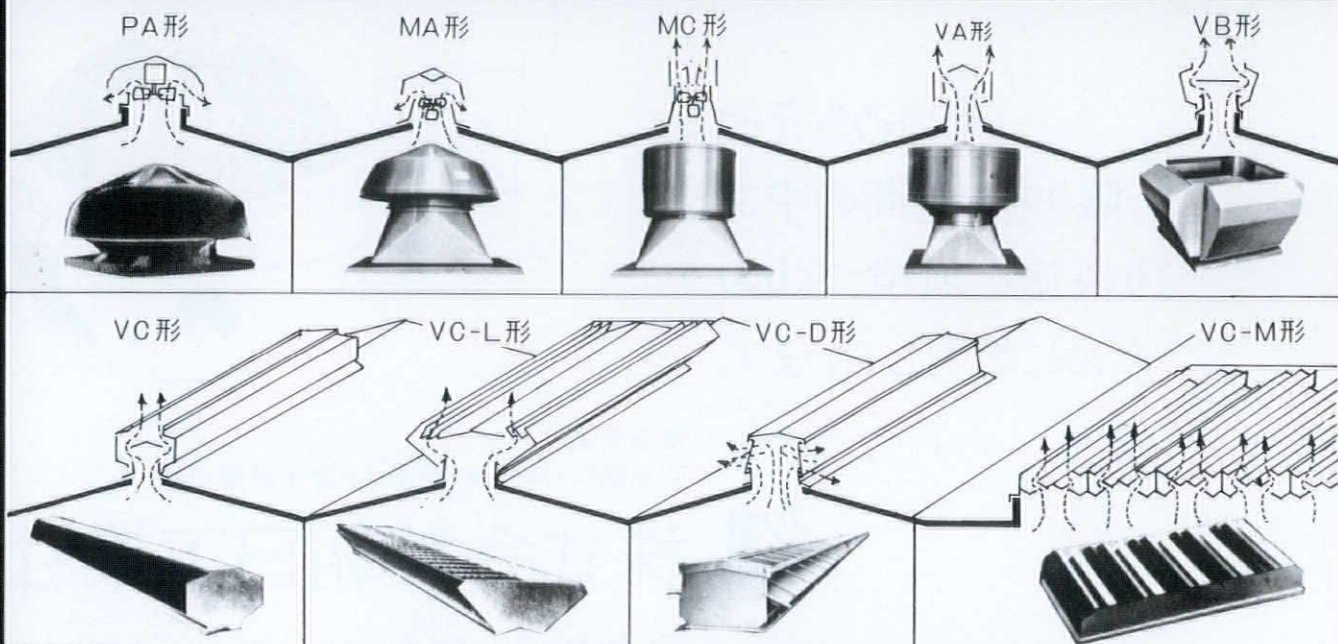
九木ライトフォーム・シールド

クローラクレーン・耐火被覆

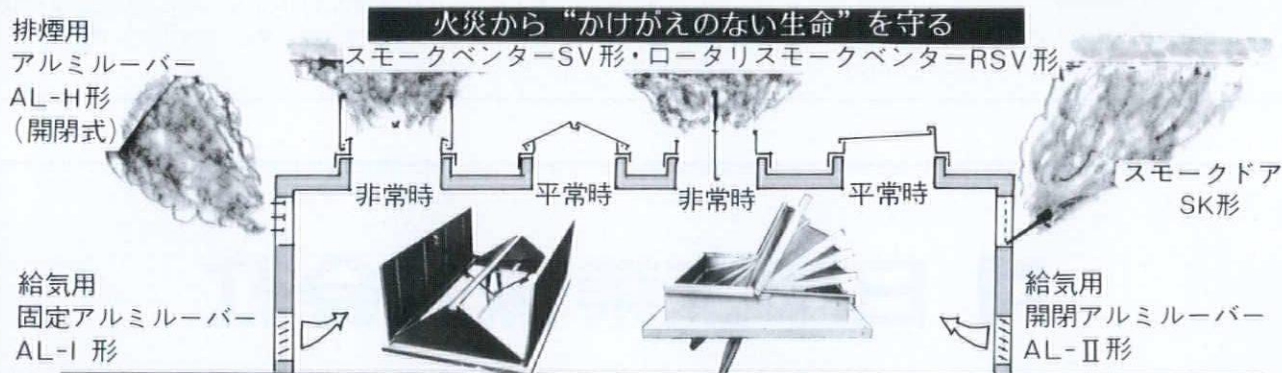
坂本商会は創業80年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

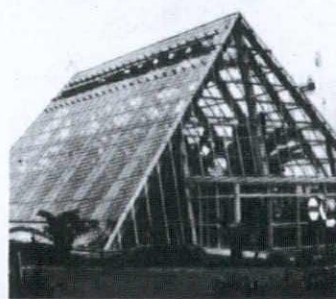
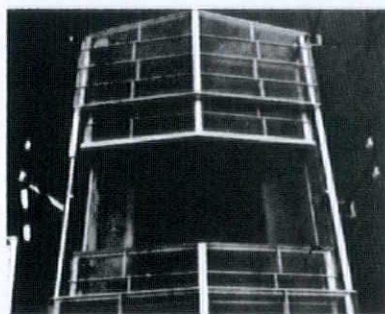
強制換気・自然換気装置



排煙・ルーバー装置



“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト



株式会社 坂 本 商 会

本 社	東京都中央区日本橋2-16-12(江戸ニビル)	〒103-0027 電話	東京 (03)3271-5591 (代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270-2214 電話	松戸 (0473)87-6595 (代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270-2214 電話	松戸 (0473)87-3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131-0032 電話	東京 (03)3619-2221 (代)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい (五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (6362) 6515

FAX06 (6362) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル 06 (6231) 4548

FAX06 (6227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247(代)

FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (6379) 1791

東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

須田町佐志田ビル (3255) 8411

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

ア	株朝日工業社	A17
カ	株関電工	A1
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
	川崎電気株	A10
キ	株きんでん	109
サ	株坂本商会	A18
	三機工業株	117
シ	新日軽株	表4
	新菱冷熱工業株	118
	昭和銅機株	A9
	昭和アステック株	116
ス	住友電設株	A15
タ	高砂熱学工業株	表3
	大興物産株	A7
	ダイダン株	A11
チ	株中電工	A11
ト	東光電気工事株	A12
	株トーエネック	A10
	東洋熱工業株	124
	株東芝	A20
ニ	日新工業株	A3
	株西原衛生工業所	A16
	日章工業株	A17
マ	松下電器産業株	A2
ミ	三菱電機株	123
ヤ	矢崎総業株	表2
	山田照明株	113
	株ヤナセ	110
ロ	ロンシール工業株	A8

TOSHIBA

エレベーターから機械室が消えた！ 大好評、マシンルームレスのスペースセル。

（スペースセル）は、マンションなどの住宅用だけでなく、オフィスやテナントビルなどの乗用、病院など医療施設の複合用と充実しています。さらに、最大昇降行程は60m。20階建ての建築物にも対応するなど、設計・デザインの可能性をいちだんと拡大。まさに時代が求めた新世紀のエレベーターです。

スペースセルは ここが違う！

デザインフリー

スペースセルは、機械室の設置は不要。ですから、屋根のデザインの自由度が拡大。建物高さの面でも制約が少なくなり、建築構造としての美観を自由に追求することを可能にしました。

レイアウトフリー

スペースセルなら昇降路の位置を自由にレイアウト。高さ制限上も有利。既存の建築物のエレベーター増設にも柔軟に対応します。

スペースを有効利用

エレベーター設備のべ面積を大幅に縮小。いままでエレベーター設備に要していた共有部分を有効スペースとして活用できます。

省エネ&建築・設備工事を削減

スペースセルは、モーター容量が従来のロープ式や油圧式よりも低く抑えられるので、電源設備容量や消費電力量を低減します。また機械室のものが無くなるため、従来必要だった機械室の建築・設備工事はすべて不要になります。

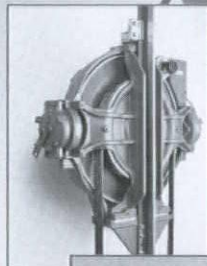
新保守システム「スーパーTERM（東芝遠隔監視メンテナンス）」で 万全の保守点検サービスを提供

東芝エレベーターが開発した新しい遠隔監視メンテナンスシステム「スーパーTERM」がエレベーターを止めずに遠隔診断、機器の状態変化をリアルタイムに察知し故障の未然防止につとめます。また万一の故障の際にも、より迅速な対応が可能となります。

いまお使いのエレベーターをハイグレードにリニューアル

ビルのリニューアルをお考えになる時、東芝エレベーターでは、最新モデルのスペースセルへのグレードアップをおすすめします。事前の調査にもとづき効率のよいリニューアルをご提案します。

コンパクト化に徹した新しいタイプの巻上機。昇降路内の設置を可能にした薄型ギヤレス巻上機を採用、高効率ギヤレスシステムにより、省エネルギーを実現しました。



超薄形の新開発制御装置。

超薄形設計のインバータ装置や最新の制御用プロセッサを搭載した高密度・高性能の制御基板を採用、厚さわずか100mmの制御装置を最上階のりばに配置することができました。

東芝マシンルームレスエレベーター スペースセル

SPACE



株式会社 東芝 昇降機事業部 本社 〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1 (東芝ビルディング) TEL (03) 3457-4621 FAX (03) 5444-9275 ホームページアドレス <http://www2.toshiba.co.jp/ing/syoji/>
 北海道支社 ☎ (011) 214-2451 東北支社 ☎ (022) 264-7641 北陸支社 (金沢支店) ☎ (076) 224-2815 新潟支店 ☎ (025) 246-8263 長野支店 ☎ (026) 228-3354 北関東支社 ☎ (048) 640-1130 東関東支社 ☎ (043) 299-1017
 神奈川支社 ☎ (045) 664-8614 神奈川西支店 ☎ (0462) 30-2833 静岡支店 ☎ (054) 221-1804 中部支店 ☎ (052) 564-8511 関西支店 ☎ (06) 6440-2281 神戸支店 ☎ (078) 252-2975 中国支店 ☎ (082) 212-3606
 岡山支店 ☎ (086) 224-6168 四国支店 ☎ (087) 825-2440 九州支店 ☎ (092) 735-3056 北九州支店 ☎ (093) 522-0544 大分支店 ☎ (097) 536-2040
 東芝エレベーター株式会社 本社 〒141-0001 東京都品川区北品川6-5-27 営業本部 TEL (03) 5423-3648 FAX (03) 5423-3663 保守営業統括部 TEL (03) 5423-3378 FAX (03) 5423-3521 リニューアル部 TEL (03) 5423-3278 FAX (03) 5423-3513